

NHK放送予定(平成22年1月~2月)

- NHK-FMラジオ(日曜日 7:15~8:00)
1月24日 素謡「郎郷」(宝生流) 亀井保雄ほか
1月31日 素謡「善知鳥」(再)(宝生流) 小倉敏克ほか
2月7日 素謡「卒都婆小町」(親世流) 浅見真州ほか
2月14日 素謡「花月」(宝生流) 金森秀祥ほか
2月21日 素謡「竹生島」(再)(宝生流) 金森秀祥ほか
2月28日 素謡「善知鳥」(再)(宝生流) 金森秀祥ほか
NHK教育テレビ(15:00~17:00)
1月24日(日) 喜多流能「松風」
シテ 友枝昭世、ワキ 宝生閑

演能カレンダー

名古屋能楽堂

- (平成22年1月)
17日(日) 第53回狂言鳳の会 (有料)
24日(日) 名古屋宝生会定式能 (有料)
31日(日) 万作を観る会 (有料)
[2月]
7日(日) 東和能楽伝承会 (番組②面) (無料)
11日(祝) 海能会新年会 (番組②面) (無料)
柳原雷司忠師を偲ぶ会 (無料)
弘耀会主式能演(番組③面) (有料)
青名古屋觀世会定例公演(番組③面) (有料)
13日(出) 故弘耀会 (無料)
14日(日) 柳原雷司忠師を偲ぶ会 (有料)
27日(出) 現代会狂言 IV (有料)

故 柳原雷司忠師を偲んで
2月11日 弘耀会演能

昨年6月逝去した幸清流小鼓方・故柳原雷司忠師を偲ぶ会がきたる二月十一日(建国記念の日)に名古屋能楽堂で催される。主催は弘耀会・船戸昭弘師後援幸友会。催主の船戸師は、偲ぶ会に於て「故柳原先生には幼少より二十二年間、御指導を賜り、道成寺まで披かせて頂きました。お世話になりました弘耀会の一

を頂戴し、弘耀会(こうようかい)を発足させて頂きました。故先生のご遺志に背かぬようこの道に勵んで参る覚悟です。柳井四郎兵衛先生は、当地の先生方のご後援に感謝して今後とも指導ごべんたつをお願い申し上げますとあいさつしている。午前九時半始、番組は、舞囃子など二十四番はじめ一調、独調、連調など六番。(番組②面)

藤井徳三

武田友志 武田志房

鳳鳴会

禮古場 名古屋市中区三の丸二の一 名古屋能楽堂禮古室 電話(0)五二(三三二)八〇八八

泉嘉夫

井上裕久 井上嘉介

〒603-8175 京都市北区紫野下鳥田町六

名古屋市昭和区山手廻3-8-2-306 電話(0)五二(八三二)三二八五 西宮市甲陽園目中山町三三二二五 電話(0)七九八(0)二四五八

高橋瞭一 觀世喜正 觀世喜之

名古屋觀世九皇会

山本博通 山本勝一

名古屋觀衛会

梅若猶義 梅若吉之丞

猶梅 猶會

〒603-8123 京都市北区小山下花ノ木町二

幽花会 片山慶次郎 伸吾

大槻文蔵

大槻清韻会

〒605-0008 京都市東山区西野町24 電話(0)七五五(二一)九二一

片山幽雪

觀世清和

名古屋觀世会

謹

賀

新

年

聴く能楽

のうのう能、名古屋

のうのう社(東京都新宿区矢来町47-15)による「第2回能の旅人」(のうのう能 in 名古屋)が2月13日(土)藤田舞台(名古屋市西区幅町2-10-9)で開催される。この催しは「聴く能楽」として当日Aプログラム(午後1時開演)、Bプログラム(午後3時半開演)の2部制で開催される。Aプログラム(12時30分開場)一調「笠之段」(謡・味方團、小鼓・後藤嘉津幸)▽一調「橋弁慶」(謡・武田友志、大鼓・河村真之介)▽一管「疎之段」(笛・竹市学)▽半能「井筒」(シテ親世喜正、笛・竹市学、小鼓・後藤嘉津幸、大鼓・河村真之介) Bプログラム(午後3時開場)一調「花置」(謡・親世喜正、大鼓・河村真之介)▽一調一戸「小登」(謡・味方玄、小鼓・後藤嘉津幸)▽一管「鈴之段」(笛・竹市学)▽半能「祝・酌之舞」(シテ親世喜正、笛・竹市学、小鼓・後藤嘉津幸、大鼓・河村真之介、大鼓・加藤洋樹) 全席指定五十円(各回定員80名) チケット申込みのうのう事務所/電話03-32266-102 07かんせこむ E-mail: /www.kanseiko.com/

流)
●平成23年1月3日(月)午後2時始「翁」(親世流)「屋島」(親世流)
●3月5日(土)午後2時始、能「薄経」(金春流)狂言「墨塗」(和泉流)
◎名古屋市中小学生能楽鑑賞会 7月8日、9日 12月1日、2日
能「羽衣」狂言「柳井」
◎豊田市中小学生能楽鑑賞会 7月29日、30日、8月3日、6日、於豊田市能楽堂
◎若狭能 6月12日(土)、曲目未定
◎小牧山新能 9月18日(土)、曲目未定
◎新年謡初式 23年1月2日(日)於名古屋能楽堂
能(照明能)「船弁慶」(シテ片山謙司、子方分林道隆、ワキ殿田謙吉)
午後2時開演、主催・名古屋片山能制作委員会
入場料 S席(正面指定席)五〇〇円、A席(自由席)四〇〇円、学生席(自由席)二〇〇円。チケット取扱いは片山家能楽・京橋保存財団(T E L 0 7 5 . 5 5 1 . 6 5 3 5) 名古屋能楽堂(T E L 0 5 2 . 2 3 1 . 0 0 8) 栄アトレケ92(T E L 0 5 2 . 9 5 3 . 0 7 7 7) チケットぴあ(T E L 0 5 7 0 . 0 2 . 9 9 9 / E 1 4 0 0 . 8 4 8)

名古屋能楽堂
定例公演日程
平成22年演能予定

名古屋市文化振興事業団(名古屋能楽堂)、能楽協会名古屋支部主催の平成22年度の演能予定は次のとおりである。
◎名古屋能楽堂定例公演

第一回名古屋片山能
3月13日 名古屋能楽堂

「片山家の能」を鑑賞する「第一回名古屋片山能」が今春3月13日(日)名古屋能楽堂で開催される。名古屋片山能の開催にあたって、催主・片山幽雪師は、「以前より、名古屋で片山家の能を定期的に観たいとの要望を頂いておりましたが、このたび(名古屋片山能)としてその第一歩を踏み出すことになりました。名古屋片山能

として、平成22年は年間2回の公演を予定しておりますが、幾久しく回を重ねていくことができますように、何卒お見守りいただきませうとあいつつしている。
能組は、半能「石橋・大獅子」(梅田邦久、片山伸吾、梅田嘉宏、武田大志、ワキ高安勝久、舞囃子「高砂」(片山幽雪)

発行能楽の友社
名古屋市千種区千種2丁目18-18 (郵便番号 464-0858)
電話(052)731-7984 FAX(052)733-2837 振替口座 00800-6-363993
購読料 1年 1100円 1年 1800円 郵送の場合 1100円

能楽の友

東海能楽伝承会

— 伝統芸能を次世代につなげるために

二月七日(日) 午前十時半開演
名古屋能楽堂

和合式
翁 シテ 和谷 衛市 三番 今枝 郁雄 村瀬 恒史 誠
神楽 和谷 朱太郎 船戸 健一 大野 誠
後見 森田 健 狂言 後見 佐藤 友彦
長田 郷 坂野 見 加藤 洋輝
高砂 坂高 雅一 充 後藤 幸 竹市 学

半能
長田 郷 坂野 見 加藤 洋輝
高砂 坂高 雅一 充 後藤 幸 竹市 学

後見 加藤 誠子 地謡 福田 頌一 和谷 忠弘 市
平塚 昭子 伊藤 多美 松井 俊介

伝統文化こども能楽教室

おけいこ発表

仕舞・囃子・一口謡など

能羽衣
健 長田 明 大野 誠命
原 想元 正樹 後藤 孝一郎 松井 俊介
後見 長田 郷 地謡 山田 幸 貴 衛見 松井 俊介
平塚 昭子 松田 幸 孝 長田 郷 忠弘 市

能狸々
西村 よし子 高風 原 小 志 船戸 昭弘 竹市 学
後見 長田 郷 地謡 伊藤 昌雄 松井 俊介
加藤 誠子 和谷 英太 朗 長田 郷 忠弘 市

「入場無料」

主催 東海能楽伝承会

(先着六三〇名)

共催 和楽会(和谷社中)
呉竹会(寛社中)

故 柳原富司忠師を偲ぶ会

弘 耀 会

二月十一日(建国記念の日)
午前九時半始
名古屋能楽堂

海士 囃子 組
前野 郁子 河村 総一郎 加藤 洋輝
堀井 善介 鹿取 希世

番外独演 屋 高 梅田 嘉宏 船戸 昭弘
道明寺 近藤 幸江 河村 加藤 大加藤 洋輝
班女 平泉 和子 吉田 神子 大野 誠
楊貴妃 久田 三津子 河村 総一郎 竹市 学
雲林院 浅野 文字 中村 多栄 竹市 学
連調 羽衣 増野 鉦乃 中 満 柳 純子 希世
増田 京子 松田 裕子
須磨源氏 今沢 美和 河村 真之介 加藤 希世
平井 絵里子 鹿取 希世
雲雀山 岩田 宏子 河村 真之介 竹市 学
御室 卓子
胡蝶 八神 孝亮 村井 邦大 鹿取 希世
杜若 佐伯 裕子 古河 千津 大野川 誠治
江口 山脇 総一郎 鹿取 希世
連調 玉之段 北川 温子 一柳 千津 鹿取 希世
中 満 純子 高岡 連子
融 兼松 三欣 細井 倭子 加藤 六郎兵衛
河村 総一郎 藤田 六郎兵衛
独演 笠之段 梅田 邦久 加藤 貢条
唐船 横江 美真子 河村 加藤 洋輝
鈴木 千鶴子 竹市 学
砧 佐藤 啓子 山崎 純子 藤田 六郎兵衛
中 純子
一調 江口 泉 嘉夫 松久 素子
桜川 森 幹子 河村 総一郎 大野 誠
山口久美子
三山輪 岩田 時代 河村 真之介 大助川 誠治
杉浦 まり 竹市 学
松風 小坂 純子 竹市 学
河村 真之介
融 深見 しげ 磯部 比奈子 藤田 六郎兵衛
遠藤 千代 大野 誠
連調 箴 吉口 典孝 松岡 祐司
岩田 典世 鈴木 マチ子
都築 康子 中 理 富美子 瑞穂
森 明美 伊藤 秀子 鹿取 希世
三浦 昌子 河村 真之介 藤田 六郎兵衛
小美 佐子
水室 林 昭 大野 誠
上野 智永 大野 誠
大浜 一 郎 幸 竹市 学
河村 総一郎 藤田 六郎兵衛
沢田 又 一 藤田 六郎兵衛
追 加
主催 弘 耀 会
電話 〇五〇九一〇一〇三 岐阜 各務原市 各務 東町四一六七
携帯 〇五八三八七〇一一二二三七番
後援 幸 友 会
電話 〇九〇七八五七一一二二三〇番

「御来場歓迎」



大西智久

観 芳 会
観 世 芳 伸

怡 楽 会
山階 彌 右衛門
山階 弥 次

邦 謡 会
梅 田 邦 久
梅 今本 須清 沢 一
梅 田 嘉美 安和 勲 甫政

名古屋 修 諷 会
梅 若 修 一

(株)大阪能楽会館

〒530 0015 大阪府北区中崎西2-3-17

久田 観 正 会

久 田 勘 鷗
郁 風 会 前 野 郁 子 親 子
松 藤 会 松 山 幸 子
星 野 路 子

松 音 会

泉 泰 孝
〒166 0001 東京都杉並区宮前四一十九四
電話 〇三三三三二八一六〇番

泉 雅 一 郎

〒201 0000 東京都狛江市事野川四六六八
電話 〇三三四八八二四八五番

春 鶯 会

梅 若 善 高
〒560 0084 豊中市新千里南町三丁目18-12
電話 〇六六八三二一七八五四
〒166 0003 東京都杉並区高円寺南4-27-7 800
電話 〇三三三二二一〇五七〇

梅 春 会

井 戸 和 男
良 祐 男
〒545 0001 大阪市阿倍野区文の里3-16-17
電話 〇六一六六二一一二二一九

上田 観 正 会 能楽堂

上田 観 正 会 TEL 〇七八一
六九一一五四四九

上 田 貴 介 威 司 弘

大 公 拓 貴
介 威 司 弘

名古屋 淡 交 会

三 交 会
久 田 三 津 子
〒460 0001 名古屋市中東区一社3-1 102
電話 〇五二七〇五一一五八五

武 田 謳 楽 会

武 武 田 欣 志 弘 司
武 田 大 邦 志 弘 司

財団法人 鎌倉能舞台

中 森 貫 太

初 陽 会

武 田 宗 和

舞 謡 会 橋 岡 久 太 郎

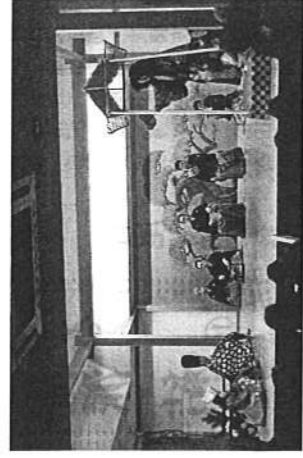
* * * * *

山 小 宮 松 吉 塚 小 山 島 宮 荒 坪
岸 倉 内 原 田 出 岸 田 下 木 内 花 路 之
美 美 重 年 要 友 三 郎 功 亮
登 富 樹 章 雄 章 彦 三 郎 吉 功 亮

五色の会 能を観る 第11回 朋の会公演

公演として、能「邯鄲」を上演、会場いっぱい熱心な観能がつづけられた。
能組は、仕舞「通小町」(宇高 通成 狂言「しびり」(野村小三

朋の会(金剛流シテ方・羽多野良字師主幹)は「五色の会」能を観る「タイトル」で、毎年花朋会敷舞台(岡崎市大西町奥長入)で演能を行っているが、昨年12月23日(水)祝第11回



明の会(金剛流シテ方・羽多野良字師主幹)は「五色の会」能を観る「タイトル」で、毎年花朋会敷舞台(岡崎市大西町奥長入)で演能を行っているが、昨年12月23日(水)祝第11回

「チケット」前売券二五〇〇円(当日券三〇〇〇円) 学生券一〇〇〇円
入場券はチケットぴあ(TEL0570・02・9999) Pコード786・119)および出演者宅

附祝言 主権青陽会
お向合せ 名古屋平名東区二社三の一六二 電話〇五二・七〇五・一五八五

能 葵上 八神孝充 杉江元正 船戸昭弘 鬼頭義命 大野誠誠
後見 久野路子 地謡 高沢美和 武田大志 加賀橋一 清沢一致 近藤幸江 梅田嘉宏

仕舞 巴 祖父江修一 松山幸親 雲胡 梅田嘉宏 地謡 古松山幸親 林院 梅田邦久 清沢一政 狂言 争 今枝邦雄 佐藤友彦 後見 井上靖悟

能 弱法師 久田勤鶴 高安勝久 河村総一郎 鹿取香世
後見 祖父江修一 地謡 久田勤鶴 武田大志 前野郁子 梅田嘉宏 梅田邦久 梅田嘉宏

能 青陽会 定式能 (第154期) 第一期
二月十三日(土) 十二時半開演 名古屋能楽堂

面紹社主権
能楽研究会「面紹社」(代表役員 田紹義氏)は、恒例の新春能面展を一月十七日から二月七日まで名古屋市鶴舞図書館一階コーナーで展示、開催している。

新春能面展
展示は、能面作品14点、能絵(参考展示)13点。舞台写真1点。出展者は、面紹社社中12名。(保田紹雲、水野観雲、岩田刻雲、久保曉雲、山崎周雲、一色青雲、金入雲、大橋宗一、加藤豊久、漆畑健治、田崎未知、高橋純子)
一月三十日展示替え。

能 求塚 榎王茂十郎 大倉源次郎 助川治 観世清和 藤田六郎兵衛
後見 上田公威 地謡 吉沢八神 孝充 梅田邦久 観世芳伸 高橋一 武田邦弘

仕舞 国東北砂 武田邦弘 高橋一 片山清司 地謡 久田勤鶴 祖父江修一 狂言 佐渡狐 井上靖悟 佐藤友彦 後見 大野弘之

能 鶴亀 高安勝久 河村真之介 加藤洋輝 梅田邦久 福井四郎兵衛 竹市学
後見 梅田嘉宏 地謡 松山幸親 清沢一政 片山清司 加賀敏彦 古橋正邦

素謡 神歌 久田勤鶴 千歳 古橋正邦
地謡 武田大志 清沢一政

名古屋観世会定例公演能
二月十四日(日) 十二時半開演 名古屋能楽堂

能楽の友社
宝生流 嘉宝会
千早会 八神孝充
桜月会 加藤春枝
洗心会 奥村富久子
親修会 祖父江修一
幸謡会 近藤幸江

小松勝憲
松盛会
加賀敏彦
賀水会 桑名賀水会 名鉄百貨店友の会

宝生和英
近藤乾之助
豊橋翼会
名古屋翼会

辰巳満次郎
佐野由於
倉本雅

衣斐正宜
衣斐正宜後援会
恵美寿会

宇高通成
松野恭憲
松野恭憲能の会
豊嶋能の会 豊春会 豊嶋三千春

古川周子
岐阜周星会
名古屋周星会
金剛流

宝生和英
近藤乾之助
豊橋翼会
名古屋翼会
辰巳満次郎
佐野由於
倉本雅
恵美寿会
衣斐正宜
衣斐正宜後援会
恵美寿会
千早会 八神孝充
桜月会 加藤春枝
洗心会 奥村富久子
親修会 祖父江修一
幸謡会 近藤幸江
千早会 八神孝充
桜月会 加藤春枝
洗心会 奥村富久子
親修会 祖父江修一
幸謡会 近藤幸江

千早会 八神孝充
桜月会 加藤春枝
洗心会 奥村富久子
親修会 祖父江修一
幸謡会 近藤幸江

小松勝憲
松盛会
加賀敏彦
賀水会 桑名賀水会 名鉄百貨店友の会

宝生和英
近藤乾之助
豊橋翼会
名古屋翼会

辰巳満次郎
佐野由於
倉本雅

衣斐正宜
衣斐正宜後援会
恵美寿会

宇高通成
松野恭憲
松野恭憲能の会
豊嶋能の会 豊春会 豊嶋三千春

古川周子
岐阜周星会
名古屋周星会
金剛流

宝生和英
近藤乾之助
豊橋翼会
名古屋翼会
辰巳満次郎
佐野由於
倉本雅
恵美寿会
衣斐正宜
衣斐正宜後援会
恵美寿会
千早会 八神孝充
桜月会 加藤春枝
洗心会 奥村富久子
親修会 祖父江修一
幸謡会 近藤幸江

千早会 八神孝充
桜月会 加藤春枝
洗心会 奥村富久子
親修会 祖父江修一
幸謡会 近藤幸江

小松勝憲
松盛会
加賀敏彦
賀水会 桑名賀水会 名鉄百貨店友の会

宝生和英
近藤乾之助
豊橋翼会
名古屋翼会

辰巳満次郎
佐野由於
倉本雅

衣斐正宜
衣斐正宜後援会
恵美寿会

宇高通成
松野恭憲
松野恭憲能の会
豊嶋能の会 豊春会 豊嶋三千春

古川周子
岐阜周星会
名古屋周星会
金剛流

宝生和英
近藤乾之助
豊橋翼会
名古屋翼会
辰巳満次郎
佐野由於
倉本雅
恵美寿会
衣斐正宜
衣斐正宜後援会
恵美寿会
千早会 八神孝充
桜月会 加藤春枝
洗心会 奥村富久子
親修会 祖父江修一
幸謡会 近藤幸江

当地の各流儀・流派・結社・ 社中の消息を辿る ⑩

竹尾 邦太郎

四 「麦の会」 ③

第一回は昭和五六年八月三〇日、「本日の能について」西田三好の解説のあと、能組は能「小督」久田徹二・前野節子・今沢美和・西村欽也・井上礼之助・地頭梅田邦久・狂言「酢薑」井上松次郎・井上礼之助、仕舞三番「花月」松井彬「班女」大島政允「天鼓」大島久見、能「松風・見留」梅田邦久・清沢一政・西村欽也・井上松次郎・地頭久田徹二、独吟「鶴之段」二井栄逸、仕舞四番「敦盛」近藤幸江「籠太鼓」久田秀雄「遊行柳」塚本秀雄「野守」武田邦弘、能「海人・経轡中之舞」長田驍・長田郷(子方)植田隆之亮・三木末信、大野弘之、地頭大島政允、ワキに榊王流の植田隆之亮、三木末信が関西から来演。

第二回は昭和五七年二月一日、この回から西田三好による解説が無くなる。能組は能「鉢木」梅田邦久・須部甫・西村欽也、飯富雅介・佐藤友彦、野村又三郎、地頭久田徹二、独吟「東北」二井栄逸、仕舞「忠度」大島久見、能「羽衣・舞込」長田驍・飯富雅介・地頭大島久見、狂言「名取川」野村又三郎・井上礼之助、仕舞「弱法師」久田秀雄、能「船弁慶・前後之替」久田徹二・松山忠司(子方)西村欽也、飯富雅介、大野弘之、地頭梅田邦久。因みに入場料は一般三千円、学生半額。

第二回は昭和五八年二月一日、能「高砂」長田驍・松井彬・西村欽也、飯富雅介、杉江元・井上松次郎、地頭大島久見、独吟「網之段」二井栄逸、仕舞「天鼓」大島久見、能「草子洗小町」久田徹二・久田秀雄(貫之)今沢

美和・前野節子(女ツレ)高橋藤一・清沢一政(男ツレ)松山忠司(子方)、植田隆之亮・井上礼之助・地頭梅田邦久、狂言「節分」野村又三郎、佐藤友彦、仕舞三番「田村キリ」河村和重「松風」橋本謙道「山姥」橋本雅夫、能「善知鳥」梅田邦久・松山幸親、梅田敦史(子方)、西村欽也、大野弘之、地頭久田徹二、関西から大鼓山本孝の来演。

第一四回は昭和五九年二月五日。能組は能「屋島」久田徹二・松山幸親、植田隆之亮・井上礼之助、地頭梅田邦久、狂言「酢薑」野村又三郎・井上松次郎、能「源氏供養・舞入」梅田邦久・西村欽也、飯富雅介、佐藤友彦、地頭久田徹二、独吟「養老」二井栄逸、仕舞三番「東北」大島久見「花壇クルヒ」武田邦弘「野守」山田義高、能「昭君」長田驍・松井彬、長田郷(子方)西村欽也、地頭大島久見。

第一五回は昭和六〇年二月七日。能「自然居士」梅田邦久、梅田敦史(子方)西村欽也、飯富雅介・井上松次郎、地頭久田徹二、狂言「口真似」野村信行、野村又三郎、大矢高義、仕舞三番「田村」中川雅章「東北」武田邦弘「船弁慶」浜井義孝、能「桜川」長田驍・長田信恵(子方)谷田宗一郎、飯富雅介、杉江元、地頭大島久見、仕舞四番「月宮殿」長田郷「八島」高林伸二「雲林院」狩野秀生「谷行」大島久見、独吟「鉢木」二井栄逸、能「救生石・白頭」久田徹二・西村欽也、井上礼之助、地頭梅田邦久。

昭和四五年九月二六日に発足。昭和四五年九月二六日に発足。年一回の公演を続けて来た「麦の会」もこゝで終を迎えることになった。喜多流・長田驍、宝生流・衣斐正直で始められた会は昭和五一年に観世流・久田徹二が参加、入れ替わるように昭和五二年

の第七回では衣斐正直が抜け、同人は長田驍・久田徹二の二人に。昭和五四年、第九回からは観世流・梅田邦久が参加、爾来、終回まで会は三人で運営された。結社の公演には概ね催し月が固定されるが、三年と続くことは無く、昭和五七年から終回の昭和六〇年まで四年間、漸く二月に固定されたところだった。

「麦の会」能の上演は昭和四四年の大阪公演を除き全三九番(左表)、狂言は全二五番。

	喜多	宝生	観世
神	1		
男	1	1	
女	7	2	2
狂	1(1)	2(1)	2(1)
鬼	4	4	1
	15	6	11
			7
			39

括弧内は同人以外(和島寛太郎・辰巳孝・泉嘉夫)による客演。協方、囃子方、狂言方の三役の出演は、ワキ西村欽也22、高安滋郎7、高安勝久3、森晴蔵1、岡治郎右衛門1、谷田宗二郎1、飯富雅介1(以上高安流)植田隆之亮3(榊王流)ワキツレ飯富雅介9、杉江元2、高安勝久1、三木末信1(榊王流) 笛 野三男14、藤田明彦12、藤田六郎兵衛7、森本重一5、鹿取希世3、西部恵司1 小鼓 福井彦次郎13、後藤孝一郎10、柳原富司忠11、山口亮6(以上幸清流)久田舞一郎2(大倉流)

大鼓 河村総一郎15、吉田定男11、河村大1(以上石井流)、飯一13、鬼頭英二1、山本孝1(以上大倉流) 太鼓 助川龍夫15、鬼頭好信4アヒ 井上松次郎9、井上礼之助7、佐藤友彦5、大野弘之5、佐藤秀雄4、野村又三郎4。 結局「麦の会」に喜多流・長田驍は初回から終回まで一五年、宝生流・衣斐正直は六回まで六年、観世流・久田徹二は六回から終回まで一〇年、観世流・梅田邦久は九回から終回まで七年、関わる事となったが、当地の人材に乏しか

った喜多流は、地謡に終始廣島県福山から大島久見・政允の力強い親子の来演を得、宝生流は辰巳孝・倉本雅ら、観世流は上田照也(久田徹二の師)泉嘉夫ら、が地頭や後見で支援、また久田徹二と梅田邦久は能二番で相互にシテと地頭を勤め協力する。なお第四回を除き毎回、独吟で舞台を勤めた喜多流・二井栄逸の存在を無視することは出来ない。二井栄逸は本名栄一(囃子の番号が本名の清からに似る)、大正元年(一九一

二)二月二十八日生、三歳のとき小児麻痺に罹り足が不自由になるといふ。昭和三年(一九二八)五月、第一四世喜多六平太宗家内弟子となる。昭和一〇年一月、喜多流謡曲定本全巻の能のスケッチによる原画三千図完成。

第一五世喜多寛宗家の一演能手記「昭和四四年九月二〇日」謡曲会発行所刊に「二井栄一君」の一文がある。 門下教授候補生、二井栄一君が業成つて芽出度く教授認可、故郷へ帰つた。候補生としては先きに大橋末次君が卒業、今又二井君が巣立つて、私としては甚だ愉快に堪へない。ただ東京の地を離れる

ことは止むを得ないことながら残念に思ふ。 同君は器用の質で、且つ美声といふべき御の人だ。最初素人として習ひに来た時分は、上りのした話で、余り感心出来なかつたが、四谷の楽屋の仲間入りしてから、メキメキ力が着いて来た、最近半年位の躍進は、楽屋の誰よりも目に立った。調子に張りが出て来たし、地謡を任せても外さずに聴った。幸清の鼓を稽古したことも大分役立つたが――。 帰ると決まつたので、八月の稽古能の「大会」に地頭をやらせたが、立派に聴った。 同君が東京に永住出来るなら、将来の地謡の有力なメンバーとして働いて貰ひたいとも思つたが、これは私の我が儘だから仕方がない。 松阪の地も、流儀は仲々盛んだが、同君のやうな有為な人は、もうすこし大きな所に運出して貰ひたいと、これは私のせめてもの希望である。

同時期、流儀を越え軌を一に発会した立合能の結社「和島寛太郎・野村又三郎・泉嘉夫 合同会」が昭和五〇年、発展的解消をした一〇年後、この「麦の会」も所期の目的を達成したか、解散。その後、この種の結社は今日に至るも現れていない。

豊田市能楽堂は三月十三日(土)豊田市能楽堂三月能を開催する。演能は、観世流「熊野」読次之伝・村雨留(シテ野村四郎、ツレ杉浦豊彦、ワキ宝生欣哉、ワキツレ大日方寛、筒、藤田六郎兵衛、小鼓・大倉源次郎、大鼓・国川純、地謡・浅井文義ほか) 大倉流狂言「伊文字」(シテ茂山正邦、アト・主 茂山十五郎、太郎冠者 茂山茂) 入場料(全席指定)正面席六〇〇円、脇・中正席四〇〇円(学生半額) 舞囃子、仕舞など10番上演。 チケットの販売は豊田市能楽堂

謹 賀 新 年

年 新 賀 謹

<p>シテ方金春流宗家</p> <p>金 春 安 明</p> <p>〒167-0002 東京都杉並区南荻窪三丁目17-16 電話〇三(三三三二)二五七二番</p>	<p>福 王 茂 十 郎</p> <p>知 和 幸 登</p>
<p>金 春 信 高</p> <p>〒167-0041 東京都杉並区喜福寺三丁目27-27 電話〇三(六七六五)六一四四番</p>	<p>高 安 勝 久</p>
<p>本 田 光 洋</p> <p>〒164-0002 東京都中野区上高田二丁目25-2 電話〇三(三三八六)二六四二番</p>	<p>宝 生 欣 哉</p>
<p>伊勢金春会</p> <p>宇 仁 田 吉 邦</p> <p>〒516-0001 伊勢市八日市場町5-16 電話〇五九六〇五二九八</p>	<p>西村同門会</p> <p>橋相杉飯 正 雅</p>
<p>長田驍後援会</p> <p>〒514-0204 津市高野町三三五一丁四六 電話〇五九二〇〇六九七番</p>	<p>谷田同門会</p> <p>岡有小原 松林 遼 充一 努大</p>
<p>喜多流</p> <p>和 楽 会</p> <p>和 谷 衡 市</p> <p>〒516-0001 伊勢市中島二丁目26-12 電話〇五九二〇〇一五九番</p>	<p>清 水 利 宣</p> <p>〒500-0817 高槻市桜ヶ丘北町11-25 電話〇七二六九四五〇一七</p>
<p>喜多流</p> <p>和 谷 栄 太 朗</p> <p>〒515-0073 松阪市殿町一四二二三 電話〇五八六〇三五〇番</p>	<p>藤 田 舞 台</p> <p>藤 田 六 郎 兵 衛</p> <p>〒491-0041 名古屋市中区幡下2-10-9 TEL & FAX 〇五二一五七一三三四</p>

◆ 初冬の舞台から ◆

「名古屋観世会定例公演」 「豊田市能楽堂特別公演」 「名古屋宝生会定式能」 「第八回・三の会」

竹尾邦太郎

「蟬丸・替之型」 皇子・皇女の身ながら前世の因果に山中文字通り俗世を捨てさせられた盲目の蟬丸と、惑乱狂気に髪も逆立ち放浪の狂女逆巻、弟と姉、東の間の出会いの哀話。

小書でツレ蟬丸もシテ扱いとなり、薫屋も街前にスミ掛けて置かれる。蟬丸(幸親)は襟淺黄・白綾着付・浅黄指貫・紺地電二雪輪文草狩衣に面は蟬丸、捨てられることを遠観の、感情を抑えた声

は、山まで付き添って来た清貫(ワキ雅介)の要まった声音と相俟ち問答に互いの心理状態が巧く現われる。物着に床几を下りる蟬丸、狩衣を脱げば皇子は黒水衣になり、角帽子を被せられて遺世の憎。一つ一つが珍しく俚れぬ身の回りの疑問を、ワキが明かしてゆく掛合もしつとりと上々。蟬丸を独り残して行かねばならないワキ、やり捨て難い名残りに断腸の思いは、へさりとしては、と至らぬ

己れに許しを乞うかに再度平伏すると、へ尽きぬ涙に、シラリのみ、立ち橋懸へ。その気配に蟬丸は杖を取り前へ、へ伏し転びてそ泣き給ふ、と笠を捨てて、退るとはも捨て安座双シラリの落胆、初回(勸助・正邦・修一ら)の愁嘆場をワキ雅介、



観世会「蟬丸」替之型 左より 梅田邦久、松山幸親 (杉浦賢次氏撮影)



名古屋観世会定例公演「蟬丸」替之型 梅田邦久 (杉浦賢次氏撮影)

蟬丸幸親が締める。博雅三位(アと勉)の介添で漸くシラリを解き薫屋へ入れて貰う蟬丸、代って逆巻(邦久)が事を出る。面増・付髪・襟白二・白地纏着着付・紺長袴・狂と世を持つ、小書で装束も替り装束胸の姿。己が異形への奇立ちに、風にも解かれず、といきなりといった風に左手で左の付髪を握り締める激情が象徴的なら、へ花の都を立ち出でて、と橋懸を狂と世で舞う(写真)進行の中、へ水も走井の、と勾欄に寄つて左手を狂と世に添えて水鏡を見詰める、へ現在の我が姿や、と静かにシラリの対照的で象徴的。折柄、蟬丸がつれつれに弾く琵琶を聞き始めると心に薫屋を見込み運じ出すと、へ宮も葉やも、で舞台へ入ってくる逆巻、へ薫屋の雨の足音もせて、と忍び寄るを言目耳敏い蟬丸が聞きつけ、逆巻との掛合に薫屋を出る蟬丸、へ互に手に手を取り交はし、と、のめる様に差し出す姉の手を、探るかの様に弟はおぼつか無げに伸ばす手(写真)、印象深い。へ理きあへぬ、涙に共にシラリ、姉はスミへ下居、遠からぬ縁の再会を地との掛合で弟に説くクリ。身の不運を託つつクセは居クセ、型は村雨の音にへ頼んで、弟が扇を琵琶に探して構えるところだけ、薫屋の起臥をへ構はしや、とシラリ姉に、琵琶を収める心で扇を懐中する弟、姉はシラリを解き名残りを惜しむ別れに。姉を誘う弟、弟を思い遣る姉、ロンギの掛合は哀感刺々として素晴らしい。へ別れ路止めよ連坂の、は姉が二度返す。キリは、へ互にさらばよ、で姉は三ノ松から二ノ松に戻り、弟も姉の声を頼りに常座へ、へ泣く泣く別れ、とシラリ姉弟、返シ向に姉は舞へ、弟のシラリ留メ。調和のとれた品のよい沁々した好舞台だった。(1時間40分)

「隠理」 狸から利を得て副業としていらしい太郎冠者(シテ小三郎)、主(アト高義)に追求められ惚けるが、狸を当てる客を呼んだゆえ、ならば市で求めてこいと命じられ困惑。夜前釣つたを主と命で取られるのも癪、市で刺き口突は後の事とはかりに「狸は

名古屋観世会定例公演「隠理」 野村小三郎 松田高義 (杉浦賢次氏撮影)



狸、大狸」と売り歩く構着。怪しいと睨んでいる主も、上戸の太郎冠者のこと、飲ませば口も軽くなるろうと酒持参で様子を窺いに市へ。ぱつたり出くわし憚る太郎冠者に、売り声を聞いてしまった主はここぞとばかりねちねち奇めにかかるか、何とか言い掛ける小賢しいシテ、生氣撥刺の問答である。酔傍で酒を勧められ、こんな所で一旦はむむ太郎冠者も飲めばさうと酒盛り、「肴は何ぞ一さし舞へ」と命じられ、「この街中は何」とは言い糸、腰に下げた狸を気取られぬ様に舞う小舞は「狸」、後ろは鼻せしと「あれあれ」と主の注意を引き(写真)くると廻るが、これだけでは済まず連舞の「鶏飼」に小細工も露見、元気一杯の太郎冠者を手綱締めるかに抑えるか、主。びちびち活きのよい舞台。(23分)

「恋重荷」 恋に貴賤の障てなしと言ひ糸、業を世話する老人・山科莊司(シテ九郎右衛門)が女御(ツレ嘉玄)に心を寄せたとて、その噂を知り当の女御までが臣下(ワキ勝久)を使い陰謀な奇謀に加担することに。臣下、重々しい名言から下人(アト小三郎)に莊司を呼び出させ、莊司に事の趣意を伝えるシテ、ワキ問答が場をつくる。初回

(清司・邦弘・正邦ら)へ恋の持夫にならうよ、と重荷に闘志を燃やす莊司、肩取ルと誰踏み初めて恋の道へ巷に人の迷ふらん、と扱いかねる恋の道に踏み入れてしまった思いをイロエにみせる。さらばと引き締める重荷の前、膝をつき両手を縄に掛け引き上げんとすれど、重荷も道理、へ持ちかねる、口惜しさにつくり腰を落とす。が、まだ望みは捨てず、石に立つ矢の響え、締めはしない強い語調に、いかにも軽く持たうよ、は我と我が悪いを鼓舞するか。へ由なき恋、の懐懐に、重荷に走り寄つて一

ならず、仰け反るよう引き上げんとして二度、びくともせず、へそも恋は何の重荷ぞ、と右手で膝を打つと安座双シラリの慟哭。口惜しさから落胆、絶望、理不尽な仕打ちに対する怒りから怨みへと、ふつふつと滾る胸のうち、心象風景が兎事実に表現される。中人はへ乱れ恋になして思ひ知らせ申さん、とするする幕へ、最早親の抜けた騒さか。代わつて下人が立シヤベリにその死を悼み、臣下に莊司の死を伝えると、ワキ語に憐憫を示し、重荷の前へ女御を促せば、女御は無難の者やな、と膝をつきシラリ、用意をみせるが、立とうとして立てない。

後場。恋の一念無量の鬼となつた後シテ莊司の霊力に金縛りの女御、面重荷悪尉・白頭の魁偉は圧倒的な迫力で女御に迫り、へ重荷持たるものか、と胸板に構えて女御を睨め付けた凄さは、忿怒が凝った立廻りから強々と踏む二ツ拍子、鹿背杖で女御の肩を押さえ付けるのも(写真)怖かった。いつの世も、真情を弄ばれ裏切られる怨みは癒し難く、鬼が神となつて姫を守ることに、当世では在り得なからう。(1時間9分・11月8日・名古屋観世会定例公演)

「道成寺」 「道成寺」は金春と聞く。後シテの蛇体を赤頭にする

新 年 賀 謹

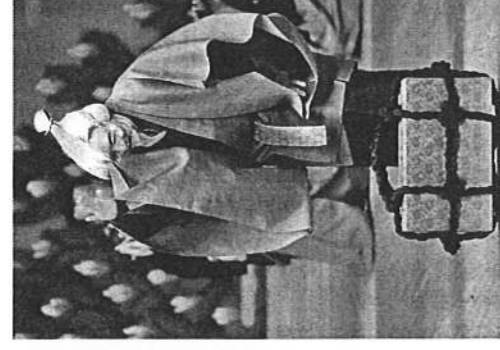
大倉源次郎	幸友会	桂	大倉流小鼓 松月会	吐石会	亀井俊一	飯島六之佐	呉竹会 伝統文化(能楽)こども教室
福井良四郎兵衛	福井聡介	後藤孝一郎	久田舜一郎	河村総一郎	保忠雄	茂山千作	寛 鈺 一
谷口正喜	谷口有辞	上田悟	久田陽春子	河村眞之介	大蔵彌太郎	千五郎	谷口正喜 〒602 0915 京都市上京区中立売通室町西入 室町スカイハイツツ610号
青耀会	長生会	鬼頭義命	高橋奈王子	河村大	大蔵千太郎	七五三	谷口有辞 〒570 0221 大津市緑町二四一〇
金春流太鼓	大蔵狂言会	大蔵誠	大倉流小鼓 松月会	河村大	基 誠	千二郎	金春流太鼓 〒800 1183 和泉市青葉台2-1-17-25 電話〇七二五(56)八五二一 名古屋 名古屋市中区栄5-1-6-1-4 稲古場 栄能楽堂 電話(〇五二)二五二一-一八三三
青耀会	大蔵彌太郎	千五郎	久田陽春子	河村大	千太郎		青耀会 〒800 1183 和泉市青葉台2-1-17-25 電話〇七二五(56)八五二一 名古屋 名古屋市中区栄5-1-6-1-4 稲古場 栄能楽堂 電話(〇五二)二五二一-一八三三
上田悟	大蔵千太郎	七五三	高橋奈王子	河村大	千太郎		上田悟 〒490 1322 愛知県稲沢市平和町城西1-1 電話(〇五六七)9-一九六〇番
鬼頭義命	大蔵誠	千二郎	高橋奈王子	河村大	千太郎		鬼頭義命 〒490 1322 愛知県稲沢市平和町城西1-1 電話(〇五六七)9-一九六〇番
大蔵彌太郎	大蔵千太郎	千二郎	高橋奈王子	河村大	千太郎		大蔵彌太郎 〒215 0027 神奈川県川崎市麻生区岡上1-1 〒517 0441 九八七十一一八七
大蔵千太郎	大蔵誠	千二郎	高橋奈王子	河村大	千太郎		大蔵千太郎 〒600 0003 京都市北区紫野下柏野町五九一 電話(〇七五)四六二四一五
基 誠	大蔵誠	千二郎	高橋奈王子	河村大	千太郎		基 誠 〒970 1001 金沢市香林坊2-1-8-17 電話(〇七六)二六二一四三四〇
千五郎	大蔵誠	千二郎	高橋奈王子	河村大	千太郎		千五郎 〒970 1001 金沢市香林坊2-1-8-17 電話(〇七六)二六二一四三四〇
七五三	大蔵誠	千二郎	高橋奈王子	河村大	千太郎		七五三 〒970 1001 金沢市香林坊2-1-8-17 電話(〇七六)二六二一四三四〇
千二郎	大蔵誠	千二郎	高橋奈王子	河村大	千太郎		千二郎 〒970 1001 金沢市香林坊2-1-8-17 電話(〇七六)二六二一四三四〇



観世会「恋重荷」 左より 片山九郎右衛門、梅田嘉宏 (杉浦賢次氏撮影)

地は安明・廣明ら、主後見を金記・金春流一門挙げての来演は、道成寺は金春の名に恥じない立派な舞台だった。(1時間41分・11月14日・豊田市能楽堂特別公演)

【班女】美濃・野上宿の遊女花子(シテ)燈子、吉田少将



名古屋観世会「恋重荷」 片山九郎右衛門 (杉浦賢次氏撮影)

【班女】美濃・野上宿の遊女花子(シテ)燈子、吉田少将

るとき、他流は「赤頭」の小書が付ける。先ず道成寺の住僧(ワキ)菅好が金入角帽子・白綾着付・紫木衣・小刀の正装で従僧(ワキツレ)善博・菅太郎を併い、堂々たる貫録をみせて右官から鐘供養を告げて座着くと、下掛の流儀では狂言方が劇中で鐘を吊り、能力(アヒ)靖浩・融が寛くと、白拍子(シテ)光透が現われる。道成寺は各流とも前シテの唐織の文様に極めがあり、金春は亀甲地鶴巻立襟という。今回のシテ光透は面曲見・金鱗文白摺着付・黒地紋尺縁括腰巻・極メノ唐織蓮折の姿。道行のへ急ぐしるしか未だ暮れぬ、に逸る気持ちをもみせ、女人禁制をいうアヒとの問答に「いやこれは奈の女人とは変り候」と強く出るところに執念を。気圧されたアヒは舞を条件に烏帽子を被して禁制を破ると物着に。烏帽子をつけ一ノ松へ出たシテは、いわゆる執心の目付でキツと鐘を見込むと、煽り立てるような烈しい大鼓(眞之

介)の一調で舞台へ入り、へ嬉しや、の興奮。乱拍子の小鼓は観世新九郎、当地方来演は珍しい。乱拍子は何段だったか、シテと小鼓、単純な反復の難しさはラウエル「ボレロ」の小太鼓と同じだろう。見所として段を教えることに意味があるのかどうか、見惚れるうち分からなくなった。堰を切ったような急之舞から鐘人は左手を突き上げ鐘に接近、鐘の縁に手が掛かり、拍子を踏むや身体を捻って中へ飛び上がった。その鮮やかさはシテの二人の子息(芳樹・由樹)らの鐘後見との呼吸の妙、感動した。自若として淡々と語るワキ語が聞かせ、ノットで鐘が上がるも、鐘を押し上げる心に両手を挙げた姿から胸板に安座のシテ。面は白般若、着付は替えず、唐織は脱いだまま。立つと折(六郎兵衛・小・大・義命)でワキとの闘争は、スミから鐘を見上げ膝行するところ鬼気迫り、キリは己が息で火蓮塵となつて走り込み幕内で飛び、ワキのエウケン留メ。

【ワキ勝久】を忘れられず、交わした形見の扇を見詰めるばかりで宿ノ長(アヒ高義)から放逐されるどころ、きついアヒ、うじうじした様子のシテ、短かい前場がよい。ワキへの怒事もだし難く、物狂いとなつて都を彷徨うは神頼みのカケリの狂騒、へあら恨めしの人心や、のシマリ 哀れ。すでに花子は野上不在を知り、帰京のワキ、従者(ワキツレ)正樹)を併い男女の出会いが叶うという私に。先刻、花子が班女の扇とて舞い狂うを承知のワキツレ、「いかに狂女、何とて今日は狂はぬぞ」とシテを挑発すれば、女流のシテらしい打ち委れた風情が捨て難い。就中、へ関の月を、正中下居に眺めるところ、クセ中、一面方媚、襟白赤・白摺着付・赤地秋草文唐織の可憐な姿ゆえのシテの凄さが。玉藻ノ前の事蹟はクセ中、へ御殿の燃消えにけり、とワキにアシラフところ、また、帝を極まず玉藻ノ前が安倍泰成の調伏に化生の身を現わしへ消えし跡からじ、とツツと背を向け居立ちかかるとキツとワキツレにアシラフところ、何のお為なるらん、とキツとワキツレにアシラフところ、キリは扇の交換、傾くなく旨くいった。(1時間25分)

【不見聞】主(高義、豊の太郎冠者(シテ)小三郎)に留守居を言いつけるが、耳が不自由なのを案じ耳敏い座頭の市市(隆行)を呼ぶ。が、じつとして居ても退屈、盗人の聞人聞きつけたら座頭が豊に合図することに決めると、悪戯好きの二人、先ず座頭が豊を騙して右往左往するのを唾えば、謀られたと知る豊も然る者、盗人は居ないで目出度いゆえ小舞を舞うので、舞い終えたら顔を撫でて知らせるから寝てくれと頼み、へいと物細き御座いと、【柴垣】を舞い、足で顔を撫で一矢を報い喰いにすれば、この度は座頭が返礼に平家を語るから、語り終えたら手を挙げるので寝めてくれと頼み、へそもそもこの豊と申すはへ意地悪つんばの金つんば奴、などと悪口雑言とは分からず、寝る豊。また謀られたと豊は、魂胆あつてもう一番舞うぞと小舞語は「鶴鶴」、へこの川波にばつと放せば、と座頭の足を取

つて倒すと「勝つたぞ勝つたぞ」と走り込み、この仕打ちに座頭は先は良くないぞと杖をつき入る。隆行者を虚仮にするようだが小三郎・隆行の熱演によって見えてくる当陸の社会に力強くあつてやらんと融け込む座頭者の活力。(24分)

【殺生石】那須原、石の上を飛ぶ鳥が落下するのを見て驚愕する女翁道人(ワキ勝久)の能力(アヒ)靖浩、そこへ呼掛で現われる思女(シテ)狂太郎、ワキとの問答に殺生石の謂れ、玉藻ノ前に触れるところ淡々とす、み、へ那須野の原に立つ石の、と初回(正宣・輝和ら)になつてから、面方媚、襟白赤・白摺着付・赤地秋草文唐織の可憐な姿ゆえのシテの凄さが。玉藻ノ前の事蹟はクセ中、へ御殿の燃消えにけり、とワキにアシラフところ、また、帝を極まず玉藻ノ前が安倍泰成の調伏に化生の身を現わしへ消えし跡からじ、とツツと背を向け居立ちかかるとキツとワキツレにアシラフところ、何のお為なるらん、とキツとワキツレにアシラフところ、キリは扇の交換、傾くなく旨くいった。(1時間25分)

前号の訂正
4頁5段18行を見—見

11月15日・名古屋生学生会(式能)

【釣狐】「狐三昧」とあり、野村小三郎の東京芸大・那須他分野の同期生による長唄「那須野」、箏曲「呪狐」と狂言「釣狐」。本舞台が始まる前に小三郎が同会、進行係で三分野の出演者による座談会があり、在野時代の想い出や、それぞれの遺の芸の話などがあり面白かつたが、気になるのは「釣狐」。野村万蔵著「狂言の道」釣狐の項に次のようである。

シテの演者は装束をつける前に、幕うちの鏡の間に設けられた屏風内へ入ります。この屏風内へ釣狐を演じた経歴のある者が、装束をつける為に幕内後見として入ることを許されるだけで、いろいろの心得を必要とするこの屏風の作法が習いであります。装束をつけ終わると、シテは床几に掛け氣を落し着けて待ちます。このように楽屋で床几に掛けることは、勿論他の曲では許されないのであります。——中略——

後見という者は普通は舞台だけです、この曲に限って幕内にシテとアドとそれぞれの後見二人の外に、前に述べました屏風内の幕内後見が二人、それにこの幕の係である楽屋後見が二人と都合六人の人数を要します。

これ程の秘曲、出演前には慎しんでも慎しめ足りないと思われるが、少々寛ぎ過ぎではなからうか。六度目というから勿論自信はあつたでしょうが、さて、舞台はシテ小三郎、アド隆行、そつなく熱演だったが前場はアドに対する畏れ、怯えの風情が薄らよつて、後場はむしろしやうな気分も感じられ、一曲としては精神性の深みも元氣過ぎて消えてしまつたのでは、と思つたのは儼目か。(1時間12分・11月21日・第八回狂言三の会)

新年 新 賀 謹

葵心庵 舞台

尾張旭市東大町原田二四九三ノ二
若杉ビル(旭市役所南)
電話 〇五六二五④三三四六番
能舞台 電話 〇五六一五④六九八

鳳の会

林 和 利
井 上 菊 次 郎
佐 藤 友 彦

〒490 名古屋市中区平和一〇一四
野村事務所 気付
電話 052(350)7971
FAX 052(350)7972

狂言やるまい会

野村小三郎
松田高義
奥津健太郎

〒490 名古屋市中区昭和区滝川町54
サンハウス滝川3D 井上芳
電話 052・834・8607
FAX 052・834・8607

狂言 共同社

井 大 井 井 井
井 大 井 井 井
井 大 井 井 井
井 大 井 井 井

〒096 東京都左京区北白川東小倉町28
電話 〇七五(七〇)二二〇一二番
FAX 〇七五(七〇)二二二三二

喪中につき
年賀欠礼いたします
浦田保浩

楽 諷 庵 舞 台
連絡先 名古屋昭和区川名山町一〇五
電話 (八三二)三四九一

彰 諷 閣
連絡先 豊中市緑丘五十五一四
山本博通
電話 (〇六)六八四九一二五八
または 安城市三河安城東町一七三
グレイシアスヒラ安城内
電話 (〇五六六)七七一八三四一

ウシマド写真工房
牛 窓 正 勝
雅 之
〒602 東京都上京区北野七七軒
TEL 〇七五(四六)二二三四二
FAX 〇七五(四六)一五七七二

栄 能 楽 舞 台
名古屋市中区栄五十六一四
電話 (二六二)二一八二三番

朝日カルチャースセンター
雛子教室
小鼓 後藤孝一郎
丸栄スカイル10階

NHK放送予定(平成22年2月~3月)

Table with NHK-FMラジオ (日曜日 7:15~8:00) and program details for 2月21日, 2月28日, 3月7日, 3月14日, 3月21日, 3月28日.

演能カレンダ―

名古屋能楽堂

Table with dates (2月, 3月, 4月) and event details for 名古屋能楽堂 3月定期公演, 第1回名古屋片山能, 第2回名古屋宝生会定式能.

社 友 の 能 楽 行 発

名古屋市中種区千種2丁目18-18 (郵便番号 464-0858) 電話 (052) 731-7984 FAX (052) 733-2837 振替口座 00800-6-36393

能 楽 の 友

名古屋市芸術奨励賞

能楽の友社受賞

〔団体〕伝統芸能部門

名古屋市は、芸術文化の振興、創造活動に大きな功績のあった個人・団体に芸術賞を授与しているが、昭和21年度名古屋市芸術賞として、芸術特賞二人、芸術奨励賞二人と一団体を決定。2月5日東区のメルバルクで授賞式が挙行政され、本紙「能楽の友」(加野昭二郎代表)は、伝統芸能の分野で、芸術奨励賞を河村たかし名古屋市長から授与された。

第1回

「萬歳楽座」公演

藤田六郎兵衛師が主宰

3月26日 国立能楽堂

笛方藤田流十一世宗家・藤田六郎兵衛氏は、昨年東京・国立能楽堂で、初舞台から50年の記念の会を催し、菅門宮久子妃殿下の御臨席を得て盛会に行われたが、このたび新しい観能の会として「萬歳楽座」を発足、主宰して、きたる3月26日(金)東京・国立能楽堂で初回公演を開催する。

出演/片山幽雪、梅若玄祥、大槻文蔵、野村萬斎、藤田六郎兵衛(司会) 素囃子「道成寺組曲」笛・藤田六郎兵衛、小鼓・大倉源次郎、大鼓・亀井広忠、大鼓・観世元伯 能「土蜘蛛」朝光・観世清和、大刀持・観世喜正、胡蝶・観世鏡之丞、僧・大槻文蔵、蜘蛛ノ精・梅若玄祥、独武者・宝生閑・独武者ノ下人・野村萬斎、笛・藤田六郎兵衛、小鼓・曾和博朗、大鼓・亀井広忠、大鼓・観世元伯、地謡・片山幽雪ほか

S席12,000円/A席1,000円/B席900円/小学生3000円 [チケット申込み] 電子チケットぴあ TEL0570-02-9999 (Pコート 400-393) ヲロロンチケット TEL0570-0884 003 (Lコート32536) 藤田六郎兵衛事務所 TEL052-5771-5763 (FAXとも) 名古屋市西区幡下2-10-19 左近クリエーション TEL03-3354-9012 (受付平日午前10時~午後6時) 会員募集/問い合わせ、萬歳楽経運営事務局(アゴ音楽事務所)内 東京都新宿区左門町6-10、TEL03-5379-8717、FAX03-5379-5303

名古屋能楽堂三月定期公演

三月六日(土)午後二時開演 名古屋能楽堂

狂言(和泉流) 節分 シテ 佐藤友彦 アト 佐藤融 大鼓 河村総一郎 笛 鹿取希世 小鼓 後藤孝一郎 後見 今枝郁雄 前野 郁子 古橋 正邦 能(観世流) 姥 高安 勝久 河村総一郎 加藤 洋雄 白頭 杉江 正樹 後藤孝一郎 鹿取 希世 間 井上 靖浩 本由 勲 梅田 嘉宏 高橋 甫 武田 久 加賀 敏彦 清沢 一政 地謡 後見 武田 邦久 梅田 邦久 地謡 高橋 甫 武田 久 加賀 敏彦 清沢 一政

主権 名古屋市文化振興事業団

(名古屋能楽堂) 能楽協会名古屋支部

入場料 前売指定 四〇〇〇円(能楽堂のみ取扱い) 前売一般 三〇〇〇円(当日三五〇〇円) 学生前売 二〇〇〇円(当日一五〇〇円) 取扱所 名古屋能楽堂(0522-2331-9008) チケットぴあ(05270-0231-9008) プレイガイド、ナディア(0522-2331-073) (Pコート 40988) (0522-2331-073) (0522-2331-073)

第一回名古屋片山能

三月十三日(土)午後二時開演 名古屋能楽堂

半能 石 橋 武田 大志 片山 幽雪 梅田 邦久 高安 勝久 河村真之介 後藤 嘉津幸 加藤 洋輝 大 江 一 忠 河村 博重 地謡 橋本 忠 武田 邦久 古橋 正邦 後見 武田 邦弘 梅田 邦弘 地謡 橋本 忠 武田 邦久 古橋 正邦

能 船 舟 慶

〔照明能〕 子方 分林 達隆 片山 謙司 殿田 謙吉 亀井 広忠 吉阪 一郎 竹市 学 重 前 直 倉 則 久 英 志 御厨 誠 吾 間 井上 靖浩 後見 小林 慶三 地謡 大 江 一 忠 河村 博重 分林 達隆 梅田 邦久 古橋 正邦

舞囃子 高 砂

片山 幽雪 亀井 広忠 吉阪 一郎 竹市 学 〔片山九郎宗朗氏欠〕 地謡 橋本 忠 武田 邦久 古橋 正邦

一色神社奉納能

450年の伝統を守る一色能は、きたる3月14日(日)伊勢市一色町公民館で、平成22年一色神社例祭の奉納能を開催する。主催一色町能楽保存会、一色町自治会。能組は、能楽翁「羽衣」狸々狂言「鬼瓦」清水はじめ舞獅子1番、連吟4番、連管1番、独吟2番、仕舞25番。とくに将来の後継者として養成している子供教室のメンバーが仕舞に出演、保育園児の連吟をはじめ出演は幼稚園から中学生まで合わせて数十名になる。一色町能楽保存会事務局 伊勢市一色町一三〇六一、☎059-02779-6526(携帯09-059-02779-6526)

一色町能楽保存会

〔入場料〕 S席(正面指定席) 五〇〇〇円 A席(自由席) 四〇〇〇円 学生席(自由席) 二〇〇〇円

〔チケット取扱〕

片山能楽・京舞保存財団 TEL075-5531-6 名古屋能楽堂 075-5531-6 学アプレチケ92 000-99003 チケットぴあ 05270-0231-9008 (Pコート 409788)

名古屋芸術奨励賞 能楽の友社様 名古屋市は芸術賞を授け市民の心の拠り所となるべき芸術の伸張をねがっております。あなたのために、たゆみなき精進努力による、清新な業績を讃え、さらに大いなる期待と希望を託し、芸術奨励賞を贈ります。平成22年2月5日 名古屋市長 河村たかし

能楽の友社

〔2009年〕12月号で516号に及ぶ。「能楽の友」紙の特徴は、能楽界の流儀・流派を超えた横断的な情報の提供と活動であり、このような能楽情報誌は「能楽の友」紙を含め、全国でも2紙を数えるのみである。能楽は平成13年に世界無形文化遺産に指定されたが、「能楽の友社」設立当時は、東京の国立劇場にも能舞台が無く、その建設が内外から切望されていた時代であった。このような能楽界の激動の時代において、名古屋能楽堂の建設運動、熱田神宮能楽堂の改修運動などをつぶさに伝えるとともに、能楽愛好者の要望を汲み上げ、能楽堂建設の呼びかけ報道を行うなど、建設実現への一助となつた功績は非常に大きい。また、創刊以来この地方の能楽情報を余すところなく伝える役割を担ってきた。

一色町能楽保存会

450年の伝統を守る一色能は、きたる3月14日(日)伊勢市一色町公民館で、平成22年一色神社例祭の奉納能を開催する。主催一色町能楽保存会、一色町自治会。能組は、能楽翁「羽衣」狸々狂言「鬼瓦」清水はじめ舞獅子1番、連吟4番、連管1番、独吟2番、仕舞25番。とくに将来の後継者として養成している子供教室のメンバーが仕舞に出演、保育園児の連吟をはじめ出演は幼稚園から中学生まで合わせて数十名になる。一色町能楽保存会事務局 伊勢市一色町一三〇六一、☎059-02779-6526(携帯09-059-02779-6526)

〔2面に関連記事〕

当地の各流儀・流派・結社・社中の消息を辿る ⑩

竹尾 邦太郎

五、「澹華能・幸友会別会鑑賞能」①

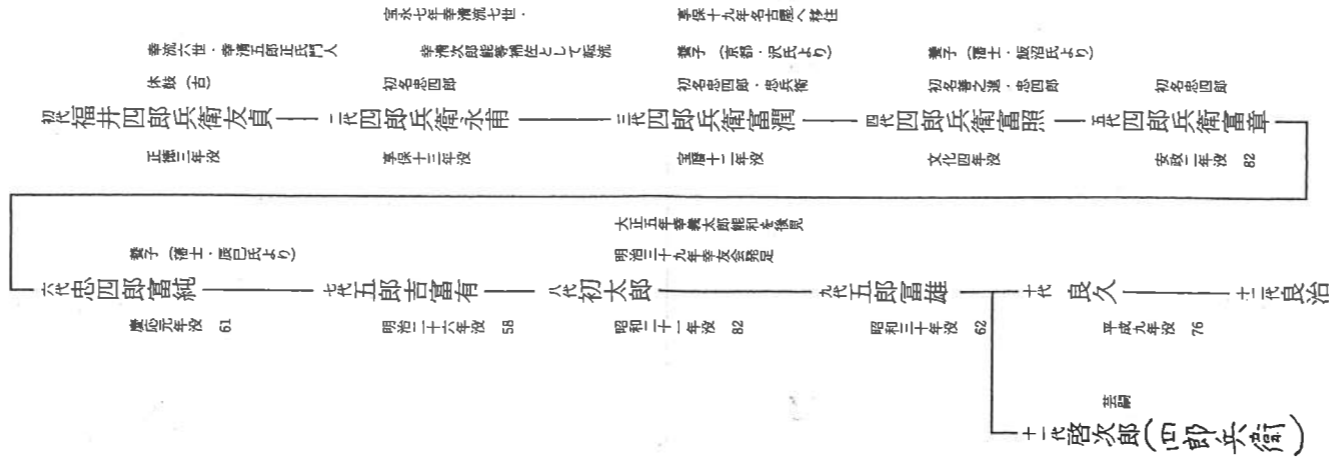
戦前、昭和10年(一九三三)5月24日を起源に戦中を挟み戦後、昭和23年に再開、昭和46年(一九七二)10月24日、第65回公演で終焉を迎えた名匠鑑賞能、主宰の小鼓方幸清流の田鍋惣太郎(明治17年12月12日―昭和46年12月4日)は東西から名手を招聘して当地能楽界を刺激、その発展に与与するところ大であったが、それから18年後、その間の渴を癒やすかのように同じ雛子方から福井啓次郎(昭和5年)が澹華能を起す。福井家は尾藤隆に抱えられた小鼓方の名家(系譜参照)、幸清流の分家格後見の家という。平成元年11月3日、澹華能の発会に当たり、主宰の福井啓次郎は会名の趣意と記念すべき初回に選

んだ能「墨染桜」について次のように述べている。

拝啓 爽秋の候益々御清栄の事とお喜び申し上げます。さて今般、例年の秋の幸友会に併せ、鑑賞能を澹華能と名付け催す事となりました。澹華能とは福井家の家紋・六角に六つ唐花(カラハナ)の音トウカに因み、鼓は澹の音と自然居士・白樂天などの謠にもあり、私只今住みます大須の古名・浪越に掛けての命名で御座います。出来れば毎年東西の名手を招き、名曲・秘曲を取上げ私始め一門の研鑽の場と致し度く存じます。

今回は大正天皇諡園の昭和二年五月景服町の舞台にて、九世福井

【福井家】(尾藤隆小鼓方)



能楽の友社 主なあゆみ

昭和41年、能楽協会名古屋支部によって構想が練られていた、「名古屋に新能を」という企画が実現し名古屋総鎮守・若宮八幡社で開催、千五百人の観客で会場を埋めつくし、大きな反響をよんだ。これを機に能・狂言の伝統芸能をさらに親しまれ、知ってもらおうという能楽師の熱意が「能楽の友」紙誕生の契機となり、その年の秋、2回にわたり発刊予告第1号、第2号を発行

昭和42年 「能楽の友」創刊号発行

昭和44年 第1回論曲名所めぐり実施(昭和62年まで19回実施)

昭和45年 創刊3周年記念として、別会能「運成寺」公演

昭和50年 名古屋新能の歴史を記す冊子「新能」刊行

昭和60年 熱田神宮能楽部創立30周年記念誌「記念能」刊行

平成元年 名古屋市制100周年記念乱能の報道

平成3年 名古屋能楽堂



めつくし、大きな反響をよんだ。これを機に能・狂言の伝統芸能をさらに親しまれ、知ってもらおうという能楽師の熱意が「能楽の友」紙誕生の契機となり、その年の秋、2回にわたり発刊予告第1号、第2号を発行

昭和42年 「能楽の友」創刊号発行

昭和44年 第1回論曲名所めぐり実施(昭和62年まで19回実施)

昭和45年 創刊3周年記念として、別会能「運成寺」公演

昭和50年 名古屋新能の歴史を記す冊子「新能」刊行

昭和60年 熱田神宮能楽部創立30周年記念誌「記念能」刊行

平成元年 名古屋市制100周年記念乱能の報道

平成3年 名古屋能楽堂

春季菊の会 能「源氏供養」

3月14日 金剛能楽堂
金剛流「菊之会」(廣田泰三師

主宰)は、きたる3月14日(日)金剛能楽堂で「菊之会春季公演」を開催する。午後2時始。

能組は、仕舞「采女」(きり)シテ廣田泰三

能「源氏供養」(シテ廣田泰三、ワキ 村山弘、ワキツレ 小林努、笛 森田保美、小鼓 林吉兵衛、大鼓 谷口有祥、後見 金剛水護、豊嶋幸洋、地謡 種田遣一、廣田幸稔、今井克紀、宇高竜成、豊嶋晃朗、宇高徳成)

狂言「嵐山伏」(茂山あきら、丸石やすし、増田浩紀、後見 佐々木圭吉)

会費 正会員(年2回公演) 15000円/優待券連呈

入場料(全自由席) 7000円、学生券5000円。

お問い合わせ、申し込み 菊之会事務局

廣田泰三(京都市左京区下鴨宮崎町128、TEL075・781・3421)▽廣田泰能(京都

市中央区室町通四條上ル、レスター1シエ四條烏丸1007号、TEL075・213・1727)

子ども狂言教室 名古屋市巡回公演

名古屋市、名古屋市文化振興事業団、狂言共同社主催による「名古屋市子どものための巡回劇場・子ども狂言教室」狂言がやってきました。3月20日(土)東文化小劇場、27日(土)中区役所ホールで開催される。

演目は「嵐山伏」「樺燵」「巖山伏」。両会場とも午前の部、午後の部の2部制で公演。入場料/中学生以下5000円、大人8000円。申込みは狂言共同社(佐藤事務所)電052・911・8784、名古屋能楽堂052・231・0088、文化振興事業団052・249・9387。

友枝昭世師 能「半部」立花

5月1日 豊田市能楽堂

豊田市能楽堂主催の「五月能」は、5月1日(土)豊田市能楽堂で、人間国宝・喜多流の友枝昭世師を迎えて能「半部」立花を伊衣鈴する。

なお平野啓子さんにより「源氏物語の女・夕顔」の語り・朗読が行われる。午後1時30分開場、午後2時開演。

入場料/全席指定 正面席6000円、脇・中正面席4000円(学生半額)

チケット販売 豊田市能楽堂・056565・3582200、チケットぴあ・電話0570・0299999(Pコード401・774)

名古屋宝生会定式能(第254期)

三月二十一日(日)午後一時始
名古屋能楽堂

土屋 周子
衣斐 愛子
清 経 杉江 元 河村 総一郎 船戸 昭弘 竹市 孝

狂言 岩橋 男 井上 靖浩 女 佐藤 友融 仲人 佐藤 友彦 後見 今枝 郁雄

能 羽衣 佐藤 耕司 飯富 雅介 尾 寛 福井 四郎兵衛 大野 誠命 鬼頭 義命

後見 竹内 淳子 地謡 鈴木 久仁七 和久 莊太郎 王井 博祐 石原 隆成 衣斐 正宣 加賀山 幸三 久野 幸三

仕舞 嵐山 和久 莊太郎 地謡 柳川 馨一 辰石 黒 辰巳 二郎

仕舞 半部 倉本 雅 地謡 衣斐 愛子 竹内 淳子 十屋 周子

能 山姥 内藤 飛能 高安 勝久 河村 眞之介 加藤 洋輝 杉江 元 後藤 嘉津幸 藤田 六郎兵衛 榎元 正樹

問 今枝 郁雄

後見 倉本 博祐 地謡 竹内 孝成 石黒 孝 王井 道尚 夫人 和久 莊太郎 衣斐 正宣

(終了予定 五時半頃)

主催 名古屋宝生会
名古屋市中区錦区御器所3-1-23 1-19-1
電話 FAX 052・882・5660

【観客員券】
正会員券 一八〇〇〇円
(年間通用4枚綴り)
当日券五〇〇〇円、学生券二〇〇〇円
プレイガイド(当日券のみ取扱い)

取扱い 芸文(地下2階)、栄アレチケ92(三越地下)
ナナイアパーク(7階)、松坂屋本館(7階)
出演楽師宅又は宝生会事務局へ

五郎が金剛右京師のお手を致しました墨染桜の名古屋での上演を企画致しました。八月、善光寺新能の節、金剛宗家に御伏詣り御出演頂きますが、先帝を偲ぶ詠歌を主題に桜の精をシテとしたしめやかながら華のある金剛流独特の本三番目能をご覧頂きます。御来駕の程御願ひ申し上げます。草々

追 告 墨染桜の名古屋での上演につき、大正天皇諡園の昭和二年

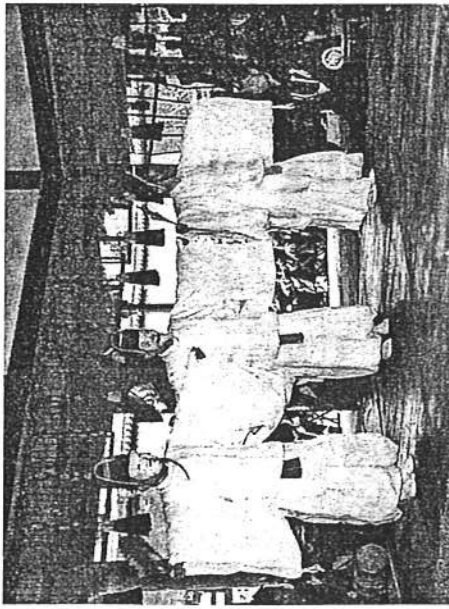
五月景服町の舞台にて、九世福井五郎が金剛右京師のお手を致しました折の語を聞いて居りましたので、金剛流にての企画が有るかと思っております。年内には舞台・三役の都合のつく日が無くなり半ば諦めて居りました所、此の八月善光寺新能にて金剛の御家元にお目に掛りました折、例年の私共秋の幸友会十一月三日のご都合をお尋ねしました所、お繰合せ頂ける事となり、御家元のおシテにて上演の運びとなりました。白子の不断桜の如く小春日の非時の花も珍しきかと感考致します次第です。

白子の不断桜 鈴鹿市に在る高野山真言宗の名刹、白子山観音寺の境内に咲く国指定(一九三三)天然記念物。当寺の本尊は白衣観世音菩薩、安産の靈験あらたかな靈場として子安観音の名で知られる。なお、此の桜に取材した能

「不断桜」が「校註謡曲叢書第三巻」博文館、大正四年刊、に収録されている。(筆者註)

初回の能組は、舞雛子「高砂」泉嘉夫、一調「胸之段」福井良久・衣斐正直(詠)、舞雛子「善知鳥」奥善助、能「墨染桜」金剛殿・西村欽也、佐藤友彦、藤田六郎兵衛、福井啓次郎、河村総一郎、地頭廣田隆一、主後見廣田泰三。

②(画つづく)



昭和44年・新能保存会パンフレット「新能」より転載

外不出の三人翁である。シテ信高、ツレ安明・神一。本来、白の浄衣に白指貫の、所謂「白式」で、小鼓も一丁であるが能舞台出勤のことで、青糸の蜀江錦文様翁袴衣に紫裳(神一のみ赤裳)の指貫を

②面よりつづき) なお「豊栄楼」は諷刺(りようあん)の能と言われ金剛流の専有曲。諷刺とは飛騨、天子の忌中、大喪の期間を言う。当地では大正天皇崩御の忌中、昭和二年五月二日、泉服町能楽堂で金剛右京(明治5年―昭和11年)が勤めて以来63年振りの上演。今回は昭和天皇を偲び哀を慰めるため催主・福井啓次郎による時置を得た好企画。因に本曲は昭和改正本で廃曲となったものが昭和新修本発行と同時に、現行曲に組入れられ、昭和53年3月19日、流誌「金剛」百号記念の催しの一として復曲上演される。シテ金剛殿ワキ岡治郎石衛門アと茂山十五郎・地頭廣田隆一・主後見島崎弥左衛門。

第三回は平成3年11月9日、名古屋市民芸術祭'91協賛・福井家名古屋三百年記念。能組は「翁・十二月往来・父尉延命冠者・烏帽子祝儀・橋掛之舞」金春信高・金春安明・横山神一・野村又三郎・井上祐一・藤田六郎兵衛・福井啓次郎(頭取)・福井良治・柳原富司忠(脇取)・河村総一郎・地頭吉場広明・主後見金春晃美・舞囃子「唐船」衣裳正真、狂言「福之野弘之、居囃子(駿馬天狗)衣裳正真・水上輝和(謡)藤田六郎兵衛・福井啓次郎・吉田定男・舞囃子「野郎」梅田邦久・藤田六郎兵衛・幸正昭・河村真之介、一調「小僧」後藤孝一郎・金春晃實(謡)、能「船弁慶・遊女之舞・替之出」本田光洋・鬼頭尚久(子方)西村欽也・高安勝久・飯富雅介・佐藤友彦・鹿取希世・幸義太郎・真庭一・鬼頭喜太郎・地頭金春安明・主後見高橋汎。今回の「翁」は高都春日社・興福寺古儀に則る所謂三人翁、金春家のものである。なお、大鼓には「打掛り」の小書が付いた。参考までに本紙三〇〇号(平成3年12月号)の記事を再録する。

お、宝生流の「鷗鷗小町」は藩制時代はいざ知らず、維新以後も記録が無く今回が当地初演と思われる。 第三回は平成3年11月9日、名古屋市民芸術祭'91協賛・福井家名古屋三百年記念。能組は「翁・十二月往来・父尉延命冠者・烏帽子祝儀・橋掛之舞」金春信高・金春安明・横山神一・野村又三郎・井上祐一・藤田六郎兵衛・福井啓次郎(頭取)・福井良治・柳原富司忠(脇取)・河村総一郎・地頭吉場広明・主後見金春晃美・舞囃子「唐船」衣裳正真、狂言「福之野弘之、居囃子(駿馬天狗)衣裳正真・水上輝和(謡)藤田六郎兵衛・福井啓次郎・吉田定男・舞囃子「野郎」梅田邦久・藤田六郎兵衛・幸正昭・河村真之介、一調「小僧」後藤孝一郎・金春晃實(謡)、能「船弁慶・遊女之舞・替之出」本田光洋・鬼頭尚久(子方)西村欽也・高安勝久・飯富雅介・佐藤友彦・鹿取希世・幸義太郎・真庭一・鬼頭喜太郎・地頭金春安明・主後見高橋汎。今回の「翁」は高都春日社・興福寺古儀に則る所謂三人翁、金春家のものである。なお、大鼓には「打掛り」の小書が付いた。参考までに本紙三〇〇号(平成3年12月号)の記事を再録する。

「翁 十二月往来・父尉延命冠者・烏帽子祝儀・橋掛之舞」高都興福寺古儀新能の初日、春日社頭での一行なされる門外不出の三人翁である。シテ信高、高、ツレ安明・神一。本来、白の浄衣に白指貫の、所謂「白式」で、小鼓も一丁であるが能舞台出勤のことで、青糸の蜀江錦文様翁袴衣に紫裳(神一のみ赤裳)の指貫を

着けた。鏡ノ間で火打を切る音、笛と小鼓の調べ、言葉尻長く曳く「お養」の寂びた声、ゆつくりと上る幕。狂言方面箱の祐一(兼十蔵)・元秀・信行に続き、シテ方三人が静々と進ぶところは莊嚴じの上もない。囃子方は六郎兵衛・啓次郎・良治・富司忠・総一郎。地は汎・広明・八郎・鉄郎ら、三番聖は又三郎である。 爽快な十蔵ノ舞の後、へ総角やとんどや、を聞き、クツロいで居た大鼓・総一郎は右足で右袖脱ぐと三合程離した。石井流の習「打掛り」の真ノ調べである。終つて再び袖を通すとクツロギ、その袖で大鼓を包み込んだ。次いで十二月各月のめでたい詞章を掛合で誦す「十二月往来」そして、笛と小鼓のアシラとがあつてシテ翁の舞になる。本来の、土俗的素朴な翁と打つて爽り格調高く崇高な趣である。地の、へ萬歳樂で三人翁は合掌叩頭、面を脱くと拝礼をして面箱に納めた。この時、大鼓方後見は大鼓を替える。延命冠者を着けた十蔵が、父尉のシテと向き合つて「御祈禱申さん」と招き願して一足詰マルところなどは、古風が面白い。シテの短い舞があつて、小鼓頭取の長い掛声の裡に、大鼓は直すと素袍の両袖脱いで「打掛り」に備える。その前に三人翁が翁唄りの長閑な囃子で幕に退くや、大鼓は二ノ松へ往き、左ウケて正坐する。小鼓三挺が打ち出して笛がヒシギを吹くと、大鼓・総一郎は左膝を立てて激しく打ち出し、打ちながら立つて正面右、框近くまで走り、それから真後ろに退つて床几に掛かった。圧倒的な大鼓の迫力は將に超脱級であつた。搦ノ段は途中両袖被いて二ノ松に抜ける橋掛ノ舞があり、鳥籠ひは二つ跳んだだけだつた。烏帽子を廻る問答が小書「烏帽子祝儀」。「さらばこの三つの烏帽子をこの尉が祝い申さう」と鈴を受けての鈴ノ段は軽やかに浮き立ち、又三郎しなやかに見せつけた。なお、和泉流がこの「翁」に付き合うのも当地ならでは、珍しうめだつた。(1時間21分)

以下次号

◆師走から睦月の舞台◆ 「名古屋能楽堂十二月定例公演」「青陽会定式能」「豊田市能楽堂狂言づくし」と「名古屋能楽堂正月特別公演」「豊田市能楽堂新春能」

竹尾邦太郎

「田村」都見物に清水寺を訪ねる旅僧の一行(ワキ勝久ワキツレ正樹・幸)に清水寺は地主権現の桜を自讃する庭掃きの童子(シテ大志)が寺の縁起を語り、刃りの名所を教える前場。 旅僧一行の講経に惹かれ現れる坂上田村麿(後シテ大志)、都郎安全になすべしとの仰せ、で正中床几に掛かると、クセは馬上の心でへ勢多の長橋と指廻シ(写真)て長大な景を見せ、へ踏み鳴らし、と三ツ拍子踏むところに逸る気持を。上ケ端あと、へ弓馬の遣もさきかけんと、立ち、カケリからキリは勇壮流麗な鬼神退治の型の連続。若い徳丈夫のシテはきびきびと極めて爽快。へ一度放せば千の矢先、とハネ胸に正先へ進み、へ雨敷と、降りか、る矢を面切つて見上げ、へ乱れ落つ、矢を防ぐところに扇を頭に翳し飛返り下居のところなど鮮やかだつた。(1時間18分・12月13日・名古屋能楽堂十二月定例公演)

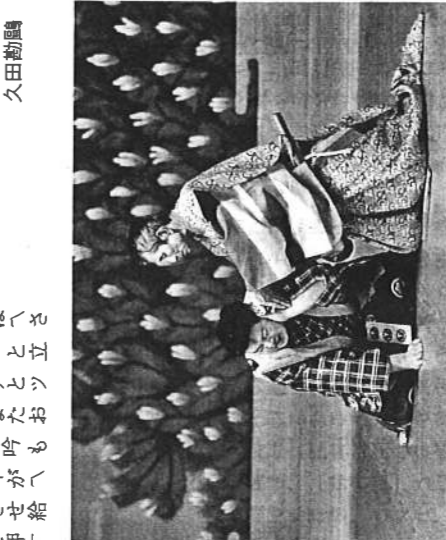
「鉢木」僧に身を置き民情観察に廻国の最明寺時頼(ワキ元)、雪の佐野の泊りで秘蔵の盆栽を齎して持て成す不遇赤貧の源一(の親切と、シテのいざ鎌倉の心構えに感じ入り信を後にする前場。 先づ何事もなくツレが出、次いで次第々囃子(幸・齋津幸・総一郎)でワキが出る。雪笠であれば情景も鮮明、シテの出の「ああ降つたる雪かな」の迷惑な気持ちにより利くのではと思われるが、一旦は信を断るシテが、ツレの徳應でワキを正先から「なうなう旅人」と呼び戻すところ、「袖なる雪をうち払ひうち払ひし給ふ気色」に左袖二度払うような所作を眺める心象の現われ。へこれは東路の、とシテは切向(邦久・正邦・尊宏ら)で構態へ。雪の上のとワキの肩に手を掛け信を勧めるのも神妙。盆栽を薪に供するところは、梅は振り下ろして伐り、桜は二度鋭く突いて伐るが、そこに太刀と梅の手の麗さをみる。クセは千の矢先、とハネ胸に正先へ進み、へ雨敷と、降りか、る矢を面切つて見上げ、へ乱れ落つ、矢を防ぐところに扇を頭に翳し飛返り下居のところなど鮮やかだつた。(1時間18分・12月13日・名古屋能楽堂十二月定例公演)



名古屋能楽堂12月定例公演 「田村」 左より武田大志、高安勝久



青陽会 「鉢木」 久田勘麿



青陽会 「寝音曲」 左より井上靖浩、佐藤友彦 (杉浦賢次氏撮影)

「田村」武田大志 (杉浦賢次氏撮影) 先づ何事もなくツレが出、次いで次第々囃子(幸・齋津幸・総一郎)でワキが出る。雪笠であれば情景も鮮明、シテの出の「ああ降つたる雪かな」の迷惑な気持ちにより利くのではと思われるが、一旦は信を断るシテが、ツレの徳應でワキを正先から「なうなう旅人」と呼び戻すところ、「袖なる雪をうち払ひうち払ひし給ふ気色」に左袖二度払うような所作を眺める心象の現われ。へこれは東路の、とシテは切向(邦久・正邦・尊宏ら)で構態へ。雪の上のとワキの肩に手を掛け信を勧めるのも神妙。盆栽を薪に供するところは、梅は振り下ろして伐り、桜は二度鋭く突いて伐るが、そこに太刀と梅の手の麗さをみる。クセは千の矢先、とハネ胸に正先へ進み、へ雨敷と、降りか、る矢を面切つて見上げ、へ乱れ落つ、矢を防ぐところに扇を頭に翳し飛返り下居のところなど鮮やかだつた。(1時間18分・12月13日・名古屋能楽堂十二月定例公演)

「鉢木」僧に身を置き民情観察に廻国の最明寺時頼(ワキ元)、雪の佐野の泊りで秘蔵の盆栽を齎して持て成す不遇赤貧の源一(の親切と、シテのいざ鎌倉の心構えに感じ入り信を後にする前場。 先づ何事もなくツレが出、次いで次第々囃子(幸・齋津幸・総一郎)でワキが出る。雪笠であれば情景も鮮明、シテの出の「ああ降つたる雪かな」の迷惑な気持ちにより利くのではと思われるが、一旦は信を断るシテが、ツレの徳應でワキを正先から「なうなう旅人」と呼び戻すところ、「袖なる雪をうち払ひうち払ひし給ふ気色」に左袖二度払うような所作を眺める心象の現われ。へこれは東路の、とシテは切向(邦久・正邦・尊宏ら)で構態へ。雪の上のとワキの肩に手を掛け信を勧めるのも神妙。盆栽を薪に供するところは、梅は振り下ろして伐り、桜は二度鋭く突いて伐るが、そこに太刀と梅の手の麗さをみる。クセは千の矢先、とハネ胸に正先へ進み、へ雨敷と、降りか、る矢を面切つて見上げ、へ乱れ落つ、矢を防ぐところに扇を頭に翳し飛返り下居のところなど鮮やかだつた。(1時間18分・12月13日・名古屋能楽堂十二月定例公演)

拍子は踏まなかった。全役、力の充実した立派な舞台だつた。(1時間44分) 「寝音曲」夜前、たまたま主(アト友彦)に謡を聞かれた太郎冠者(シテ靖浩)、事ある毎に所望されては叶わんと謡の事考を否定するが、否定しきれず、酒を飲まねばと歌々を埋ねれば、「とくと注がれませう程に」とねだる酒は大義三蔵。飲み干して「さ、取らせられい」大義乱暴に押し進ず可成の酩酊に「取らいでなろうか」と気色はむすびだが、あろうことか更に女共の膝枕でなければ謡を聞きたさに己むを得ず主が女共に代つて己の膝を貸せば、酔の勢いは寝転がって誦す太郎冠者の横着。坐つても、立つても声は出ないと言ひ張る太郎冠者だが、主が手枕を上する(写真)うち錯覚、逆に身体が起きて誦い出す小舞謡「貝尽し」が中々の名調。「さればこそ身共を騙しをつた」と主、「ホ、こりや忘れまして」「この構着者、やるまいぞ、やるまいぞ」の追込みにならず、「先づ今日は行て休め」「ハアア」となるのが珍しかった。(26分) 「野守」羽黒山の山伏(ワキ勝久)、修験の山・大峯葛城への進すが春日野に立ち寄り、そこで野守ノ翁(シテ大志)と出合い、謂れのありそうな池水が野守の鏡と呼ばれる事を知る。更に、

④面つづき



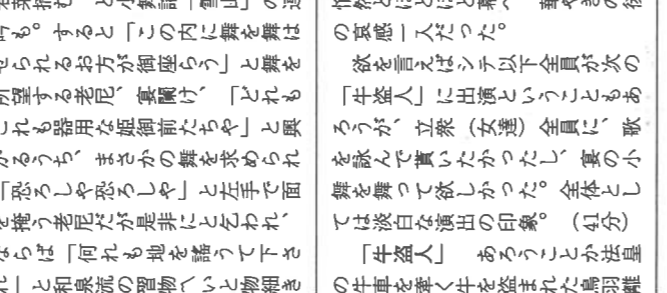
青陽会「野守」 武田大志

真の野守の鏡は鬼神が所持し聞けは興味ますます津々、古歌に詠まれた「蒼鷹の野守の鏡」に及べば、その逸話みずから語らうとするシテの確りした屋語がよい。昔、御符ではくれた鷹の行方を問われて老野守、「水の底に在るべきぞ」と立つと、狩人を働かすべく、「はつと」正先へ出ると水底を覗く心に下を見るシテ。地(一政・萬彦・敏彦)になりへよくよく見れば、と再度下を見、へ鷹は木居に、と目付柱上方を見る辺り、少々性急に思わぬでもないが几帳面に演じ、ワキに古歌の趣意を説き、帝の御意を得た敬意を昔話に、へ申せばすむ涙かな、と下居にシヤルと、地との掛合のロンギ。昔話を聞くほどに真の野守の鏡を見たがるワキに、鬼の鏡で見せられないとシテは、野守の我がなせ鏡を持たないのかとへ疑はせ給ふかや、とキツとワキを見据え緊迫のところ可。中入は作物(山)へ。

後場、ノットで作物に向かい、へ鬼神の明鏡曇らすして我に奇特を見せ給へや無無無無依、と折れば、へ一仏成道の法味に引かれて、へ野守の鏡は現れたり(写真)と作物から出る後シテ鬼神。それを恐れるワキに、ならば帰るぞとばかりに戻らうとするシテが可笑しい。が、呼び止められ、ワキの折棒に当たる義賊な舞動(誠・昭弘・眞之介・洋輝)に勢威を見せ、キリは天地を映す鏡の扱いも鮮やかに地獄の有様を見せる。飛び返つてへ打つて鉄杖の数々、と扇を下を打つところ、へ大地をかっぱと、拍子強々と踏み鳴らすところ、など粗さもみせるが若々しい力で押してくる行き方が痛快、トメ拍子は踏まなかった。(1時間12分、12月19日・青陽会定式能)

「鬼瓦」 「藩か逸国の大名」と正先の名宣はシテ栞丞、禮園に際し太郎冠者(アト麿)を併い、訴訟の無事落着を因幡樂師へお礼詣りに。首尾よく訴訟が叶ったのも此のお樂師の御利生、国許へ勸請したいとシテ、御堂の造作を後堂までぐるりと廻つて事細かに観察するうちに留まる黒い物。脇歴前から右上を指して「あれは何ぢや」とアトに問うは鬼瓦と分かり俄に落涙のシテは、不華するアトに国許の女共に似るのだと。そして、御堂の普請の細部に詳しくシテは、今度は美形には程遠い女共の顔の造作の一々を古明に活写してアトに同意を求めれば、困惑気味のアトは面白がつても居られず追従せざるを得ない苦しさ。女共の容貌が彷彿となるにつれて亦落涙するシテに、戻れば直ぐにもお会い出来ること、とツレが話題を転ずればシテも合点、斯様な時にはどつと笑うて退かう、と笑ひ留メに。シテの、朴訥正直な田舎大名の術の無さが巧みとして逢ふ、女共への愛情、微笑ましかった。小品ながら佳品。(12分)

「庵之梅」 梅の木といえは節くれだち、こつこつと骨ばつた印象を持つが、スミに据えられた紅梅ノ立木は垂直にすつと立ち梅に似合わない。大小前には紫引廻シの萬屋、屋根に紅梅をあしらひ正に庵の梅ノ中に老尼(シテ萬)。狂言次第の雛子(学・孝一郎、総一郎・義命)で梅見の女達(アト馬丞、小アト匡、小三郎、健太郎・万蔵、万蔵)が誰がかりで老尼の許を訪ねて来る。内の様子を窺う向いて嬌態に居並ひツツログと、引廻シが取られ姿を現わす老尼。隠樞の庵にも春には梅が人待ち願に咲き心も昔に還る、と思いを微吟する老尼の声を聞き、在庵を知ると立つ一同、女達の頭のアドは「如何にお察すか」と小腰を屈め、身内に居られませう。一旦、佳しい庵で恥しいと断るも、とやかく言うのも見苦しいと左



豊田市能楽堂狂言づくし「牛盗人」 左より小笠原匡、野村万蔵、野村拳之介

手で庵の柱を持つて立つと「腰いたや」と戸を開ける型を。賑々しく舞台に入つて来る一同が褒める梅に、老尼は自身を擁え、老ひぬれと花のぞしき盛り哉、と何か探つたいような含意。ほのぼのと和楽の雰囲気は「お察も今日は共に遊ばせよう」と初々しい。折角だから「何と口ずさきも御座らぬか」と勧めれば、二人が応えて詠む歌を老尼が披露、講評の後、それそれは晴れがましく自身の短冊を梅の枝に掛ければ、舞台も一応整いアトが「さあさあ小竹筒(ささえ)を聞かせられい」と呼び掛けて酒宴になる。「お忘ぢや、お察が」と先づ老尼が飲み、女達の中から肴にへ春毎にへ君を祝ひて若菜摘む、と小舞謡「雪山」の運吟も。すると「この内に舞を舞はせられるお方が御座らう」と舞を所望する老尼、真剛げ、「どれもこれも器用な姫御前たちや」と興がるうち、まさかの舞を求められ「恐ろしや恐ろしや」と左手で面を掩う老尼だが是非にとおわれ、ならば「何れも地を誇うて下され」と和泉流の習物へいと物細き



名古屋能楽堂正月特別公演「蒼老・水波ノ伝」 左より清沢一政、松山幸親 (杉浦賢次氏撮影)

御腰に、と小舞「柴垣」を舞う(写真)。因に平成10年、野村又三郎は「住吉」を舞っている。さて、萬の老尼の舞は老いの華やき、腰のひねり具合には残んの色気も逢ふ、舞上げれば女達の「よいやよいや」の喝采に「殿しや郎しや」と他言無用を、「御しはらしい事御座る」と褒められ、は「何のしはらしい事が」と照れる風情には可愛らしさも。萬、老尼の心技の微妙事事にみせる。キリは女達に梅の枝を土産に、と手折らせへ今の名残を惜しむらん、と正中から招き前に萬屋へ進み、舞へ退いて行く女達を見送る心、へ眼蔵にぐすと入りけり、と萬屋へ入り、右側から出ると孤影悄然とほとほと暮へ。華やきの後の哀感一入だつた。

欲を言えばシテ以下全員が次の「牛盗人」に出演ということもあろうが、立派(女達)全員に、歌を飲んで貰いたかつたし、真の小舞を舞つて欲しかった。全体としては淡白な演出の印象。(41分)

「牛盗人」 あらうことか法皇の牛車を奪く牛を盗まれた鳥羽離



名古屋能楽堂正月特別公演「筒竹筒」 野村小三郎 (杉浦賢次氏撮影)

宮ノ牛奉行(アト萬、盗人を訴人すれば仮に同類であっても罪を許し、その上、褒美は望みの俵、と高札を立てれば、子供(実兵庫三郎ノ息、子方拳之介)が訴人に出演する。取り次ぐ太郎冠者(扇丞)に牛奉行が早速その子供に会うて証拠を問えば、それには及ばず対決すれば明らか、の返事に太郎冠者と次郎冠者(匡)を答

疑者・兵庫三郎(シテ万蔵)を捕縛に向かわせる。虫の知らせに「あら不思議や、俄に曇の気色が変つた」と胸騒ぎを覚える兵庫三郎も捕えられて奉行の前に。頭なを白名切る三郎は、訴人が息子と知つて驚き面罵するも最早逃れられない。罪状認否を迫られ盗みは認めるが、親の年忌に手元不如意ゆえと弁解、更に布施の故事を引き合いには抗弁する。「小賢しい事を言い出した」と奉行、が繪圖出でて再び反らす(一度出した君主の言は取り消せない)、とて獄屋へ送らんとすれば、「先づお待ちなされませ」と遮る息子(写真)は褒美の件に言及、「さては勅にも偽りが御座るか」と奉行に抗論、親の助命が成らなければ親子共々成敗を、と震ながらの訴えに三郎も上訴した息子の真意を知り涙。奉行も流石に孝子の誠に打たれ、「物の哀れを知らざれば木石に劣る」と自戒、兵庫三郎を釈放する。

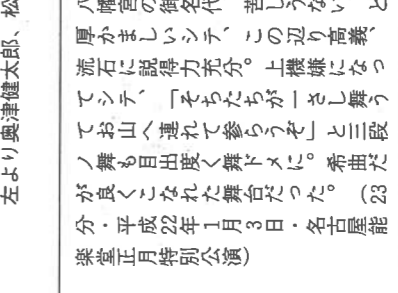
萬・万蔵・拳之介、三代に亘る以心伝心は阿吽の呼吸の妙味。訴人の子供に往々萬の眼差しの滋味、白洲で揺れる万蔵の感情の機微、就中、拳之介の確りした健気な行動は素晴らしく充実の舞台だつた。(41分、12月20日・豊田市能楽堂狂言づくし)

「筒」 注連繩の張られた舞台は清々しく正月の瑞氣。蘇芳な舞舞の中、千蔵(旭)は若さの発露、雄健に舞い納めて舞払いの役目を済ますと、翁(シテ邦久)は具わる威厳も荘重に翁舞の端正、袖捌きも悠揚と、天地人と踏む拍子にも重み。三番叟(小三郎)は力感あふれ、群中採之段は笛前から目付柱へ向かつてのいわゆる鳥飛どの三跳躍、まさに翼を伸ばし鮮やかな。ただ鈴之段を勤めて暮へ退くとき、緊張が解けたか、橋懸で扇を落したのには頂けない。(1時間2分)

「蒼老・水波之伝」 人口に膾炙する孝子譚。不思議の泉を鏡分に遭わされた勅使一行(ワキ雅介・ワキツ正樹・幸、目的の養老の瀬で、老いを養う霊泉の有難さに感じ入つて居る樵翁と樵夫(シテ一政ツレ孝志)に会う。シテは面小牛尉・樵津黄・小格子着付・白大口・茶水衣に杖。ツレは直面・樵赤・段殿斗目着付・白大口・濃緑水衣・負柴に水桶を持つ。ワキはシテとの問答に噂の親子と知り、養老と名付けの謂れを問えば、シテの詞をツレが受け、シテとの掛合から同吟に交々説くところ、少々気負いもみえて妙。湧水の在処を眼のあたりに御代を寿ぐとクリ以下を省き直ぐへ山路の奥の水にては、とロンギ。へこの水な行動は素晴らしく充実の舞台だつた。(41分、12月20日・豊田市能楽堂狂言づくし)

「筒竹筒」 八幡宮の神事に毎年神酒を奉納する大和の酒屋(アト隆行)と河内の酒屋(小アト健太郎)、同連して雑談のうち酒の容器を大和は筒(つつ)、河内は竹筒(ささ)だと口論するところ、口論しては遅れる故に急ぎ連れて参れの神勅で八幡宮の末社鳩ノ神(シテ高義)が出現すれば、判定が得られると同人喜び、「先づこれへ御來臨なされませ」と床几へ招じる。

愚かな事を、とシテ、同じ物だと論し、「筒竹筒」という酒の神・松尾大明神に関わる物語で同人を納得させると、口が乾いたからと神酒を飲ませと要求する。御奉納より先には如何なものか、と激るアトに、神勅で出現するからは八幡宮の御名代、苦しいない、と厚かましいシテ、この辺り高義、流石に説得力充分。上機嫌になつてシテ、「そちたちがさし舞うてお山へ連れて参らうぞ」と三鼓ノ舞も目出度く舞ドメに。希世だが良くこなれた舞台だつた。(23分、平成22年1月3日・名古屋能楽堂正月特別公演)



名古屋能楽堂正月特別公演「筒竹筒」 野村小三郎 (杉浦賢次氏撮影)

NHK放送予定(平成22年3月~4月)

Table with NHK-FMラジオ and NHK-TV放送予定. Columns include date, program name, and performer.

演能カレンダー

名古屋能楽堂 (能・狂言演能関係) (TEL 052-231-0088)

Calendar table for performances from March to May. Columns include date, event name, and location.

能楽の友

発行能楽の友社 名古屋千種区千種2丁目18-18 (郵便番号 464-0858)

太子ロマン斑鳩の里 櫻祭能公4月4日演 金剛流発祥の地

斑鳩町観光協会・奈良金剛会の主催による「太子ロマン斑鳩の里・桜祭能」は4月4日(日)奈良県斑鳩町の「いかるがホール」で催される。

昨年8月に逝きされた観世流シテ方・準職分、故熊澤惠美子氏を追悼する能の会が、5月22日(土)、名古屋能楽堂で催される。

故熊澤惠美子追悼能 観世清和宗家が来演

5月22日 名古屋能楽堂

追悼能は、能「井筒」「卒都婆小町」の二番、観世清和宗家が仕舞「碓」を上演。梅若吉之丞師をはじめ梅猶会の能楽師、中部地区能楽師が出演して手向ける。

した伝統芸能の継承と新たな観光資源の発掘をめざして、能楽金剛流発祥の地「斑鳩の里」を知っていただくことを目的として開催されるもので、桜花さかんなこの時期の能楽公演は今回で13回を迎える。

料金 前売2000円(自由席)、当日2500円(自由席) 定員729名(うち車椅子移動席4席をふくむ) 公演演目 能「田村」長床凡(シテ植田泰三) (金剛流)

能「殺生石」

廣田鑑賞会能

京都・金剛能楽堂で開催する。午後1時30分開演。鑑賞会能の番組は次のとおり。狂言「伯母ヶ酒」(茂山千三郎・松本薫、後見・鈴木実)

狂言「神鳴」(安東伸元) 仕舞「杜若」(豊嶋忠嗣) 仕舞「春日纏帯」(豊嶋幸洋) チケット販売所 法隆寺1センター・いかるがホール・斑鳩町内公民館

能 藤 戸

久也、今井克紀、和田次夫、鳥崎暢久、種田道一、掛川昭二、重本昌隆、種田道一、掛川昭二、重本昌隆、種田道一、掛川昭二、重本昌隆

能 羽 衣

清沢一政、和合之舞、高安勝久、後見 近藤幸江、梅田邦久、地謡 八神孝充、須部敏彦、今沢美和、武田邦久、加藤洋輝、竹市学

能 組

仕舞 誓願寺キリ 今沢美和 地謡 角田尚香、前野野幸江、星野路子、加藤洋輝、竹市学

青陽会定式能(第54期)

四月十日(土)十二時半開演 名古屋能楽堂 梅猶会主催による平成22年度第2回大阪能楽公演は、6月5日(土)大阪能楽会館(大阪市北区中崎西2-1-3)で催される。

梅猶会大阪公演

6月5日 能3番上演 料金 一般8000円(正面席) 5000円(廊下・中正席) 会員7500円 学生2500円

戸島俊、ワキ福三茂十郎、狂言「佛師」(水破・善竹隆司、田舎人・善竹隆平) 能「梅枝」(シテ梅若修一、ワキ福三和幸、ワキツレ長川正彦、山本順三、問・善竹忠一郎)

能 山 姥

武田大志、梅若玄祥、高安勝久、河村真之介、加藤洋輝、雪月花之舞、杉元正樹、後藤孝幸、藤田六郎兵衛

附 祝 言

後見 梅田邦久、地謡 吉沢池、加賀敏彦、久武田邦久、勳、武田志房、池田勤、祖父江修一

狂言 附子 雲雀山波 善知鳥

武田大志、梅若玄祥、高安勝久、河村真之介、加藤洋輝、雪月花之舞、杉元正樹、後藤孝幸、藤田六郎兵衛

能 田 村

後見 武田大志、久田勳、地謡 八神孝充、梅田勤、高橋一、須部敏彦、梅田勤、梅田勤、梅田勤

名古屋観世会定例公演

四月十一日(日)十二時半開演 名古屋能楽堂 名古屋市名東区二社三の二六二 久田勤 事務所 電話052-734-1619

附 祝 言

後見 今沢美和、武田邦弘、地謡 星野路子、梅田勤、前野野幸江、祖父江修一

附 祝 言

後見 今沢美和、武田邦弘、地謡 星野路子、梅田勤、前野野幸江、祖父江修一

「平家物語を観る」

大槻能楽堂自主公演能

大槻能楽堂自主公演能では、「能の魅力を探るシリーズ」として上演が企画されているが、本年の企画として、「平家物語を観る」観のあわれ」を語る」テーマで、4月、5月、6月の3回にわたって公演が行われる。演能は次のとおり。

【第487回】4月24日(土)午後2時開演
お話し「保元の乱、憤死を遂げた崇徳の悲運」井沢元彦氏
能「松山天狗」前シテ・後シテ 観世兼之丞、後ツレ・相模坊、柴田総、後ツレ・春属の天狗、長山耕三、長山桂三、ワキ西行法師、殿田謙吉、アイ、茂山逸平
鼓・杉市和、小鼓・成田達志、大鼓・河村大、太鼓・三島元太郎、後見・大槻文蔵ほか。地謡・片山達司、上田拓司、浦田保親、上野雄三ほか。

【第490回】5月29日(土)午後2時開演
お話し「平治の乱、源平の争乱、武家政権の始まり」中西進氏
能「朝長」シテ浅井文義、ツレ

武重康之、トモ斎藤信輔、ワキ福王茂十郎。ワキツシ森本幸治、喜多雅人、アイ野村小三郎
鼓・光田洋一、小鼓・林吉兵衛、大鼓河村総一郎、太鼓・前川光長
後見・泉泰孝ほか。地謡・大槻文蔵、多久島利之、斎藤信隆、上田拓司ほか

【第492回】6月26日(土)午後2時開演
お話し「稚児牛若に鞍馬で何が起ったのか?」中津文彦氏
能「鞍馬天狗」白頭、シテ上野雄三、子方・牛若丸、寺澤拓海、子方・稚児、武富晶太郎、川島広気、武富春香、水田兼暉、寺沢杏海、ワキ福王知登、ワキツシ山本順三、喜多雅人、アイ・善竹隆平、善竹忠一郎、松下孝輔、上吉川徹、善竹隆司、笛・森田保美、小鼓・荒木建作、大鼓・白坂保行、太鼓・中田弘美、後見・大槻文蔵、寺澤幸祐、地謡・上野朝義、斎藤信隆、赤松碩英、山本正人ほか
入場料金 一般自由席：前売四

竹尾 邦太郎

「清華能・幸友会別会鑑賞能」

第四回は平成四年二月二二日。今回は熱田神宮能楽殿を離れ同年一〇月三〇日に新設・開館成った「愛知芸術文化センター」内のコンサート・ホールが舞台(客席数一八〇〇)、「あいちの芸術家たちシリーズ・愛知芸術文化センター開館記念」公演の一環として行われる。能組は喜本正樹による「舞と仕立・能の魅力」と題する講演のあと、善隣子「三番叟・

採之段」藤田六郎兵衛、榎井登次郎(頭取)榎井良治、榎井良久(脇鼓)・河村真之介、舞雛子「養老・水波之伝」野村四郎、狂言「三本柱」井上松次郎、野村文三郎、井上祐一、佐藤友彦、能は県花かきつばたに因み「杜若・恋之舞」観世栄夫、西村欽也、囃子方は藤田六郎兵衛、榎井登次郎、河村総一郎、助川龍夫、主後見興善助、地頭野村四郎。

因に同年九月五日、「愛知芸術文化センター」の前身「愛知県文化会館(講堂・美術館・図書館の総合体)」の開館を控え、「さよなら愛文ホール」一聯の公演に能楽協会名古屋支部も協賛、第三三回・大衆能を行っている。愛文ホールとは愛知文化講堂の譲で、開

館は昭和三年(一九五八)六月一七日、当日、柿落しに三宅藤九郎(明治34年3月18日-平成2年12月19日)が「三番叟・採之段」を、榎若六郎(明治40年8月3日-昭和54年2月8日)が仕舞「船弁慶」を動めた。愛知文化会館の(面くつつく)



愛知芸術文化センター・ホール
12月12日(土) 午後2時開演
主催/中日新聞社

二〇〇円、当日四七〇〇円
学生自由席：前売二六〇〇円、当日三〇〇〇円
入場券発売/大槻能楽堂事務局 (TEL06.67661.8055)
大槻能楽堂ホームページ
http://www.daikei-kyogen.co.jp、ローソンチケット

栄謡曲クラブ 名所めぐり

近畿・東海・北陸の謡曲謡曲グループとして、毎月演習が行われている栄謡曲クラブ(三口謙介氏主宰)では、このほど平成10年から実施している「謡曲名所めぐり」の訪問地をまとめて本紙に寄せた。三口氏は、謡曲愛好者の皆様の参考になればと、次のようにレポートしている。

☆ ☆
能楽を楽しむ謡曲好きのサロン栄謡曲クラブでは、定期的に謡曲名所めぐりを行っている。謡曲をとりまく名所旧跡残りなく一見。あわせて謡会もという寸法。能楽の友縁集部のアドバイスで近年の分を纏めてみた。なお近場のところは謡会のみである。謡曲愛好の

皆様の参考の足しにして載ければ幸いです。
平成10年5月。明治村、辰服座舞台(謡会)。11月。洛西、十輪寺、持釜祭。連吟で行事進行。他謡曲。▶平成11年6月。高野山、遍照尊院(謡会)他謡曲。11月。宇治。源氏物語ミュージアム、平等院、他謡曲。(謡会)。▶平成13年6月。佐渡。能舞台めぐり、本膳社能舞台(謡会)他。11月。奈良。正暦寺、春日大社、他謡曲。(謡会)。▶平成14年6月。若狭。古能舞台、池田町能面美術館能舞台(謡会)他謡曲。11月。関幡丸神社(謡奉納)、養仲寺、他謡曲。▶平成15年4月。森名、六華苑(謡会)。6月。富山県。護国八幡宮(謡奉納)。利賀村芸術公園、他謡曲。11月。京都。西本願寺、織豊苑、他謡曲。(軍中謡)。▶平成16年6月。長野。戸隠能舞台(謡会)姥捨、他謡曲。11月。奈良。当麻寺(沓南院謡会)。▶平成17年4月。昭和村能舞台(謡会)。6月。金沢。石屋能舞台(謡会)、他謡曲。11月。比叡山延暦寺、他謡曲。(軍中謡)▶平成18年7月。石川県小松。多太神社兜祭保存会協賛謡奉納、他謡曲。11月。奈良。奈良豆比古神社、在原神社、

他謡曲(謡会)▶平成19年7月。善光寺宿坊(謡会)他謡曲。11月。京。大原寂光院、他謡曲。(謡会)▶平成20年7月。能登。輪島、総持寺(謡会中止)。11月。竹生島、琵琶湖周辺謡曲。(軍中名匠能ヒナオ鑑賞)▶平成21年4月。内海しほりや能舞台(謡会)。7月。天河大牟財神社能舞台(謡会)、他謡曲。11月。観世流の源流を訪ねて。世阿弥公園、観阿弥ふるさと公園、他謡

名古屋能楽堂演能案内

第32回 邦謡会能

四月十八日(日) 十二時三十分開演
名古屋能楽堂

解説「母の愛・父の愛」 村瀬和子

仕舞 藤戸 片山 健雪、片山 達司、高安 勝久、河村 総一郎、後藤 嘉津幸、藤田 六郎兵衛、杉江 元、佐藤 融

仕舞 花月 片山 伸吉、片山 慶次郎、武田 大志、古橋 正邦、久松 邦久

狂言 伊呂波 シテ 井上 蒼夫、ト 井上 清浩、後見 佐藤 融

仕舞 天鼓 榎田 邦久、梅田 嘉宏、飯富 雅介、河村 真之介、加藤 洋輝、竹市 学、後見 武田 大志、片山 伸吉、榎本 須部、伊藤 甫、青木 道治、清沢 一政、味方 女子

附祝言 主権 邦 謡 会
名古屋市昭和区台町2-16-15
TEL/FAX052.841.4632

【入場料】全席指定席 五〇〇〇円
【前売券取扱い】
名古屋能楽堂 TEL052.2331.0808
FAX052.2331.8758

邦謡会 TEL&FAX052.2841.4632
チケットぴあ TEL052.3204.9993
市内プレイガイド

(終演四時半頃)

故 熊澤恵美子 追悼能の会

五月二十二日(土) 午後一時始
名古屋能楽堂

能 井筒 梅若吉之丞、高安 勝久、河村 敏一、後藤 嘉津幸、榎取 希世

仕舞 天鼓 盛 梅若 基徳、池内 光之助、梅若 善高、梅若 雅一

舞子 融 梅若 修一、河村 真之介、福井 四郎兵衛、大野 誠

狂言 呂連 佐藤 友彦、井上 博浩、後見 今枝 郁雄

仕舞 経正 梅若 善久、井戸 和男、久田 勤鸞、岡田 晃一

仕舞 阿鶴之段 梅若 善久、井戸 和男、久田 勤鸞、岡田 晃一

仕舞 隅田川 泉 寛夫、梅田 邦久、地謡 小松 勝蔵、梅若 基徳、梅若 雅一

仕舞 砧 観世 清和、地謡 梅若 善高、梅若 吉之丞、梅若 修一

能 卒都婆小町 福王 茂十郎、河村 総一郎、藤田 六郎兵衛、水留 浩史、後藤 孝一郎

後見 観世 清和、梅若 善高、梅若 修一、地謡 大西 礼久、梅若 善久、岡田 晃一

(終演予定午後六時頃)

主催 熊澤 敦 後援 梅猶 会

「御招待能」
「招待券をお持ちでない方は入場出来ません」
招待券お申込み先
465-0097 545-0004 146-0094
東京都大田区東大町三二七-二 梅若 修一
〇三二三七三四一八三五六
大阪市阿倍野区文の里三二一六七一七
井戸 和男
〇六十六六二二二二九九
名古屋市長区寺町和ヶ丘三二七六一四〇四
熊澤 敦
〇五二一七八二一六九七三

金剛流の内外語は金剛又兵衛景頼の作曲で、最初は参宮といっ

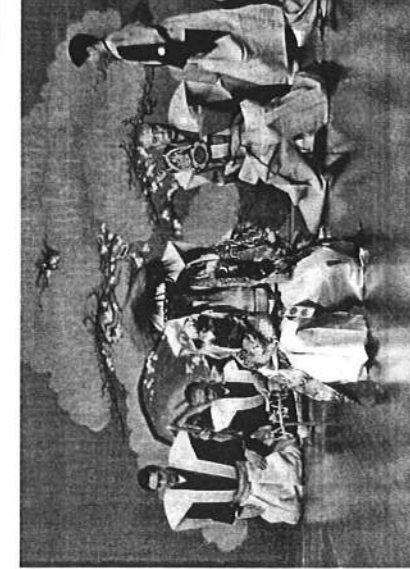
屋能楽会が呉服町舞台上演して以来、七三年ぶり、そのときの記録による配役はシテ金剛殿(初世)西村弘敬(ワキ)雌子方は森田光風・田綱徳太郎・谷口幸次郎・前川光次。藤田光風(明治25年4月19日―昭和41年4月14日)編による亡父・森(弘化3年5月26日―大正11年5月2日)の遺稿「千野の摘草」の「よしあし草」の中に次の文章がある。

第五回は平成五年一月三日。能組は「舞金剛」と題する能楽評論家・山崎有一郎の講演のあと舞雌子「乱・広巻之式」金剛永護、狂言「素袍落」野村又三郎・井上祐一・井上礼之助、一調「花籃・クルヒ」後藤孝一郎・宇高通成(訖)、能は此の年が二〇年に一度の伊勢神宮の遷宮の年に当たってをり、これに因み金剛流のみにある「内外語」豊嶋三千春・植田恭三・高安勝久・飯富雅介・杉江元・雌子方は藤田六郎兵衛・福井啓次郎・河村総一郎・助川龍夫・主後見金剛永護・地頭宇高通成。

「内外語」は金剛流の専有曲といふこともあるが当地での上演は極く稀。大正九年二月二日、名古屋能楽会が呉服町舞台上演して以来、七三年ぶり、そのときの記録による配役はシテ金剛殿(初世)西村弘敬(ワキ)雌子方は森田光風・田綱徳太郎・谷口幸次郎・前川光次。藤田光風(明治25年4月19日―昭和41年4月14日)編による亡父・森(弘化3年5月26日―大正11年5月2日)の遺稿「千野の摘草」の「よしあし草」の中に次の文章がある。

第五回は平成五年一月三日。能組は「舞金剛」と題する能楽評論家・山崎有一郎の講演のあと舞雌子「乱・広巻之式」金剛永護、狂言「素袍落」野村又三郎・井上祐一・井上礼之助、一調「花籃・クルヒ」後藤孝一郎・宇高通成(訖)、能は此の年が二〇年に一度の伊勢神宮の遷宮の年に当たってをり、これに因み金剛流のみにある「内外語」豊嶋三千春・植田恭三・高安勝久・飯富雅介・杉江元・雌子方は藤田六郎兵衛・福井啓次郎・河村総一郎・助川龍夫・主後見金剛永護・地頭宇高通成。

第五回は平成五年一月三日。能組は「舞金剛」と題する能楽評論家・山崎有一郎の講演のあと舞雌子「乱・広巻之式」金剛永護、狂言「素袍落」野村又三郎・井上祐一・井上礼之助、一調「花籃・クルヒ」後藤孝一郎・宇高通成(訖)、能は此の年が二〇年に一度の伊勢神宮の遷宮の年に当たってをり、これに因み金剛流のみにある「内外語」豊嶋三千春・植田恭三・高安勝久・飯富雅介・杉江元・雌子方は藤田六郎兵衛・福井啓次郎・河村総一郎・助川龍夫・主後見金剛永護・地頭宇高通成。



第5回清華能「内外語」豊嶋三千春(シテ)

た。然し旧幕時代には雌子方等の申合せが調はないので此の能が出来なかつたのを金剛右近(致右京の父)が是非盛り立てやうと尽力して居る中に維新となつて其の話も傾倒したが漸く明治九年十月大坂生国魂神社奉納の始めて申合せが成立して無舞演能が出来たのである。其の時文章も改正になり曲名も内外語と改めた。其の後右京氏が東京へ持ち帰つて演じた事もある。此の能の歴史はまだ新しい。

また、「この遺絶えずは―東京における金剛流のあゆみ―」東京金剛会、昭和33年7月1日刊の中、金剛右京の「他流にない内外語」の文章のきりに「この能は当流では重習の一つとして重んじている。何しろシテの装束が三度変わる。唯それだけでも類がない能である。ましてノットがあり、神楽があり、獅子舞があり(写真)、破の舞があると云う風だから、重習の価値は十分にあり」とある。なお右京は鈴之助時代の明治二年三月二日、一六歳、祖父・金剛唯二右近氏成の没後五年祭に芝能楽堂、明治三十七年四月二四日、三二歳、軍資(日露戦争)献金能に牛込新小川町親世舞台、明治四三年一〇月九日、三九歳、右京と改名後は大正九年四月三日、四九歳、大鼓方金春流、二〇世川井彦兵衛(明治20没54)―九世金春養三(明治36没63)金春五



第6回清華能「楊貴妃・玉簾」三川泉(シテ)、宝生閑(ワキ)(撮影・杉浦賢次)

十男(彦兵衛子、明治29没)増見仙太郎(大5没67)追書能に清国神社能楽堂で「内外語」を勤めていた。第六回は平成六年二月三日、宝生流大会で能楽評論家・藤城龍夫の講演のあと、能組は能「楊貴妃・玉簾」三川泉・宝生閑・井上祐一・雌子方は藤田六郎兵衛・福井啓次郎・河村総一郎・主後見三川淳雄、地頭近藤乾之助、狂言「石神」野村又三郎・野村信行・井上礼之助、一調「駒之段」福井良治・衣袋止直(訖)、一調「船弁慶」鬼頭喜太郎・三川淳雄(訖)、能「善知鳥」近藤乾之助・金井雅貴・山名運郎(子方)・宝生閑・佐藤友彦、雌子方は麗取希世・柳原富司忠・寛範一・主後見衣袋正直、地頭三川淳雄。三婦人の一と三草履の一という能組は如何にも皮肉。

第七回は平成七年七月八日、喜多流大会。能楽評論家・山崎有一郎の講演「喜多流の能と粟谷菊生の舞台」のあと、能組は舞雌子「飛鳥川」粟谷明生、狂言「叔母々酒」井上祐一・佐藤友彦、一調「笠之段」柳原富司忠・粟谷幸雄(訖)、能「阿漚」粟谷菊生・宝生閑・野村信行、雌子方は藤田六郎兵衛・福井啓次郎・寛範一・助川龍夫・主後見高林白牛口二・地頭粟谷幸雄。第八回は平成八年六月三日。能組は「劍」山本勝一・野村小三郎(三番叟)山本博通(千蔵)井



豊田市能楽堂新春能「鞍馬」左から井上善夫・井上靖浩・佐藤融・今枝郁雄

「鞍馬」太郎冠者(アト都雄)を伴い大名(シテ融)、たまにたま出合う猿丸(小アト靖浩)の小猿(蒼太)に目を留め、無心したいことがあると太郎冠者に交渉させる。出来る用なら承る、の言質を取つてくると、大名は猿丸に先づ一札あるうことか小猿の皮を剥いで鞆(矢入れの籠)に張りたい旨を太郎冠者に言わせる。冗談と高を括つて居た猿丸も、大名は本気と分かり、中に立つ太郎冠者に命乞いを懇願するも、一札までさせては片矢にかけても、といつか折れる気配もない大名。大名の専横ぶり、己れにもとばかり及びぶのではないかの太郎冠者

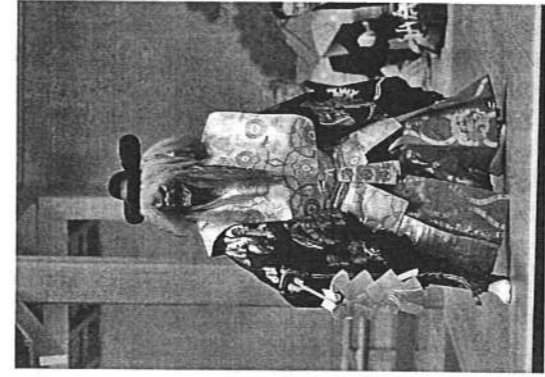
上靖浩(面楯)、大野誠、柳原富司忠(頭取)福井良治、駿介(脇鼓)河村眞之介、主後見泉壽夫、地頭藤田邦久、一調「難波」福井良久・大槻文蔵(訖)、狂言「伊文字」野村又三郎、佐藤友彦、松田高義、能「白楽天・波夜陀庵之

伝」梅若六郎・赤瀬雅則・宝生閑・坂苗融、則久英志、雌子方は藤田六郎兵衛・福井啓次郎、河村総一郎、助川治、主後見山本勝一、地頭大槻文蔵。

◆早春の舞台から◆ 「豊田市能楽堂新春能」第五三回・鳳の会「金剛定期能・初会」第二二回・万作を観る会

竹尾邦太郎

の杖え、楽天的だった猿丸の悲嘆、三者三様の心理描写も的確に、狂言共同社を背負つて立つ気概をみせ上々。猿丸と小猿は笑の



豊田市能楽堂新春能「加茂・替装束・御田」金剛永護(撮影・杉浦賢次)



豊田市能楽堂新春能「加茂・替装束・御田」左から金剛永護、高安勝久、杉江元(撮影・杉浦賢次)

以下次号

能ふらつと 能楽堂

豊田市能楽堂企画 能楽入門講座

豊田市能楽堂では、初心者向けの能楽入門講座として「ふらつと能楽堂」のタイトルで、きたる4月14日(水)豊田市能楽堂で第一回講座を開催する。開催時間/午前11時(正午終了予定)

「テーマ」源氏物語「夕顔」の帖

内容は、「源氏物語」を絵画化した「源氏絵」や工芸品のデザインを通して「夕顔」の物語を、絵で読み、眼で楽しむ講座。

講師は、徳川美術館学芸員・龍

ら、シテ・ワキ問答に矢は御神体と明かされて更に不審を蒙らせてくる機切れのよいワキが可。俥りがあるとは言い、シテの語りは立つたまま、語る御神体の正体。此の地の養女が流れて拾った矢を軒に挿すと懐胎、男児を産むという処女受胎を地で行くような話には、三蔵になり父を問われ、矢を指差すと矢は雷となり天上、これ即ち別雷神と。明晰な力のあるシテ語も光る。尚も興味を喚ばれるワキは、上代はいざ知らず今も矢が御神体の不思議をシテとの掛合に、初同(清隆・通成、道一ら)になつてワキ、ツレ、それぞれ座着き、シテを代弁する初同が時の流れを川の流りに重ねて説く。シテは「流れはよも尽きし、で舞台を一巡、へいざいざ水を汲まうよ」とツレにアシラヒ、直ルと地との掛合にロンギ。京洛の川尽しの景観を述べ、へ水掬の神の心汲まうよ、と矢立台の前、下座に水を手向ける心は合奏する姿が美しかった。ワキに養母を問われ、へ汝知らずや、と濟平とした態度へ、汝知らずや、と濟平とした態度に、居立つところなど威風も。中人はへ神隠れに、と小廻り二ツから驚愕へ。シテは面楯、赤白赤、白地摺箔着付、小書「替装束」で唐織着流しでなく赤地纏袴腰巻に白地下り藤文縫着流折(本来は白線縫折の

豊彩氏。参加料/500円。チケット問合せ/豊田市能楽堂、電話056553582200。主催 豊田市能楽堂、(財)豊田市文化振興財団、豊田市、豊田市教育委員会

篠山春日能

4月10日「楊貴妃」

篠山能実行委員会主催による「篠山春日能」(第37回)は、4月10日(土)、兵庫県篠山市の「春日神社能舞台」で上演される。演能は、観世流能「楊貴妃」(シテ梅若万三郎)狂言「清水」(茂山千五郎)能「鶴」(シテ大槻文蔵)。

ようだが)で水榭を持つ。位が高そうだった。問(アト)も小書の眷問「御田」。加茂明神の神主(アト友彦)に呼び出され田歌を詠いながら賑やかに現われる早乙女たち(アト融ら立奏四人)、恋文が欲しいか、とからかう神主と掛合に、おおらかな田舎の風俗感だが、能「加茂」の前後が文字通り中断され、曲趣はばやけるきらいも。後場、出端(六郎兵衛・孝一郎・総一郎・光夏)で先づ御祖神(拾った矢を軒に挿し懐胎した女人の本体、後ツレ養母)が天女の姿で現われ天女ノ舞を。舞上げて正兵で片膝をつき、袖受シ、へ業裾を、濡らし涼を取るかに顔で水を注ぐ型をして颯正へ。両袖受シ雲ノ扇に舞へ別雷神(後シテ永護)の出現を促せば、早苗で幣を持ち奮然と現われ一ノ松で名乗ると、舞台へ入つては雄健な舞動の圧倒的な大きさに神威をみせる。キリはへ威光を現し、た別雷神を見届けた心に退いて行くツレ御祖神を立腰に見送るシテ別雷神も、へ天路に、と膝行から両袖着上方地のうちに三ノ松。へ攀ち上つて、と幣を捨て、片膝つき袖被シ、立つと俥子は踏まずトメ。後シテも「替装束」で面は大飛出でなく、赤顔に金ノ光の飾り、袷(面へつつく)



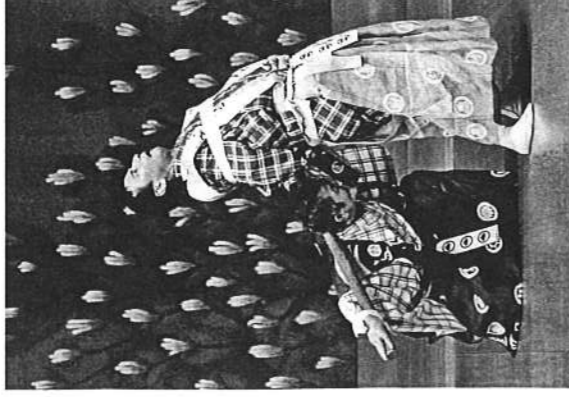
鳳の会「宗論」 左より佐藤友彦、井上靖浩

③面よりつづき
 袷衣の上に刺次を着る(写真のも珍しかった。(1時間43分・1月16日・豊田市能楽堂新春能)
 「宗論」宗論は宗派間において、教義上の優劣あるいは真偽について行う論争、古くは応和三年(九六三)天台宗と法相宗との間で応和の宗論が、下つては天正七年(一五七九)浄土宗と日蓮宗との安土宗論がある。因に日蓮宗は中世末まで法華宗と呼ばれる(『岩波・佛教辞典』より)。
 此の曲の時代は不明だが、都は本国寺の法華僧(アト靖造)が身延山からの帰途、たまたま善光寺から戻る黒谷の浄土僧(シテ友彦)に出会い、道連れ欲しさに同道を願えば、渡りに舟とばかりに、何があろうと都までお供を、と応じる。しかし自己紹介で互いの素性が分かってしまえば犬猿の仲の法華と浄土、法華は何か口実を構えて別れようとするが、浄土は何があろうと「一日出家の契約致したこと」と、いっかな聞き入れず執物に法華を挑発、果ては吾が宗旨のお珠教を頂けて改宗を迫れば、法華も黙つて居られず対抗するが、隙をみて宿主(小アト俊徳)のところへ。しかし探し当てられ根負け、処置なしの風情の法華、見つけてき返りせんばかりの浄土、シテとアト両者の持ち味が終始よく出てをり出色。
 宗論は双方互いに位相のずれた食べ物絡みの教義に亘ちて埒が明かず床に就くが、はや慶朝(午前



鳳の会「素袍落」 左より佐藤友彦、大野弘之

六時頃の勤行)と浄土が経を読み出せば、負けじ法華も。次第にエスクリートして踊り出し名号と題目を取り違えてゆくところ(写真)、乗りに乗りハツの悪さを砂阿弥陀仏と取める機知、キリは此の知恵をシア派とスン二派に重ねたい思い、力演の舞占だった。(53分)
 「素袍落」お伊勢語りに伯父(小アト弘之)を誘うよう主(アト郁造)に頼まれた太郎冠者(シテ友彦)、急なことで同道許わぬ伯父に門出の祝い酒を振舞われ、一度は固辞するも好きな酒、進められるまま、に盃を重ねれば、酔いの勢いは、伯父を世間が奪めなるとつべらひ、その機舌は、主を諷めると言わでもの事を、更には更三伊勢土産にくどく言及、しとろもどろになつてゆくところ、田満な伯父の当惑気味な表情がよ



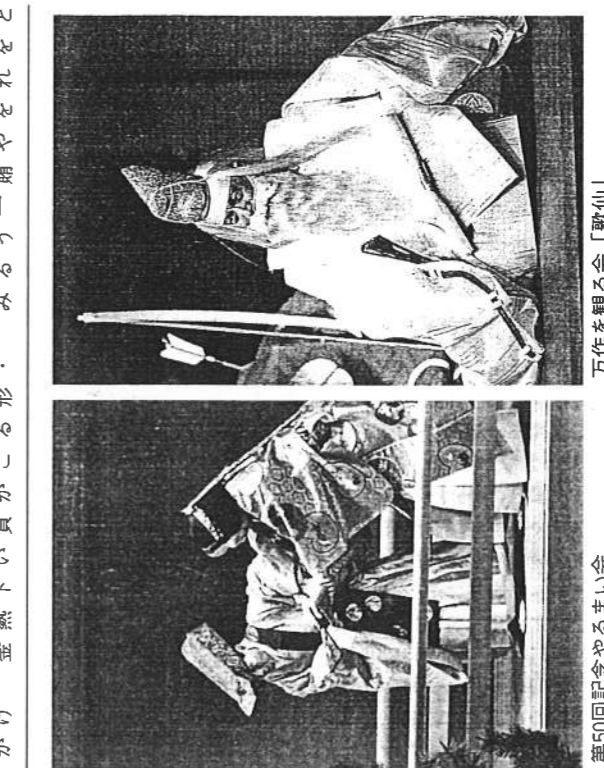
鳳の会「構縛」 左より佐藤友彦、佐藤融(杉浦賢次撮影)

く、太郎冠者の奇々させられる程の粘りこさも堂に入る。傳るさ、此れを着て名代に参宮を、と機別に頂戴する素袍(写真)に上機嫌な太郎冠者、へあの山見さへ此の山見さへ、と素袍を頭上に戴き諸氣分の帰途、遅いと案じて迎えに出た主は、つたり出るとは、「こなた誰ぢや」のていたらしく、今や両人お伊勢語りも念頭に無く、太郎冠者が落とした素袍をめぐり一悶着、曲名「素袍落」の所以。大様な小アト弘之に捨て難い旨味。(31分)
 「構縛」留守に盗み酒をするから、と主(アト靖雄)にまんまと縛られて手出しが出来ない太郎冠者(シテ友彦)と次郎冠者(小アト勉)だが、そこは必要は発明の母、才覚の働く両人に技け目は無く、両手の不自由も何のその、翳境を打開して漸款(写真)すればお定まりの酒宴に。肴は互いに地を受け持つて舞う「七つ子」や「暁」の小舞の愉快。鼻を明かされた主の連る方無い無念の表情に笑つても居られないか。(33分)
 1月17日・第53回鳳の会
 今回、鳳の会は傑作中の同人、菊次郎を欠くことで最終公演というところに、そこで幾多舞台を共演してきた盟友・友彦、菊次郎との思い出の曲三番のシテを独演。昨今、シテ方の独演三番能を聞かな

いが、狂言では珍しい。たゞ二番が酒に絡む太郎冠者物で、人気曲とはいえ食傷気味にならざるを得ないのも直面の類型ゆえ、面を掛ける曲も入れ、ばと考える。また、見所の強い要望もあつたであらうが、能のシテと違い喋りつめた狂言のシテ、体力の消耗も大、流石に「構縛」の小舞謡「七つ子」では声も掠れ辛そうにみえた。これまでの鳳の会の勢いを以てすれば、和泉流山脇派全曲完演も夢ではなかつたが、終幕を迎えたことは残念至極。何れ次世代により再出家があるだろうが、徒らに新しい結社名を模索することなく、馴染んだ鳳の会のまゝ、に第二次鳳の会を名乗つて欲しいと思うや切。
 「翁」シテ永誦。悠揚として辺りを歩む傳丈夫の風格は金剛大未ならこそ。袖捌き大きくゆつたりと、正先の拜は翁髯髯字が舞台に着く程ではないが、紫指貫・浅葱玉虫色二光ル蜀江文翁袷衣の全身に満ちる瑞気。声量豊かなと、うとうたり、の誦ものびやか。面箱を重ねる千三郎の千歳ノ舞は深刺として爽快、きびきびした身のこなしに喜ばれ。シテの翁ノ舞は天地人に誇む足拍子も重々しく、大きな舞に威風。三番三は逸半。翁唄りあと小鼓(舞一郎・一郎・敦史)が打ち出し、笛(市和)のヒシギ三はアヒ座からスミへ、退つて堂座、採出しの囃子でへお、さいお、さい、となり、アヒ座から走り出ないのが珍しいと思つた。採之段の力強さは鳥飛どの跳躍にも。鈴之段は手首の返しなど柔らかに明朗闊達に動める。(1時間10分)
 「高砂」阿蘇の神主一行(ワキ和室ワキツレ雅人・正彦)、高砂の松の謂れを聞くことと浦人を待つこと、現れる老翁(シテ龍運)と姥(ツレ島駒)、へ尾上の謡も響くくなり、連吟に吹かれる笛の妙味。年ふる松を己れらの

人生を重ねるシテ・ツレ連吟がしつとりと良く、ワキとシテの問答もはきはまと爽やか。相生の松をめぐりワキの疑問にシテとツレ異口同音、連吟にへ(松諸ともにこの年まで)相生の夫婦となる物を、とシテとツレ共にワキへシラフところ、ほのほのとする。聖代を扱う初回(通成・道一・泰能ら)から、更に高砂の松のめでたい謂れを懇ろにと請われ、へそれ草木心なしとは申せども、と竹杷を置き下居のシテとツレ、扇を持ちクリからサシ・クセへと万物みな和歌の姿、中でも履れて松、と詠みて高砂の尾上の鐘の音すなり、の上ノ端でワキから直り、扇を腰に居立つて竹杷を取り、立つとへ掻けども落葉の尽きせぬは、と左手前へ二度、左から右手前へ一度掻くとも確りと丁寧。クセ切にシテは肩下シ、竹杷をひく。ワキに素姓を問われ、シテとツレ連吟にへ高砂住の江の神、と名乗ると、中人地へ住吉に先づ行きて、と居立つて扇を頭上に行先を指示、正先でへ小舟に、とノリ込みへ追風に、と両袖揚げ帆を一杯に静かに構懸へと入る。
 アトは浦人やすし、高砂の松の子細、住吉の神の影向の奇想、我が新造船で住吉へ、と滔々と語り精彩。
 後場は爽爽と現れる住吉明神(後シテ龍運)面部彫野・黒垂・透冠・襟浅葱・匣板着付・白地金立湧立大口・紺地金襴立袴袷衣の姿。へ拍子を揃へて、と右ウケ打合せニツから舞台へ入つてくること、へ梅花を折つて、と扇を頭上に花を挿頭す心をみせ、へ二月の雪、と袖を抜けて落花を受ける心から遠拝掛の神舞三段、師父譲りの大きな舞はきびきびと幸さの発露、凄美に舞上げ、キリへ拜禮を抱き、と文字通り扇を幸福の象徴に、両袖で抱く姿に明る前送、嬉しかった。(1時間21分)
 「佐渡狐」年貢納めの道中、連れ立つた越後ノ百姓(アト逸平)に佐渡に狐は居るまいと言われて佐渡ノ百姓(シテ正親)、郷党意識の強さは誰しも、侮られてはならじと狐の本体も知らず居ると抗弁、有無を賭けて養者(次

アトやすし)に裁定を仰ぐことに。先に養者に会う佐渡、賄賂を渡し事を有利にと籠絡に掛ければ、一旦は拒絶する養者も四辺を窺い素早く袖に納めれば、やれやれと北窓笑む佐渡。賄賂者と收賄者、互いに顔見合わせ「ハハハ」と乾いた笑いは共犯者の胸のうち、当世にも政財官界に見られる景色かも、鳥の合つたところをみせる。
 裁定の場は向つて右から養者、越後、佐渡の順に横列、狐の姿形色の様々を越後に問われ、窮する度に佐渡が養者の助けを仰ぐところは越後の目の遣り場の在り様が鑑だが旨かつた。キリは愚途、負けが未だ納得出来ない越後が問い忘れた啼き声、窮余の佐渡は「トツテココウ」と啼き形勢逆転、熱演だった。(34分・1月24日・金剛定期能初回)
 「無茶施経」毎月、経を上げにゆく檀家、施主(アト幸雄)が控える読経の間にちよいちよい振り向いては世間話などを挟み余裕のある態度の僧(シテ万之介)、施主が来客で中座のときに事の萌芽だつたらう。読経を仕舞い「エツベン」と咳払いの僧だが布施の出る気配がない。さりとしてこの辰でも体面上輝られ大いに傲む僧、何とか施主に分らせようと再三戻つては説教に事奪せつて合を匂わすが「左様でござる」「一向に控が明かず、普立ちは頂点、体面も何のその方便を以て、と袈裟を巻としてきた態に尻れば漸く気付く施主が、この度は態度を豹変、体面を慮りこれ迄の経緯を糊塗しようとして計る老翁、万之介の老練は見事に演じ「妙法蓮華経」のトメに合誓が。たゞこの執拗さは何が重苦しく、からつとした笑いが無いのでも、人間のもつ機軸なところを働いているからであろう。(4分)
 「歌仙」六歌仙を描いた絵馬二枚をそれぞれ太郎冠者(隆行)と次郎冠者(健太郎)に玉津島神社の神前は目付柱と脇柱に掛けさせ、和歌の態にあやかりたいと業報者(アト小三郎)、拜をするところに絵馬の様子が変る奇特を見守る心は八疊かなる今この御代の



万作を観る会「歌仙」(番組より転載) 第50回記念やまいる会「歌仙」左より野村又三郎、野村小三郎(撮影・杉浦賢次)

歌合せの誦のうち主従が切戸へ退くと、代つてへ磯の波、と人丸(シテ万作)以下、暹昭(萬蔵)・業平(傳治)・小町(和憲)・猿丸(大)・元輔(幸雄)返す句からへ松吹く風の音までも、と向吟に、へ今宵の月に遊ばん、と一回、舞台に座着く。多彩な装束の六歌仙の勢揃いが舞台に映え賑やか。それぞれが誰誰やら郷撫やら身辺雑事を雑談のうち「さて今宵は何をして遊ばませう」と人丸、歌人の集まりには結局歌合に。兼題を記され猿丸大夫、三方の短冊は各自が取る。業平が「忍の千人斬」の題を引けば、「お家のごとでござる」と冷やかされ、最後に演じ「妙法蓮華経」のトメに合誓が。たゞこの執拗さは何が重苦しく、からつとした笑いが無いのでも、人間のもつ機軸なところを働いているからであろう。(4分)
 「歌仙」六歌仙を描いた絵馬二枚をそれぞれ太郎冠者(隆行)と次郎冠者(健太郎)に玉津島神社の神前は目付柱と脇柱に掛けさせ、和歌の態にあやかりたいと業報者(アト小三郎)、拜をするところに絵馬の様子が変る奇特を見守る心は八疊かなる今この御代の
 迫れば、また暹昭が口を救み険悪な空気の中、すらすら詠む小町。暹昭が褒めれば人丸は眩し、それを質す暹昭に人丸は小町との仲を怪しみ争いに。この辺りの人間模様が実に鮮やかに描写され、万作・萬蔵、腹では大いに楽しんでる趣。
 人丸に加勢して暹昭を打撃する業平たちを止めようとする小町。暹昭は小町と逃げるが、ここは一昨々年やまいる会の又三郎が小町と逃げるどころ(写真)、業平からも花帽子・指貫・紫水衣・掛袴の姿の萬蔵の體面より派出で直撃する早い印象。暹昭は棒、小町は長刀を持ち反撃の氣勢をあげる構態、舞台へ入つては派手な新組にケケリもあつて誰掛りに人丸と暹昭、へむんずと組めば、へ我も我もと歌よみは皆折れて休らひしが、と全員安座に夜明鳥の声を聞き、最初の位置に月を見る元の型に、へ元の絵馬となりけり、といわゆるストップ・モーションの珍しい留メ。小町の相手が傳であるという意義、権高な人丸と暹昭を常識人・暹昭との絡み具合が面白く、六歌仙のアンサンブルも上々、結構だった。(54分・1月31日・第12回万作を観る会)

NHK放送予定(平成22年4月~5月)

4月25日 NHK-FMラジオ(日曜日 7:15~8:00) 素謡 [小袖曾我] (宝生流) 佐野由於ほか [小鍛冶] [小鍛冶] [狸々]

5月2日 NHK-FMラジオ(日曜日 7:15~8:00) 素謡 [東岸居士] (親世流) 浅井文義ほか [狸々]

5月9日 NHK-FMラジオ(日曜日 7:15~8:00) 素謡 [草紙洗] (宝生流) 前田晴啓ほか [頼政] (親世流) 吉井順一ほか

5月16日 NHK-FMラジオ(日曜日 7:15~8:00) 素謡 [花籠] (再) (親世流) 遠藤六郎ほか

5月23日 NHK-FMラジオ(日曜日 7:15~8:00) 素謡 [鐘の音] 三宅石近ほか

5月30日 NHK-FMラジオ(日曜日 7:15~8:00) 素謡 [雷]

演能カレンダー

名古屋能楽堂 (能・狂言演能関係)

(TEL 052-231-0088)

〔5月〕
2日(日) 幸 謡 会 (無料) (番組①面)
15日(出) 幸 謡 会 (無料) (番組①面)
16日(出) 幸 謡 会 大 座 (有料) (番組②面)
22日(出) 幸 謡 会 さる 乃 座 (有料) (番組③面)
23日(出) 幸 謡 会 大 座 (有料) (番組②面)
30日(出) 幸 謡 会 大 座 (有料) (番組②面)

〔6月〕
5日(出) 幸 謡 会 大 座 (有料) (番組③面)
6日(出) 幸 謡 会 大 座 (有料) (番組③面)
12日(出) 幸 謡 会 大 座 (有料) (番組③面)

第4回 若鯨能

能「三山」[班女]「莫上」

6月12日 名古屋能楽堂

能楽協会名古屋支部主催による「若鯨能」は、きたる6月12日(土)、名古屋能楽堂で開催される。

能楽協会名古屋支部では、毎年6月の熱田祭に合わせて、熱田神宮能楽殿で奉納能を開催してきたが、熱田神宮能楽殿が閉館されたに伴い、能楽後継者の育成と能楽協会の若手の研究会として、平成19年に「若鯨能」として演能が行われ、ことし第4回を迎える。

またこの企画は、文化庁の「芸術団体人材育成支援事業」ともなっており、伝統芸能の維持・発展の見地からも重視されており、愛好者の支援が望まれるところである。能組は次のとおり。

能(宝生流)「三山」シテ衣斐愛、ツレ鶴間眞美子、ワキ杉江元、笛・鹿取幸世、小鼓・後藤勝彦、大鼓・河村眞之介、ア伊・佐藤風、狂言(和泉流)「飛越」シテ今枝郁雄、アト鹿島俊裕、後見・佐藤友彦

能(金剛流)「班女」シテ加藤かおる、ワキ高安勝久、ワキツ

発行 能楽の友社
名古屋市中種区千種2丁目18-18
(郵便番号 464-0858)
電話 (052) 731-7984
FAX (052) 733-2837
振替口座 00800-6-36393

購読料 1年 1100円
送料 1年 1800円
郵送の場合 1年 1000円

友 楽 能 友

豊春会春の能

5月16日 金剛能楽堂

京都 金剛流・豊春会(主宰・豊嶋三千春)は、きたる5月16日(日)金剛能楽堂で「豊春会・春の能」を開催する。開演午後1時。

番組は次のとおり。

名古屋名駅新能

「真夏の夜の祭典」として親しまれる「名古屋名駅新能」は、7月25日(日)に開催される。

会場は例年のごとく、JRN名古屋駅・タワースカイテック特設会場(桜通口駅前広場)主催は財団法人親世文庫、名古屋名駅新能実行委員会。

この名古屋名駅新能は、2002年に第1回が開催され、名古屋での唯一の大規模な新能として、観世宗家の来演もあり、夏の風物詩として市民の関心はきわめて高く、実行委員会によれば、昨年はハガキによる応募約2000通、インターネットによる応募約15000名で来場者総数は2000名となっている。

入場無料であるが、着席整理席は600席で、事前応募・抽選形式、自由席は当日先着順。開場午後5時、開演午後6時。

能楽後継者 育成研修会

6月12日 名古屋能楽堂

能楽協会名古屋支部では、能楽後継者育成研修発表会として、毎年人材育成の推進を行っているが、今年は6月12日(日)、名古屋能楽堂で開催する。午前10時始。

能「蟬通」シテ豊嶋三千春、ワキ福王茂十郎、ワキツレ広谷和夫、森本幸治、笛・光田洋二、小鼓・曾和尙博、大鼓・守谷田訓、大鼓・前川光範

狂言「呂運」茂山七五三、茂山千五郎、茂山宗彦

仕舞「社若」クセ シテ植田恭三

能「土蜘蛛」シテ豊嶋晃嗣、頼光・田中敏文、胡蝶・重本昌也、從者・中嶋謙昌、ワキ檀王和幸、ワキツレ喜多謙人、水留浩史、笛・森田保美、小鼓・竹村英雄、大鼓・守家由訓、大鼓・前川光範、間・茂山正邦

入場料 一般券6000円、学生券3000円。

申込みは、振替口座(豊嶋後援会)01030・6・2887・987(券は当日受付渡し)

豊春会/京都府東山区知恩院山内林下町四五五、電話075・561・5408番

なお次回(日)豊春会秋の能は、10月17日(日)金剛能楽堂で公演。生立・豊嶋三千春

幸 謡 会

五月二日(日)午前十一時開演 名古屋能楽堂

番外仕舞 嵐山 村井邦子

素謡 正 出口新也 内藤賢治
組 小林俊雄 鈴木善太郎

俊 寛 高取良昌 吉房徳二

仕舞 鞍馬天狗 三浦美由紀
芭 采女 芝崎恭子
蕉 熾 百瀬水三子

半 野 順子 飯富雅介 河村総一郎
後見 武蔵 藤田六郎兵衛
大槻 文蔵 地謡 石川晴子
森 善子
赤松 慎英 齊藤孝久 近藤幸江

連吟 屋 高 荒木悦子
舞 高 砂 小林俊雄 河村眞之介 加藤洋輝
清 経 近藤幸子 福井四郎兵衛 大野誠

仕舞 枕慈童 高取良昌
硯 石川晴子

能 鈴木善太郎 高安勝久 河村眞之介 加藤洋輝
後見 近藤幸江 武蔵 須部 康之
赤松 慎英 地謡 吉房 徳二
八神 孝充 祖父江修一

舞 須磨源氏 山下須美子 河村眞之介 加藤洋輝
藤 戸 吉房 徳二 河村総一郎 大野 誠
道 明 寺 田中 孝子 船戸明弘 藤田六郎兵衛

番外仕舞 般若 近藤幸江
雲 林 院 大槻 文蔵

附祝言 主催 幸 謡 会 近藤幸江
岡崎市鶴田本町二二二三
TEL0564-211259

壺泉会大会

五月十五日(土)午前九時半始 名古屋能楽堂

番 組 泉雅一郎

仕舞 江之島 泉雅一郎
高砂 桑井陽菜
羽衣 西脇玉乃
丸々 矢津佳奈

附祝言 主催 壺泉会 嘉夫

能 硯

素謡 正 高橋典子
叔 捨 嶋田都彌子 古在由邦
仕舞 清 経 坂野見
野 守衣 亀井清子
内藤ひとみ

能 硯 中川真澄
石川晴子 河村総一郎 加藤洋輝
横之庄 福王和幸 船戸明弘 藤田六郎兵衛
後見 武蔵 藤田六郎兵衛
赤松 慎英 齊藤孝久 近藤幸江

安 宅 黒田正泰 梅若 猶彦
後見 山本 正人

素謡 弱法師 内藤 悦子
鴉之 段女 木曾 幸子
川島千代子

求 塚 倉沢 一池 泉 雅一郎
長谷川 悦雄

舞 桜 川 御厨 博子 河村総一郎 竹市 学
後藤孝一郎 藤田六郎兵衛

芭 蕉 大坪田 紀子 後藤孝一郎 藤田六郎兵衛
多 久 島 高 志 子
久 田 三 津 子

素謡 景 清 乾 昌博 藤田 三郎

仕舞 女郎花 不徹 佑子
敦 盛 加藤 華絵
高野物 狂 下川 勢津子

舞 楊貴妃 切本 勝子 河村眞之介
融 杉浦 万里 後藤孝一郎 竹市 学

遊行柳 橋 進 眞 藤 謙一 竹市 学
後藤 洋輝

素謡 定 家 長屋 文裕 水田 康子

能 土蜘蛛 高安勝久 元 坂野 見 加藤 洋輝
後藤 謙一 竹市 学
伊 野 村 小 三 郎 地謡 八神 孝充

附祝言 主催 壺泉会 嘉夫
「御来聴歓迎」

当地の各流儀・流派・結社・社中の消息を辿る

竹尾 邦太郎

五、「清華能・幸友会別会鑑賞能」③

一挨拶 榎井啓次郎

清華能毎回格別のご褒を賜り厚く御礼申し上げます。
 本年は先々代宗家幸義太郎能和師の後見を勤めておりました八代福井初太郎富達の五十年祭に相当りますので、幸清次郎宗家のお勧めにより初太郎玄孫聡介に薦、私は三老女の樽垣を披かせて頂きます。宗家の監修のもと当家の所伝により観世鏡之丞師始めお相手の方々に乱拍子の小書試演のご賛同を得開催の運びとなりました事、先相の余徳もさる事乍ら所縁の皆



第9回清華能 観世喜之 宝生閑 (杉浦賢次氏撮影)

様のご支援の賜物と厚く御礼申し上げます。ごゆるりと秋の午後をお楽しみ下さい。
 一挨拶 榎井良久
 父五郎・母すずより聞き及びました事など交なましてご挨拶申し上げます。

故 熊澤恵美子 追悼能の会
 五月二十二日(土) 午後一時始
 名古屋能楽堂
 主催 熊澤 敬
 後援 梅 猶 会
 能井 筒 高安 勝久 後藤 薫一 鹿取 希世

名古屋能楽堂企画展
 能絵鑑と能面展
 名古屋能楽堂では、企画展として「宇和島伊達家伝来(能絵鑑)と保田紹雲能面展」を4月30日(金)まで開催している。
 開催時間は午前9時~午後5時(最終日は午後3時まで)入場は無料。
 出展は、能絵鑑「野々宮」「定家」「羅生門」など宇和島伊達文化保存会所蔵の逸品。能面は「狸々」「般若」「節木増」など、能面作家保田紹雲師の作品を出展する。

狂言 どさる乃座 in NAGOYA
 五月十六日(日) 午後二時開演
 名古屋能楽堂
 狂言 成上り 大鼓 野村万之介 主 石田 幸雄
 舞囃子 盤 渉 楽 大鼓 河村真之介 太鼓 大川 典良
 狂言 朝比奈 朝比奈 野村万之介 團圓 野村小三郎
 狂言 二人袴 男 野村 裕基 太郎冠者 深田 博治
 女 野村 萬斎 観 野村 万作
 主催 万 作 の 会
 東京都豊島区高野台5-1-25 TEL 03-3997-8778
 「申し込み」電子チケットぴあ TEL 0570-02-9999
 (Pコード 4021-8922)
 柴アレチケ92 (名古屋三越地下) 電話052-953-0777

名古屋観衛会
 五月二十三日(日) 十一時始
 名古屋能楽堂
 お話 山本 博通
 舞囃子 六 浦 駒形 賀津子 福井 四郎兵衛 鹿取 希世
 熊 野 可児 島歌子 福井 四郎兵衛 大野 誠
 胡 蝶 榎原 和美 福井 四郎兵衛 鹿取 希世
 富士太鼓 秦野 淳代 河村 総一郎 竹市 学
 紅葉狩 中川 芳子 後藤 孝一郎 鹿取 希世
 吉野夫人 柿坂 正子 河村 総一郎 加藤 洋輝
 番外仕舞 昭 輝 山本 順之 章弘
 素謡 夕 顔 橋詰とサノ 安井 敦子
 舞囃子 葛 城 池内 博彦 後藤 孝一郎 中田 弘 学美
 三 輪 竹内 美紀子 河村 真之介 中田 弘 学美
 白 楽 天 鷹田 喜美子 河村 真之介 後藤 孝一郎 竹市 学

卒都婆小町
 五月二十三日(日) 午後六時頃
 主催 熊澤 敬
 後援 梅 猶 会
 河村 総一郎 藤田 六郎兵衛
 後藤 孝一郎 水留 浩史

狂言 呂 蓮
 佐藤 友彦 佐藤 清融 井上 靖浩
 後見 今枝 郁雄
 狂言 阿 彌 之 正 盛 正 梅若 善人
 阿 彌 之 鬘 井戸 和男
 阿 彌 之 鬘 久田 勸 鶴 岡田 晃一
 阿 彌 之 鬘 泉 真夫 梅田 邦久
 阿 彌 之 鬘 観世 清和

狂言 成上り
 大鼓 野村万之介 主 石田 幸雄
 舞囃子 盤 渉 楽 大鼓 河村真之介 太鼓 大川 典良
 狂言 朝比奈 朝比奈 野村万之介 團圓 野村小三郎
 狂言 二人袴 男 野村 裕基 太郎冠者 深田 博治
 女 野村 萬斎 観 野村 万作
 主催 万 作 の 会
 東京都豊島区高野台5-1-25 TEL 03-3997-8778
 「申し込み」電子チケットぴあ TEL 0570-02-9999
 (Pコード 4021-8922)
 柴アレチケ92 (名古屋三越地下) 電話052-953-0777

雁 大 名
 大 名 野村小三郎 大鼓冠者 松田 高藏
 雁 屋の亭主 野口 隆行
舎 弟
 弟 茂山 茂 兄 茂山 正邦 教え手 松本 薫
浦 島
 長老浦島 野村小三郎 孫 亀の精 野村 信明
神 石
 夫 野村 万藏 妻 仲 敬人 小 節 小 節 小 節 小 節
 奥津健太郎
 主催 野村 事務所
 四世・野村小三郎
 【入場料】(前売り)
 A券 六〇〇〇円(正面指定席) 電話090-83323-3210
 B券 四五〇〇円(正面上手/端正面、中正面指定席)
 学割 三〇〇〇円
 入場券取扱 野村事務所(電話090-83323-3210)
 電子チケットぴあ(Pコード4021-4388)
 電話05770-02-9999
 ※当日券は残券がある場合、12時30分より1000円増で販売 (③面へつづく)

第五十三回 狂言やるまい会 名古屋公演
 五月三十日(日) 午後一時三十分開演
 名古屋能楽堂
 身内の情景
 入場無料 御来場歓迎
 主催 名古屋観衛会
 後援 正 山 花 博 通
 指導 山 本 博 通

能 楊 貴 妃
 杉野 伸江 殿田 謙吉 河村 真之介 藤田 六郎兵衛
 後藤 薫一 井上 靖浩
 問 井上 靖浩

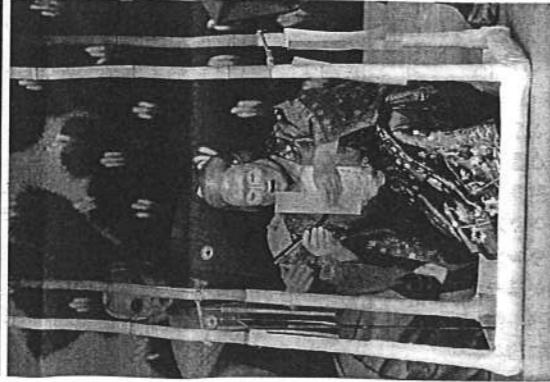
野 宮
 足立 奈々子 河村 総一郎 大野 誠
 砂 湯浅 知子 河村 真之介 中田 弘 学美
 八段之舞 伊藤 健一郎 後藤 薫一 竹市 学美
 クロギ 後藤 薫一 竹市 学美
 山下 麻乃 橋詰 弘
 山中 節子 橋詰 弘
 山本 博通
 湯浅 知子
 河村 真之介 藤田 六郎兵衛

能装束展
 金沢能楽美術館
 金沢能楽美術館は、4月17日から5月30日(日)まで、春期特別展として「京都国立博物館所蔵・能装束特別展」を開催している。
 京都国立博物館は、明治30年の開設以来、千年の都に脈々と受け継がれてきた伝統とそこで育まれた美意識を反映するコレクションとして国内外に広く知られている。
 金沢は加賀藩前田家が能を武家の式楽として保護・育成し「加賀宝生」として独自の発展を遂げ、金沢市の無形文化財に指定されている。
 今回の展覧会では、明治時代以降、各地へ分散してしまった加賀藩前田家旧蔵品のひとつが里帰りを果たすことになる。そのほか前田家旧蔵品をはじめ、当時の織技の粋を尽くした唐織や金箔の縫箔など京都国立博物館の代表的な能装束が一室に集まる。

能絵鑑と能面展
 名古屋能楽堂企画展
 名古屋能楽堂では、企画展として「宇和島伊達家伝来(能絵鑑)と保田紹雲能面展」を4月30日(金)まで開催している。
 開催時間は午前9時~午後5時(最終日は午後3時まで)入場は無料。
 出展は、能絵鑑「野々宮」「定家」「羅生門」など宇和島伊達文化保存会所蔵の逸品。能面は「狸々」「般若」「節木増」など、能面作家保田紹雲師の作品を出展する。

狂言 どさる乃座 in NAGOYA
 五月十六日(日) 午後二時開演
 名古屋能楽堂
 狂言 成上り 大鼓 野村万之介 主 石田 幸雄
 舞囃子 盤 渉 楽 大鼓 河村真之介 太鼓 大川 典良
 狂言 朝比奈 朝比奈 野村万之介 團圓 野村小三郎
 狂言 二人袴 男 野村 裕基 太郎冠者 深田 博治
 女 野村 萬斎 観 野村 万作
 主催 万 作 の 会
 東京都豊島区高野台5-1-25 TEL 03-3997-8778
 「申し込み」電子チケットぴあ TEL 0570-02-9999
 (Pコード 4021-8922)
 柴アレチケ92 (名古屋三越地下) 電話052-953-0777

京都国立博物館所蔵 能装束展
 金沢能楽美術館
 金沢能楽美術館は、4月17日から5月30日(日)まで、春期特別展として「京都国立博物館所蔵・能装束特別展」を開催している。
 京都国立博物館は、明治30年の開設以来、千年の都に脈々と受け継がれてきた伝統とそこで育まれた美意識を反映するコレクションとして国内外に広く知られている。
 金沢は加賀藩前田家が能を武家の式楽として保護・育成し「加賀宝生」として独自の発展を遂げ、金沢市の無形文化財に指定されている。
 今回の展覧会では、明治時代以降、各地へ分散してしまった加賀藩前田家旧蔵品のひとつが里帰りを果たすことになる。そのほか前田家旧蔵品をはじめ、当時の織技の粋を尽くした唐織や金箔の縫箔など京都国立博物館の代表的な能装束が一室に集まる。

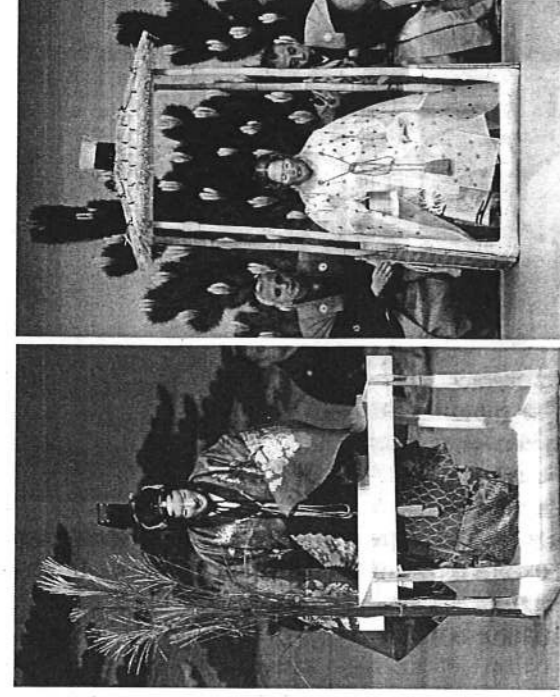


⑪第11回清華能「関寺小町」(左より)梅若恭行、山中景昌(子方)

⑫関寺小町 梅若恭行 (杉浦賢次氏撮影)

代宗家義太郎能和師後見として同伴上京祖母をおと三人で渋谷に居を構えます。間もなく田鍋師は圓次郎師を東京へ戻されました。大正十二年九月関東大震災に逢い祖母なおが慣れぬ所での心細さから掃名の念がのり、祖父は同十三年十一月後事を幸清谷江草重忠・瀧村立太郎両氏に託し名古屋に帰りました。昭和十七年喜壽の祝いを幸友会伊藤佐平氏(現宗家夫人久子さま殿父)の御肝煎で八事八勝館にて開催、先代圓次郎宗家・

幸清谷御社中はもとより幸悟朗(祥光)・大藏士藏(長右衛門)両家元も参会、戦時中と申しながら大変盛会でございました。能組は舞囃子「海士」観世晴夫、能「鷹」観世喜之、浅見真州(王)宝生閑、高井松男、坂苗胤・井上正昭、大日向寛、佐々木則之、井上祐一(アと官人)囃子方は藤田六郎兵衛・福井啓介・河村総一郎・観世元信、主後見観世喜正・地頭五木田三郎、狂言「萩大」野村万蔵・井上靖浩・野村小三郎、一調二番「八島」福井啓次郎・衣裳正宜



第10回清華能「井筒 物簀」今井泰男 (杉浦賢次氏撮影)

第9回清華能「梅垣 乱拍子」観世鏡之丞 (杉浦賢次氏撮影)

後シテ クセあと よしよしそれとて。幸手慣れし舞なれば。舞はでも今は叶うまじと。と小鼓打ち止め 大鼓一調にてシテ横板までクツログ着物烏帽子を付けるツツケにて作物石少し高めに立出で 興範頼りに宜へ。浅まし作ら舞の袖。露打ち払い舞い出す。と小鼓二調。乱拍子にかかる二ツ目のカシラにて中之歌。あと善声・ハア ○ 聞きシテ梅垣の女の 地身の果てを 崩シの手 大鼓のカシラ聞き ハガカリ老女之舞になる。三段舞 呂中申にて段 二段目休息あり シテ立ちたまま作物の柱に寄り掛かる態にてアシライニクサリ 聞きナン地頭不打 正先シズミ三段 白川の波白川。烏帽子脱ぐ 残り留めニクサリ

第一〇回は平成一〇年一〇月一

(謡)「天鼓」後藤孝一郎・長田鏡(謡)乱曲一調「連十郎」幸清次郎・観世喜正(謡)、素囃子「延年之舞(宝生流)」藤田六郎兵衛・幸正昭・亀井広忠、一調二声「小管」柳原富司忠・片山九郎右衛門(謡)、能「梅垣、乱拍子」観世鏡之丞・宝生閑・野村万蔵、囃子は藤田六郎、福井啓次郎・亀井忠雄、主後見片山九郎右衛門・地頭野村四郎。なお、これまで長らく連続、上演の機会も無かった「梅垣」の乱拍子、「常の演出と異なる所」参考まで書きとめます」と催主は次のように記す。



青陽会「弱法師・盲目之舞」久田勘麿

「弱法師・盲目之舞」 謡言を真に受け、伴、後徳丸(シテ勘麿)を放逐するも無実を知り、償いに伴の二世(現世と来世)安楽を願ひ玉王寺で修行を行おうと高安通俊(ワキ勝久)、下男(アヒ融)にその事を願ひさせる。一声ノ囃子(希世・孝二郎・総一郎)でシテ三ノ松に。昼夜の別も分らず難波の海の様な果て無い深い歎き誰が知ろうか、と盲目の身を叩きシテ、不幸な境遇を述べるカシは着き、直ぐ修行を受けに初阿(邦久・正邦・嘉安ら)はへ九曜

◆早春から仲春への舞台◆

「青陽会」「名古屋観世会定例公演」と「名古屋能楽堂三月定例公演」

竹尾邦太郎

七日、宝生流能で能組は舞囃子「岩船」近藤乾之助、一調「俊成」忠度・福井良治・衣裳正宜(謡)、一調二番「獅子」藤田六郎兵衛・柳原富司忠、狂言「狐塚」小唄人・野村又三郎、松田高義・野村小三郎、能「井筒・物簀」今井泰男・森常好、囃子を一噌庸二・福井啓次郎、河村総一郎、主後見渡辺容之助、地頭三川泉。第一回は平成一二年二月二十八日、福井啓次郎古書記念に名古屋では享保七年(一七二二)以来という秘曲「関寺小町」を観世流梅若一門で上演する。能組は「関寺小町」梅若恭行。研究室長の講演のあと、舞囃子



青陽会「歌争」左より佐藤友彦、今枝部雄

の憂奈羅で運び出す。佛法と一度シテ柱際に止まり、へ最初の、と舞台へ。へ天王寺の石の鳥居、はシテ柱に向くと柱を左手でさわり、杖でも探つてへ此処なれば、杖を当てる慎重。施行の場は、折から梅の香を聞くところ、へ袖を広げて、と左袖つまみ広げ施しを、同様にアとも近寄り「さらさらさら」と扇面を傾ける。玉王寺の縁起を述べるクリ。カシ・クセを省き、シテに

「松山天狗」梅若六郎、一調「弾丸」幸清次郎、梅若清記(謡)、能「関寺小町」梅若恭行、山中景昌(子方)、宝生閑・宝生欣哉、坂苗胤、大日向寛、囃子を藤田六郎兵衛・福井啓次郎、亀井忠雄、主後見山本勝二、地頭梅若六郎。因みに今回の「関寺小町」を以て催主・福井啓次郎はいわゆる老女物を完演。即ち昭和三九年「卒都婆小町」梅若六郎、昭和六二年「娘捨」宝生英雄、平成二年「鶴鶴小町」辰巳孝、平成九年「梅垣」観世鏡之丞、平成一二年「関寺小町」梅若恭行。

以下次号

全自由席 二千円 チケット取致 各出演能楽師、名古屋能楽堂、チケットぴあ(Pコード4021984) お問い合わせ先 井上類次郎 TEL: FAX 〇五二(八三四六二二) 平成二十二年度文化芸術団体人材育成支援事業

青陽会「歌争」

左より佐藤友彦、今枝部雄

能 加藤おる 吉田多将 高安 勝久 河村総一郎 大野 誠
後見 豊嶋三千春 康治 四ツ井つや子 山根 奏子
竹市 幸司 幸司 熊谷 真知美子 伊藤 雅子
長田 郷昭子 郷昭子 田中 春奈子 羽多野 良子
横川の小型 飯富 雅介 船戸 昭弘 加藤 洋博
後見 加藤 誠子 地謡 伊藤 幸孝 松井 俊介
橋本 聖子 地謡 加藤 英毅 長田 健二
領一 和谷 衛市

附祝言 (五時半頃終了予定)

主催 能楽協会名古屋支部

若鯨能(第四回)

六月十二日(土) 十二時半始

名古屋能楽堂

能 三山 元 河村真之介 鹿取 希世
後見 衣斐 正宣 地謡 竹内 孝成 東川 尚史
大塚 恵 平田 正文 内和久 庄太郎
シテ 新藤 今枝 船越 了男 鹿取 俊裕
後見 佐藤 友彦

能 狂言 飛越 (和泉)

能 班女 (金剛) 加藤おる 吉田多将 高安 勝久 河村総一郎 大野 誠
後見 豊嶋三千春 康治 四ツ井つや子 山根 奏子
竹市 幸司 幸司 熊谷 真知美子 伊藤 雅子
長田 郷昭子 郷昭子 田中 春奈子 羽多野 良子
横川の小型 飯富 雅介 船戸 昭弘 加藤 洋博
後見 加藤 誠子 地謡 伊藤 幸孝 松井 俊介
橋本 聖子 地謡 加藤 英毅 長田 健二
領一 和谷 衛市

附祝言 (五時半頃終了予定)

主催 能楽協会名古屋支部

大原御幸

六月六日(日) 午後一時開演

名古屋能楽堂

能 大原御幸 飯富元正 河村真之介 藤田六郎兵衛
橋本 雅介 後藤 嘉津幸
野村小三郎
後見 武富 康之 地謡 八神 孝允 山本 正人
泉 嘉夫 地謡 須部 甫一 赤松 梅英

附祝言 主催 幸江

近 藤 幸 江
岡崎市野田本町二二三
TEL 〇五六四 二二二五二九

全自由席 五千円(全席自由席)

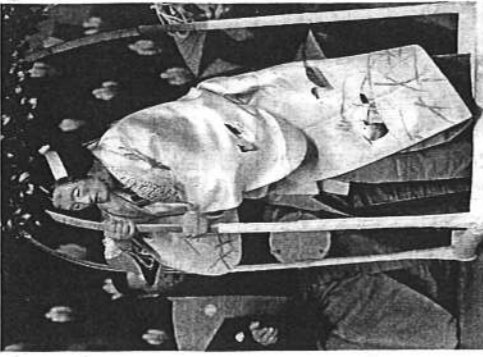
気付くワキは人目もあり連れ帰るのは夜、と先づシテに日観(入り日に西方浄土を想像すること)を勤める。盲目のシテが当て難量に幕の方へ片手合掌をすると、そちらは東、と答めるワキと問答。「天王寺の西門を出て極楽の東門に向ふは僻事か」と論破するの痛快に、へ入日の影も舞ふとかや、と一ノ松へ掛け、へ清言何のなす所ぞや、と拍子一ツ踏むとイロエ掛中之舞はいわゆる盲目之舞。杖と舞上げ、へ今は入日や、と月ノ扇に日観を心眼に眺め、へ清目青山は心にあり、と胸に扇を当て(写真)、へ見るせとよ、と扇を慶五帯に差すと、胸の昂りは胸杖にへ春の緑の草香山、がワキ柱へ現御する心。へ難波なる、と小廻りからへ長柄の櫓、と橋懸へ抜け、勾欄を杖で擦り二ノ松へ。興奮状態はへ彼方此方と、狂気したように杖を激しく突いて舞台へ戻ると、立ち出たアとに肩をぶつけて倒れるなど大胆な型をみせる。杖を捨て立つシテはへげにも真の弱法師として、と三ツ拍子に口惜しき恥かしさを浄ませる。へ思へば恥かしやな、と左袖に面を隠し、へ今は狂ひ候はし、と下居、打合せて約束する。キリはシテ、ワキ互いに名乗ればへ観ながら恥かし、と逃げるシテに走り寄るワキ。アヒがシテを連れ込みワキがユークンして留めた。(58分)



観世会「佐渡狐」
左よより井上靖浩、佐藤友彦

③面よりつづき
い、そこで右巻を目にすると、花は綺麗に咲こうが歌には詠まれぬ、と甲。お追従のつもりで乙が古人の首「難波津に芍薬の花冬籠り、今を春へとしやくやくの花」を吟ずれば、それは「咲くや此の花」だと嘲笑する甲に乙は憤然、歌争のつもりはない、と野へ。後を追つて甲、和解の空気がなつたところを土筆(つくし)の群生に気が付き、摘む前に先づ一句と「春の野に土筆ははれてぐんなり」と詠めば此の度は乙が嘲笑する。むっとして甲は慈鎮の句にて、真葛ヶ原に風さわぐんなり」とある、と抗弁すると、それは「風さわぐんなり」だと重ねて嘲笑され、人は誰しもおかしなところがあるものだ逃げ甲は、乙の執拗な嘲笑に鎌先を乙がつか

て無難な負け方をした相撲に向ける。いきり立つた乙は、相撲が望みかた嫌がる甲の足を取り(写真)倒して葬へ。いっばしの風流人を真似る庶民の、うる覚えの和歌の知識が引き起こす争い。練達(19分)
「葉上」光源氏の北の方。葉上に憑く物の怪、臣下(ワキツレ正樹)に命じられ、口寄せの巫女(ツレ旭)に呼び寄せられたのは、クトキに六条御息所(怨霊)シテ孝充(を名乗る生霊、出小袖の前。病臥の葉上を象徴する出小袖)は一人格、流星かも知れないが切戸からでなく本舞で出して欲しい。
往古の栄華も洞窟の現在、萌す葉上への恨みは後妻打ちに。思い止まるよう諷めるツレに、斟酌無用とばかり「いや如何に言ふとも」と左袖きつとツレにアシラフと枕元に立つて行き「ちやう」と扇を高く上げ打つところ着きつける。枕之段

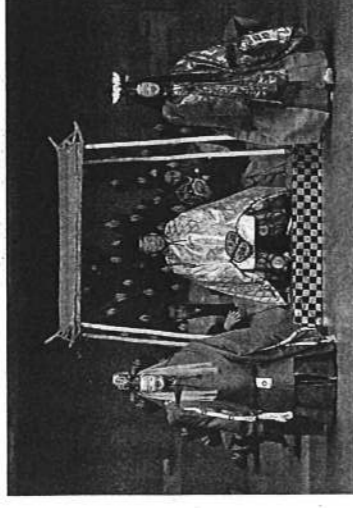


観世会「求塚」
写真・杉浦賢次氏撮影
観世清和

「求塚」旅僧(ワキ茂十郎)、従僧(ワキツレ知登・雅人)と撰津生田で葉挿の里女逢(シテ清和・ツレ嘉安・木志)に出遇う。求塚の在所を訊ねるが、由無し事に悶わる互いに時間の無駄と取り合つて貰えない。ワキとシテ、ツレ問答、掛合が互いの立場を踏まえ空気が引き締まる。初回(清司・邦久・邦弘)からロンギへ、



青陽会「葉上」
左よより八神孝充、杉江元、相元正樹



観世会「鶴亀」
左よより八神孝充、梅田邦久、吉沢旭

は枕に象徴される御息所の悶怨。光君の寵を得ず葉上に引きかえ寵を失なう身を歎き嫉妬に恨みを叫ぶ御息所、いつそ破れ車で拉致を、と。へ沢辺の虫と扇翳して面使と、へ光る君とぞ、と出小袖(葉上)に目を遣るところ

(がく)を舞い聖代を葬ぐ。
狂言口開で盲人(アヒ郎達)、皇帝の行幸の旨を伝え、皆々参内あれと願って退くと、莊重な真之来序(学・昭弘・真之介・洋輝)で幕揚と出るシテ、威厳ある端正な行まいに皇帝の品位は年功の重み。中之舞三彈を相舞する鶴と亀はよく揃い美しく爽快。選擇掛の樂を舞うシテは袖アシラフとあざやかに足拍子重々しく舞上げ、へ祈え行く(言の杖を)、ときれいに袖袂々姿に老朽ぶりをみせた。主役見清司、地頭芳伸。(50分)
「佐渡狐」先の金剛例会初回の翁付脇狂言も同曲。年貢上納が可能な百姓の存在あればこそ世の中の出度さではあるが、人を騙した裏で企及する贈取贈(写真)の後ろめたさが曲趣にあれば、愚報物のような和樂の気分は感じられない。
金剛例会のときは大藤流茂山千五郎家、向かつて左から佐渡・越後・奏者と並んだが、この度の和泉流狂言共同社は越後・佐渡が入れ替る。奏者(友彦)にしてみれば、越後ノ百姓(アト徳次)より佐渡ノ百姓(シテ靖浩)が自分に近い程よさうだが、佐渡の席は正中中で三角形の要にあり、奏者と越後は底辺の一線上で互いに素通しであるところに奏者の苦心。越後に狐の色を問われれば、「狐色」と答える佐渡に、越後の註素を遣るように佐渡の言葉尻を繰ぎ、「おおお赤う貴なものぢや」と越後を牽制するに大真。当然、場の空気を読む越後、不審は帰るさ、問いそびれた狐の啼き声を佐渡に聞けば、苦慮の末に「チチクワイ」と。「それは鴉ぢやないか」と嘘は露見する。脳裂感なのめならず皇帝も自ら棄

るに心持ちを、へなほも思ひは、と葉上の前、へその面影も恥かしや、と抱へ扇にツレから面を隠し、扇投げ捨てると情織を内から引き脱ぎ被き中入。
後場、巫女で埜が明かず下人(アヒ俊裕)を使者に招請を受け祈禱に赴く小聖(ワキ元)、祈り始めて背後の気配にへ東方に降三世、でサツと振り向くや、同時に後シテは袂衣(前シテの重織)を持ち上げ般若の面を覗かせる阿吽の呼吸の妙。ゆっくり袂衣を脱ぎ、腰に巻くとワキとの闘争は懸際に袂衣を捨て身軽に。ワキに追われ三ノ松へ逃げるも逆襲、シテ柱に左手を掛け病臥の葉上を見込むところ凄味を。葉上の枕元へ迫るところ(写真)もまぎまぎと精彩。(1時間3分・2月13日・青陽会)
「鶴亀」月宮殿に皇帝(シテ邦久)の出御を得て事始の節会、居並ぶ百官御相(ワキ・ワキツレ勝久・元・正樹)を前にして幕例の鶴亀(ツレ旭・孝充)の相舞。観感なのめならず皇帝も自ら棄

へ若葉摘まうよ、と葉挿の労働歌も明るい野辺の景色、浅春のへ吹かる、秋もなほ寒し、と袖に目を遣るシテの、何となく沈み込む気分は、ツレが八拍み残して帰らん、と退いて行くの知らぬげに独り残るところ、意味深長、ワキとの対話を望む心が。ワキに不審はよく揃い美しく爽快。選擇掛の樂を舞うシテは袖アシラフとあざやかに足拍子重々しく舞上げ、へ祈え行く(言の杖を)、ときれいに袖袂々姿に老朽ぶりをみせた。主役見清司、地頭芳伸。(50分)
「佐渡狐」先の金剛例会初回の翁付脇狂言も同曲。年貢上納が可能な百姓の存在あればこそ世の中の出度さではあるが、人を騙した裏で企及する贈取贈(写真)の後ろめたさが曲趣にあれば、愚報物のような和樂の気分は感じられない。
金剛例会のときは大藤流茂山千五郎家、向かつて左から佐渡・越後・奏者と並んだが、この度の和泉流狂言共同社は越後・佐渡が入れ替る。奏者(友彦)にしてみれば、越後ノ百姓(アト徳次)より佐渡ノ百姓(シテ靖浩)が自分に近い程よさうだが、佐渡の席は正中中で三角形の要にあり、奏者と越後は底辺の一線上で互いに素通しであるところに奏者の苦心。越後に狐の色を問われれば、「狐色」と答える佐渡に、越後の註素を遣るように佐渡の言葉尻を繰ぎ、「おおお赤う貴なものぢや」と越後を牽制するに大真。当然、場の空気を読む越後、不審は帰るさ、問いそびれた狐の啼き声を佐渡に聞けば、苦慮の末に「チチクワイ」と。「それは鴉ぢやないか」と嘘は露見する。脳裂感なのめならず皇帝も自ら棄

と右ウケて立ち、柱に取り付き(写真)へあら熱や、と前々兼ねてくすおれる襟に安座、胸掻き巻る心に掻き扱くところ写実の妙。機嫌の有様をみせるキリは、無間地獄へ墮ちる様を左膝つきへ足上頭下、と扇右逆手に上を見、下へぐつと指すところに三年三月の苦痛を象徴。キリは左横から塚に入り、扇左手に替へ亡者の形は、と直り扇で面隠し安座、へ失せにけり、の返し句で扇右手に立つと塚を前から出て留めた。可憐な乙女に降りか、苦酷な運命沁々思われ哀感一入。後シテの白線に描かれた鴛鴦の紋様が実に象徴的だった。(1時間46分・2月14日・観世会定例公演)
「節分」いつも節分には豆を拾い、食べるのが楽しみでやって来る蓬萊ノ鬼(シテ友彦)、夫が出雲大社へ年取り(節分の夜の年越参り)に行き女房(アト融)独り家をたまに訪れ、扇の頭付き校のことを忘れ膝で目を突く。当今、寺社には節分の行事として追儺の豆撒は残るも一種のイベント化、刃りて「福は内、鬼は外」の大声を聞かない。当時の習俗を画面化した「節分」、懐しい。
終を叩き落し、鬼は案内をどうが、出て来た女は気付く様子もない。合点した鬼が隠れ蓑笠を脱ぎるばかりで様子が知れない。野余、話の米口と食物をねだれば、出されたは蕪菜、調理が分らず、女の応待も不満で撒き散らせば、ろから会話が成立。盛んに女に言い寄る鬼は、小歌や小舞で歓心を買おうとするが躍起になり過ぎ、小歌の文句に感情移入、降る雨も恋の晴れやる事の無かるろ、と安座の双シラリ。ここへ来て女は鬼の純情一途な愛情を知り、見掛けに由らず怖くないと分れば、弱味にいつけ入りあくとい仕打。宝の隠れ蓑笠取り上げると、享事の歴に就いたつもりで「草臥れやの草臥れやの」と横臥の鬼に「鬼は外鬼は外」と豆を打つて追い出す。鬼の面は昨年、越前池田町の新作能面公募展で最優秀賞受賞の小坂與一の作「武悪」。驚異風が如何

にもシルクロード経由を思わせる異国風で正に遠来の蓬萊国の鬼。
シテは小謡に声が振れ気味、喉の酷使が自愛を。アトの女は役に嵌り好調。(32分)
「山姥・白頭」都で百万山姥と噂される遊女・百万(ツレ郁子)、親の十三回忌として従者(ワキ勝久)供人(ワキツレ元・正樹)と共に善光寺詣りに北陸道を行く。富山と新潟の異境、境川を北アルプスの峻嶲、中山道は狸尻を北上の方が遙かに楽だが、能作者は山姥の神秘性を強調するため敢えて人界を遠ざけたのである。里人(アヒ靖浩)を案内者に難路を行けば俄に日没の暗さ、途方に暮れるところへ呼掛で宿をしようとする女(シテ正邦)、面は病的な面白く見える露女・横浅黄・露女白頭着付、無紅唐織の姿。暗闇の中で愁眉を開くワキ、シテの本意が山姥の歌の一節き校のことを忘れ膝で目を突く。当今、寺社には節分の行事として追儺の豆撒は残るも一種のイベント化、刃りて「福は内、鬼は外」の大声を聞かない。当時の習俗を画面化した「節分」、懐しい。
終を叩き落し、鬼は案内をどうが、出て来た女は気付く様子もない。合点した鬼が隠れ蓑笠を脱ぎるばかりで様子が知れない。野余、話の米口と食物をねだれば、出されたは蕪菜、調理が分らず、女の応待も不満で撒き散らせば、ろから会話が成立。盛んに女に言い寄る鬼は、小歌や小舞で歓心を買おうとするが躍起になり過ぎ、小歌の文句に感情移入、降る雨も恋の晴れやる事の無かるろ、と安座の双シラリ。ここへ来て女は鬼の純情一途な愛情を知り、見掛けに由らず怖くないと分れば、弱味にいつけ入りあくとい仕打。宝の隠れ蓑笠取り上げると、享事の歴に就いたつもりで「草臥れやの草臥れやの」と横臥の鬼に「鬼は外鬼は外」と豆を打つて追い出す。鬼の面は昨年、越前池田町の新作能面公募展で最優秀賞受賞の小坂與一の作「武悪」。驚異風が如何

が如何にも妖気。半切・無紅唐織葺折・葉付鹿背杖、面山姥は丹塗(越)でなく動(青黒)く見えたが侮丈夫のシテに大きな山姥の恐ろしさ。鹿背杖突き一ノ松に留まると、へ森林に骨を打つ、と強く二ツ突くと、へ麻酔々たり、では胸杖にへ山また山、と右ウケへ何れの工か、と面切るのが重量と連らなる感嘆を眺める趣。へ水また水、と舞台へ入つては、へ一声の山鳥、と打合、へ山廻りするぞ苦しき、で鹿背杖を扇に替える。床几のクセは、へ峰々えては、と右へ目付柱上を眺め、へ無明谷深き、と直り、へ下化衆生を表して、で拍子二ツ踏み、扇を逆手に立つて右足ぐつと踏み出しへ金輪際及べり、と強く下方へ指すとこる鮮烈。へすもも山姥は、行かざる処の無、へ然れば人間にあらずとて、と上テ端、雲の様な存在は鬼女に姿して現れたが、色(現象界の物質的存在)は即ち是れ空(固定的実体は無)と。この哲理を述べる長大な二段クセが聞かせる。シテはへ足訂の、と語い寄座へ行くと扇を鹿背杖に替へ、へ山廻り、と立廻。鹿背杖を扇に合際は山廻りの辛苦。キリはへ御名残惜しや、と膝つきツレにアシラフと、へ眼申して、と立ち、へ帰る山の、で再び鹿背杖を扇に替へ、山の春秋は花や月を尋ねる心に舞を一巡、へ影を尋ねて、で頭ヲ取り月を見るところにそ今宵に、そのとき私も真の姿を、とへすはやかけるふ、と腰を落し目付柱へ見ると、へさなきだに、と直り、初回(邦弘・勘助・一政)はへ雲に心を、とずつと消えて再び夜の明ける不思議、ワキがアトに山姥には何がなると問えば、朝・桶・木戸などとは遠方無。流儀、流派によっては団栗・野老・木戸、また櫻口・野老・木戸とも。共通する木戸は「山に住む木戸」が「山に住む鬼女」の誤聞とワキに甞められることに。
後場、真ノ山姥(後シテ正邦)は白頭・横浅黄・黒地金鱗着付

「前号の訂正」

3頁6段14行、序腰とあるのは「片腰」、
3頁8段後から13行、早苗とあるのは「早笛」、
4頁4段28行、重ねるは「兼ねる」。

NHK放送予定(平成22年5月~6月)

5月23日 NHK-FM ラジオ(日曜日 7:15~8:00) 素謡「花籠」(再)(親世流) 遠藤六郎ほか

5月30日 素謡「鐘の音」(三宅右近ほか)

6月6日 素謡「敦盛」(親世流) 津村礼次郎ほか

6月13日 素謡「檜垣」①(宝生流) 近藤乾之助ほか

6月20日 素謡「檜垣」②(宝生流) 近藤乾之助ほか

6月27日 素謡「湯合」(豊多流) 香川靖嗣ほか

能楽の友社

名古屋市中種区千種2丁目18-18
(郵便番号 464-0858)

電話 X 731-7984
F (052) 733-2837
振替口座 00800-6-363993

購読料 1年 1100円
1年 1800円
郵送の場合 1100円

能楽の友

演能カレンダー

名古屋能楽堂

(能・狂言演能関係)

(TEL 052-231-0088)

(5月)	名古屋能楽堂 観衛会 (無料)	名古屋能楽堂 観衛会 (有料)
23日(日)	第53回狂言やるまい会 (番組①面)	
30日(日)	名古屋能楽堂 6月特別公演(有料) (番組①面)	
(6月)	幸謡会 (有料)	能楽関係者育成研修発表会 (番組②面)
5日(土)	名古屋能楽堂 6月特別公演(有料) (番組①面)	若謡 (有料)
6日(日)	能謡会 (有料)	名古屋能楽堂 観世能演能会 (無料)
12日(土)	若謡 (有料)	宝生流全国学生能楽連盟自演会 (無料)
12日(土)	名古屋能楽堂 観世能演能会 (有料)	宝生流全国学生能楽連盟自演会 (有料)
13日(日)	宝生流 観世能演能会 (無料)	
19日(土)	宝生流 観世能演能会 (有料)	
20日(日)	名古屋能楽堂 定式能 (有料)	

19世宝生流 宝生英照氏逝去

5月11日 宝生流葬執行

宝生流第十九世宗家・宝生英照氏は四月十七日、心不全のため逝去した。享年五十二歳。近親者により密葬が行われ、本葬は宝生流葬として、五月十一日午前十一時から東京・文京区本郷の宝生能楽堂で執り行われた。喪主は二十世宗家和美氏。葬儀委員長は親世流二十六世宗家・親世清和氏がつとめ、能楽関係者をはじめ多数の会葬で永遠の別れを惜しんだ。

狂言共同社創立百二十年を記念して、きたる七月十一日(日)名古屋能楽堂で「第11回 御洒落名匠狂言会」が開催される。

「お洒落(おしやらく)」は、狂言共同社創立の中心となった初代井上菊次郎伊勢門水らが当時流行の「康楽部(くらぶ)」をもしり参加した「愛知洒落部」、通称「御洒落会(おしやらくかかい)」に由来がある。自ら狂言を楽しむ、狂言に遊び、軽妙・洒落と評された先人の心をしのびつつ、現在の名匠・名人の芸・達人の技を味わい、楽しむ催しとして期待される。

午後1時開場 午後1時30分開演

狂言共同社創立 百二十年記念 お洒落名匠狂言会

7月11日 名古屋能楽堂

演・演目は、素雉子「獅子」、狂言「三本柱」(井上靖浩 鹿島俊)

授・豊橋市、豊川市、蒲郡市、新城市、田原市、豊橋文化振興財団、豊川はじめ後援各自治体文化協会、豊橋角町能楽保存会など。

開場午後5時、開演午後6時。

チケット/5000円、販売窓口「三河三座事務所(愛知新聞社) TEL0532・32・3111」

1▽財団法人豊橋文化振興財団▽豊橋丸末 TEL0532・53・5064。(雨天の場合は、豊橋中学校体育館) (正午決定)

番組は次のとおり。

解説 「今宵のお楽しみ」辰巳清次郎

仕舞「氷室」(和久莊太郎)

「小袖巻我」(十郎・辰巳大二郎・五郎・辰巳和麿)「鶉之段」(石黒孝)

狂言「仏師」(すづば、井上靖浩、田舎人・佐藤友彦)

火入れ

能「鞍馬天狗」(シテ・辰巳清次郎、牛若・石黒空、花見見・地元の子供達、ワキ・檀王和幸、能力・佐藤融、木葉天狗・井上靖浩)

豊田市能楽堂 7月能公演 「禰宜山伏」景清

豊田市能楽堂「七月能」は、七月二日(土)親世流能「景清」松門之出(シテ梅田邦久)和泉流狂言「禰宜山伏」(シテ野村小三郎)が上演される。

なお演能のはじめに、村瀬和子氏(詩人)の解説がある。番組は

次のとおり。午後二時開演。

狂言「禰宜山伏」(シテ・山伏野村小三郎、アト・伊勢の御師 奥津健太郎、アト・茶屋 野口隆行、子方・大黒天 野村信朗 後見・松田高義)

能「景清」シテ・景清 梅田邦久、ツレ・人丸 梅田善宏、トモ・従者 祖父江修一、ワキ・里人 高安勝久、

笛・藤田六郎兵衛、小鼓・後藤孝一郎、大鼓・河村総一郎、後見・片山幽雲、青木道喜、地謡・片山清司、武田邦弘、古橋正邦、片山伸吾、味方玄、分林道治、清沢一政、武田大志

入場料/全席指定(税込)正面 6000円、脇・中・正面席 4000円

チケット販売場所/豊田市能楽堂(電話 0565・35・8200)

インターネット予約 氏名: 〃 〃 〃 TEL0570・02・9999、Eメール 401・781)

第4回吉田城新能

8月7日 「鞍馬天狗」仏師

授・豊橋市、豊川市、蒲郡市、新城市、田原市、豊橋文化振興財団、豊川はじめ後援各自治体文化協会、豊橋角町能楽保存会など。

開場午後5時、開演午後6時。

チケット/5000円、販売窓口「三河三座事務所(愛知新聞社) TEL0532・32・3111」

1▽財団法人豊橋文化振興財団▽豊橋丸末 TEL0532・53・5064。(雨天の場合は、豊橋中学校体育館) (正午決定)

番組は次のとおり。

解説 「今宵のお楽しみ」辰巳清次郎

仕舞「氷室」(和久莊太郎)

「小袖巻我」(十郎・辰巳大二郎・五郎・辰巳和麿)「鶉之段」(石黒孝)

狂言「仏師」(すづば、井上靖浩、田舎人・佐藤友彦)

火入れ

能「鞍馬天狗」(シテ・辰巳清次郎、牛若・石黒空、花見見・地元の子供達、ワキ・檀王和幸、能力・佐藤融、木葉天狗・井上靖浩)

名古屋能楽堂六月特別公演

6月5日(土) 午後二時開演

狂言 柿山伏

今枝 靖雄 佐藤 融 後見 今枝 郁雄

主権 野村事務所 四世・野村小三郎

入場券取扱 野村事務所(電話 0590・8323・3210) 電子チケットぴあ(TEL 0570・02・9999、Eメール 401・781)

※当日券は、残券がある場合、12時30分より1000円増で販売。

組 名古屋能楽堂

五月三十日(日) 午後一時三十分開演

身内の情景

雁大名 野村小三郎 大股記者 松田高義 雁屋の亭主 野口隆行

舎弟 茂山 茂 兄 茂山 正邦 教え手 松本 薫

浦島 野村小三郎 浜 野村 信朗 亀の精 野口 隆行

石神 野村 万藏 妻 小笠原 匡 仲敷人 奥津健太郎 小鼓 船戸 昭誠

(終了予定 三時半頃)

第五十三回 狂言やるまい会 名古屋公演

5月30日(日) 午後一時三十分開演

身内の情景

組 名古屋能楽堂

五月三十日(日) 午後一時三十分開演

身内の情景

雁大名 野村小三郎 大股記者 松田高義 雁屋の亭主 野口隆行

舎弟 茂山 茂 兄 茂山 正邦 教え手 松本 薫

浦島 野村小三郎 浜 野村 信朗 亀の精 野口 隆行

石神 野村 万藏 妻 小笠原 匡 仲敷人 奥津健太郎 小鼓 船戸 昭誠

(終了予定 三時半頃)

能大原御幸

6月6日(日) 午後一時開演

幸謡会

飯 樽元 雅正 河村真之介 藤田六郎兵衛 橋本 幸 後藤嘉津幸

問 野村小三郎

後見 武富 康之 地謡 吉沢 孝允 山本 正人 泉 義夫 須部 神八 赤松 利之 祖父江 修一 赤松 利之 浦 甫 英

主権 幸 謡 会

近 藤 幸 江

岡崎市豊田本町一―二三 TEL(〇五六四)二―二五二九

◎会員券 五千円(全席自由席)

チケット料金 前売指定 5000円 自由席一般 4000円 学生 3000円 (自由席のみ当日500円増)

取扱所 名古屋能楽堂(Tel0552・2331・0088) プレイガイド(采アレチケ92・松坂屋ほか) ナディアパーク(TEL0552・2665・2015) チケットぴあ(Tel0570・02・9999、Eメール 401・781)

幸謡会

六月六日(日) 午後一時開演

名古屋能楽堂

番 組

仕舞 融 豊 村井 邦子 地謡 吉沢 孝允 須部 神八 祖父江 修一 浦 甫 英

独吟 歌 占 泉 嘉夫

仕舞 梅 枝 大 槻 文藏 地謡 武富 康之 山本 正人 赤松 利之 浦 甫 英

法 齊 藤 信 隆 多 久 島 法 子 塩 谷 幸 恵 近 藤 幸 江

能大原御幸

飯 樽元 雅正 河村真之介 藤田六郎兵衛 橋本 幸 後藤嘉津幸

問 野村小三郎

後見 武富 康之 地謡 吉沢 孝允 山本 正人 泉 義夫 須部 神八 赤松 利之 浦 甫 英

主権 幸 謡 会

近 藤 幸 江

岡崎市豊田本町一―二三 TEL(〇五六四)二―二五二九

◎会員券 五千円(全席自由席)

能安宅

観世流 勳進 流

後見 武田 邦弘 地謡 黒田 本時 高橋 一彦 加藤 邦久 須部 孝親 加賀 敏彦 山田 幸親 藤田 六郎兵衛 河村真之介 後藤嘉津幸 藤田六郎兵衛 高安 勝久

久田 勳 鶴

主権 名古屋市文化振興事業団 名古屋能楽堂 能楽協会名古屋支部

(午後四時五分頃終了予定)

当地の各流儀・流派・結社・ 社中の消息を辿る ⑳

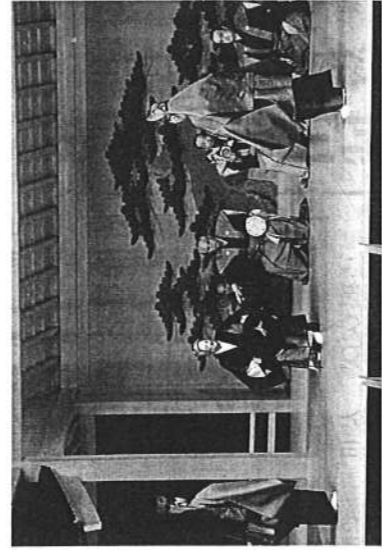
竹尾 邦太郎

五、「清華能・幸友会別会鑑賞能」④

— 承前 —

第二回は平成二二年一〇月二日、福井家十世・良久の三回忌追善。能組は雛子「翁・法会之式」泉嘉夫・山本博通(千歳)・幸正昭(頭取)柳原富司忠・後藤嘉津幸(脇鼓)大野誠(笛)・地頭高橋敏一・半能「梅士・赤頭三段之舞」浅見眞州・久田勘吉郎(子方)高安勝久・飯富雅介・杉江元・雛子を鹿取希世・福井啓次郎・河村総一郎・助川龍夫・主後見水鳥忠修・地頭山本順之、一調

二番「駒之段」福井啓次郎・長田藤(謡)「鱈之段」寛敏一・山本順之(謡)・幸雛子「盤遊楽」竹市学・後藤孝一郎・河村眞之介・鬼頭専太郎、一調「木賊」幸清次郎・衣裳正宜(謡)・狂言「悪太郎」野村又三郎・井上祐一・佐藤友彦、能「卒都婆小町」一度之次第「野村四郎」殿田謙吉・大日向寛・雛子を藤田六郎兵衛・福井良治・亀井忠雄・主後見浅見眞州・地頭山本順之。十世・福井良久の嫡子・良久(十二世)披袂の「卒都婆小町」を、嫡孫・啓次郎は一調「駒之段」を手向ける。



第12回清華能「卒都婆小町・一度之次第」左よより大日向寛・野村謙吉(杉浦賢次氏撮影)

第一三回は平成二三年一二月三日。能組は雛子「猿之段」野村小三郎(三番豊)大野誠・柳原富司忠(頭取)福井啓次郎・福井良治(脇鼓)河村眞之介・半能「高砂」近藤乾之助・飯富雅介・杉江元・橋本幸・雛子は鹿取希世・福井啓次郎・河村総一郎・助川龍夫・主後見高橋敏一・地頭小倉敏克、雛

子「井筒」三段之一声「長田藤・竹市学・幸清次郎・寛敏一、狂言「茶壺」野村又三郎・野村小三郎・松田高義、一調「老松」幸正昭・泉嘉夫(謡)・連調「陸之段」後藤孝一郎・後藤嘉津幸・辰巳清次郎(謡)・能「草紙洗」蘭拍子「宝生英照・辰巳和磨(子方)武田孝史(貫之)水上優、和久庄太郎・内藤飛能(朝臣)森常好(黒主)・藤田六郎兵衛・福井啓次郎・安福建雄・主後見近藤乾之助・地頭高橋敏一。

「草紙洗」蘭拍子「宝生英照・辰巳和磨(子方)武田孝史(貫之)水上優、和久庄太郎・内藤飛能(朝臣)森常好(黒主)・藤田六郎兵衛・福井啓次郎・安福建雄・主後見近藤乾之助・地頭高橋敏一。

「草紙洗」蘭拍子「宝生英照・辰巳和磨(子方)武田孝史(貫之)水上優、和久庄太郎・内藤飛能(朝臣)森常好(黒主)・藤田六郎兵衛・福井啓次郎・安福建雄・主後見近藤乾之助・地頭高橋敏一。

「草紙洗」蘭拍子「宝生英照・辰巳和磨(子方)武田孝史(貫之)水上優、和久庄太郎・内藤飛能(朝臣)森常好(黒主)・藤田六郎兵衛・福井啓次郎・安福建雄・主後見近藤乾之助・地頭高橋敏一。

名古屋能楽堂 定例公演番組

本紙では、ことし1月号で「平成22年の名古屋能楽堂定例公演」の日程及び上演予定演目をお知らせしましたが、未確定部分があり、確定した演目、演者は次のとおり。

平成22年度
名古屋能楽堂定例公演
能「狂言でたどる天下統一の道(後編)」
◇6月特別公演 6月5日(土)午後2時始
能「安宅」(観世流)久田勘吉郎・狂言「柿山伏」(和泉流)今枝嘉雄
(本紙①面掲載)
◇7月公演 7月4日(日)午後2時始。市民能楽セミナー※解説/ワキの世界(飯富雅介)
能「邯鄲」(観世流)梅田嘉宏・狂言「鼻取相撲」(和泉流)佐藤友彦
◇9月公演 9月5日(日)第

1部午前10時開演、第2部午後2時開演
(一部)能「二人静」立出之一声(観世流)近藤幸江、久田三津子、能「紅葉結」(宝生流)佐藤耕司、狂言「瓜盗人」(和泉流)佐藤融、舞獅子「春日龍神」(金春流)鬼頭尚久
(二部)能「富士太鼓」(喜多流)長田藤、能「龍坂」(観世流)古橋正邦、狂言「取燈」(和泉流)野村小三郎、舞獅子「意城」(金剛流)熊谷真知子
◇10月公演 10月22日(金)午後6時30分開演。
能「大江山」(宝生流)衣裳正宜、狂言「朝比奈」(和泉流)鹿島俊裕
◇12月公演 12月5日(日)午後0時30分開演。
能「杜若・恋之舞」(観世流)梅田邦久、能「船弁慶」(宝生流)竹内澄子、狂言「鞍馬参」(和泉流)今枝嘉雄、舞獅子「自然居士」(金剛流)加藤かおる
◇正月特別公演 平成23年1月3日(日)午後2時開演
能「翁」(観世流)武田邦弘

能楽後継者 育成研修発表会 (第十八回)

六月十二日(土)午前十時始
名古屋能楽堂

番	組	仕舞	加	茂	田口	将成	地頭	東川	尚史
(宝生)	鶴	飼	り	江	湖	陽	三	内藤	飛能
(観世)	放下僧	久田	勘吉郎	大鼓	河村	眞之介	地頭	吉沢	旭
(舞)	邯鄲	吉沢	旭	船戸	昭弘	加藤	洋輝	誠	
(金剛)	三輪	田中	春奈	寛	敏一	加藤	洋輝		
(金剛)	融	大川	慶美	河村	総一郎	加藤	洋輝		

若鯨能 (第四回)

六月十二日(土)十二時半始
名古屋能楽堂

番	組	能	三山	山	元	河村 <th>眞之介 <th>鹿取 <th>希世 </th></th></th>	眞之介 <th>鹿取 <th>希世 </th></th>	鹿取 <th>希世 </th>	希世		
(宝生)	山	島	久	杉	江	元	河村	眞之介	鹿取	希世	
(和泉)	飛越	新	嘉	今	枝	郁	雄	下	男	鹿取	俊裕
(金剛)	班女	加	藤	か	お	る					

名古屋観世会定例公演能

六月十三日(日)十二時半開演
名古屋能楽堂

能	組	能	雨月	雨	月	高安 <th>勝久 <th>河村 <th>総一郎 <th>加藤 <th>洋輝 </th></th></th></th></th>	勝久 <th>河村 <th>総一郎 <th>加藤 <th>洋輝 </th></th></th></th>	河村 <th>総一郎 <th>加藤 <th>洋輝 </th></th></th>	総一郎 <th>加藤 <th>洋輝 </th></th>	加藤 <th>洋輝 </th>	洋輝
(和泉)	飛越	新	嘉	今	枝	郁	雄	下	男	鹿取	俊裕
(金剛)	班女	加	藤	か	お	る					



第14回清華能「通小町・雨夜之伝」
左より泉嘉夫、泉雅一郎
(杉浦賢次氏撮影)

乱拍子から、イロエ掛りの中之舞にすゝみ、舞いがすんで「麗立てば」とワカになる。キリにも多少



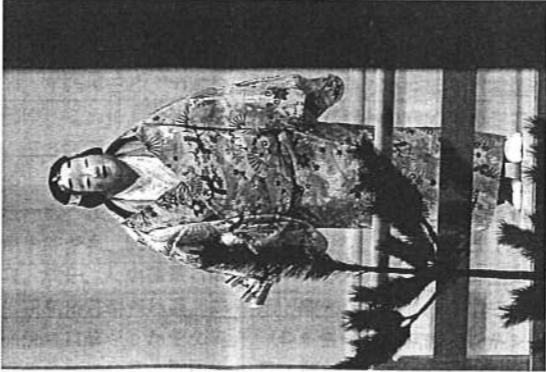
第13回清華能「草紙洗・蘭拍子」
宝生英照、森常好
(杉浦賢次氏撮影)

変わった型がなされる。シテが緋の長袴をはき、能のはやしは最高乱拍子を踏むというので、けんらん豪華な大舞台という感じを醸し出す。

因に東京五流能「草紙洗・乱拍子」の配役は宝生九郎(シテ小町)宝生英照(子方)王近藤三三(貫之)松本忠宏(今井泰勇)渡吉信和(朝臣)松本蔵三(黒主)山本則寿(從者)藤田大五郎・幸円次郎・安福春雄・後見宝生英雄・田中規之助・地頭武田光雲。



豊田市能楽堂3月能
①「伊文字」左より茂山正邦、茂山十五郎
②「熊野・譚繼之伝・村雨留」野村四郎



河村眞之介(大鼓)・舞姫子「竹生鳥」高橋藤二、お話「能へのお誘い」藤田六郎兵衛、一調「花筐」柳原富司忠・梅田邦久(謡)・素雉子「中之舞」鹿取希

世・福井孝介・寛銀一・助川龍夫・能「通小町・雨夜之伝」泉嘉夫・泉雅一郎・高安勝久・雉子藤田六郎兵衛・福井啓次郎・河村繪一郎・後見近藤幸江・久田三津子

・地頭梅田邦久。福井家十二世福井良治の息鳥聡介、悠介、憲介の三兄弟が出演。

◆仲春から陽春の舞台◆

「豊田市能楽堂三月能」「名古屋宝生会定式能」と「華寿会」「青陽会」

竹尾邦太郎

「伊文字」申し妻(妻が寝るよう神仏に祈願すること)をするため清水観音に御籠りする主(アト十五郎)、靈夢を齎り、これが正夢。指定の西門一の階に太郎冠者(次アト茂)と急げば「もしく出まして御座る」と太郎冠者、「何が出た」と問髪を入れぬ主の、まるで他人事のような調子が可笑しい。果して御霊夢の御妻が否か問うてこいと主、御自身のこと故こなた直々に太郎冠者、押し問答の末にも羞恥が先に立ち、逡巡する太郎冠者も、主命とあって「この度は申し切つて問ふて参ります」と。当の御妻様と分り、主命通り宿を問えば女(シテ正邦)は「恋しくは問ふても来れないの国、いせ寺本に住むせわらは、」と歌を残し消え失せる。歌の大半を聞きそびれた太郎冠者

に、諦められぬ主の一縷の望みは「問ふても来れい」までの句。責任上、太郎冠者は歌園を設け通行人に下の句を付けさせるように進言、初め関など躊躇した主も、通行税など取らぬと分れば己のため、大いに乗り気になる。この辺り、十五郎のちやつかりしているところ巧い。先づ掛かつたのは「なう仕がしや仕がしや」と肩衣女(二役)、「何とぞ下を付けて下され」と太郎冠者に低頭懇願され、ば、「それならば先づ関を解かされ」と使ヒノ者、次第に言葉遊びに嵌り、主従二人との掛合に節を付け吟詠するうちリズムに乗って舞掛りに(写真)想像力が喚起され、一首が纏つてくるのも面白い。

所期の目的が叶えば互いに別れを惜しみ、哀歎交々のうち目出度く使ヒノ者のシヤギリ留ス。十五郎と子

鳥の正邦・茂、親子の調和のとれた和やかな舞台。(34分)

「熊野・譚繼之伝・村雨留」故郷の老母の病篤きを知らせる文を齎す侍女朝顔(ツレ豊彦)、夢の間に惜しと名前や要件を述べサシを置き直ぐ進行、熊野(シテ四郎)の訴え。虫の知らせか、老母を案じる心に出て来たシテは三ノ松。思い掛けぬツレの訪れは、文に目を通すと「あら榮止や」と一瞬息を詰め憂色の風情、胸中鮮やかにみせる。文之段は「さらば諸共に読み候べし」と宗盛(ワキ欣哉)、床几を下り正中へ、小書「譚繼之伝」で先づワキが「甘泉殿の春の夜の夢、と読み始めれば(写真)、シテは老母の心中を思い堪らぬ心へ心弱き老の驚達み事も涙に咽ぶばかりなり、とワキと連吟、へたに然るべくは、以下はワキのお許しを得て帰郷を、の文面、シテの独吟になる。文意に則してのシテとワキの読み継ぎの微妙が素晴らしい。固より文は私信、「見るまでもなし、それに高らかに読み候へ」とワキがシテを突くはねるのが本来だろうが、小書はシテの気持ちを前置、それ故に、同情に訴えられて折角の花見を無にされては、の思い却つて強く、下手な情は無用とはかりに花見軍を出させるところ、疝性なワキの性格がよくでる。

車中は帰郷叶わぬシテの脱力感、へ東路とて、と左手で柱を掴むのも纏る心、前方を眺めへせめて其方の懐しや、と左手シヤルところ切ない。狭い車中、細かな足遣いに都の賑わいを右、左に視線移すのも気を紛らす心か。やがて街を出外れ、地(文義・久保・勘助ら)との掛合は左右の寺々に目を留めるロンキ。へ六道の辻とかや、と右へ目付柱を見る哀感も一入へこ、より、と後ろ向きに車を出ると、清水の佛の御前に、と下居合掌の姿が如何にも慎ましく美しい。酒宴の席に待るよう急がされ、「何とて御当座などを」の声調には逆らいたい皮肉の心も。

病の老母に思い巡らすも依ならぬ世の中も、津水寺を巡る遠近の風物は知れるような春日遅々の中、と述べるクリ・サシ・クセ。クセの上分端まえ、へ寺は桂の橋柱、と立つと、へ稻荷の山の薄紅、で抱へるに眺望の広さ。酌に立ち、ワキにへ一さし舞ひ候へ、と舞を所望されるも、へ深き情を人々知る、とシテ、麗量みシヨリ足速に二ノ松へ、人の気も知らず呑気な、の気持が如笑。心を鎮めて戻ると中之舞、舞の途中で落花を望見したか、一ノ松裏勾欄へ走り、前勾欄に寄る(写真)と、へなうく俄に村雨の、と舞を中断が小書「村雨留」。扇開いて戻るとへ降るは涙か、とスミから扇がサシ舞台を一巡、扇左に取ると落花を受け散るを惜しまぬ人である、で正中下居、扇面に受けた落花をこぼし、麗量むと筆に擬して右手に。袂から赤い短冊を取り出して一首を書き付けワキへ。へ如何にせん都の春も惜しけれと馴れし真の花や散るらんには流石のワキも惻隱の情、暇を許されてシテはワキの憂心を恐れ、へたにこの候に、と立つや早々に橋懸へ。へ明け行く後の、と扇を高く撃ち踏む拍子の喜悅、心情描写に優れた肌理細かな舞台だった。(1時間28分・3月13日・豊田市能楽堂三月能)

「譚繼」名倉から進行へ、入水した主君清経の遺髪を携へ都に上る淡達三郎(ワキ元)の気重なる(①面へつづ)

名古屋宝生会定式能 (第34期)

六月二十日(日)午後一時始
名古屋能楽堂

能小督	飯富 雅介	河村眞之介	竹市 学
間	今枝 郁雄	福井 啓次郎	
後見	和武 孝史 辰巳 大二郎	地謡 竹内 淳成 久野 幸三	佐藤 耕司 寺井 良雄 内藤 飛能
狂言 地藏舞	佐藤 友彦	野村小三郎	後見 佐藤 融
能鳥追	橋本 幸 飯富 雅介	河村眞之介 船戸 昭弘	南取 希世
間	井上 靖浩		
後見	玉井 博祐 衣笠 愛	地謡 津田 節武 村上 勝成 玉井 道夫	和久 莊太郎 辰巳 清次郎 黒田 孝司
仕舞 是社	若 界	辰巳 清次郎 寺井 良雄 武田 孝史	地謡 飯 克徳 小倉 伸二 辰巳 大二郎
能鵜飼	宝生 和英 高安 勝久 杉江 元	飯 敏一 後藤 孝一郎	奥頭 義命 藤田 六郎兵衛
間	佐藤 融		
後見	寺井 良雄 和久 莊太郎	地謡 辰巳 大二郎 内藤 飛能 澤田 宏司	石黒 孝 武田 孝史 辰巳 清次郎 小倉 伸二

(終了予定 五時半頃)

主催 名古屋宝生会
名古屋市中区御器所3-23-19 1 階
衣 斐 正 直 方
TEL/FAX 052-882-5600

「入場料」(全自由席)
正会員券 一万八千円(年間適用4枚つり)
当日券 五千円
学生券 二千円
取扱い
■アレイガイド(当日券のみ取扱い)
■地下2階(栄アレイケ922)(三越地下)
ナディアパーク(7階)、中日(1階)、松坂屋本館(7階)

胸中がよくでる。入水と聞きへなに身を投げ空しく、と語る瀧柱ノ妻(ツレ周子)、せめて討たれるか病死なら未だしも、と夫の柔弱へ怨みてもその甲斐の無き世を悲しみ、ひっそりシタルと、恐れまざるワキが徐に差し出す遺囑に奪る夫への思い。泣き寝の夢枕に清経(亡霊)(シテ愛)が現われる。面今若(か)里垂・殺子打烏帽子・襟浅黄・紅白段唐織着付・白大口・紫長絹・太刀の姿・長絹の裾の帆舟文様が豊前柳ヶ浦を暗示するが、シテとツレは夫と妻、掛合に互いの怨み辛みを叩つて心づけて合うが、配役が共に女とあつて緊迫感に欠ける憾み。もしツレが男なら能「清経」は成立しないだろうし、女流能楽師には選曲は一大事、能は男のものと言われぬ前に一考あつて然るべきか。ツレの怒嘆に、シテは話題転換とばかり入水に至る必然をサシからクセに。李佐八幡に祈念するが見放され、失望の態は「一門は氣を失ひ、と指廻し床几を立つと正面へ。へ還幸なし奉る、と退つて下居、へ哀れなりし有様、と両手をつき垂れる風情は文字通りの悲喜。

クセになり、合戦譚は「白鷺の群れ居る松見れば、と勢よく袖を返すところに羽音のぞわめきを見る。へ月に横く気色、の月ノ厨から海の濤間となる迄の一連の型、風扱いは綺麗だが、キリの太刀捌きには余力強さを感じなかつた。地謡は宝生流の名物(?)全女性が、地頭、稚だけが突出しており謡に厚味が感じられないように思う。(1時間1分)

「岩橋」岩橋の架橋を役行者に命じられた葛城ノ女神、醜女を恥じて夜しか就寝せず未室に終り、糸で縛められたという能「葛城」の説話に拠る。

結婚後十日余にもなるのに昼夜被衣を脱がず、女(小アト醜)の顔も見ない男(シテ溝造)、「どこぞ片断なこともあらうか」と仲人(アト友彦)に問えば、十人並みの器量と聞かされ安堵。脱がぬ被衣については困惑の仲人だが、そこは世馴れたもの、歌を好く彼女に岩橋にまつわる歌を聞かせれば脱こう、と二首を教えるが歌にはほとんど無縁の男。仮名で書いて貰い、カンニングをして歌むことに。「葛城や人目をつゝむ神だにも夜は現れ給ふ習ひを」と一首歌むも反応無く、二首目も。あくまで頑な、女の被衣を強引に剥ぎ取れば現れたのは醜女、今や居直つて万々年も連恋おうと慕い奪う女を怖れ、「許せぬ」と逃げる男に「願立さやなく」と追う女。「釣針」に似る。「葛城」を知らぬと面白さも半減、上演稀々な稀曲。事情は異なるがスエーデンで問題のブルカ着用の是非、思わぬでもない。秘すれば花か、イスラム女性性は目元涼やかな美形多いのでは。(9分)

「羽衣・巖流」漁夫白龍(ワキ雅介)に羽衣を取られて天上して得ない天人(シテ耕司)、一ノ松でへ住み馴れし空に何時しか行く雲の、と右上方を眺める風情に望郷の思い沁々。シテ・ワキ問答から、己れが恥ずかしいワキ、羽衣を再びへ掛け置けば、と松立木に。地次第へ真遊の駿河舞、の返シ句に後見が羽衣(長絹)を持つて戻ると物着に。赤地に金の唐草菊桐文様の長絹の艶麗がシテの面



豊田市能楽堂3月能「熊野・説経之伝・村雨留」
左より野村四郎、宝生欣哉 (杉浦賢次氏撮影)

立増に映える。序之舞は三段、途中、笛の調子が高くなる巖流調に。舞の中、右袖高く巻キ上げ遠く見廻すところに視界広々と開けるが、運どが重いよう舞に流麗さが欠ける憾み。舞上げると小書で直ぐへ真遊の教々に、となる。へさる程に時移つて、と構懸へ抜け、へ漣風にたなびきく、とハネ扇やわらかく眼下に浮島を眺める心は、へ愛鷹山や、で三鼓の流シに地を残し兼へ。ワキが常座で留める。キリの、浮遊する軽快明るい気分が余り感じられなかつたのも運ど。(56分)

「山姥」都の遊女百万(ツレ飛龍)、親の十三回忌に從者(ワキ勝久)供人(ワキツレ元正)と共に善光寺詣りに。戦後越中の堺川で里人(アト郁雄)に這を託ね、取えて難路を導ぶのも弥陀来迎の道の縁、懇願して案内に里人を先立て行くと、俄に夜となる陸奥。そこへ宿賃そうと現われる日く有りけな初老の女(シテ澗次郎)、面深井・襟浅黄・紺無地・無紅龜甲三巴文厚被着付・半切杖の姿。一ノ松へ、いわゆるある」と言う笛を能くする何某(アト隆行)に無理矢理同行を頼み込む。

折から月の出、早く笛を吹いて貰いたいシテを忘れ、先約を無にされたこともあるのか、アトは様々な月の眺めを愛でて飽かない。人の氣も知らずに、といらくを暮らせるシテ、敬慕と性急の対照が熱演で鮮やか。さて、笛が吹かれるとアトの笛は上手で、女も誘われようというもの、それを途中で止められては、とはらくするシテ。現われた被衣の女(小アト庵太郎)がてつきりアトを当該の男と勘違いすれば慌てるシテ。

キリは「あれは何ちや」とシテは女に氣も動転、後ろから覆い被せられると「あれく」とあらぬ方を指して女の氣を外らし、「許してくれい」と逃げる。三番上々のアンサンブルだった。(9分)

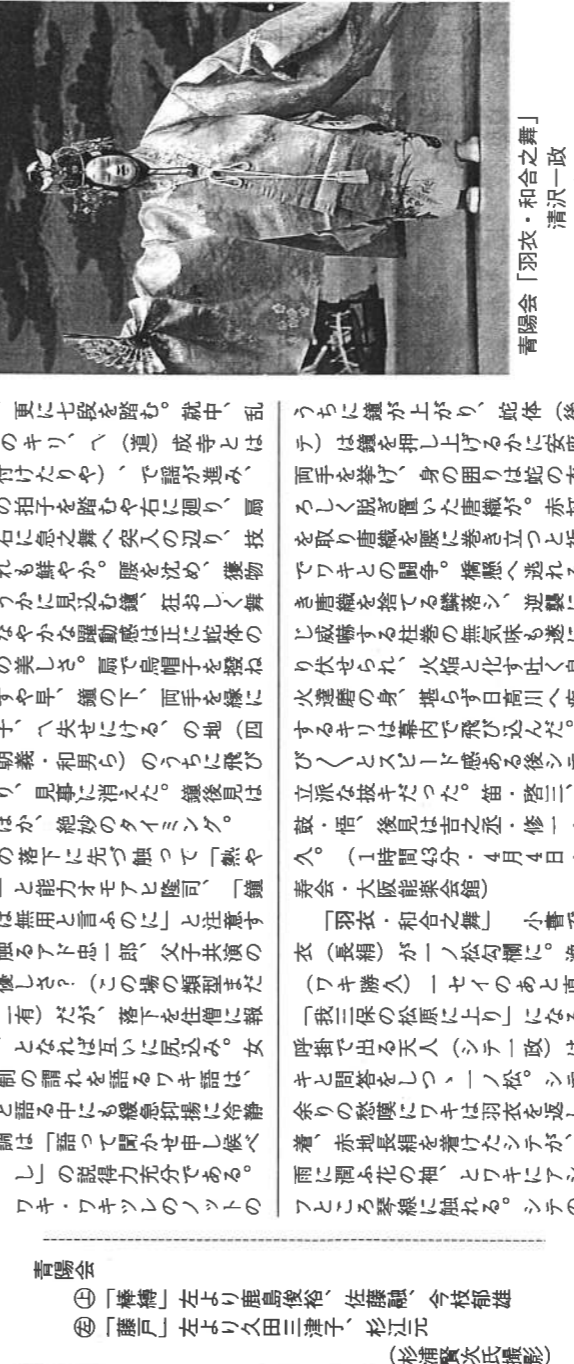
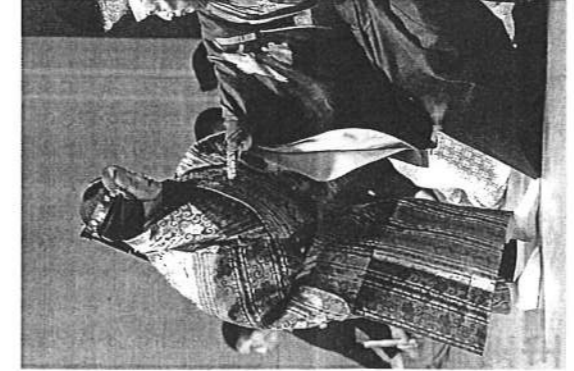
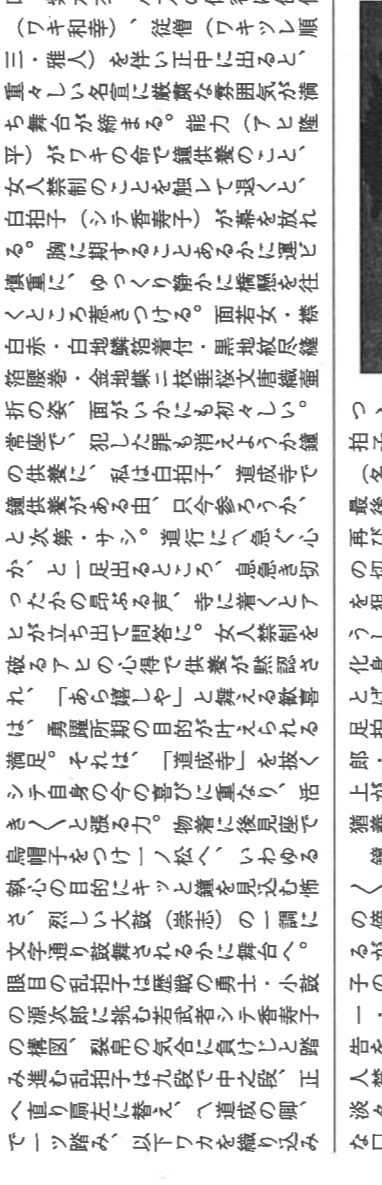
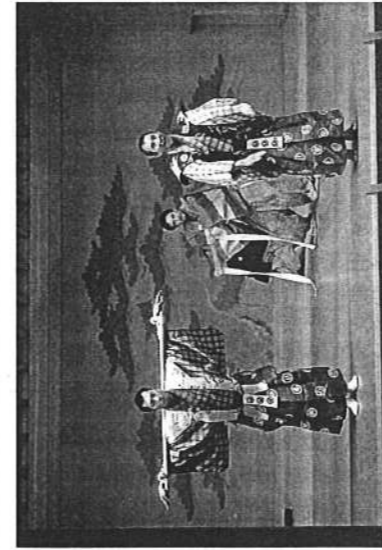
「運戒寺」梅若宮之丞門、立花香妻子の披き。先づ持ち出された鐘を能力(アと隆平・虫虎が手際よく一発で吊り上げ氣持ちがよい。金入角帽子・白綴着付・白大口・紫水衣・小刀の俵巻は住僧(ワキ和幸)、從僧(ワキツレ順三・雅人)を伴い正中に出ると、重々しい名目に厳肅な雰囲気満ち舞台が締まる。能力(アと隆平)がワキの命で鐘供養のこと、女人禁制のことを触して退くと、白拍子(シテ香妻子)が奉を放れる。胸に期することあるかに運ど慎重に、ゆつくり静かに構懸を往くところ惹きつける。面若女・襟白赤・白地鱗着付・黒地蚊尺縫・箔腰巻・金地蝶三枝桜文唐織盤折の姿、面がいかにも初々しい。常座で、犯した罪も消えようか鐘の供養がある由、只今参ろうか、と次第・サシ。道行にへ急ぐ心か、と足出るところ、息巻き切つたかの昂ぶる声、寺に着くとアトが立ち出て問答に。女人禁制を破るアとの心得で供養が黙認され、「あら贈しや」と舞える歓喜は、勇躍祈所の目的が叶えられる満足。それは、「運戒寺」を抜くシテ自身の今の喜びに重なり、活きくと語る力。物着に後見座で烏帽子をつけ一ノ松へ、いわゆる執心の目的にキツと鐘を見込む怖さ、烈しい大致(業志)の一調に文字通り鼓舞されるかに舞台へ。眼目の乱拍子は歴戦の勇士・小鼓の源次郎に挑む孝武者シテ香妻子の構図、裂帛の氣合に負けずと踏み進む乱拍子は九段で中之段、正へ直り廊下へ替え、へ運戒の御、で一ツ踏み、以下ワカを織り込み

つ、更に七段を踏む。就中、乱拍子のキリ、へ(運)成寺とは(名付けたりや)、で謡が進み、最後の拍子を踏むや右に廻り、廊下を再び右に急之舞へ突入の辺り、技の切れも鮮やか。腰を沈め、獲物を狙うかに見込む鐘、狂おしく舞うしなやかな躍動感に正に蛇体の化身の美しさ。馬で烏帽子を撥ねるとばすや早、鐘の下、両手を縁に足拍子、へ尖せにける、の地(四郎・朝義・和男ら)のうちに飛び上がり、見事に消えた。鐘後見は猶業はか、絶妙のタイミング。鐘の落下に先づ触つて「熱や〜」と能力オモアと隆同、「鐘の傍は無用と言ふのに」と注意するが触るアト忠一郎、父子共演の子の優しさ? (この場の類型まだ一・二有)だが、落下を住僧に報告を、となれば互いに尻込み。女人禁制の調れを語るワキ語は、淡々と語る中にも緩急抑揚に冷静な口調は「語つて聞かせ申し候べし」の説得力充分である。ワキ・ワキツレのノットの

うちに鐘が上がり、蛇体(後シテ)は鐘を押し上げるかに安座に両手を挙げ、身の回りは蛇の衣よりしく脱ぎ置いた唐織が。赤打杖を取り唐織を腰に巻き立つと祈りき唐織を捨てては鱗落シ、逆襲に駆し威嚇する住僧の無気味も遂に折り伏せられ、火焔と化す吐く息で火達磨の身、堪らず日高川へ疾駆するキリは幕内で飛び込んだ。まびくとスピード感ある後シテ、立派な被衣だった。笛・登三・大鼓・倍、後見は吉之丞・修一・礼寿会・大阪能楽会鐘

「羽衣・和合之舞」小書で羽衣(長絹)が一ノ松勾欄に。漁夫の優しさ? (この場の類型まだ一・二有)だが、落下を住僧に報告を、となれば互いに尻込み。女人禁制の調れを語るワキ語は、淡々と語る中にも緩急抑揚に冷静な口調は「語つて聞かせ申し候べし」の説得力充分である。ワキ・ワキツレのノットの

「前亭の訂正」
4頁1段7行目を↓と
4段8行目 弾↑段



青陽会
④「機縛」左より鹿島俊裕、佐藤誠、今枝郁雄
⑤「藤戸」左より久田三津子、杉江元 (杉浦賢次氏撮影)

「機縛」留守中に盗み酒をする太既冠者(シテ俊裕)と次郎冠者(小アト郁雄)、主(アト魁)は出掛けに簀を以てままと両人を縛り上げるが、そこは機軸の利く両人、弱すれば通ず、とばかりの悪知恵は盗み酒も鮮やか。両人上々の連携は、酒宴となつて不自由な身体で舞う小舞も中々。縛られたまま、の行動が味噌なのだが、和泉流山鹿派は喜面に縄を解いてしまうのが冗長。

「藤戸」戦功により新領地に入り、領民に訴事あれば聞こうと佐々木盛綱(ワキ元)、現われた老女(シテ三津子)が我が子殺害の恨みを申し立てれば、「ああ音高し何となく」といきり立つワキ。それに任まらずシテは、我が子の跡を弔い残された我を訪い慰めて、と切願し、初回(勘鷗・正邦・修一ら)の代弁に纏々母の心情を吐露すれば、ワキは、戦争に勝つため秘密の濃湯を恐れ刺殺した漁夫の母、とようやく分り、語るワキ語は慎重に言葉を選んで、といった印象で素晴らしいけれど、詳細を聞き、暮る悲しみはへ在り甲斐もあらはこそ、とクセ中、ワキにアシラフとハツと居立ち、右手で膝を打つやへ亡き子と同じ遣に、と立つてワキに肉迫、払い退けられ(写真)安座双シヨリのところもよかった。

後シテは面濃男の漁夫ノ霊、刺し通されるところ、へ狭間に流れか、つて、とワキへ詰め、するく退るところ、悲惨な情景を見た。氣合の籠つた好舞台。(1時間20分、4月10日・青陽会)

「前亭の訂正」
4頁1段7行目を↓と
4段8行目 弾↑段

NHK放送予定(平成22年6月~7月)

- 6月20日 NHK-FMラジオ(日曜日7:15~8:00) 「梅垣」②(宝生流) 近藤乾之助ほか
- 6月27日 NHK 番組「宝生流」香川清嗣ほか
- 7月4日 NHK 番組「寶多流」岡久広ほか
- 7月11日 NHK 番組「親世流」水上順ほか
- 7月18日 NHK 番組「春采」(宝生流) 宇高通ほか
- 7月25日 NHK 番組「楊貴妃」(宝生流) 宇高通ほか
- 7月25日 NHK 番組「再川巻」(親世流) 武田志保ほか
- 7月25日 NHK 番組「三輪・白式神楽」(親世流)
- 7月25日 NHK 番組「呼声」(大蔵流)

演能カレンダ―

名古屋能楽堂 (TEL 052-231-0088)

〔6月〕
20日(日) 宝生流全国学生能楽連盟自演会
名古屋宝生会 宝生定式能楽(第54期・第3回)(番組③面)
(無料)(有料)
(能・狂言演能関係)

〔7月〕
2日(金) 名古屋能楽同好会ゆかた年会祭
4日(日) 名古屋開府400年祭
8日(木) 9日(金) 名古屋能楽堂中学生能楽鑑賞会(番組①面)
10日(出) 第3回能の旅人(番組①面)(有料)
11日(出) 第3回能の狂言(有料)
17日(出) 第3回能の舞(有料)
19日(出) 第3回能の留(有料)
24日(出) 第3回能の宝(有料)
25日(出) 第3回能の宝(有料)
31日(出) 第3回能の陽(有料)

友 樂 能 友 友

発行 友 樂 能 友 友 社

名古屋千種区千種2丁目18-18
(郵便番号 464-0858)
電話 (052) 731-798 4
FAX (052) 733-283 7
振替口座 008000-6-363993
購読料 1年 1100円
郵送の場合 1年 1800円

記 念 第 30 回

大阪城新能

8月25日 能「翁」「安宅」

伝統ある「大阪城新能」は、こ
とし第30回記念として、八月二十
五日(水)、大阪城西の丸庭園で、
親世流親世清和宗家、梅若玄祥師
らが来演して開催される。
主催：読売新聞社 読売テレ
ビ、後援：大阪府、大阪市、大阪
府教委、関西経済連合会、大阪商
工会議所など、午後六時開演。
能組は、親世流能「翁」翁、親
世清和、三番叟・茂山七五三、
大蔵流狂言「寶生」翠・善竹忠一
郎、男・茂山忠三郎、妻・茂山長暢、
親世流能「安宅」弁慶・梅若玄
祥、義経・寺澤拓海、山伏・上田
拓司、上野雄三、梅若玄祥、生一知
敬、梅若善久、大西礼久、浦田保親、
武蔵義之、梅若猶義、高樫・樺王

能「長野」

「信州安曇野新能」は、
ことし第20回記念として、
八月二十一日(土)安曇野
市明科龍門湖公園で、人間国宝・
片山幽雪師、野村萬師らを迎え開
催される。
主催は、信州安曇野新能実行委
員会、共催：安曇野市、安曇野市
教育委員会。

能組は、能「翁」翁、青木道
亭、三番叟・野村万蔵、半能「養
老・水波之伝」シテ、青木道寛、
ワキ・宝生欣哉、狂言「極の酒」
太郎冠者・野村萬、舞獅子「西行
悠」シテ片山幽雪、半能「石橋」
大獅子・白獅子・片山清司、寂照
法師・宝生欣哉。
午後4時開演、午後5時演能解
説、午後8時30分終了予定。

入場券(全席自由席) 一般四五
〇〇円(前売パンフレット付四二
〇〇円)、高次生三五〇〇円。
チケット問い合わせ/キョウト
ーインフォメーション電話06・7
732・8888。問い合わせ/
読売新聞大阪本社企画事業部 TEL
06・63666・1848。

第9回 名駅新能

能「熊野」「放下僧」
7月25日 JR名駅タワーズガーデン

「第9回名古屋名駅新能」は、7
月25日(日)親世流宗家・親世清和
師が来演して、JR名古屋駅・タ

ワーズガーデン特設会場で開催さ
れる。午後6時半開場、午後7時
開演。
入場は無料。ただし整理券が必
要。整理券の応募方法は、往復は
がきに郵便番号、住所、氏名、年
令、電話番号、希望席数(1通2
名まで)を記入のうえ、次の宛先
へ送る。当選発表は発送をもって
替える。
宛先〒45310024 名
古屋市中村区名楽町4-16、大
黒寺内、名古屋名駅新能実行委員
会事務局(TEL052・482
・3580)

応募締切り/平成22年7月9日
(金)必着。
整理席は600席。自由席(立
見)600名。先着順。なおホ
ームページからも応募できる。
E-mail: /www.kanze.com
なお開催当日午後5時より会場
にて第2回全国学生能楽コンク
ールの結果発表及び表彰式、エキシ
ビジョン演技披露が行われる。
主催：財団法人親世文庫、名古
屋名駅新能実行委員会、後援：愛
知県、名古屋市、愛知県教育委員
会、名古屋学校教育委員会、愛知県
芸術文化協会など。

第3回 能の旅人公演

七月十日(土) 午後二時開演
名古屋能楽堂

一 調 歌 占
キリ
大鼓 山本博通
河村総一郎

チケット料金 前売指定 三〇〇〇円
自由席一般 一〇〇〇円
学生 一〇〇〇円
(当日券は五〇〇円増)

取扱い所 名古屋能楽堂 (TEL052・231・0088)
プレイガイド(宝生) 92・松坂屋ほか
ナナイアパルク7階PPG/TEL052・222・222
チケットぴあTEL0570・02・99999
(Pコード44・3270・02・99999) 2015

問い合わせは、安曇野市教育委
員会文化課文化振興係、TEL0
263・81・3111。
なお宿泊セット鑑賞プランを取
り扱っている。新能鑑賞券、夕食
弁当、宿泊地、会場送迎、宿泊
(1泊朝食付、2名1室以上)の
セット商品。料金1万2000円
〜1万7000円。

能 郡 野 (親世流)

シテ 舞生 梅田 道宏
ワキ 物置 飯高 隆彦
太郎冠者 井上 清浩
新巻 井上 清浩
おのゝ 徳田 宗久
トモキツレ 徳田 宗久

笛 竹市 幸親
大鼓 後藤 嘉津幸
小鼓 徳田 宗久

三ツ本 佐藤 友彦
シテ大 佐藤 友彦
ワキ 井上 清浩

能 郡 野 (親世流)

シテ 舞生 梅田 道宏
ワキ 物置 飯高 隆彦
太郎冠者 井上 清浩
新巻 井上 清浩

笛 竹市 幸親
大鼓 後藤 嘉津幸
小鼓 徳田 宗久

演 能 案 内

名古屋開府四〇〇年祭 パートナ―シップ事業

名古屋能楽堂七月定例公演

― 市民能楽セミナー ―

七月四日(日) 午後二時開演
名古屋能楽堂

解説 「ワキの世界」 飯富 雅介

狂言 鼻取相撲
(和泉流) 佐藤 友彦

能 郡 野 (親世流)

シテ 舞生 梅田 道宏
ワキ 物置 飯高 隆彦
太郎冠者 井上 清浩
新巻 井上 清浩

笛 竹市 幸親
大鼓 後藤 嘉津幸
小鼓 徳田 宗久

狂言 三本柱 奏者 井上 清浩
大鼓 徳田 宗久
小鼓 徳田 宗久

狂言 朝比奈 朝比奈 野村 茂 関 野村 万蔵
大鼓 徳田 宗久
小鼓 徳田 宗久

狂言 鏡 野村 万作 次郎 野村 万作
大鼓 徳田 宗久
小鼓 徳田 宗久

狂言 千切木 本 佐藤 友彦
大鼓 徳田 宗久
小鼓 徳田 宗久

狂言 三本柱 奏者 井上 清浩
大鼓 徳田 宗久
小鼓 徳田 宗久

狂言 鼻取相撲 (和泉流) 佐藤 友彦
大鼓 徳田 宗久
小鼓 徳田 宗久

能 葵 上 武島 廉之
観世 喜正
飯富 雅介 河村 真之介 加藤 洋輝
橋本 幸 後藤 嘉津幸 竹市 学
間 井上 清浩

チケット 指定席 五〇〇〇円、自由席四〇〇〇円
学生席 二〇〇〇円(自由席のみ)

取扱い チケットぴあ TEL0570・02・99999
(Pコード44・5550)
のこの事務所(TEL03・3266・1020)
(受付月/金)
インターネットTEL:/www.kanze.com
(おんげのホームページ)

主催 (有)KNOW・NOH
TEL03・32666・1020

狂言共同社創立百二十年記念

第十一回 御酒落 名匠狂言会

七月十一日(日) 午後一時三十分開演
名古屋能楽堂

素囃子 獅子 大鼓 河村 総一郎 本鼓 鬼頭 義命
小鼓 後藤 嘉津幸 笛 大野 誠

狂言 三本柱 奏者 井上 清浩 大鼓 徳田 宗久
三ツ本 井上 清浩 今枝 清雄
後見 大野 弘之

狂言 朝比奈 朝比奈 野村 茂 関 野村 万蔵
大鼓 徳田 宗久
小鼓 徳田 宗久

狂言 鏡 野村 万作 次郎 野村 万作
大鼓 徳田 宗久
小鼓 徳田 宗久

狂言 千切木 本 佐藤 友彦
大鼓 徳田 宗久
小鼓 徳田 宗久

狂言 三本柱 奏者 井上 清浩
大鼓 徳田 宗久
小鼓 徳田 宗久

第3回 まいまい狂言会

七月十七日(土)

午前十時半開演

名古屋能楽堂

狂言 井杭

舞臺 野村小三郎
阿茶 野口信隆
井杭 野村信朗

狂言ロボット初舞台

「伝統芸能と最新ロボット技術の夢の競演」

狂言であ・そ・ぼ!!

親子で楽しむワークショップ

(上演 十二時頃)

料金は大人二五〇〇円、小人一〇〇〇円
(全席指定)

主催 まいまい狂言会

野村小三郎

お問い合わせ 080-1618-9713

当地の各流儀・流派・結社・社中の消息を辿る

②

竹尾 邦太郎

六、「大衆普及能」

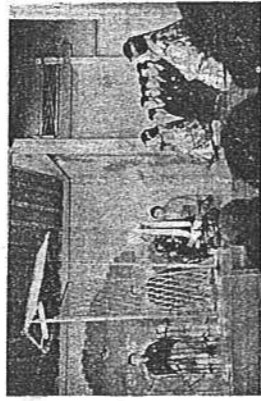
①

大衆普及能は昭和三年(一九五八)六月一七日、都心の東区久屋町八丁目八番地(現在の東区東桜一丁目二番地)に開演した愛知県文化会館講堂で昭和三五年八月二三日、初回が行われる。能組「あとがき」に「文化講堂は冷房が完備しておりますので非常にすずしく暑さ知らずです」とあるのも、昭和三〇年一月一六日に竣工した熱田神宮能楽殿には当時、空調設備はなく昭和四五年七月まで待たねばならなかった。愛知県文化会館は県立美術館・図書館・講堂の三位一体の建物、講堂は文化講堂の名で親しまれてきた。舞台は間口23・2米、奥行き12米、天上高21米、座席はワン・スロープ式で一四三八席、補助席二五二席、音楽・舞踊・演劇・

能・映画・講演会など多目的に使用される文化の一大殿堂(殿堂という言葉、近年は使われなくなりました)。能・狂言に使用されるのは今回が初めてではなく、柿落シの日に「三番叟・橋掛ノ舞」九世三宅藤九郎、仕舞「船弁慶」一七世梅若六郎がある。常の舞台では翌一八・一九の両日、能楽協会名古屋支部による開館記念演、二九日には第一回朝日五流能、八月には能楽協会名古屋支部と中部能楽師会の主催で名城献金能、一月には主催オリエンタル中村で先代梅若実五〇年祭記念能がある。年が替わり昭和三四年以降も第四回朝日五流能(第一〇回からは中日劇場)、第二回朝日五流能(二の回で廃止)、能楽協会名古屋支部主催の皇太子陛下御成婚記念能

など五流での大能のときなどに使用されてきた。初回に当たり能楽協会名古屋支部・支部長の田鍋惣太郎は「普及能を備すについて」として「能は年とともに隆盛になつて参りました。これは最近一般に古典ものを見直すところ傾向の現れかと思われ、これまでも折にふれ普及能を催して参りましたが、今回これが後援会の発足となつて、みなさまに平易に判りやすく見ていた

だくよう時に番組を組みました。何卒御誘い合わせられ御観賞下さい。」と述べる。能組は舞囃子「養老」観世喜之、能「小管」内藤泰二・戸田和子(小管局)浜村園子(侍女)西村弘敬・佐藤秀雄(女主)、舞囃子「羽衣」和谷亀二郎、能「夜寛」柴田初太郎・久田秀雄(廉頭)加藤丈太郎(成経)高安滋郎、井上松次郎(船頭)、独吟「鶴之段」前田昌広、狂言「鼻山伏」河村丘造、井上松



能 (小)



能 (中)



能 (大)

能

大衆普及能

八月十三日午後五時
於 県文化講堂

主催 能楽協会名古屋支部
普及能後援会
朝日新聞社

初回の番組(三ツ折の表紙部分)

狂言也留舞会

七月十九日(月・海の日)

午前十時三十分開場

名古屋能楽堂

【第一部】

午前十時開演

(初月会) 鬼瓦

大名 林 恭子 太郎冠者 宇佐美昭子

竹生島参

太郎冠者 加藤志津子 主 奥津健太郎

(初月会) 鏡屑

太郎冠者 坂倉 純子 主 宇佐美昭子
次郎冠者 高村 幸子

狂言小謡 貝尽し 平山みよ子

痺

太郎冠者 堀場 翌吾 主 野村 信朗
(小季一年生)

因幡堂

男 白石 敦子 妻 奥津健太郎

口真似

太郎冠者 小川 義範 主 野村小三郎
(高役二年生) 何 米 伊藤 泰

(上演予定 午後二時頃)

【第二部】

午後二時開演

入間川

大名 吉村由紀子 太郎冠者 松田 高義
八郎の假累 杉浦 勝裕

隠狸

太郎冠者 伴野 俊彦 主 野口 隆行

柿山伏

山伏 吉本 有孝 如 主 田端 泰衛
(中季三年生) (高役一年生)

鐘の音

太郎冠者 安保 亨子 主 藤波 徹

仏師

スッパ 磯村 美和 田舎者 野口 隆行

蝸牛

山伏 伊達 義子 主 野村小三郎
太郎冠者 伊達 義也
(中季二年生)

(上演予定 午後四時三十分頃)

【御来場歓迎】(入場無料)

(主催)也留舞会

(参加)野村小三郎

(指導)野野村事務所

(連絡先)野野村事務所

名古屋市中区平和一丁目二〇番四号

TEL (〇五二) 三五〇一七九七二

FAX (〇五二) 三五〇一七九七二

次郎(弟)佐藤秀雄(兄)、能「船弁慶」大塚二二・天野治美(子方)西村欽也・立石澄雄・高安守彦、井上礼之介(船頭)、シ舞囃子「玄象」観世喜之、仕舞子方五流が揃う。第二回は昭和三十六年八月五日、能楽協会名古屋支部結成二五周年を記念する。能組は舞囃子「加茂」辰巳孝、能「耶耶」大塚二二・西村欽也・立石澄雄、佐藤秀雄、独吟「鐘之段」前田昌広、仕舞三番「鉄輪」長田鏡「唐船」加藤

藤良久「小袖當我」小島秀雄、観世武雄、能「班女」内藤泰二・西村弘敬・西村欽也、佐藤卯三郎、舞囃子「玄象」観世喜之、仕舞「玉之段」宝生九郎、狂言「瓜笠人」井上松次郎・河村丘造、仕舞二番「阿漕」本田秀男「土蜘蛛」広田彪二、能「紅葉狩」柴田初太郎・久田秀雄、佐藤太後・高安滋郎・守彦、勝久・井上松次郎、佐藤秀雄。第三回は昭和三十七年八月二五日、能「鶴亀」内藤泰二・田鍋明宏・内藤伸・西村弘敬、欽也・井上祐一、舞囃子「胡蝶」山本博之、仕舞四番「西王母」加藤良久「鶴之段」辰巳孝、「美盛」宝生九郎「隅田川」豊嶋弥左衛門、舞囃子「山姥」桜間龍馬、能「松風」大塚二二・豊嶋三千春・高安滋郎、狂言「権様」和泉保之、井上松次郎・河村丘造、舞囃子「船弁慶」和島寛太郎、能「夜討曾我」柴田辰武・久田秀雄・河村延二・佐藤太後・塚本秀雄・殿島修二・太田重次郎・丹下三義・佐藤卯三郎・井上礼之助。東京から宝生宗家九郎、和泉宗家保之、京阪から豊嶋弥左衛門・三千春、山本博之が来演。第四回は昭和三十八年八月一四

③面へつづく

第九回 名古屋名駅新能

七月二十五日(日) 午後六時開演

JR名古屋・タワーズガーデン
特設会場

(観世流) 舞囃子 邯鄲

久田三津子 河村真之介 加藤 浩輝
榎 渉 船戸 昭弘 鹿取 希世

地謡 松山 幸親 上田 拓司
藤 各 幸彌 山田 義高

(観世流) 能 熊野

上田 公威 観世 清和 河村 総一郎 藤田 六郎兵衛
村雨留 錦田 善博 久田 舜一郎

後見

坂口 貴信 地謡 大月 倉行 上田 貴拓司
梅田 邦久 古橋 正邦 武田 邦弘

(和泉流) 狂言 文山賊

佐藤 友彦 佐藤 融

後見 今枝 郁雄

(観世流) 能 放下借

久田勤吉郎 船戸 昭弘 竹市 孝
高安 勝久 井上 靖浩

後見

観世 義高 坂口 貴信 藤谷 音彌
芳伸 梅田 武志 上田 武田 貴弘
梅田 義宏 古橋 正邦

主催 社団法人 観世文庫
名古屋名駅新能実行委員会

【要整理券】
申込み方法①面参照
自由席は当日先着順
(600名)

能楽資料センター公開講座 武威野大学

武威野大学能楽資料センターでは、平成22年度公開講座として、次の日程でセミナーを開催する。聴講無料。

▽六月十七日(木)「披くといふこと」能の大曲、秘曲を演じる意味」武威野大学客員教授・羽田飛氏

▽七月一日(木)「シテ方喜多流・大島政元氏に聞く」聞き手・武威野大学教授・リチャード・

エマート氏
▽九月三十日(木)「太鼓方観世流・観世元伯氏に聞く」聞き手・武威野大学客員教授・三浦裕子氏
▽十月七日(木)「シテ方観世流・関根梓六氏に聞く」聞き手・能楽研究家・西野圭氏
時間 午前10時40分~12時10分
会場 武威野大学6号館雷頂講堂(東京都西東京市新町1-1-20)
問い合わせ 武威野大学能楽資料センター 電話0422-526618

第六回は昭和四〇年八月二日、能組は舞雛子「養老」桜間龍馬、能「巴」大塚二、西村欽也

第五回は昭和二十九年八月三日、午前と午後の二部制。第一部は能「経改」辰巳孝、高安滋郎、狂言「雷」井上礼之助、佐藤卯三郎、能「狸々」柴田初太郎、高安守彦。第二部は舞雛子「養老」和島富太郎、能「小倉」大塚二、片岡淳子、豊嶋三千春、西村弘敬、山本光二郎、仕舞二番「羽衣」福井淳子「弱法師」柴田初太郎、狂言「蚊相撲」井上松次郎、井上祐一、佐藤秀雄、舞雛子「忠度」観世喜之、能「養絹」佐藤太後、太田重次郎、西村欽也、井上礼之助、仕舞二番「藤戸」今井健三郎「殺生石」辰巳孝、舞雛子「桜上」桜間龍馬、能「船弁慶」内藤泰二、田鍋明宏(子方)高安滋郎、守彦、佐藤卯三郎。

第四回は昭和四二年八月二日、能組は能「竹生鳥」久田秀雄(前)柴田収武(後)加藤丈太郎、西村欽也、立石澄雄、高安守彦、佐藤卯三郎、仕舞「小曲曾我」熊澤恵美子、有賀滋子、舞雛子「花月」和島富太郎、仕舞「山姥」柴田初太郎、能「半蔵」大塚二、西村弘敬、野村又三郎、舞雛子「船弁慶」観世喜之、仕舞「養絹」辰巳孝、狂言「武悪」井上松次郎、佐藤秀雄、井上礼之助(武悪)、舞雛子「融」桜間龍馬、能「土鍋」内藤泰二、戸田秀雄(頼光)村瀬淳子(胡蝶)鬼頭嘉男、高安滋郎、守彦、勝久、井上祐一。

第三回は昭和四二年八月二日、能組は能「大衆普及能」は「加茂」観世喜之、能「田村」河村純二、殿島修二、西村欽也、仕舞四番「吉野天人」有賀滋子「玉之段」辰巳孝「藤戸」宝生九郎「母之段」柴田初太郎、舞雛子「安宅」和島富太郎、能「羽衣」内藤泰二、高安滋郎、狂言「鷹山伏」井上松次郎、佐藤秀雄、井上礼之助、仕舞「鵜之段」豊嶋弥左衛門、舞雛子「熊坂」桜間龍馬、能「養上」大塚二、片岡淳子、高安滋郎、守彦、井上祐一。

「大衆普及能」初回の能組の「あとがき」に「仮説とは申しながら実に立派な能舞台を組み立て

第七回は昭和四二年八月二日、能組は能「竹生鳥」久田秀雄(前)柴田収武(後)加藤丈太郎、西村欽也、立石澄雄、高安守彦、佐藤卯三郎、仕舞「小曲曾我」熊澤恵美子、有賀滋子、舞雛子「花月」和島富太郎、仕舞「山姥」柴田初太郎、能「半蔵」大塚二、西村弘敬、野村又三郎、舞雛子「船弁慶」観世喜之、仕舞「養絹」辰巳孝、狂言「武悪」井上松次郎、佐藤秀雄、井上礼之助(武悪)、舞雛子「融」桜間龍馬、能「土鍋」内藤泰二、戸田秀雄(頼光)村瀬淳子(胡蝶)鬼頭嘉男、高安滋郎、守彦、勝久、井上祐一。

第八回は昭和四二年九月三日、能組は能「俊寛」内藤泰二、戸田秀雄、吉田俊彦、高安滋郎、佐藤卯三郎、連吟「三井寺」芥川秀子、坂田淳子、舞雛子「葛城」大和道子、舞雛子「唐船」和島富太郎、仕舞「遊行柳」柴田初太郎、能「杜若」恋之舞」梅田邦久、西村欽也、仕舞「春日龍神」辰巳孝、舞雛子「班女」観世武雄、狂言「三人片輪」和泉保之、野村又三郎、井上松次郎、井上礼之助、舞雛子「船弁慶」大塚二(写真)、能「小鍛冶」本田光洋、金春欣三、高安滋郎、勝久、佐藤秀雄。

第九回は昭和四二年八月二日、能組は能「大衆普及能」は「加茂」観世喜之、能「田村」河村純二、殿島修二、西村欽也、仕舞四番「吉野天人」有賀滋子「玉之段」辰巳孝「藤戸」宝生九郎「母之段」柴田初太郎、舞雛子「安宅」和島富太郎、能「羽衣」内藤泰二、高安滋郎、狂言「鷹山伏」井上松次郎、佐藤秀雄、井上礼之助、仕舞「鵜之段」豊嶋弥左衛門、舞雛子「熊坂」桜間龍馬、能「養上」大塚二、片岡淳子、高安滋郎、守彦、井上祐一。



第8回大衆能・舞雛子「船弁慶」(高辻幸一氏撮影)



名古屋観世会「田村・替装束」武田邦弘



観世会「田村」飯富雅介(杉浦賢次氏撮影)

「田村・替装束」旅僧(ワキ雅介)、桜花爛漫の都清水寺に到り、寺内の童子(シテ邦弘、美は田村鷹ノ巻)に寺の来歴や辺りの名所を訊ねる。兩人ともに春宵月下の桜花を舞奏するところ、旅僧は白く有りげとみて童子の名を問えば、仄めかすだけで堂に消える。前場、シテは小僧の喝食姿でなく春の童子姿。寺内の桜を大いに自慢するシテの一セイ・サシ。下歌・上歌を有き、直ぐワキとの問答から乞われて清水寺の来歴を語るシテ語。寺の有難さも得意気に爽やかな弁舌を初回(邦久・正邦一政ら)が受け、へ大悲の影を

られます」とあるが、写真はその舞台。鏡板の老松は当時、愛知県文化会館の副館長であった太田三郎画伯の選定で、地元の画家・小寺礼三画伯の揮毫によるという。

シテ大塚二、囃子方は大森英三郎・福井良久・吉田定男、池田茂、写っていないが地頭は名古屋の金剛流の重鎮山田仁三郎。

以下次号

◆晩春から初夏の舞台◆ 「名古屋観世会定例公演能」第32回 邦謡会能」と「豊田市能楽堂五月能」 竹尾邦太郎



観世会「附子」(杉浦賢次氏撮影)

は、へ天も花に酔へりや、で頭取らずに胸をカザシ殿む四ツ拍子に法悦も。地との掛合はロンキ、シテの名を問ひ、辞去する先が氣掛かりなワキに、へ我が行く方を見よや、と居立ってアシラとへ地主権現の御前より、で立つと地の裡にへ松へ、へ月のむら戸を、扇で振して横に開ける型、静かに中入する。清水寺門前ノ者(アと健太郎)がワキの求めに清水寺創建の田村鷹の事績を爽やかに語り、供養を勤めて退くと、後場は鬼神征伐の武勇譚。後シテは田村鷹、小書で面大天神・黒頭・唐冠・厚板着付・白地金襴妻三雲文半切・白地金襴檀三輪至文袷袢衣(面肩上ダ)、剣を負い唐団扇を手につかつかと出る雄姿には坂上田村鷹を名乗る大將軍の貫禄。大小前、床几に掛かるとクセ中、へ石山寺を、右ウケ合掌に観音の加護を祈念、へ勢多の長橋、三ツ拍子踏み鳴らし、へ胸も足並や、と腰を浮かせば人馬一体に奮、起つ心。小書でカケリを省き、キリの鬼神と闘争の場。あれを見よとへ(味方の軍兵の)旗を、左手指して促し(写真)、へ(千手観音の)光を放つて虚空に飛行し、と踏む四ツ拍子は観音の加護を得た歓喜、へ一度放せば、と床几を立つと、千の矢先降り注ぐを見上げ、キッと面切れるも鮮やかだった。(1時間16分)「附子」附子とは、その方から吹く風に当たつても滅却すると

して舞わんとすシテは月の夜に私も眞の姿を、と、謡・詞に心氣描写の巧さ存分に聞かせる。中人地(志房・邦弘・勲鶴ら)へ雲に(心をか

似て舞いますよ、の無手勝流の構えにも思え、ツレへの強烈な皮肉が。地のうちに二ノ松へ走ると後

冠者(シテ高巻)と次郎冠者(小アド小三郎)に剣を刺して外出する主(アド健太郎)だが、そんな猛毒を主はどう扱つてをられるのが不審して善直には聞かないのが阿人。禁じられ、は破りたいのが人の常、もとより好奇心のかたまりの阿人、風が吹けば吹き返せばこの少々顔々しく、附子が妙辯と判つて食い尽くした奉け句、主には死を以て償おうと死ぬ理由つけに主の秘蔵の掛け軸を破り、天目茶碗を割るところなどは小面憎い横着。主を侮り、憚りの氣配無なのが如何にもドライ、臆し畏れる氣も欲しいが。(23分)「山姥・雪月花之舞」山姥の山廻りを曲舞に創り都て百万山姥の盛名を馳せる遊女百万(ツレ大志)、従者(ワキ勝久)供人(ワキツル元・正樹)と連れ立ちら母の十三回忌供養に普光寺へ向かう道すがら、難路を里人(アと隆行)の先導で進むうち天変に遭い、日く有りげな老女(シテ玄迷)の庵に宿を借りることに。この老女こそ実は本家本元の山姥、当世ならさしずめ「山姥入廻り」の著作権を遊女百万に侵害されての怒り、へ恨み申しに来たりたり、とツレにアシラフとところ、せつと冷たい喩味。更に、此の濟目で名を得ているのならへわらはが身をも吊ひ、と要求するの切実を晴らされよ、とシテ。怖れをな

赤鶴作「山姥」自然の中に生きた人間といいますが、山の気そのものの呼吸すら感じさせるこの面

「歌行燈」成立一〇〇年記念 「鏡花と能楽」 泉鏡花記念館・金沢 能楽美術館共同企画展



名古屋観世会「山姥・雪月花之舞」梅若玄祥(杉浦賢次氏撮影)

立一〇〇年を記念して「鏡花と能楽」のテーマで、共同企画展を6月4日から今秋9月26日(日)まで2会場で開催している。第1会場/泉鏡花記念館(金沢市下新町2-13、電話076・222・1025) 第2会場/金沢能楽美術館(金沢市広坂1-1-25、電話076・220・2790) 立前期展「歌行燈」自筆原稿、真龍院八十の賀の囃子番組(泉鏡花記念館)舞台展示・能「海人」

(金沢能楽美術館) ☆後期展「照葉狂言」自筆原稿(泉鏡花記念館)、中田万三郎(徳之助舞)坂崎六之佐冠書簡(泉鏡花記念館)、松本長演能スケッチ(金沢能楽美術館) 入館料 いずれも一般三〇〇円、65歳以上二〇〇円 イベント①仕舞と対談「鏡花と能楽」名作「歌行燈」を中心に、仕舞「玉之段」舞、松田芳子氏(シテ方至生流)謡、渡辺茂人氏(シテ方至生流)、会場、金沢能楽美術館、7月24日(土)午後2時より ②公開インタビュー「渡辺登之助氏が語る近代金沢能楽界のあゆみ」。出演、渡辺登之助氏(シテ方至生流)、8月7日(土)午後2時から。会場金沢能楽美術館。申込先金沢能楽美術館(TEL076・220・2790)



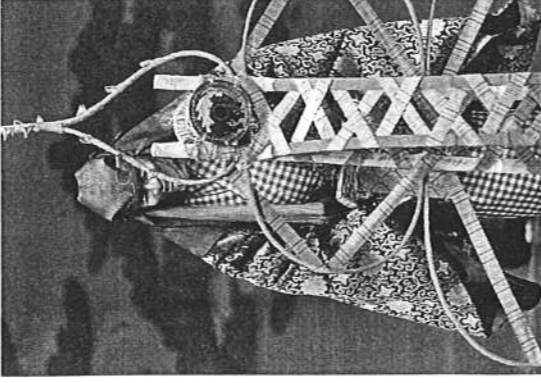
邦誼会「藤戸・蹠跼之伝」
④より片山幽雪、高安勝久
(杉浦賢次氏撮影)

「藤戸・蹠跼之伝」敵の意表をつくため、漁夫から藤戸の浅瀬を教えられるも、機密の洩漏を恐れ刺殺した盛綱(ワキ勝久)、先陣の功で押領の新任地で訴訟の事ある者は出頭せよの触れを出す。現れた孝女(前シテ幽雪)は漁夫の母、殺された母を思う母の心情を綿々と訴える初回(邦久・邦弘・正邦ら)の真切は、へせめては甲はせ給へや、とワキを直視、へ跡甲はせ給へや、とシテ返す傷心のシテに、流石のワキもほだされて語り出す殺害の情況。ワキ語は波々とした中にも「盛綱きと思ふやう」以下には後ろめたさの口吻も。へあの辺ぞと夕波の、と立つシテは目付柱の方をじつと見詰め、へこはそも何の報いぞ、で膝をつきシテのにも仰え。クセは、へ亡き子と同じ道に、と右膝を打ち、激憤に驀られへ人目も知らず伏し転び、ワキ

④面よりつき)で、四季の風景をめながら山廻りをする……梅若ではこの面を使いますが、この面を得て梅若の「山姥」は決まったともいえません。私もこの面を使って演じてみましたが、面だけが浮き上がったような感じで、今一つでした。まだまたこの面の可能性は秘められているかと思しますので、それだけに使い甲斐のある面ともいえません。

に迫るところ、へ我が子返させ給へや、と両手を差し出し(写真、ワキに弘われて退り安座の双シテリ)なるどころ、気力充実の追真。こで、藤戸福王流はシテを感謝する言葉が入るが、高安流は既にワキ語にあり、直ぐ「いかは誰かある」と下人(アトと馳)を呼び出してアトのシテ送り込みになる。あとアトは、へ一松で此の経緯を立シヤベリ、戻つてワキとの問答から死者を管弦講で申う旨を触して後場。

孤愁を湛えて古色蒼然、此の面を掛けるのを期待したが、面は意表を衝くかに、書て「殺生石」の後シテで掛けられた新面の玉藻前で吃驚した。舞台へ入るとシテ・ツレ掛合はへ一声の山鳥、と打合せするシテに促されるように、ツレは地次第よし足引の山姥が、で立つと扇を開きシテと相舞になるが(ここが珍しかった)、舞の一段落を左右(サイウ)の型みせたと、へ山廻りするを苦しみ、と扇を畳みながらあつさり脱落して床几に掛ければ、シテはツレを尻目(アト)に鹿背杖を扇に替える



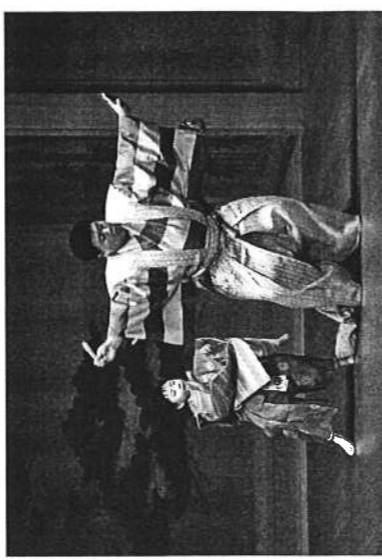
邦誼会「天鼓・弄鼓之舞」
梅田嘉安
(杉浦賢次氏撮影)



邦誼会「天鼓・弄鼓之舞」
梅田邦久
(杉浦賢次氏撮影)

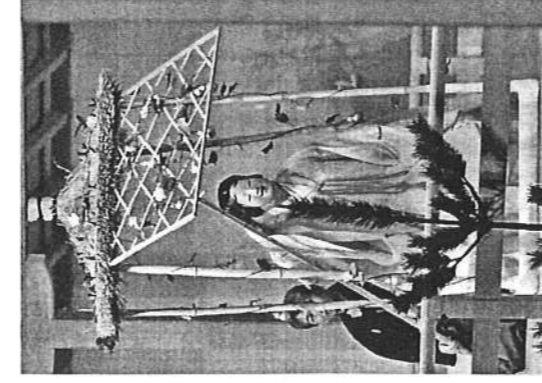
み、刀に振した杖を左手に握つて運ぶつ刺し通し刺し通してスミまで出て来るのが如何にも不意討の感で面白かった。杖を右手に替へ、へ十尋の底に、沈む心で安座、へ折衝引く妙に、と立ちイロエにへ一松先へ。地のへ引かれ行く波の、で小廻りからへ浮きぬ沈みぬ、と岩の狭間に流れか、る屍の姿を、膝ついて立つと杖を表勾欄に当て、擦つてシテ柱まで

り、と腰を浮かせ左足一ツ踏み履逆手に直下を指スのも鮮やかに、へ休む重荷に、と權夫に方を置ず象徴的な型も揺るぎない美しさ(写真)。キリはへ塵積つて山姥となれる、と鹿背杖を両手で差し上げる型の大きさ、へ峯に翔り、と一ノ松へ抜け、勾欄に左足掛けを足早らずや地のうちに走り込み、ツレが常座へ立つて行きシテを見送る心に右ウケ、大鼓の残り留。変わった型が沢山あり、技の切れは目まぐるしい程、難然たる重みの山姥ではなく、面に似合わない妖艶な山の妖精の軽快な趣だった。囃子は六郎兵衛・草津幸・貞之介・洋輝、主後見邦久。(1時間47分・4月11日・名古屋観世会定期公演)



邦誼会「伊呂波」
④より井上蒼大、井上靖浩
(杉浦賢次氏撮影)

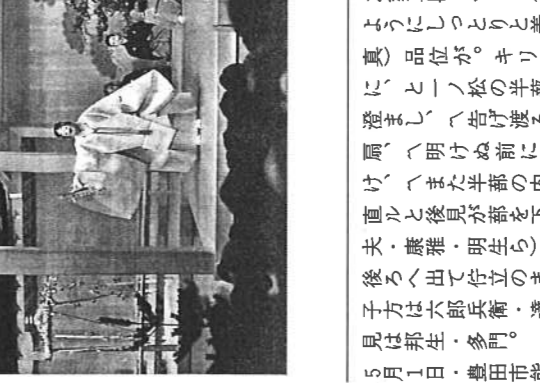
後ろ向きに行き、背中をぶつけて下居のところに象徴的にさせる。キリの、御法を得て成佛するところも説得力があり気持ちも籠つていた。



豊田市能楽堂5月能
「半部・立花」友枝昭世
(杉浦賢次氏撮影)

小書「蹠跼之伝」さも々頷く意。前シテがワキに迫る駆けつけつた部分の強調。(1時間24分)
「伊呂波」 寺子屋へ上げる前に手習いを、の親心は就学前に字を習わせようとする今の親も同じ。いろは四十八字を子(シテ蒼大)に教える親(アト靖浩)、先づ読みを「いろはへと」から「あひもせず京」まで、一氣に口授すれば、早すぎるので二字づつに、と子。よし、と親が「い」と言えは「どうし」と返す子。「い」は 蘭(い)、聖の中の腕を灯芯として油に浸し、往時はずら灯明とした。別名灯心草。「ろ」は「かい」と返すが即ち權(かい)、權と並称して舟を漕ぐ道具。幼い頭に入る知識は特別と驚く父も、一字づつでは堪があらず、二字にして「ちり」と言えは、書き集め火にくくよう、と子は慶のつも

「天鼓・弄鼓之舞」 母が懐胎中、夢に天から鼓が降るのを見て天鼓と名付けられた子、のちに本物の鼓が降り私育するが、妙音だならないのを知り、帝は強権発動して鼓を奪い天鼓を呂水に沈める。しかし、余人が打つても鼓が鳴らないのは、きつと鼓が元の持ち主との別れを嘆いているからであらう、と帝、勅使(ワキ雅夫)は名宣から此のいきさつを胸に難り取めるように語り、宣旨を受けて天鼓の父・王伯(シテ邦久)の許へ急ぐ。冒頭のワキ語がよく舞台を引き締める。小書で、子を先立



「半部・立花」 僧が日蓮世話になる物と云えは佛前に供える花、それを供養するのが当今も巷間行なわれる針供養などと同じ立花供養の佛事。当然舞台が進行中にあるべきと思うが、今回は能が始まる前、休憩時間中に立花は既に正先に据えられていた。花屋が来て置いていたものでもないだろう。一般に小書付で無くても「羽衣」や「葵上」など、囃子方と地謡が座着いた緊張のなかを、思わず退つて撥取り落して安座双シテのところが、巧者ぶりを遺憾なく發揮する。中入は勅使ノ従者(アト友

彦)の送り込み。二ノ松まで送り、戻つてシテの呼出の仔細を立シヤベリ、ワキと問答で天鼓を管弦講で申う旨を触して後場。
申いを喜び水上に現われる天鼓ノ霊(後シテ嘉安)、ワキの勧めにへ天降ります、で唐団扇を握に替へ「楽」を舞う。途中二ノ松へ掛け、袖披キ羯鼓台を戻込むと、鼓を弄ばんとばかり勇躍舞台へ戻ると文字通り「弄鼓」、喜々として鼓に戯れ舞う趣は、鼓を打つて頭を振り(所謂イヤ〜)、勢いはスミから羯鼓台の後ろは正面の框を廻るなど奔放。活き活き舞上げ、キリは水に戯れるところもバシバシヤでなく大きくザザザの感じ。トメは常座で袖披キ下居、立つと袖返した。少々粗いのかも知れないが元氣一杯、若々しく爽やかだった。囃子方は学・昭弘・貞之介・洋輝、主後見伸吾。(1時間16分・4月18日・第32回邦誼会能)

へ草の半部押し上げて、と現われる白地長袖・黄色大口の姿(写真)は端整な小面と相俵つて優美そのもの。クセはへこの花折りて参らする、と扇面に花を載せた心に両手で捧げ持ち、へ源氏つづくく御覽じて、と扇面を凝視するところ趣深い。へ契りの程の嬉しさ、では扇を胸に抱きスミで小廻りするが喜びにスキップを踏むように思え、扇の扱いが繊細。序之舞三段、沁々と往時を便ぶかのようにしつとりと美しく舞い(写真)品位が。キリはへ鐘も頻りに、と一ノ松の半部屋の方に耳を澄まし、へ告げ渡る真裏、と霊ノ扇へ、へ明けぬ前にと、橋懸へ抜け、へまた半部の内にと、入つて直ルと後見が扇を下ろし、地(能夫・藤雅・明生ら)一杯を聞き、後ろへ出て佇立のま、トメた。囃子方は六郎兵衛・達志・崇志、後見は邦生・多門。(1時間18分・5月1日・豊田市能楽堂5月能)

持ち出された立花に向かい「敬つて申す立花供養のこと」と申しても何か空々しく思えてしまう。当日、配布の詞書には(僧は能力に花の供養をするように命ずる)と括弧付の記載。小書「立花」の場合と分かるが、何故、舞台が整わない前に立花が出されたのか、理解に苦しむ。小書の指示通り、ワキがアトに立花供養の支度を申しつけ、アトが参詣を勧めて触れると、徐に後見が二人掛りで恭しく正先に立花を据えてこそこの小書「立花」、舞台も映えるのだが。閉話休題。
黄昏とき、供養の場に現われ白い花を供える里女(シテ昭世)、僧に花の名を問われ、晩夏、時刻からみても白い花が開けば曇りがつきそうなのを、と里女。人の名にも似、粗末な理想に咲くのでへ知らし召さぬは理なり、と僧にアキラフところが印象的だった。

NHK放送予定(平成22年7月~8月)

- NHK-FMラジオ能楽鑑賞(毎週日曜日7時15分~8時)
7月19日 楽謡 「楊貴妃」(金剛流)宇高通成ほか
7月25日 楽謡 「巻網」(再)「観世流」武田志房ほか
8月1日 番唄子 「安宅」(観世流)①観世鎮之丞ほか
8月8日 番唄子 「安宅」(観世流)②観世鎮之丞ほか
8月15日 特集 「能の音楽」①ゲスト 高桑いずみ
8月22日 特集 「能の音楽」②ゲスト 高桑いずみ
8月29日 特集 「能の音楽」③ゲスト 高桑いずみ

三演能カレンダー

名古屋能楽堂 (TEL 052-231-0088)

- (7月)
19日(月) 狂言 舞会 (無料)
24日(出) 司宝会 合同大会 (無料)
25日(出) 第2回全国学生能楽コンクール (無料)
31日(出) 青陽会 定式能 (有料)(番組①面)
(8月)
1日(日) 廣瀬瑞弘師追善第40回名古屋春栄会 (無料)(番組②面)
3日(火) 名古屋能楽堂夏休み親子能楽教室 (無料)
4日(水) 同上 (無料)
8日(木) 第6回名古屋青雲会 (有料)(番組①面)
9日(金) 名古屋能楽堂夏休み親子能楽教室 (無料)
17日(火) 名古屋学生能楽連盟8月例会 (有料)(番組②面)
20日(金) 名古屋三の会夏競 (有料)(番組②面)
22日(日) 第26回衣斐正直後援会 (有料)(番組②面)
29日(日) 七夕彩 (有料)(番組②面)

発行能樂の友社
名古屋千種区千種2丁目18-18
(郵便番号 464-0858)
電話 (052) 731-7984
FAX (052) 733-2837
振替口座 008000-6-36393
購読料 1年 1100円
郵送の場合 1年 1800円

能樂の友

豊田市 能楽堂 ろうそく能

9月11日 能「殺生石」

豊田市能楽堂では、きたる九月十一日(出)ろうそく能(能「殺生石」、新作狂言「死神」)を開催する。
宝生流能「殺生石」は、シテ衣斐正直、ワキ飯富雅介、アイ茂山正邦。
笛・竹市学、小鼓・後藤嘉津幸、大鼓・河村真之介、太鼓・加藤送輝、後見・和久莊太郎、内藤飛鶴。
地謡・水上輝和、真川光夫、稲川寿一、佐藤耕司、久野幸三、平田正文、竹内淳一、竹内孝成。

大蔵流新作狂言「死神」。シテ茂山千五郎、アト茂山茂、茂山七五三、丸石やすし、茂山正邦、島田洋海。
開演午後二時。
入場料(全席指定)正面席五千円、脇正面四千円(学生半額)
チケット 豊田市能楽堂(0565-3358200)、インターネット予約 Eto://www.etonet.com/チケットぴあ(057044660)

宝生流能「安宅」上演

8月22日 衣斐正直後援会能

宝生流「衣斐正直後援会」では、第二十六回演能として、八月二十二日(出)名古屋能楽堂で、「安宅」を上演する。午後一時開演。
能組は「安宅」一番。シテ衣斐正直、ワキ殿田謙吉、後見に宝生和英宗家。地頭に辻藤乾之助師。
子方義経に令孫の坂口侑、同行山伏には東京関東で活躍する宝生流の次世代を担う高橋亘、野村聡、小倉伸二郎、亀井雄二、東川尚史、水上優が来演、狂言方として野

村小三郎、松田高義師が出演する。
衣斐師は、後援会報で「次世代に能を正しく伝え、そこから、より大きな芸術価値を求めていく」とが能楽師としての私の使命と想っていること「安宅」の上演に打ち込む意欲を語っている。
番組②面掲載。衣斐正直後援会事務局(名古屋市昭和区御器所三丁目三十一、御器所パークマンション)ハ〇二、電話〇五二・八二一・五六〇〇。

演能案内

佐藤耕司後援会 司宝会
五周年記念 涌宝会
七月二十四日(出)午前九時半始
名古屋能楽堂

能花月 岡田真理 飯富雅介 河村真之介 鹿取希世
能吉野静 芳賀カズ子 飯富雅介 河村真之介 竹市学
ほか楽謡、舞囃子、連吟、仕舞、独調、独吟など四十数番
「入場無料」
司宝会
名古屋市天目区島田3-301-2-1310
涌宝会
和久莊太郎
東京都北区滝野川6-13-12
後援 異国会、照門会
名東高校能楽研究部

青陽会定式能(第354回期)

七月三十一日(出)午後一時始
名古屋能楽堂

仕舞 雲雀山 星野 野子 地謡 角田尚香、久田三津子
子方 中野弘士郎 前野 郁子
能 隅田川 杉江 元 河村真之介 大野 誠
後見 久田三津子 地謡 八吉沢 武田 大志
近藤 幸江 山 幸親 幸充 久田三津子 一政 邦志
仕舞 賀茂 武田 大志
鶺鴒 若キリ 松山 幸親 八神 孝亮
銅占キリ 久田 勲 加藤 八神 孝亮
吉沢 旭 加藤 邦彦
鳩歌 杜若 加藤 邦彦

狂言 蟹山伏 佐藤 融 中島 俊裕 後見 佐藤 友彦
能 天鼓 祖父江 修一 高安 勝久 河村真之介 竹加藤 洋輝
兼鼓之舞 今枝 郁雄 後藤 嘉津幸 竹市学
附祝言 後見 古松山 幸親 地謡 高須 久 勲 吉甫 梅田 清武 大志
高橋 正邦 高橋 謙一 高橋 謙一 梅田 清武 大志
主権 青陽会 藤田 嘉宏
お問合せ 名古屋市長栄区二社三の二六二
久田 勲 鶴岡 事務所
電話〇五二・七三三・四一六・一九二

「入場料」
当日券 三千円
学生 千円
チケットぴあ(0570446602)
名古屋能楽堂 出演楽師宅

伺

御

中

暑

名古屋 観世会

観世 清和

片山 幽雪

大槻 清韻会

大槻 文蔵

鳳鳴会

武田 志房

武田 友志

藤井 徳三

幽花会

片山 慶次郎
伸 吾

梅 猶 会

梅 若 吉之丞
梅 若 猶 義

名古屋 観衛会

山本 勝一
山本 博通

名古屋 観世九皇会

観世 喜之
観世 喜正

高橋 瞭一

浦田 保浩

電話(〇七五)七二一六八五〇

壺泉会

泉 嘉夫

名古屋市昭和区山手通3-8-2
電話(〇五二)八三二二八五
西宮市甲陽園目神山村三三二五
電話(〇七九八)〇二四五八

〒603 8123 京都市北区小山下花ノ木町二

〒605 0000 京都市東山区西野町24
電話〇七五五六一二九二一

〒540 0005 大阪市中央区土町A番七号
電話〇六六七四一〇八九番

〒606 0014 京都市左京区下鴨芝本町58-14
電話(〇七五)七二一六八五〇

【入場無料】

主催 名古屋青雲会
後援 社団法人宝生会
名古屋宝生会

能舎利 飯富雅介 河村真之介 加藤洋輝
後見 衣宝生和英 川瀬隆士 高橋憲正
地謡 佐野玄直 澤田宏司

仕舞 花鶴 銅 江洲 隆三
善知鳥 烏クワイ 和久埜太郎 衣斐 愛

解説 衣斐 愛
名古屋能楽堂
八月九日(月)午後二時始

第六回 名古屋青雲会

主催 春歌会・名古屋春栄会
後援 西御門金春会
金春穂高

【入場無料】

能乱 橋本 幸 寛 飯一 加藤 洋輝
後援 孝一郎 大野 誠
舞囃子 一祝 廣瀬 雅弘

名古屋能楽堂
八月一日(日)午後一時始

第四〇回 名古屋春栄会演能会

廣瀬瑞弘師追善

舞囃子 初音 廣瀬 和弘 「是茶」 幸田まち子
仕舞子 海人 金春 祥沙 「錦木」 金春 嘉織
独吟 羽衣 金春 飛翔 「祝ノ段」 長谷川とし子
仕舞子 詠法師 富永 康文 「敬盛」 新美 智正
独吟 鶴亀 石原 誠 「田村」 東屋 由利子
仕舞子 覆願寺 原 松枝 「紋上」 一野 研志
舞囃子 巨八幡 豊田 均 「鶴亀」 加藤 剛
仕舞子 極 山田 寛世子 「羽衣」 伊藤 理紗
独吟 詠法師 伊藤 みつ子 「熊坂」 橋谷 弘子
仕舞子 兼老 白井 芳子 男 「女顔花」 湯本 哲明
舞囃子 東北 菱田 安子 「鶯」 西瀬 英紀
仕舞子 高砂 大森 安美 「経政」 杉谷 桂子
独吟 船井慶 渡辺 晃一 「野守」 箕浦 達
仕舞子 逆行柳 中田 能光 「高砂」 酒井 賢一
独吟 極 森川 光夫 「詠法師」 堤 幸夫
仕舞子 社若 伊藤 雄一 「鉄鑪」 山田 友久
舞囃子 橋ノ段 佐藤 俊之 「藤戸」 金春 穂高

【入場券】五千円(学生二千円)
お問い合わせ先
衣斐正宜後援会事務所
電話 052・882・5600

能安宅 殿田 謙吉 河村真之介 藤田 大郎兵衛
後見 寺井 和英 村上 茂 水上 輝和
地謡 島雄 幸三 東川 光夫
間 野村 小三郎 松田 高義

講演 義経一行が辿った道

水内 水上 飛 優
東川 尚史
和久埜 井 雄二
小倉 伸二
野月 信二
高橋 月 信二
坂口 信二

名古屋能楽堂
八月二十二日(日)午後一時開演

第26回 衣斐正宜後援会能

【入場料金】一般五千円、学生三千円
(全席指定)
取扱い/事務所(電話090・67007)
47114、チケットぴあ(電話
0577002・99999) eコマンド
404・741)

狂言三の会事務局
東京都東村山市久米川5-19-42
電話090・6770
FAX042・3977・4714
(月曜・金曜9時~20時)

萩大名 大名 野口 隆行 大徳 野村 小三郎
瘦松 山賊 松田 高義 女 野村 小三郎
千鳥 太郎 岩者 奥津 健太郎 通主 野村 小三郎

名古屋能楽堂
八月二十日(金)午後六時半開演

狂言三の会 第九回公演

【問い合わせ先】
名古屋市昭和区御器所三-1-19
御器所パルクマンション八〇二
電話052・882-5600
衣斐正宜 方

(株)大阪能楽会館

〒530-0015 大阪府北区中崎2-3-17

上田 貴 大公拓 介 威司 弘

上田観正会能楽堂
上田観正会 TEL0781-
六九一五四四九

〒545-0004 大阪市阿倍野区文の里3-16-17
電話06-6622-1122 九九

梅春会 井戸 和男 良祐

〒500-0084 豊中市新千里南町三丁目18-12
電話06-6831-7854
〒166-0003 東京都杉並区高円寺南4-27-7
電話03-3332-1057 〇908

春鶯会 梅若 善高

泉 雅一 郎
〒201-0002 東京都江戸市東野川四十六八
電話03-3346-1484 五番

松音会 泉 泰 孝
〒108-0001 東京都杉並区宮前四-19-14
電話03-3333-1828 六番

〒465-0000 名古屋市長区二社3-10
電話052-705-1555

久田観正会 久田 勤 鷗
前野 郁 子
松山 幸 子
星野 路 子

大西 智 久

名古屋修 諷 会 梅若 修 一

〒461-0033 名古屋市中区台町二丁目十六五
電話052-842-1423 三番

邦謡会 梅田 邦久 久
今本 須清 沢 一
梅田 嘉美 宏和 勲 甫 政

怡楽会 山階 彌右衛門 山階 弥次

観芳会 観世 芳伸

暑中御見舞 申し上げます

山小宮松吉塚小山島宮荒坪 岸倉内原田田出岸田年要友三郎功亮
美重 章雄 登富 樹章 登富 樹章 登富 樹章

舞橋岡会 橋岡 久太郎

武田 宗和 宗典

初陽会

財団法人 鎌倉能舞台 中 森 貫 太

武田 武田 欣司 武田 大邦 弘志

武田 謳楽会

名古屋淡交会 三 橋 岡 慈 観
交会 久田 三津子
〒465-0000 名古屋市長区二社3-10
電話052-705-1555

当地の各流儀・流派・結社・社中の消息を辿る

竹尾 邦太郎

六、「大衆能」

— 承前 —

第九回は昭和四三年九月一日、愛知文化講堂が借りられず熱田神宮能楽殿で催される。前年までの文化講堂の収容人数から考慮して午前十一時始と午後二時半始の二部制。第一部は能「田村」伊藤鉄之進・西村欽也、佐藤秀雄、仕舞二番「野宮」熊澤重美子「笠之段」有賀滋子、舞囃子「融」和島富太郎、狂言「不見不聞」井上礼之助・井上松次郎、野村又三郎、能「三輪」殿島修二・高安滋郎、佐藤卯三郎。

第二部は舞囃子「養老」大槻秀夫、能「七騎登」河村鉦二・加藤丈太郎(頼朝)佐藤太俊(義美)杉村竹翠(三郎)加藤総兵衛(信綱)丹下三義(土佐坊)稻生芳雄(次郎)小林琢麻(子方)・西村欽也、佐藤秀雄、狂言「文荷」井上祐一・佐藤友彦、佐藤卯三郎、仕舞「殺生石」辰巳孝、アと語「奈須子市語」和泉保之、舞囃子「飛坂」桜間龍馬、能「鉄輪」内

藤泰二・高安滋郎、高安勝久、井上松次郎。二部制だが会費は通し、指定席十円、普通席八百円。なお地謡に豊嶋弥左衛門、三十三春、桜間辰之が来演。

第一〇回は昭和四四年九月七日、舞台は再び愛知文化講堂。能組は舞囃子「養老」片野真四郎、能「杖怒重」内藤泰二・西村弘敬、仕舞二番「東北」服部紗枝「鞍馬天狗」福井道子、舞囃子二番「八島」桜間龍馬「松虫」観世喜之(写真)、能「羽衣」長田鏡・西村欽也(写真)、仕舞二番「班女」丹下三義「邯鄲」柴田収武、狂言「墨塗」和泉保之、井上松次郎、佐藤友彦、舞囃子二番「松風」辰巳孝「飛坂」和島富太郎(写真)、能「土蜘蛛」加藤丈太郎、久田秀雄、殿島修二、竹内六郎、塚本秀雄、高安滋郎、西村欽也、高安勝久。

第一一回は昭和四五年九月六日。能組は舞囃子「高砂」山田仁三郎、能「大佛供養」柴田収武、杉村竹翠(母)佐藤太俊、久田秀雄、加藤丈太郎、河村真之介(子)

方)西村欽也、井上礼之助、仕舞「井筒」加藤良久、舞囃子二番「松風」桜間金太郎「唐船」辰巳孝、仕舞二番「雨之段」河村鉦二「花笠」梅田邦久、能「半部」内藤泰二・高安滋郎、野村又三郎、狂言「仁王」和泉保之、井上松次郎(何某)佐藤秀雄、井上礼之助、佐藤友彦、大野弘之、佐藤卯三郎(跛)、舞囃子「融」藤井久雄、能「小鍛冶」和島富太郎、高安滋郎、勝久、佐藤秀雄。地謡に瀬尾辰之、大島政允が来演、この年の五月、桜間龍馬は金太郎を襲名する。

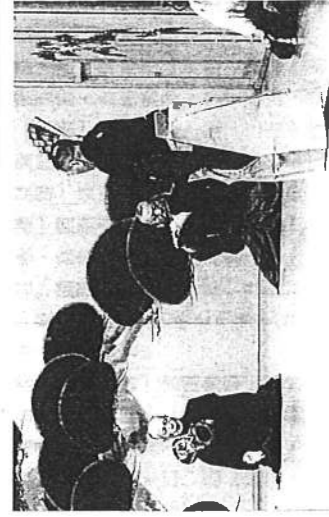
第二二回は昭和四六年九月五日。能組は舞囃子「養老」和島富太郎、能「小袖曽我」塚本秀雄、佐藤太俊、福井道子(母)加藤保彦(鬼王)長谷川章(回三郎)、佐藤秀雄、舞囃子「龍田」大槻秀夫、能「羽衣」床凡物着「伊藤鉄之進」西村欽也、仕舞五番「清経」竹内六郎「野宮」殿島修二「山姥」柴田収武「松風」有賀滋子「忠度」辰巳孝、舞囃子「船弁慶」桜間金太郎、狂言「釣針」和泉保之、井上松次郎(主)佐藤秀雄(妻)野村又三郎(乙)井上礼之助、佐藤友彦、大野弘之、歌村鴻助、井上良二、井上豊弘、能「暁界」日頭「金春欣三」前田茂徳、高安滋郎、勝久、飯富雅介、大野弘之。他に豊嶋弥左衛門、三十三春、本田光洋が来演。

第二三回は昭和四七年九月三日、能組は舞囃子「高砂」和島富太郎、能「清経」内藤泰二・鬼頭嘉男、高安滋郎、仕舞二番「弱法師」大塚二二「井筒」前田茂徳、舞囃子「船弁慶」渡辺三郎、仕舞二番「陣丸」杉村竹翠「野守」柴田収武、能「松風」梅田邦久、橋保向、高安滋郎、大野弘之、狂言「三人片輪」野村又三郎、井上松次郎、井上礼之助、佐藤友彦、舞囃子「融」片山慶次郎、能「黒塚」長田鏡、西村欽也、高安勝久、佐藤卯三郎。他に小野明、橋本磯道、梅津忠弘が来演。

第一四回は昭和四八年九月二日。能組は仕舞四番「班女」服部紗枝「唐船」加藤良久「邯鄲」河村鉦二「井筒」杉村竹翠、舞囃子「高砂」内藤泰二、能「巴」長田鏡、高安滋郎、佐藤秀雄、仕舞「三輪」柴田初太郎、能「葛城」本田光洋、西村欽也、井上松次郎、狂言「六地藏」野村又三郎、井上松次郎、井上礼之助、佐藤友彦、大野弘之、舞囃子「山姥」大塚二二、能「望月」佐藤太俊、久田秀雄、河村真之介(子方)高安滋郎、佐藤卯三郎。他に和島富太郎、和谷亀二郎、大島政允、金春信高、金春欣三、吉井順一、古橋正士が来演。

第一五回は昭和四九年九月一日。能組は仕舞四番「松風」熊澤恵美子「唐船」加藤良久「隅田川」柴田収武「平鼓」梅田邦久、舞囃子「高砂」本田光洋、能「経政」高橋瞭一、高安勝久、一調「葛城」鬼頭八郎、大塚二二(謡)、狂言「釣針」野村又三郎、佐藤卯三郎、井上礼之助、佐藤友彦、驚見政行、大矢高義、大野嘉男、高安滋郎、仕舞二番「弱法師」大塚二二「井筒」前田茂徳、舞囃子「船弁慶」渡辺三郎、仕舞二番「陣丸」杉村竹翠「野守」柴田収武、能「松風」梅田邦久、橋保向、高安滋郎、大野弘之、狂言「三人片輪」野村又三郎、井上松次郎、井上礼之助、佐藤友彦、舞囃子「融」片山慶次郎、能「黒塚」長田鏡、西村欽也、高安勝久、佐藤卯三郎。他に小野明、橋本磯道、梅津忠弘が来演。

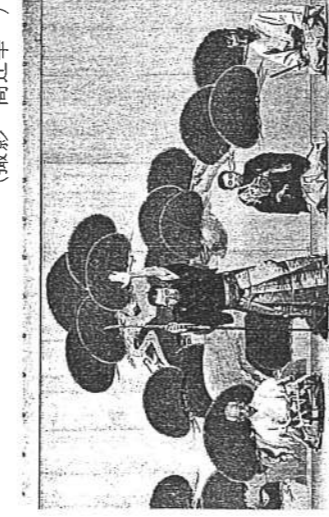
第一五回は昭和四九年九月一日。能組は仕舞四番「松風」熊澤恵美子「唐船」加藤良久「隅田川」柴田収武「平鼓」梅田邦久、舞囃子「高砂」本田光洋、能「経政」高橋瞭一、高安勝久、一調「葛城」鬼頭八郎、大塚二二(謡)、狂言「釣針」野村又三郎、佐藤卯三郎、井上礼之助、佐藤友彦、驚見政行、大矢高義、大野嘉男、高安滋郎、仕舞二番「弱法師」大塚二二「井筒」前田茂徳、舞囃子「船弁慶」渡辺三郎、仕舞二番「陣丸」杉村竹翠「野守」柴田収武、能「松風」梅田邦久、橋保向、高安滋郎、大野弘之、狂言「三人片輪」野村又三郎、井上松次郎、井上礼之助、佐藤友彦、舞囃子「融」片山慶次郎、能「黒塚」長田鏡、西村欽也、高安勝久、佐藤卯三郎。他に小野明、橋本磯道、梅津忠弘が来演。



第10回大衆能 舞囃子「松虫」
左より田鍋惣一郎、藤田昭彦、観世喜之
(撮影 高辻幸一)



第10回大衆能「羽衣」
左より長田鏡、西村欽也、河村鉦一郎、田鍋惣一郎、藤田昭彦
(撮影 高辻幸一)



第10回大衆能 舞囃子「熊坂」
左より鬼頭八郎、和島富太郎、後藤孝一郎、鬼頭季信
(撮影 高辻幸一)

<p>富中御見舞 申し上げます</p> <p>笙月会 中川雅章 〒500 岐阜市地蔵寺町八ノ二九 電話〇七五〇〇六三〇番</p> <p>賀水会 桑名賀水会 名鉄百貨店友の会 加賀敏彦 〒463 岐阜市守山区森孝二丁目七〇九 電話〇五二七七七一八九四五番</p> <p>松盛会 小松勝憲 松舞台 〒511 三重県桑名市西別所一〇六一の五 TEL・FAX〇五九四二二三四五八二</p> <p>洗心会 奥村富久子</p> <p>観修会 祖父江修一 〒507 岐阜多治見市日ノ出町2の2 電話〇五七二二二二三五六</p> <p>幸誠会 近藤幸江 〒441 岡崎市嶋田本町十一番地ノ三 電話〇五三四〇二五二九</p> <p>千早会 八神孝充 〒464 岐阜市千種区櫻庭町3-60-1-201 電話〇五二七六二二二〇一</p> <p>桜月会 加藤春枝 〒500 岐阜市鼻ヶ丘3-1-113 電話〇五七四六四一三〇六</p> <p>楽諷庵舞台 連絡は 名古屋昭和区川名山町一〇五 電話(八三二)三四九一 番</p>	<p>名古屋宝生会 宝生流 嘉宝会 〒460 岐阜市昭和区川名山町一ノ五一 鬼頭嘉男</p> <p>司宝会 〒468 岐阜市天日区島田二丁目三〇一 島田権住三三〇電話〇五二六〇七五七二 佐藤耕司</p> <p>宝生和英 金剛永謹 龍謹</p> <p>近藤乾之助 〒170 0002 東京都豊島区巢鴨五十一三十八 電話〇三三九二五二二七六番</p> <p>名古屋巽会 豊橋巽会 辰巳満次郎 佐野由於</p> <p>倉本雅 〒660 神戸市東灘区田中町1-13-22 800 電話(〇七八)四四一五四六五番</p> <p>恵美寿会 衣斐正宜 衣斐正宜後援会 〒466 061 名古屋昭和区御器所3-23-19 御器所パークマンション8002号 電話(〇五二)八八二一五六〇番</p> <p>宇高通成 徳成成 〒791 006 0010 京都市左京区吉田中太路町19 〒791 006 0010 松山市山越4丁目11-1-38 松山響雲会</p>
---	--

「成上り」二月の初午はど全
国的ではないが、新年の初寅の日
に京人は福徳の寺として信仰を集
める鞍馬の毘沙門天に詣る風習
が。
太郎冠者(シテ万之介)に太刀
を持たせ出掛ける主(アト幸
雄)、堂内で通夜をするが太郎冠
者は眠りこけてスツパ(小アト和
意)に太刀を背竹と柄杓巻えられ
る。主に迂闊さを叱責される前に
何とか打開をと苦慮のシテ万之
介、小才が利くともみえ無い純な
味わいに可笑しみ。先づ主を懐柔
して弁解の糸口を探らうと「成上
り」の言葉の理解を求めれば、戻
ってきたのは世間一般の解釈。一
応頷くも、時には山芋が鱈にな
るなどの奇弁で、太刀が背竹に
なる、など主に通じる訳もない。
主が借しいのは重代の太刀、見張
って夜明けを待てば掛ったスツ
パ、羽交い締めにして太郎冠者に
縄を掛けよと指図すれば、縄を締
い出し、縛えれば縛えたで手難な

◆初夏から仲夏の舞台◆

「第13回ござる乃座」「故熊澤恵美子
追悼能の会」「第53回やるまい会」と
「名古屋能楽堂六月特別公演」

竹尾邦太郎

らす足跡も悪いスツパに縄を掛け
られず苦悶。主の指示で後ろから
掛ければ主が縛られスツパは縄抜
けの態。ヌレゴローとして愚直、
偉丈夫の万之介の太郎冠者に禪
味。(19分)
「朝比奈」婆は人間が賢く
なり、佛門に帰依するので悪業は
かり賑わい地獄は飢饉とあって閻
魔王(アト小三郎、面武悪、鬼
文忌括、赤黒段厚板壺折、鞭を
持つ)、危機感はずから六道を
辻へ出張り、冥土へ赴く人間を責
め格そうと持ち構える。閻魔が狂
言次第(誠・薄連幸・眞之介)の
登場場で現われ、遊行を諷いつ、
舞台に入つて来るなど能が、りの
諧謔味が重画の趣。そこへ姿を見
せて引つ掛かるのが朝比奈三郎義
秀(シテ萬齋、直面、鍛型付黒頭
・白鉢巻、襟浅黄、厚板着付・白
大口・白水衣・太刀・背二七道具
かけるが意にも介されず、却つて

③面よりつづき)
弘之・井上松次郎、能「熊野」久
田秀雄、前野郁子、高安滋郎、飯
富雅介、舞囃子「山姥」長田驍、
能「春日龍神」吉田俊彦、西村欽
也、飯富雅介。
第一六回は昭和五〇年九月七
日。能組は能「祝慈恵」豊嶋三千
春・高安勝久、仕舞「取手信」小
歌「熊澤恵美子、舞囃子「松風、
見立」長田驍、仕舞三番「難波」
武田邦弘「教盛キリ」久田徹二
「阿漕」塚本秀雄、能「三山」衣
笠正彦、吉田俊彦、高安滋郎、佐
藤友彦、舞囃子「天鼓」盤渉「梅
田邦久、仕舞「熊坂」本田光洋、
狂言「甚」井上松次郎、野村又三
郎(何美)大野弘之、佐藤友彦、
歌村鴻助、今枝良治、郁雄、靖雄



驚見政行・佐藤融(姫守)井上
礼之助(鬼妻)、能「土蜘蛛」杉
村竹翠、水藤元三(頼光)吉田妙
(胡蝶)中村和男、西村欽也(独
修介、憲介(脇政)河村眞之介、
舞囃子「経政」本田光洋、能「半
蔵」松岡右衛門、高安勝久、野村小
三郎、一調二番「天鼓」後藤眞洋
幸、泉嘉夫(謡)「雨月」幸正昭
・金春徳高(謡)、狂言「魚説
法」野村又三郎、野村小三郎、一

調二番「蟻通」後藤孝一郎、衣斐
正直(謡)「金札」幸清次郎、金
春安明(謡)、能「山姥」桜間金
記、鬼頭尚久、飯富雅介、杉江元
・松田高義。他に吉澤廣明、高橋
忍、横山紳一、守屋泰利ら。
以下次号

問家による能があつたこと補足致
します。能組は素囃子「孫之段」
竹市学、柳原富司忠(頭取)榎井
修介、憲介(脇政)河村眞之介、
舞囃子「経政」本田光洋、能「半
蔵」松岡右衛門、高安勝久、野村小
三郎、一調二番「天鼓」後藤眞洋
幸、泉嘉夫(謡)「雨月」幸正昭
・金春徳高(謡)、狂言「魚説
法」野村又三郎、野村小三郎、一

大阪新能

第15回までの能組の表紙
平成22年度「大阪新能」は、8
月11日、12日の2日間 大阪・天
王寺区生玉町の生国魂神社で催さ
れる。
演能は次のとおり。
▽8月11日(水)午後5時半始
観世流能「忠信」山本真弘
和泉流狂言「群置」小笠原匡
——火入れ式——
観世流半能「井筒」大槻文蔵
観世流仕舞「玉鬘」(前田和子)

親(万作)に付き添つて貰い、門
前に持つてもらふも予て観を知る
太郎冠者に見つけられ、親も同席
の役目に。しかし、袴は聲の穿く
一領だけに苦慮する親、臨機応
変、袴の前後を引き裂き、とにか
く前だけを当てて誤魔化そうの算
段。慇懃に挨拶も済み、巫事。率
直な聲の言動にうろたえ、調子に
乗つて嗜みを忘れる舞に驚てさせ
られる親万作が老巧なら、鯛重二
玩具文構肩衣の裕基君、雅気の素
直がいかにも初々しい舞ぶりであ
る。「舞殿は気さくな人ぢやな
あ」と舅、舞に有の一さしを求め
れば、「心得てお舞やれ」と目頭
の観。「釣する所」は短い、と次
に「花の袖」を舞うが、左右へ廻
つて長々との注文を付けられて一
計。「あれ〜」とあらぬ方を指
して舅の注意を惹くうちに、くる
りとして一件落着も舅は欲求不
満、それではと強引に三人連舞は
「七つ子」を舞わせることに。舞
のうち太郎冠者に袴の細工を見つ
けられ、恥ずかしいと袴の片割れ
担ぎ逃げ出す速さ。親子孫三代で
勤める目出度さだが、東京でのよ
うに親萬齋、舅万作の方が座りが
よいのでは。(43分・5月16日・
第13回ござる乃座)
「井筒」物着「一所不住の権
(ワキ勝久)、在原寺に立ち寄
り、古の業平夫妻の跡であるうと
用うところ、水桶を持つ里女(シ
テ吉之丞、小面・襟白二・薙髪文

白摺招着付、組入唐織)を認め、
そこはかとなき氣に惹きつけら
れる。秋の夜の寂寥の中、シテは
沁々と昔を憶ひ、松韻を聞く心に
右ウケ責くを眺め、へ定めなき世
の、と臆正に下居して水桶を置き
「夢心、と合掌の無我の境もへ
(何の音にか)覚めてまし、と何
か氣配を感じて立つとワキが言葉
を掛け、問答から掛合へ。
シテの羞怯を不審するワキに、
たゞ業平の霊を申うだけとシテ、
所縁の有る筈も無く、とさらりと
躲し、跡が存在する限りは朽ちる
事も無い噂、懐しむ風情。初同
(修一・和男・光之助ら)へ一歳
暮の戀に出づるは、と井筒を見詰
める心持ちからへ草花々として露
深々と、と右へ眺めて直ルところ、
濃やかな情味が。更に詳しく
業平の行跡を述べるクリ・サシ・
クセから中人前のロンキまで、小
書でシテは床几に掛かる。特に型
は無く、たゞワキに事の二々を納
得してもらうかに度々アシラフだ
け。時にクセ中、昔、井筒の水鏡
に「面を並べ袖を掛け、とアシラ
フところ、後シテで業平の面影を
井筒に覗き見る場が思われ印象に
残る。ロンキに素性を明かし、へ
契りし年は、で床几を立ちへ井筒
の陰に隠れけり、の返し句に後見
座へ、物着になる。
物着アシラフ(鉢一・薄連幸)
の内にシテは初冠(巻織・追憶、
⑤面へつづく)

御中 暑

シテ方金春流宗家 金春安明 〒167-0002 東京都杉並区南荻窪三丁目17-16 電話〇三三三三三二二五七番	福王茂十郎 知和幸郎 登幸郎
金春信高 〒167-0041 東京都杉並区善福寺二丁目27-27 電話〇三三六七六五六一四四番	高安勝久
本田光洋 〒164-0002 東京都中野区上高田二丁目25-2 電話〇三三三八六二六四二番	宝生欣哉 閑哉
伊勢金春会 宇仁田吉邦 〒516-0007 伊勢市八日市場町5-16 電話〇五九六〇五二一九八	西村同門会 飯杉富雅 江元介 橋本元江正 宰樹元介
長田驍後援会 〒514-0201 津市高野尾町三三三三二四六 電話〇五九二〇〇六九七番	谷田同門会 小原松林 遼一 大努充
喜多流和楽会 和谷衡市 〒516-0007 伊勢市中島二丁目20-12 電話〇五九二〇〇一五九番	清水利宣
喜多流和谷栄太郎 〒515-0073 松阪市殿町一四二二三 電話〇五九二〇三三〇〇番	藤田舞台 藤田六郎兵衛
	〒451-0041 名古屋市西区曙下2-10-9 TEL 〇五二一五七一五七六三



故 熊沢麗美子追悼能の会「井筒」 (撮影 梅若吉之丞 ウシママ写真工房)



故 熊沢麗美子追悼能の会「卒都婆小町」 (撮影 梅若猶義 ウシママ写真工房)

④面よりつぎ) 飾緒)・襟着付付前・黄地秋草文縫箔腰巻・長絹の姿に飾太刀を佩く。待謡は扱けシテのサシ、八形見の直衣身にふれて、と左右の袖を剥くように見る懐旧の情。序之舞は三段二段オロシ辺で右袖被き右ウケて暫時、前方を見詰める姿が美しく、往時を回顧する風情が惹きつける。舞上げ、へ寺井に澄める、と井筒に寄りへ月ぞさやけき、の返シ向に眼くと、へ井筒にかけし・鷹が文、でツマミ扇下から上へ挙げて聖文を計る心。背比べをした昔を回顧の象徴である。キリ近く、へ冠直衣は女とも見えず、と扇カザして廻りへ男なりけり、と井筒に寄り下居、業平の面影、と左袖を井筒に掛けへ懐かしや、と沁々眺める趣(写真)の優美、素晴らしい。キリは、へ洞める花の、と肘をすほめ両袖合わせ、扇で面を隠し、洞んで小さくなる様を見せ、へ色なうて(句ひ)、へ両袖解くとへ残りて在原の、と右ウケ二足出、へ寺の鐘、

見えること今昔を問わない。僧(シテ友彦)が泊る宿の主(アド靖浩)も僧は気楽な渡世と考へ、女共(小アド雛)も、一族も諒解済みゆえ是非にと刺戟を迫り、まんまと僧形になれば次は僧名をねだる。慣れぬことに因惑のシテだが、なまく所持する「いるは乃手本」を頼りに、アドの家が代々に運の字を付けてゆく中から、呂運坊に決まる迄の、手本を麗爪らしく練るシテの、調子付いてくるところに年功の滋味。「い運坊」「ほ運坊」「よた運坊」などと勝手な命名には僧名に似つかわしくないイメージも喚起されて日本語の造語力の面白さ。そこへ「こちの人」と女共に呼ばれ、「いて参ります」と晴れやかにアド、「何と似合うたか」と坊主頭を曝せば激昂する女共。事もあろうにアドはこうなった顔末をシテのせいにするれば、先はシテには生えやうわい」と捨て台詞

のシテの盛しき。市井の人生の機微を衝き、無分別、軽薄な宿の主を滑稽好演。(28分) 「卒都婆小町」 高野山の僧(ワキ茂十郎、ワキツレ浩史)、上洛の途次、朽ちた卒都婆に坐る乞食老女(シテ猶義)を見咎めれば、反駁され逆に教えられてひれ伏す仕儀に。乞食が小町と分かると、僧が落魄の姿を哀れめば義恥の小町、施しを得なければ悪心起こつて錯乱すると。加えて四位少将の怨念が憑いて狂うが、醒めれば後世を願ひ、悟りの道に入ろう、という。

シテ猶義は披き。三ノ松で胸杖にクツロクと静かに三ノ松に。左ウケへ身は浮草云々、と次第語、地取(吉之丞・善高・最一ら)に直り、過ぎ来し方を処座のサンから下歌、上歌に人目恥かして都を出る道行。へ(天内山)の山守舟、を認め、右ウケ語めてへ漕ぎ行く人は、と左手笠にやり前方を眺める姿(面小町老女・襟白二・露芝立白摺箔着付・本地小薊草草文唐織・白緋水衣・女笠・紗に



第53回やまのまい会「雁大名」左より松田高義、野口隆行、野村小三郎 (撮影 杉浦賢次氏)

き、小町に逢う気掛りは時間、へ日は何時を夕暮、と脇正をひと見る姿に力がある。へ出で立たん、と後居座、物着に風折烏帽子・鶯色長絹を着けると業平に変容、日夜通を。へあら苦し目まひやへ胸苦しや、と扇を胸に当てよろしく退ると一夜を待たで死したりし、と安座、ワキにアシラフところなど写実の妙味。キリ、へ花を佛に手向けつ、へのハネ扇には狂乱から解き放たれた喜びの心も。面の、薄く紅を刷いた様な唇の、残んの色香もみせ猶義披きの

「雁大名」訴訟が叶って大名(シテ小三郎)から祝宴の肴を買いに遭された太郎冠者(アド高義)、香屋の亭主(小アド隆行)にこれから顧客になるからと五百疋の初雁を三百疋に負けさせるが、お金を持たず一悶着。持つて来るので売らずに置いて、と言いつ残すが戻っても大名にお金がある筈もない。思案のところ、小才の利く太郎冠者、時差を付けて先づは大名が先の香屋で雁を五百疋で求めることにした後、自身も約家の雁を請求することに。既得権はすでに大名にあり、そこで仕組んだ大喧嘩になる。慌てた亭主が調停に出る隙に、事は予て示し合はせの通りに太郎冠者が雁を掠め取つて逃げる(写真)。「萬無三玉こりや雁をすかさされた」と亭主は切戸へ、大名は「何と一段の首尾ではないか」と太郎冠者と後居一同の暴露合戦の様相、果ては手が出(写真)取つ組み合ひに。兄を倒した弟が「勝つたぞ」と勝鬨を挙げれば、「誰ぞ捕えてくれい、やるまいぞ」と兄。配役は笑の独得の賑やかさの中の軽妙感。(17分) 「浦島」 10

又三郎亡き後の小三郎・高義のコンビが息の合ったところをみせる。配役を逆にすれば、と思わぬでもなかったが。(22分) 「雀巢」舎は自己の謙称、本来は他人に対し「舍弟がお世話に」のように使うが、当世暴力団関係はさぞ知らず、一般にはあまり聞かれない。兄(次アド正邦)の口癖で名前があるのに舎弟としか呼ばれない弟(シテ茂)、シャテイの意味が分からず呼ばれるのが不満で、由来(アド薫)に訊ねれば、何れは悪戯心にさも秘密めかし、それは盗人のこと、と教える。此の間の事情を知らぬ兄は、弟の気色はむ様子を質して怒る原因を知ると、舎弟の意味を説くが逆上している弟は聞く耳を持たず、盗人は兄とばかりに旧態を襲けば、互いに盗みの暴露合戦の様相、果ては手が出(写真)取つ組み合ひに。兄を

倒した弟が「勝つたぞ」と勝鬨を挙げれば、「誰ぞ捕えてくれい、やるまいぞ」と兄。配役は笑の独得の賑やかさの中の軽妙感。(17分) 「浦島」 10年ぶりの上演で又三郎家の番外曲明治13年(一八八〇)十世又三郎信茂が勤めて以来二一九年

暑

中

御

伺

飯嶋 六之佐
〒920-0801 金沢市香林坊2-8-17
電話 〇七五二六二一四三四〇

亀井 俊雄
保雄 雄
実

河村 大
〒603-0803 京都市北区紫野下柏野町五九-1
電話 〇七五五 四六二 四一四五

吐石会
河村 真之介
〒466-0804 名古屋市昭和区前山町一丁目三
電話 〇五二三 七六一 四八八二

桂
後藤 孝一
嘉津 幸
会

幸友会
福井 聡
福井 良四郎
兵衛 介治
大倉源次郎

茂山 千作
千五郎
七五三
千三郎

大藏 彌太郎
千太郎
基誠

長生会
鬼頭 義命

金養流太鼓
青耀会
上田 悟
〒814-0133 和泉市青葉台2-1-17-25
電話 〇七二二五(56) 八五二一
名古屋 名古屋市中区栄5-1-6 14
津島場 栄能楽堂
電話 〇五二二六二 一一八三

呉竹会
传统文化(能楽)こども教室
寛 鑑
谷口 正喜
〒602-0915 京都市上京区中立売湯堂町西入
堂町スカイハイツ 610号
谷口 有辞
〒590-0221 大津市緑町二四-二〇



第53回やるまい会「舎弟」

左より茂山茂、茂山正邦 (撮影 杉浦賢次氏)

に若者へ変身、へ渚に向ひ、と幕を引込み孫と礼拝、へ我が家を指してぞ、と孫を抱き上げ、帯座で右ウケ留拍子。小三郎の祖父ぶりに師父又三郎を彷彿、信明君も成長してそつはないが、上手にやるうという気持ちか、力一杯元気に声を出さず供らしさが薄れたきらいが。小さく纏まらないようにあつて欲しい。(23分)

「石神」妻(アト匡)の徳きに依存して家を顧みず、再三難縁を追られる夫(シテ万蔵)、仲人(小アト健太郎)に別れたく無いと哀願すれば、妻もまた相談に。鉢合わせは拙いと夫を隠し、仲人は「こらへ袋が切れました」と訴えな妻に、難縁もよいが先づ石神に可合を占ひ、石神が持ち上げられるか否かで決めるよう助言。一方、夫には同性の諄もあろうか、石神に成り済まして妻の卦を己れの利に導くよう指示し、夫を石神に仕立てると先に現場へ行かせ。本物を除ける所作から床几に掛けて石神に成る夫、面が離れというのも象徴的。やつて来た妻、先づ持ち上がりねば親里へ、と平家節に「ただ人は見るに惚れ候もしや亦文珠の再来か行平の中納言も見ずは何ともない、と諷いながら手を掛ければ「さてもくあの男に縁があるやら上がりました」とと胆。神を疑うは勿体ないがもう一度と、今度は持ち上がる方に賭け、へ我が恋は迷きようずやろう末達きようずやろう、と諷い手を掛け力を入れるが「とかくあの男に縁があるやら上がりせられぬ」と仕方なく難縁を諦め、石神の御迷惑に報うため「そと袖

に若者へ変身、へ渚に向ひ、と幕を引込み孫と礼拝、へ我が家を指してぞ、と孫を抱き上げ、帯座で右ウケ留拍子。小三郎の祖父ぶりに師父又三郎を彷彿、信明君も成長してそつはないが、上手にやるうという気持ちか、力一杯元気に声を出さず供らしさが薄れたきらいが。小さく纏まらないようにあつて欲しい。(23分)

「石神」妻(アト匡)の徳きに依存して家を顧みず、再三難縁を追られる夫(シテ万蔵)、仲人(小アト健太郎)に別れたく無いと哀願すれば、妻もまた相談に。鉢合わせは拙いと夫を隠し、仲人は「こらへ袋が切れました」と訴えな妻に、難縁もよいが先づ石神に可合を占ひ、石神が持ち上げられるか否かで決めるよう助言。一方、夫には同性の諄もあろうか、石神に成り済まして妻の卦を己れの利に導くよう指示し、夫を石神に仕立てると先に現場へ行かせ。本物を除ける所作から床几に掛けて石神に成る夫、面が離れというのも象徴的。やつて来た妻、先づ持ち上がりねば親里へ、と平家節に「ただ人は見るに惚れ候もしや亦文珠の再来か行平の中納言も見ずは何ともない、と諷いながら手を掛ければ「さてもくあの男に縁があるやら上がりました」とと胆。神を疑うは勿体ないがもう一度と、今度は持ち上がる方に賭け、へ我が恋は迷きようずやろう末達きようずやろう、と諷い手を掛け力を入れるが「とかくあの男に縁があるやら上がりせられぬ」と仕方なく難縁を諦め、石神の御迷惑に報うため「そと袖



第53回やるまい会「浦島」

左から野村小三郎、野村信朗 (撮影 杉浦賢次氏)

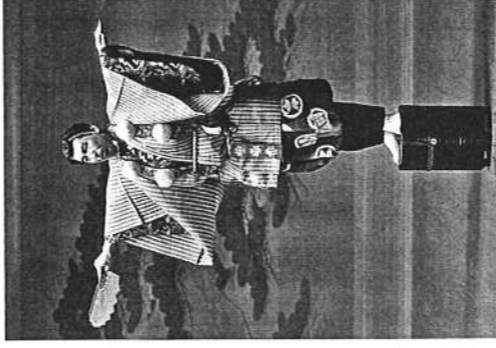
神楽を舞おうと思ひます」とと妻。五色の房付き鈴を振り舞えば(写真)、石神の夫は異がり、浮かれ拍子を踏むなどのうち、面を鈴に撥えて舞い出し、ノ松へ。神楽に陶酔する妻の許へ夫が並んで連舞になれば、やつと気付く妻、「や、これはお男ではないか」と一喝され「南無三五許いてくれい」と逃げる夫に「やるまいぞ」と妻、追込みの常套。とほけた味に万蔵、几帳面な味に近年関西で活躍の匡、充実の舞台だった。神楽の囃子に笛・鼓、小鼓・拍子。 (37分・5月30日・第53回やるまい会)

「柿山伏」登山から下山の途次、湯きを癒したいと山伏(シテ靖雄)、柿の木をみつつけ、断つて探ろうにも辺りに人は無く、巴むを得ず登つて口にしたら一個で済まない。そのうちに見回りの畑主(アト魁)が山伏に気付くと、悪



第53回やるまい会「石神」

左より小笠原匡、野村万蔵 (撮影 杉浦賢次氏)



戯心に鳥かな、猿かな、鶯かな、とからかい出せば、その都度生悪機写を為なければならぬ

い山伏。狭い髪桶(天)の上で鳥の恰好をする山伏(写真)の平衡感覚のよさも、飛ぶ段になつては墜落。腰の打撲を訴えるが、見捨てる程の運力をみせる。「さあ、連れて行て養生せられ」と命じる山伏を背負う畑主は、隙をみて放り出し、「恐ろしや」と逃げ、「やるまいぞ」と言う山伏、小品だがめりはりの利いた靖雄の確りした舞台。(20分)

「安宅・勸進帳・瀧流」シテ勸進。智略に覆れ、素胆にして沈着冷静な弁慶を力強く堂々とみせる。勸進帳は文字通りへ天もひきけと、力一杯高らかに読み上げる。中でへ慮進那佛を、でスツと近寄る壹櫻(ワキ勝人)を撥ね付



名古屋能楽堂6月特別公演「安宅・勸進帳・瀧流」

左より久田勸進、高安勝久 (撮影 杉浦賢次氏)

郎兵衛・萬津幸・真之介。充実した重量感のある大きな舞台だった。(1時間28分・6月5日・名古屋能楽堂6月特別公演)

〔前号の訂正〕
▽4頁3段3行 目/方/肩
▽4段目写真のシテ、左右入り違い

暑

中

御

伺

東海能楽研究会
代表 林 和 利

東海能楽伝承会
代表 辻 本 正 樹

名古屋中村区平米野町三丁目九
楓 嶺 一 方
電話 052-451-9797

狂言やるまい会

野村小三郎
松田高義
野口隆行
奥津健太郎

〒490 名古屋中區平一11201四
野村事務所 気付
電話 052-(350)7971
FAX 052-(350)7972

狂言共同社

井上大佐 藤上菊次郎
今井佐藤 野藤弘友
今井枝上 藤上友彦
見枝上 枝上靖靖 浩融之
鹿島政俊 行裕雄

〒490 名古屋市昭和区滝川町54
サンハウス滝川3D井上
電話 052・834・8607
FAX 052・834・8607

茂山忠三郎
茂山良暢

〒606 京都市左区北白川東小倉町28
電話 075(70)21021番
FAX 075(70)21331

能楽の友社

〔おことわり〕専中広告の掲載にあたりましては、紙面の都合により順不同とさせて頂きましたので何卒ご理解賜りますようお願い申し上げます。

葵心庵舞台

尾張旭市東大瀬町原田二四九三ノ二
電 話 〇五六一五〇三三四六番
能舞台 電話 〇五六一五〇六九八

お稽古用敷舞台

彰 諷 閣

連絡先 豊中市緑丘五15114
山本博通
電話(〇六)六八四九一二五八

または 安城市三河安城真町一七1三
グレイシヤスヒラ安城府
電話(〇五六六)七七一八三四一

栄能楽舞台

名古屋市中区栄五十六14
電話(二六二)一八三番

ウシマド写真工房

牛窓正勝 雅之

〒490 京都市上京区北野上七軒
電話 〇七五〇六二二三四一
FAX 〇七五〇六二一五七七一

朝日カルチャーセンター
離子教室

小鼓 後藤孝一郎
丸栄スタイル10階

NHK放送予定(平成22年8月~9月)

8月22日	NHK-FMラジオ能楽鑑賞(毎週日曜日7時15分~8時)
8月22日	特集 「能」の音楽②ゲスト 高桑いずみ
8月29日	特集 「能」の音楽③ゲスト 高桑いずみ
9月5日	素謡 「遊行柳」(観世流) 観世喜之
9月12日	素謡 「江口」(宝生流) 高橋 草
9月19日	素謡 「清経」(観世流) 大槻文蔵
9月26日	素謡 「松虫」(再)(宝生流) 朝倉俊樹

≡ 演能カレンダー ≡

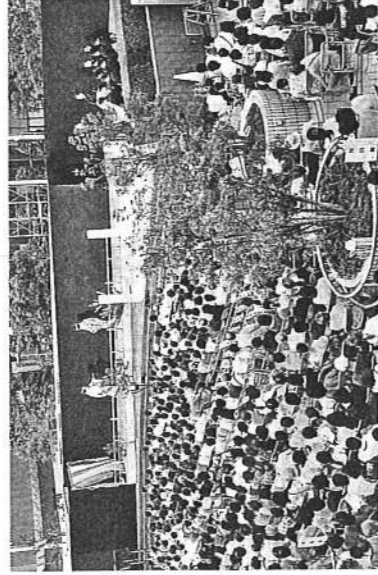
◆名古屋能楽堂◆ (TEL 052-231-0088)

(能・狂言演能関係)

[8月]	22日(日) 第26回衣斐正宜後援会能	(有料)
	29日(日) 七 彩 会	(番組①面)(無料)
[9月]	5日(日) 名古屋能楽堂9月定例公演	(番組①面)
	11日(出) 青 陽 会 定 式	第1部・第2部(有料)
	12日(日) 第2回名古屋片山能	(番組②面)(有料)
	20日(初) 名古屋観世会定例公演	(番組②面)(有料)
	25日(出) 和 泉 流 狂 言 大 会	(番組③面)(無料)
	26日(日) 和 泉 流 狂 言 大 会	(番組③面)(無料)

能楽の友

発行能楽の友社
名古屋千種区千種2丁目18-18
(郵便番号 464-0858)
電話 (052) 731-7984
FAX (052) 733-2837
振替口座 00800-6-36393
購読料 1年 1100円
送料 1年 1800円
郵送の場合 1100円



第9回 名駅新能

能「熊野」[放下僧]

7月25日 名駅タワーで盛会

「第9回名古屋名駅新能」は、酷暑のつづく7月25日、観



世流宗家観世清和氏が来演して、JR名古屋駅・タワースガーデン特設会場で開催。愛好者はじめ熱心なファンが詰めかけ、幽玄の境地に魅せられた。
演能は、舞能「熊野」(瀬戸三津子)能「熊野」(シテ観世清和)狂言「文山賊」(佐藤友彦)能「放下僧」(シテ久田勘麿)。
なお開催に先立ち、全国学生能楽コンクールの表彰が行われ「最優秀賞」学習院大学「優秀賞」名古屋大学「審査員特別賞」関西大学「中日新聞社賞」名古屋市立大学「実行委員会特別賞」金城学院大学の表彰が行われた(写真は授賞式)。

名古屋開府400年祭協力事業

名古屋能楽堂 初秋能

9月5日 2部制で公演

名古屋能楽堂9月定例公演は、「初秋能」として、九月五日(日)名古屋能楽堂で、二部制で開催される。この公演は、名古屋開府四〇〇年祭パトナーシップ事業として、能「狂言」でたどる天下統一への道(後継)として、藤堂高虎、前田玄以、大谷吉継、伊達政宗など、関ヶ原合戦の武将達が私邸で催した能の数々をよみがえさせる。
第一部は、能「二人静」(観世流・近藤幸江・瀬戸三津子)能「紅葉狩」(宝生流・佐藤耕司)舞能「春日龍神」(金養流・鬼頭尚久)、第二部は、能「富士太鼓」(喜多流・長田應能)能「熊坂」(観世流・古橋正邦)舞能「葛城」(金剛流・熊谷真知子)の上演(番組①面)

第2回 名古屋片山能

9月12日 能2番

「名古屋片山能」は今春三月に初回公演が開催され、多数の来場で非常に好評を博し、愛好者の期待にこたえたが、第二回片山能がきたる九月十二日(日)名古屋能楽堂で開催される。

今回は第一回での好評があった「照明能」という形で上演される。能「養老」(安達原)、午後二時開演(番組②面掲載)

※照明能/場面展開(時間の経過や場面の設定)をわかりやすく印象づけるために照明を使って、その効果を活かした舞台づくりがされる。

演能案内

第32回 七彩会

八月二十九日(日)午前十時始

名古屋能楽堂

素謡 鶴 亀 会員一同

仕舞 「田村」(クモ石川 咲子) 「紅葉狩」 道家 静奈
「敦盛」(キリ岩田 大輔) 「藤」(クモ 関瀬 赤美)
「女郎花」(キリ神谷 藤美)

舞能 「岩船」(杉岡 典子) 「芦刈」 市原 貢子
「葛城」(小林 恭子) 「絃上」 杉浦 俊彦
「女郎花」(渡辺 千恵)

仕舞 「国栖」(片桐 賢) 「芦刈」 片桐 連
「清経」(小林 隆) 「大江山」 坂口 貴仁
「風山」(長浜 智美) 「玉鬘」 久野 朋美
「黒塚」(武野 吉よ) 「西王母」 丹羽 佐枝子
「経政」(クモ小塚 昌子) 「半蔀」(クモ小島 久恵)

素謡 加 前川 和之 片桐 真
敦 丹羽佐枝子 小塚 昌子

能 胡 蝶 飯富 雅介 前野美津子 加藤 洋輝
間 野村小三郎 後藤嘉津幸 鹿取 希世

仕舞 「田村」(キリ山岸三三男) 「陣丸」 前川 和之
伊藤 利香

素謡 三 山 杉岡 典子 小林 恭子

仕舞 「羽衣」(クモ井口 敏恵) 「柏崎」 渡辺 千恵 石黒 実都
舞能 「養老」(宮崎 千智) 「忠度」 森 奈美江
「班女」(水藤 典子)

素謡 熊 野 林 泰子 北原 弘子

仕舞 「笠ノ段」(片桐 真) 「野宮」 上滝 早苗
「笹ノ段」(林 泰子)

舞能 「枕愁重」(伊藤 利香) 「松風」 津田 節武
「巻絹」(坂口 泰子) 「紅葉狩」 松浦 祥子

附 祝 言 七 彩 会 (にじのかい)
「御来場歓迎」 「入場無料」
名古屋千種区千種二丁目18-18
電話052-781-2142

名古屋能楽堂9月定例公演
初秋能
九月五日(日)
第一部 午前十時開演
第二部 午後二時開演

能 二 人 静 橋本 幸 河村真之介 鹿取 希世
(観世流) 立出之 一声 後藤嘉津幸 一郎

間 野村小三郎
後見 今沢 美和 加藤 春枝 加賀 敏彦
久田 勲 地謡 須部 旭枝 吉正 邦彦
高橋 暁 一 楠 梅田 邦久
清 沢 一 政

狂言 瓜 盗 人 佐藤 融 佐藤 友彦
(和泉流) 後藤嘉津幸 大野 誠
後見 大野 弘之

舞能 春日龍神 鬼頭 尚久 後藤嘉津幸 竹市 学
(金養流) 地謡 前田 英登 小田 高 若 洋
加藤 英昭 小高 若 洋

能 紅 葉 狩 高安 勝久 河村真之介 加藤 洋樹
(宝生流) 杉江 元 福井 聡 大野 誠
間 榎元 正樹 鹿取 希世
後見 玉井 博 石 森 智幸 和久 壯太郎
竹内 澄子 地謡 平田 正文 衣 斐 正 宜
加賀 山 治 内 藤 飛 龍

附 祝 言 (午後 時頃終了予定)

能 富 士 太 鼓 飯富 雅介 河村真之介 大野 誠
(喜多流) 間 鹿島 俊裕 船戸 昭弘
後見 高林 白 二 地謡 森田 克彦 長田 郷
平塚 昭子 伊藤 英毅 松井 俊二

狂言 朝 猿 大名 野村小三郎 太郎 冠者 松田 高義
(和泉流) 小唄 井上 蒼大
後見 佐藤 友彦

舞能 葛 城 熊谷真知子 河村真之介 鬼頭 義命
(金剛流) 榎井 四郎 兵衛 竹市 学

能 熊 坂 古橋 正邦 河村真之介 鬼頭 義命
(観世流) 間 今枝 郁雄 後藤嘉津幸 竹市 学
後見 前野 郁子 地謡 本八郎 孝 武田 大志
榎江 修一 松山 幸 梅田 邦 義 弘 志

附 祝 言 (午後五時三十分頃終了予定)

取 扱 い 名古屋能楽堂(052-231-0088)
プレイガイド(採アプレケ931.00088)
チケットぴあ(05270-9999)
ポコト一部4055-7334
二部4055-7337

〔前売券〕指定 四〇〇〇円 主催 名古屋市文化振興事業団
自由 三〇〇〇円 名古屋能楽堂
(当日券各五〇〇円増) 能楽協会名古屋支部

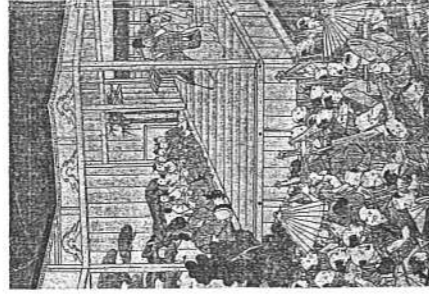
当地の各流儀・流派・結社 社中の消息を辿る

竹尾 邦太郎

六、「大衆能」③

— 承前 —

第一七回は昭和五一年九月五日、能組は能「鶴亀」河村錠二・高木美知子・吉田妙・高安勝久・飯富雅介・佐藤秀雄・舞囃子「八島」日比野圭昭・仕舞六番一駒之段「杉村竹翠」野宮「塚本秀雄」玉葛「水藤元三」松山「加藤総兵衛」網之段「生駒美代子」蟬丸「服部紗枝」能「通小町」殿高修二・佐藤太後・西村欽也・仕舞「天鼓」前田茂穂・舞囃子「融」長田隆・狂言「仁王」井上松次郎・佐藤友彦・鷺見辰行・歌村鴻助・石田喜樹・今枝良治・佐藤秀雄・能「紅葉狩」玉井博誌・竹内澄子・戸田和・足立知子・高安滋郎・高安勝久・飯富雅介・松井直子・大野弘之。能楽協会名古屋支



第19回 大衆能
昭和33年9月9日(日)日比野圭昭・高安勝久・飯富雅介・佐藤秀雄・舞囃子「八島」日比野圭昭・仕舞六番一駒之段「杉村竹翠」野宮「塚本秀雄」玉葛「水藤元三」松山「加藤総兵衛」網之段「生駒美代子」蟬丸「服部紗枝」能「通小町」殿高修二・佐藤太後・西村欽也・仕舞「天鼓」前田茂穂・舞囃子「融」長田隆・狂言「仁王」井上松次郎・佐藤友彦・鷺見辰行・歌村鴻助・石田喜樹・今枝良治・佐藤秀雄・能「紅葉狩」玉井博誌・竹内澄子・戸田和・足立知子・高安滋郎・高安勝久・飯富雅介・松井直子・大野弘之。能楽協会名古屋支

部のシテ方五流が揃うが地謡に流儀を代表する金剛流・豊嶋三千春・金春流・本田光洋・喜多流・金子匡一・宝生流・辰巳孝らが来演。
第一八回は昭和五二年九月二日、愛知文化講堂の都合がつかなかったのか、舞台は市民会館中ホールになる。本紙「能楽の友」に昭和四二年(一九六七)から昭和六二年に至る約二〇年間に亘り「観能独語」の表題で健筆を揮った当地の著名な能楽家・前田尚徳(一九〇七—一九八九)は此の第一八回について次のように述べている。
「大衆能も第十八回を迎えてますます盛ん……」
「といたいところだが、むしろ曲がり角にさしかかって来た、といたいね」
「何が曲がり角かね。会場が文化講堂から市民会館へ変わったからかね」
「いやそれは二の次だ。文化講堂の方がいいか、市民会館の方がいいか、昼間の方がいいか、夜間の方がいいか、いろいろ検討材料や反省資料が出来たことは確かです。これを機会に目先のことだけでなく、大衆能そのものの意義、在り方について、もう一度考えてほしいと思う。これが私の曲がり角という意味だ」

——中略——「それから、こんなことをいつは笑われそうだが、あの仮設舞台ね。後が黒幕、破風も柱もなく照明だけが滅法明るい。鏡取も羽目といつた方がいい感じで、いまにもちよんマゲに白粉を塗った太郎冠者が出て来そう。全体が歌舞伎の所作舞台風で能の幽玄味にそぐわない」
「これはばかりはどうにもならない。文化講堂より小さいだけにまともまっとうでよかったんじゃないか。ただ地謡がひどく聞きにくかったが、会場の音響効果に問題があるのだろうか」
能組は仕舞二番「杜若」前野郁子「歌占」近藤幸江・舞囃子「若船」吉川周子・能「小袖曽我」長田麟・大高正允・金子匡一・井上松次郎・仕舞「松風」前田茂穂・舞囃子「融」内藤泰二・狂言「附子」佐藤友彦・大野弘之・井上礼之助・仕舞二番「老松」塚本秀雄「山姥」久田秀雄・能「養老」久田徹二・高橋勝一・高安滋郎・飯富雅介・野村又三郎。豊嶋三千春・喜多流・大島久良・高林日牛口一・本田光洋らが来演。なお市民会館中ホールの使用は大衆普及(②)面へつづく)

観世九皇会百周年 記念特別公演

10月2日 名古屋能楽堂

名古屋観世九皇会は、観世九皇会百周年を記念すると共に、二世観世喜之三十三回忌追善として、きたる十月二日(日)名古屋能楽堂で特別公演を開催する。午後一時始。
能組は、能「杜若」(シテ高橋一)狂言「栗焼」(シテ佐藤勉)能「安宅」勸進帳・瀧流(シテ駒瀬直也)仕舞「実盛」(観世喜之)「半蔀」五木田三郎「鞍馬天狗」(観世喜正)
入場料正面指定席八〇〇〇円、自由席五〇〇〇円
お問合せ、お申込みは、観世九皇会(Tel0120・150・950、FAX03・5261・298)九皇会能楽師、名古屋能楽堂。

廣田鑑賞会能

10月3日 能「三井寺」

廣田鑑賞会能は、今回第15回を迎え、きたる10月3日(日)京都・金剛能楽堂で記念公演を開催する。
演能は仲秋にふさわしい能「三井寺」(シテ廣田幸稔)・舞囃子「高砂」(シテ金剛永護)狂言「柿山伏」(茂山茂)午後一時三十分始。
能「三井寺」はシテ廣田幸稔、子方西村蝶、ワキ榎王和幸、笛・森田保美、小鼓・久田舞一郎、大鼓・河村大
チケット一般八〇〇〇円(正面・脇正面)五〇〇〇円(中正座)取扱い ローションチケット(コート58464)金剛能楽堂075・441・7222 廣田鑑賞会075・722・9123 など

青陽会定式能 (第54期)

九月十一日(土)十二時半開演
名古屋能楽堂

仕舞 野宮 八田三津子 地謡 角田尚督 今近藤野郎 美幸江子
子方 中野弘士郎 梅田嘉安 松山幸親 杉江橋本 元幸 後藤孝一 鹿取 希世
能 花 筐 杉江元正 淳 後藤孝一 鹿取 希世
後見 近藤 幸江 地謡 吉沢 八神 孝充 清沢 一政
前野 輝子 古橋 正邦
仕舞 通明 寺清 沢 一政 高橋 祖江 修一
班 松道 明 寺清 沢 一政 加賀 田 邦久
女 風盛 八神 孝充 地謡 梅田 邦久 敏彦
舞子 須部 甫

第二回 名古屋片山能

九月十二日(日)午後二時始
名古屋能楽堂

半能 養老 宝生 関 河村真之介 加藤 洋輝 後藤 孝一 鹿取 希世 藤田 六郎兵衛
水鏡之伝 梅村 昌功 昌功 藤田 六郎兵衛
後見 分林 運治 地謡 梅田 大志 味方 正邦 片山 清司 大江 信行 河村 博重
舞囃子 砧 片山 慶次郎 河村真之介 藤田 六郎兵衛 大倉 源次郎
地謡 清沢 一政 梅田 邦久 青木 道喜
能 安達原 宝生 関 河村真之介 加藤 洋輝 藤田 六郎兵衛 水鏡之伝 梅村 昌功 昌功 藤田 六郎兵衛
問 野村 小三郎

狂言 口真似 井上 清浩 佐藤 謙 後見 佐藤 友彦
子方 味方 大志 武田 邦久 橋本 忠樹 後藤 孝一 鹿取 希世
能 郡 鄂 高橋 元正 河村 総一郎 加藤 洋輝 橋本 観 船戸 昭弘 大野 誠
問 今枝 郁雄
後見 今沢 美和 地謡 吉沢 八神 孝充 清沢 一政 久田 勘 須部 甫 梅田 邦久 敏彦 久田 三津子 祖父 江 修一

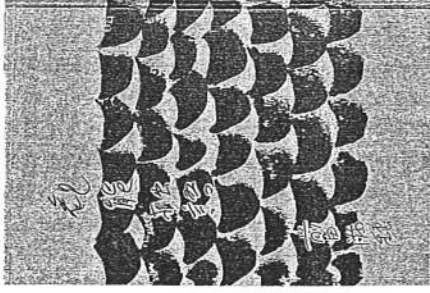
附 祝 言
主催 青 陽 会
お問合せ 名古屋市長区二社三の一六二 久田 勘 事務所 電話052-734-1619
〇前売券二五〇〇円、当日券三〇〇〇円、学生一〇〇〇円
〇入場券はチケットぴあ 電話0570-102199(ピコ)七八六一二二二二
名古屋能楽堂及び各出演者宅

名古屋観世会定例公演

九月二十日(初)十二時半開演
名古屋能楽堂

子方 片山 峻佑 祖父 江 修一 観世喜之丞 橋本 忠樹 後藤 孝一 鹿取 希世 高安 勝久 杉江 元正 河村 総一郎 藤田 六郎兵衛
能 花 筐 高安 勝久 杉江 元正 河村 総一郎 藤田 六郎兵衛
後見 武田 邦久 梅田 嘉安 地謡 須部 甫 一政 久田 勘 梅田 邦久 敏彦
狂言 雁大名 佐藤 友彦 佐藤 謙 井上 清浩 後見 井上 弾喜
仕舞 放下 僧 小松 幸親 高橋 藤一 大槻 文藏
通小町 清沢 一政 橋本 忠樹 船戸 昭弘 大野 誠
能 小鍛冶 橋本 忠樹 船戸 昭弘 大野 誠
後見 梅田 邦久 武田 大志 地謡 吉沢 八神 孝充 梅田 邦久 敏彦 加賀 田 邦久 祖父 江 修一
附 祝 言 (録音五時頃)
主催 名古屋観世会
事務所 名古屋市長区向2-1-16 15 電話 052-841-4632
入場券 六〇〇〇円
前売券取扱所 名古屋能楽堂(052・231・0088) 名古屋観世会事務所(052・841・4632)

指定席 (正面・脇正面) 五〇〇〇円
自由席 (中正面・脇正面後方) 四〇〇〇円
学生席 (自由席のみ) 二〇〇〇円
申込み 片山 峻佑・高橋 保存財団 (075555516335) 名古屋能楽堂 (0522331000) 茶アプレチケ92 (0522331000) チケットぴあ (0570102199) ・ピコ140557047
主催 名古屋片山能制作委員会
終了予定午後四時四十分頃



「観能独語」は後に1冊にまとめられ、平成元年12月、刊行される。その表紙。

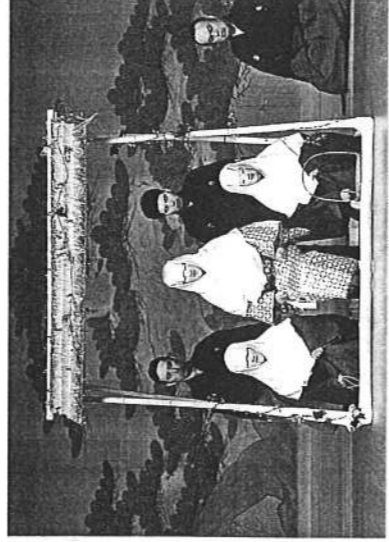
「観能独語」は後に1冊にまとめられ、平成元年12月、刊行される。その表紙。

「観能独語」は後に1冊にまとめられ、平成元年12月、刊行される。その表紙。

「観能独語」は後に1冊にまとめられ、平成元年12月、刊行される。その表紙。

「観能独語」は後に1冊にまとめられ、平成元年12月、刊行される。その表紙。

「観能独語」は後に1冊にまとめられ、平成元年12月、刊行される。その表紙。



幸誦会能「大原御幸」 左より塩谷恵、近藤幸江、多久島法子 (杉浦賢次氏撮影)



幸誦会能「大原御幸」 左より斎藤信隆、近藤幸江、塩谷恵、多久島法子、飯富雅介 (杉浦賢次氏撮影)

「大原御幸」 平清盛の息女、徳子は後白河法皇の息男、高倉天皇に嫁して建礼門院、安徳天皇を授かるが後に七歳の幼帝と壇ノ浦に入水。独り源氏に救われて都に送られ、尼となり寂光院に隠棲、亡き人々を弔う日々。そこを見舞う義父・法皇、嫁、建礼門院から入水に至る顛末を聞くという歴史の一輪。

◆仲夏の舞台から◆ 「幸誦会能」第35回能にしたしむ会 「名古屋観世会定例公演」 「名古屋宝生会定式能」 竹尾邦太郎

「観能独語」は後に1冊にまとめられ、平成元年12月、刊行される。その表紙。

「観能独語」は後に1冊にまとめられ、平成元年12月、刊行される。その表紙。

「観能独語」は後に1冊にまとめられ、平成元年12月、刊行される。その表紙。

「観能独語」は後に1冊にまとめられ、平成元年12月、刊行される。その表紙。

「観能独語」は後に1冊にまとめられ、平成元年12月、刊行される。その表紙。

「観能独語」は後に1冊にまとめられ、平成元年12月、刊行される。その表紙。

「観能独語」は後に1冊にまとめられ、平成元年12月、刊行される。その表紙。

「観能独語」は後に1冊にまとめられ、平成元年12月、刊行される。その表紙。

「観能独語」は後に1冊にまとめられ、平成元年12月、刊行される。その表紙。

「観能独語」は後に1冊にまとめられ、平成元年12月、刊行される。その表紙。

「観能独語」は後に1冊にまとめられ、平成元年12月、刊行される。その表紙。

「観能独語」は後に1冊にまとめられ、平成元年12月、刊行される。その表紙。

「観能独語」は後に1冊にまとめられ、平成元年12月、刊行される。その表紙。

「観能独語」は後に1冊にまとめられ、平成元年12月、刊行される。その表紙。

「観能独語」は後に1冊にまとめられ、平成元年12月、刊行される。その表紙。

「観能独語」は後に1冊にまとめられ、平成元年12月、刊行される。その表紙。

和泉流狂言大会

名古屋能楽堂 (初日) 九月二十五日(土) 正午開演 (二日目) 九月二十六日(日) 十一時開演

Table listing the cast members for the '和泉流狂言大会' (Wakusei-ryu Kyogen Taikai) at Nagoya Nohkan, including names like 墨塗, 伊呂波, 腰祈, etc.

③面よりつづき) 惟光を招き寄せ、と正中から半部門を見込みへあの花折れ、と左手指シ、扇を開き扇面に夕顔の花を載せる心に両手で捧げ出で、へ源氏つくづくと御覧して、と扇面にまじく目を落とすとところ、感慨も無量の趣。序之舞は特能で長絹を着けないので袖被くことも、また、上げた半部の下へ入ることもなく、さりりと粋な印象。キリはへ告げ渡る東雲、とワキ柱の方へ雲ノ扇、地のうちに一ノ松の半部門へ入り、背を向けたま、拍子は踏まずトメ。ワキは知らない若い人だったが直進に動め清新。シテ慶次郎の完全回復を祈るや切。(1時間21分)

「纏胸」主(アト薫)、何某(次アトやすし)との賭けに負けて太郎冠者(シテ正邦)を担保に何某方へ渡るが、面に向かいその旨を申し渡すのは流石に後ろめたいか、文(ふみ)に認めて持たす。よく働くというので引受けた。何某だが、主に騙された太郎冠者は面白くない。胸中には主に對する鬱たる怒りがあり、行き掛かり上「随分お目星に使用う下されい」と言ひ余、金輪際上げつない主の役には立つまい、の氣構え、用を言い付けられ、は悉く反発、口美を設けて拒否。手古摺る何某が金銭で真用を申し入れに行けば、またしても主の悪巧み、何某との示し合わせにまんまと嵌まる太郎冠者。謀とは知らず主の仕打ちを語るが、戻された癖しざ、早速、主に纏を縛うよう言い付けられ、は、逐一反復する何某との会話。後ろに控える主が何某と入れ替ったのにも気付かず、何某の細君の悪口雑言から小重を痛め付けたことまで、仕方を交しえ得々と話すところ、精彩。老獪な主と何某を相手に太郎冠者の大熱演。(44分)

「祝・思立之出・十三段之舞」小書でへ思ひ立つ心ぞ、と謡いつ、出る旅僧(ワキ欣哉)、一ノ松で名宣、夕べを重ねて舞台は都、六条河原院に着き暫時休息のところ、夕汲の老翁(前シテ伸吾)が前後の田子の紐を手繰らすに出る。面朝倉尉・嵯峨黄・小格子着付・茶水衣・白絹染分際裏の

姿、一ノ松で、月の出に汐が満ち心ししい浦の趣を詠嘆する間もなしい一セイを謡うと、小書でサシ。下歌、上歌を省き舞台へ。海辺でワキとの問答に、頼大臣の風雅な故事に触れ、へ霧の籠の鳥隠れ、とワキ正を見通す姿が佳。塩釜ノ浦京都に写した調れを語るシテ語は正中下居、時々ワキにアシラフだけだが地(清司・保向・邦弘)が受け下歌、へあら昔恋しや、で感極まり、膝を抱き固伏せし、上歌へ音のみ叫く許りなり、と背を曲げ双シラリの慟哭に、ワキも「只今の御物語に涙涙致して候」と。この温った空気を変えようの心で、ワキがシテに名所を教えるよう促せば、興にまかせてそれに時を忘れるシテ。両者の歯切れのよい問答から掛合が惹きつける。汐汲を忘れかけてシテ、へいざや汐を汲まんとて、と一ノ松へ戻って田子を担ぎ、正先右の榎一杯に出ると、右、左、と外から鎌やかに汲む。中人は背後に田子を捨て二ノ松へ、一度踏み止めへ跡をも見せず、静かに入る。頼大臣に纏わる事柄を訊れるワキの求めに、所ノ者(アト茂)の淡々とした屋語が濟むと後場。

頼大臣(後シテ伸吾)は面中将・小立烏帽子・黒垂・襟白二・縫箱着付・赤地花菱七宝葺き文半切・白直衣・太刀の気品ある姿。へこ、にも名に立つ白河の波の、で捨てた扇が端正の扉まで飛んで止まる妙。へ受けたり受けたり、で拾うと曇み、常座で連拜、早舞に。舞の中、幕際から三鼓の流シで戻ると、早舞は直り急之舞。スミで扇を左手に替え二ノ松へ、一ノ松に戻って扇面を両手に携げ持ち舞台へ入って来るところなど、遊樂の気分濃湛。舞あとの型もキどくと極め、キリはへ聲となり雨となる、と四ツ拍子踏み、へこの光陰に、と左袖巻キ、地のうちに入りワキ留メ。悠揚迫らぬ頼大臣の風格には典雅清涼の趣も。唯子方は市和・一郎・有祥・敬介、後見に欣司・淳喜。(1時間47分・6月12日・第35回能にしたしむ会・京都観世会館)



観世会「雨月」片山幽雪

観世会「雨月」片山幽雪

「雨月」西行法師(ワキ勝久)、住吉參詣への彦次、刃りの草庵に宿を乞えば、尉(シテ幽雪)は担み焼(ツレ薫空)は承諾するが、破れた軒から月を窺てたいつしと、軒を葺き雨の音さらに、は落葉降る音も聞きたいシテ、書こうか書くまいかしている草庵の何処にお泊りを、と思案の老夫婦。シテ・ワキ掛合のうち、不図シテの口を出た言葉へ尉が軒端を葺きを煩ふ、を返復すると、思わす「面日や即ち歌の下の句なり」と己れの囚きを自覺するところ、床几のシテに腰浮かさんばかりの心がみえ妙味。上の句を付ければ信は惜しまず、のシテの言葉に早速一首を整えるワキ、シテがその上の句を詠み、シテ・ワキ連吟で一首を詠むところもよかつた。へ面白の言の葉や、と扇で膝を打つシテ、地(清司・邦弘・正邦ら)となりシテとツレ大板屋(草庵)を出て下居。雨より月に執心のツレが、シテと掛合で雨に構うのも面白、へ雨にてはなかりけり、とシテは立つと舞う。月を貝、軒端に松の風を聞き、波言近くワキの眠りも楽しされるが、結構な感めようとする、め(写真)、扇開きへ時雨せぬ夜も時雨する、と謡い、へ木の葉の雨の(訪れに)、と左右、へ染めて色々の木の葉衣の袖の上、と右袖を左手でつまんで披けへ月影に、と右へ見

へ。へその風、とワキを見込み、へ神託を仰ぐべし、と勾欄に寄ると、へ神は上らせ給ひければ、と右手の扇高々と挙げると、へもとの宮人、と明神の憑依が解けたか、地のうちに入り、ワキが常座下居居手に見送り、立つてトメ

た。面は気品のある白い小牛尉、前後同じなのは曲の中の宮人の存在の重さ、同一人格の強調か。シテの滋味抑すべき舞台だった。(1時間22分)

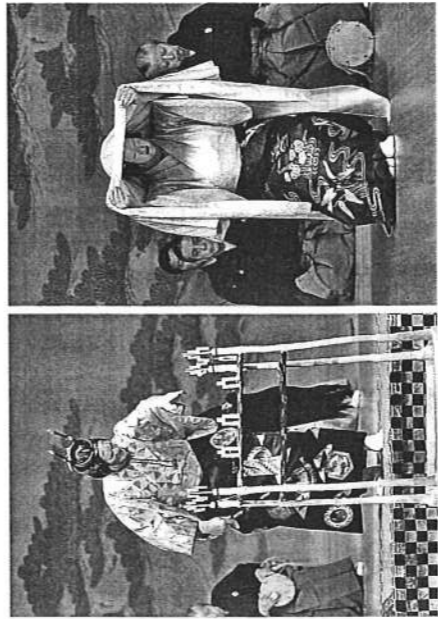
「文荷」若菜連に依る主(アト友彦)、若菜連は兼道、陰間とも。当世ならホモセクシャル、略してホモ、同性愛。陰の存在も市民権を得て同性結婚を認めないのは憲法違反との州も米国に。それはさておき、主は太郎・次郎両冠者(シテ融・小アト郁雄)に相手なく満殿宛の文を持たせる。文如き二人を使いに出すのは一人に連を覚えさすため。行く道で二人の交わす問答が可笑しくも可哀しい。代り番こに持つのは未だしも、重いからと文を背に結び二人で掛け、片寄っては不均衡と文が真ん中にくるよう互いに「つーう」「つーう」と竿に滑らせるのが無邪気なら、主の所行を茶化し、揶揄し、嘲笑するところ、普段の鬱憤晴らしもみえ、可笑もいっそ楽しい(写真)。果ては悪逆山賊が更に暗進、文の中味を読み引つ張り合い、千切れて、使いは何処へやら、千切れた文を捨ててなるなら小謡節でと悪のり、先方へ行きつとところか迎へに出た主とバツクリ。活きの良い両冠者、伸びく楽しんでやっているのが可。(25分)

「鉄輪・早鼓」男の不義を恨み、真船神社へ丑刻詣りに男を折り殺さんと女(シテ正邦)、小書で女笠はかぶらず被衣で出るのが



観世会「文荷」左より佐藤融、今枝郁雄、佐藤友彦

観世会「文荷」左より佐藤融、今枝郁雄、佐藤友彦



観世会「鉄輪・早鼓」古橋正邦

観世会「鉄輪・早鼓」古橋正邦

如何にも陰に籠もる。待ち受ける社人(アト俊裕)から神託を伝えられ、人連えではと訝るが、神託通りにするつもりになるや(写真)俄に變る面色。へ(今はは)美女の姿、と被衣を取り、へ立つと面切り、恨みの鬼となりへ憂てるなら小謡節でと悪のり、先方へ行きつとところか迎へに出た主とバツクリ。活きの良い両冠者、伸びく楽しんでやっているのが可。(25分)

後場、悪夢にうなされるという男(ワキツレ幸)が陰陽師・安倍晴明(ワキ雅介)を頼れば、設けられる経壇。ワキがへ謹上再拜、と幣を敷い、祈機を済ますと天地鳴動の妖気に女ノ生靈(後シテ正邦)が一ノ松に。面は橋姫、へ娘の赤き鬼となつて、舞台へ入つてくる一重台に上がり、膝つき、形代に向かいクトキの怒嘆は、へ捨てられて、の地邦久、勤鶴一政らでシラリ、そのまゝ、立つと常座へ。忘

三十番神に責められ、通力自在の勢いが奏えてゆくところ、麗える打板にみせた。(1時間7分・6月13日・名古屋観世会定例公演)

「小響」冒頭、廷臣(ワキ雅介)が名宣に一曲の全貌権かり語り舞台を整う。高倉帝の寵姫・小管ノ局(ツレ愛)、皇后が平清盛の息女ゆえに憚り失跡、帝は廷臣を通して源仲鼓(飯一・昭弘)で走り込むところ、男を拉致して行くかに思われた。後場、悪夢にうなされるという男(ワキツレ幸)が陰陽師・安倍晴明(ワキ雅介)を頼れば、設けられる経壇。ワキがへ謹上再拜、と幣を敷い、祈機を済ますと天地鳴動の妖気に女ノ生靈(後シテ正邦)が一ノ松に。面は橋姫、へ娘の赤き鬼となつて、舞台へ入つてくる一重台に上がり、膝つき、形代に向かいクトキの怒嘆は、へ捨てられて、の地邦久、勤鶴一政らでシラリ、そのまゝ、立つと常座へ。忘

孔待ぬ思いは一転、勃然と沸き上がる怒りは、命を取らん、と再度台上へ。へ後妻の髪を、と手を伸はず(写真)真・瘻まじい殺気は、へ思ひ知れ、と強く打板を振り下ろすところ、止めを刺さんとする気魄も如実。キリは勢いが奏えてゆくところ、麗える打板にみせた。(1時間7分・6月13日・名古屋観世会定例公演)

「小響」冒頭、廷臣(ワキ雅介)が名宣に一曲の全貌権かり語り舞台を整う。高倉帝の寵姫・小管ノ局(ツレ愛)、皇后が平清盛の息女ゆえに憚り失跡、帝は廷臣を通して源仲鼓(飯一・昭弘)で走り込むところ、男を拉致して行くかに思われた。後場、悪夢にうなされるという男(ワキツレ幸)が陰陽師・安倍晴明(ワキ雅介)を頼れば、設けられる経壇。ワキがへ謹上再拜、と幣を敷い、祈機を済ますと天地鳴動の妖気に女ノ生靈(後シテ正邦)が一ノ松に。面は橋姫、へ娘の赤き鬼となつて、舞台へ入つてくる一重台に上がり、膝つき、形代に向かいクトキの怒嘆は、へ捨てられて、の地邦久、勤鶴一政らでシラリ、そのまゝ、立つと常座へ。忘

「地蔵舞」旅人に宿籠りならん大法に、笠だけ頂かつてと亭主(アト小三郎)に頼む旅僧(シテ友彦)、一旦別れるがこつそり戻り笠をかぶり居座。氣付いたアトに咎められ、ば、笠の下の領有権を主張するシテ。それなら、とアトは笠の領域からはみ出る身体を、此処が出た、彼処が出た、と打撃すれば、その都度身体を縮め、避けるシテを面白がり、大法を敬ることに。落着いたシテが経を読み出せば、「密かに宿を貸すにそのやうに声高に経を」とアトに叱られもするが、寝酒を嗜むアトに付き合わされ、ば、一日は飲酒戒を言つても、飲むのでなく吸う分には、と相伴に与るのもおかしいシテ。酒が入れば当然骨に謡のくさりや小舞、へ心の底までも汲みて知る法の真水と思し召して飲酒の心とけて一つきこし召されよ、と「木賊」のくさりにも勧められては飲まず居られまい。シテのへぢさんさ、から「これを舞立ちに致しませう」と地蔵舞に。山鷹派と又三郎派の違着、競演は力が入った。(28分)(名古屋宝生会定式能、この項次号に続く)

以下次号

【前号の訂正】
4頁3段・後から6行目
土地↓当地
5頁4段5行目
業平↓四位少将

能 楽 の 友

発行 能 楽 の 友 社
 名古屋千種区千種2丁目18-18
 (郵便番号 464-0858)
 電話 (052) 731-7984
 FAX (052) 733-2837
 振替口座 008000-6-36393

購読料 1年 1100円
 送料 1年 1800円
 郵送の場合 1年 1000円

NHK放送予定(平成22年9月~10月)

■NHK-FMラジオ能楽鑑賞(毎週日曜日7時15分~8時)
 9月26日 素謡 「松虫」(再) 朝倉俊樹
 10月3日 素謡 「朝長」(観世流) 山本順之
 10月10日 素謡 「粘」(宝生流) 三川 泉
 10月17日 素謡 「三井寺」(喜多流) 塩津哲生
 10月24日 金春(信高さんの人と芸)
 10月31日 狂言 「昆布売」(大藏流) 善竹忠重
 狂言 「腰不立」(大藏流) 網谷正美

演 能 カ レ ン ダ ー

◆名古屋能楽堂 (TEL 052-231-0088)

(能・狂言演能関係)
 (9月) 和泉流 狂言大会 (番組③面) (無料)
 25日(出) 和泉流 狂言大会 (番組③面) (無料)
 26日(日) 和泉流 狂言大会 (番組③面) (無料)

(10月)
 2日(出) 観世九皇会百周年記念特別公演 (番組①面) (有料)
 3日(日) 名古屋猶諷会秋の大会 (番組①面) (無料)
 17日(日) 邦謡会発表会 (番組①面) (無料)
 22日(金) 名古屋能楽堂10月定例公演 (番組②面) (有料)
 24日(日) 三松交謡会 (番組②面) (有料)
 30日(出) 松田謡楽会 (番組②面) (無料)
 31日(日) 武田謡楽会 (番組③面) (無料)

能 古 屋 金 春 会 能

11月7日 名古屋能楽堂

能「頼政」「海人」

名古屋秀麗会、名古屋春栄会主催によりきたる11月7日(日)名古屋能楽堂で「第31回名古屋金春会能」が開催される。午後2時開演。

能組は、仕舞「忠度」(鬼頭高久「寛頼寺」(高橋汎)
 能「頼政」(シテ本田光洋、ワキ高安勝久)
 狂言「貫賢」(今枝郁雄)
 仕舞「笠ノ段」(本田布田樹)
 「老松」(金春安明)
 能「海人」(シテ金春總高、子方金春嘉織、ワキ飯富雅介)

能 久 田 勘 鷗 の 会

亡父追善と勘吉郎「初面」

11月23日 第21回特別公演

観世流シテ方、久田勘鷗師が主宰する「能久田勘鷗の会」はこのたび第21回を迎え十一月二十三日(火)祭特別公演を開催する。

亡父久田秀雄師27回忌追善とともに、嫡男勘吉郎君(15歳)が「初面」で能「花月」を演じ、後に観世宗家がつとめる。家元清見に観世流シテ方、久田勘鷗師が主宰する「能久田勘鷗の会」はこのたび第21回を迎え十一月二十三日(火)祭特別公演を開催する。

亡父久田秀雄師27回忌追善とともに、嫡男勘吉郎君(15歳)が「初面」で能「花月」を演じ、後に観世宗家がつとめる。家元清見に観世流シテ方、久田勘鷗師が主宰する「能久田勘鷗の会」はこのたび第21回を迎え十一月二十三日(火)祭特別公演を開催する。

チケット料金(正面指定席)5000円、自由席4000円
 前売券取扱「名古屋能楽堂」(052-231-0088) 名古屋金春会(052-8066479)コトウ)

萬 歳 楽 座 公 演

10月29日 国立能楽堂
 東京 藤田六郎兵衛師(雷方藤田流十一世宗家)が主宰する観能の会「萬歳楽座」は、10月29日(金)東京・国立能楽堂で第2回公演として能「葵上」を上演する。

平成22年度文化庁芸術祭参加公演。午後6時30分開演。

能組は、能「葵上」古式、シテ梅若女将、ワキ定生閑、笛・藤田六郎兵衛、小鼓・大倉渡次郎、大鼓・亀井忠雄、太鼓・助川治、地頭・片山幽雪。

舞踊「安宅」(大槻文蔵) 運営「津島」(増隆之 藤田六郎兵衛 松田弘之)

尾 張 徳 川 家 の 名 宝 特 別 展

10月2日から徳川美術館
 徳川美術館では、名古屋開府400年、徳川美術館・遠左文庫開館75周年を記念して「尾張徳川家の名宝特別展「国宝・初音の調度」展を開催する。

期間10月2日(土)11月7日(一般) 1200円、高天生7000円。

新 作 能 面 展

10月19日から 名古屋市博物館
 中部能面研究社(代表理事藤田氏)は、第8回の作品発表会「新作能面展」を10月19日(火)から24日(日)まで6日間、名古屋市博物館3階ギャラリーで開催する。

入場無料、後援 愛知県教育委員会、名古屋市教育局、名古屋教育委員会。

出展作品は、約五十点、伝統技法による制作、研鑽の作品を一覧に出席する。

開場は午前9時30分、閉場午後4時45分(最終日は午後4時まで)、中部能面研究社/名古屋市瑞穂区船原町4-16-10-1102、電話052-882-4310。

能組は、能「花月」能「木曾」はじめ狂言「角説法舞踊子」当麻仕舞「清経」羽衣「隅田川」、さらに「玉ノ段」「野宮」「野寺」の上演。

指定席前売二〇〇〇円、自由席一〇〇〇円、学生五〇〇円。問い合わせ、注文は、久田勘鷗事務所(TEL052-7346192、FAX052-7051585)、名古屋能楽堂(TEL052-231-0088)。

自由席券は三越、松坂屋、愛知芸術文化センターなど。

名 古 屋 猶 諷 会 秋 の 大 会

10月3日(日)午前九時三十分始 名古屋能楽堂

素謡 松 風 河合敦子 梅若修一
 仕舞 卷 絹 松崎寛子
 田女 郎 盛 水野祐利
 村花 中村明美 迪子
 素謡 松 風 河合敦子 梅若修一
 仕舞 天 鼓 青山順子
 若 波 神谷千津
 葵 上 立花香寿子 梅若 櫻 井戸 良祐
 菊 池 敏子 井戸 和男
 半 部 大 林 治郎 河合紀代美
 頼 政 菊池敏子 井戸 和男
 番 組 立花香寿子 梅若 櫻 井戸 良祐
 素謡 松 風 河合敦子 梅若修一
 仕舞 天 鼓 青山順子
 若 波 神谷千津
 葵 上 立花香寿子 梅若 櫻 井戸 良祐
 菊 池 敏子 井戸 和男
 半 部 大 林 治郎 河合紀代美
 頼 政 菊池敏子 井戸 和男
 番 組 立花香寿子 梅若 櫻 井戸 良祐

能 安 宅 工藤和哉 河村真之介 藤田六郎兵衛
 瀧 進 高橋 井上 靖浩
 流 富 下 今 枝 郁雄
 後見 長沼 範夫 桑田 貴志 弘田 裕一
 観世 喜之 古川 久 観世 喜正

追 加 後見 長沼 範夫 桑田 貴志 弘田 裕一
 観世 喜之 古川 久 観世 喜正

(終了予定午後四時半頃)

能 狂 言 栗 焼 佐藤 融 鹿島 俊裕 後見 佐藤 友彦
 観世 喜正 五木田 三郎 地謡 弘田 裕一 和久

仕舞 實 盛 観世 喜正
 半 部 五木田 三郎 地謡 弘田 裕一 和久
 鞍馬 天狗 観世 喜正

能 舞 山 姥 立花香寿子 西田 晃一
 久次米安祐 西田 晃一
 舞 松 風 観之舞 厚見 ゆり子
 通 小 町 武原 美恵
 高 砂 小 濱 亨子
 番外 舞 土 蜘蛛 梅若 秀成 梅若 猶義

能 觀 世 九 皇 会 百 周 年 特 別 公 演
 二世観世喜之三十三回忌追善
 10月2日(土)午後一時始 名古屋能楽堂

能 杜 高橋 一 船戸 敏一 加藤 洋輝
 若 飯 富 雅介 船戸 敏一 加藤 洋輝
 恋之舞 船戸 敏一 加藤 洋輝
 後見 飯坂 真太郎 地謡 桑田 貴志 瀬 喜久夫
 観世 喜正 小島 秀明 中 所 宣夫
 地謡 佐久間 啓吾 中 所 宣夫
 観世 喜正 鈴木 啓吾 中 所 宣夫
 地謡 佐久間 啓吾 中 所 宣夫
 観世 喜正 鈴木 啓吾 中 所 宣夫

邦 謡 会 発 表 会

10月17日(日)午前九時半始 名古屋能楽堂

素謡 山 姥 立花香寿子 西田 晃一
 久次米安祐 西田 晃一
 舞 松 風 観之舞 厚見 ゆり子
 通 小 町 武原 美恵
 高 砂 小 濱 亨子
 番外 舞 土 蜘蛛 梅若 秀成 梅若 猶義

神 歌 加藤井知子 才 長谷川雅彦
 鶴 亀 加藤井知子 長谷川雅彦

素謡 三 井 寺 種村とし江 寺沢みづ
 野田 ぶつ 鼓 兼松 三依

仕舞 田 村 林 昭 天 鼓 兼松 三依
 素謡 弱 法 師 養徳 敏子 森崎 紀子
 仕舞 松 風 岩田 玄子 網之段 平泉 和子
 素謡 野 宮 飯島美津代 後藤とき子
 舞 羽 衣 森 明美 蟬 丸 井上 菫枝
 野 守 森 幹子

素謡 實 盛 遠山美津子 沖見 十ナカ
 野田 ちづ子 森崎 紀子
 仕舞 西 行 桜 高野 勢子 石 礎 森崎 紀子
 素謡 定 家 佐藤 英生 古賀 則弘
 舞 歌 占 三浦 昌子 遊行柳 青柳之舞 岩田 時代
 藤 戸 三 口 謙介

素謡 景 清 尾藤 英邦 木村 万寿童
 仕舞 卒 都 婆 小 町 近藤 とき子
 素謡 山 姥 岩田 安子 高野 勢子 平泉 和子

番外 舞 菊 慈 童 梅田 邦久

(終了 六時頃)

主催 邦 謡 会 梅 田 邦 嘉 久 宏

能 百 梅若 利成 日下 幸子 飯富 雅介 寛 敏一 上田 博也
 法義之舞 後藤 繁輝 幸 鹿取 希世

能 舞 山 姥 立花香寿子 西田 晃一
 久次米安祐 西田 晃一
 舞 松 風 観之舞 厚見 ゆり子
 通 小 町 武原 美恵
 高 砂 小 濱 亨子
 番外 舞 土 蜘蛛 梅若 秀成 梅若 猶義

能 羽 安東 知代 高安 勝久 河村 俊一郎 上田 慎也
 理義之舞 後藤 孝一郎 藤田 六郎兵衛

素謡 山 姥 立花香寿子 西田 晃一
 久次米安祐 西田 晃一
 舞 松 風 観之舞 厚見 ゆり子
 通 小 町 武原 美恵
 高 砂 小 濱 亨子
 番外 舞 土 蜘蛛 梅若 秀成 梅若 猶義

附 祝 言 (終了予定 午後五時四十五分頃)
 主催 梅 若 吉 之 丞 梅 若 猶 義

当地の各流儀・流派・結社・社中の消息を辿る

竹尾 邦太郎

六、「大衆能」④

――承前――

第二回は昭和五五年九月七日、先々回(九回)に続き舞台は熱田神宮能楽殿。先号で既述の「観能独語」、前田満穂は目録で「今年の大衆能は熱田の能楽殿。文化講堂や市民会館などの便利で広い場所が、どうしても借りられなかったとあれば仕方がないが本当に残念だ。いくら詰め込んでもせいぜい五、六百人では大衆能の意義が半減する」と歎く。

観客動員の関係もあつたらう、先々回の二部制があまり評判が良くなかったので今回は一回興行。能組は能「安宅」久田秀雄・同山久田徳二・加賀敏彦・中村和男・今村嘉勇・高橋藤一・加藤保彦・中川雅章・松山忠司(子方)西村欽也(づき)野村又三郎(強)井上礼之助(従者)・仕舞四番「淡路」生駒里翠(維正クセ)服部紗枝・鼓之段「杉村竹翠」雨之段「殿島修二」連吟「花壇クルヒ」後藤実繁・犬飼末吉・仕舞「紅葉狩」前田茂穂、舞囃子「善知鳥」吉川周子、一調「鵜飼」鬼頭八郎、二井柴逸(謡)、能「生田敦盛」衣装正直・愛(子方)西村欽也、狂言「金糸」野村信行・佐藤融・野村又三郎、能「百万」長田驥・郷(子方)飯富雅介・佐

藤彦彦、狂言「腰折」井上礼之助・井上松次郎、佐藤友彦、能「船弁慶」梅田邦久(前)清沢一政(後)梅田敏史(子方)高坂藤弘・飯富雅介・大野弘之。他に本田光洋・大島久見・政允が来演。能四番、堂々の番組だがその全てに子方が、また「安宅」と「船弁慶」では共に弁慶と義経が登場、少々煩い。

第二回は昭和五六年九月六日、愛知文化講堂。「観能独語」に次の記述がある。

「会場が文化講堂に復帰したことをまず喜ぶたい。

「たしかに、能楽殿で大衆能は無理だ。関係者の努力、理解に敬意を表したい。

「しかし、その割に入場者が多くなかった。「予想よりは多かつた」という声もあるが、われわれとしては、はいとまでいかなかった。大衆能だからね。まず数人がなくては成功といえない。

「質もだ。安値興行だからといって、質を下げては大衆能の意義がなくなる。いいものを安く、沢山の人の目にもらおう、これが本来のねらいだろう。

「何でもねらい通りいくものなら苦労はない。結果だけを見ての判断は酷だろう。

能組は能「高砂」久田秀雄・本田勲・西村欽也、飯富雅介、杉江元・井上松次郎、仕舞六番「玉之段」熊澤惠美子「笠之段」服部紗枝「巴」水野元三「鐘之段」河村鉦二「阿漕」杉村竹翠「邯鄲」前

「別に酷なことをいつてつてもりはない。関係者の努力、苦労は重々みとめるにやぶさかでないが、いささか旧態依然たり、の感は否めないな。

「能四番、狂言二番、これに仕舞、舞囃子がつくのは御馳走が過ぎはしないか。二十周年のときに五番立ての本格的能組を見せたが、あれはご祝儀の別格、ふだんは能は、能三番、狂言二番が精いつばいではなからうか。

「一気の短いままのお客にはその辺が無難なところだろう。無理に五流を揃えなくてもよいじゃないか。毎年やるのだから一年交代という手もあるろ。

「それに能四番が、いかにも奇せめめのような感じで、安易に組まれた、といつては語弊があるが、いささか苦心経営の迫力に欠ける。舞台面にも、それが影を落としていたと見るほど目か。

「八月の新能は恒例の年中行事化して大成功、設備も進行も演技もそれらしく定着し、満場の観衆を満足させた。あれにくらべると大衆能は歩が悪い。新能とはいうもの、あれも一種の大衆能、同じ性格の催しを二度つづけることに問題はないか。

「それはないと思う。しかし「夏の夜の風物詩」ともいうべき格別の魅力をもたない大衆能だけに、新能に負けないだけの魅力を考え出さないとけないね。

――後略――

能組は能「高砂」久田秀雄・本田勲・西村欽也、飯富雅介、杉江元・井上松次郎、仕舞六番「玉之段」熊澤惠美子「笠之段」服部紗枝「巴」水野元三「鐘之段」河村鉦二「阿漕」杉村竹翠「邯鄲」前

田茂穂、狂言「真蓮」野村又三郎・井上松次郎、佐藤友彦、能「半部」玉井博祐、西村欽也、井上礼之助、舞囃子「福」真田康文、能「小袖曾我」須部甫、祖父江修一・安藤勝朗(団三郎)松山幸親(鬼王)加賀敏彦(母)野村又三郎、狂言「仁王」井上礼之助・大野弘之(何某)佐藤友彦、歌村鴻助、石田喜樹、鷺見政行、大矢高義、今枝良治、野村又三郎(殿)、能「小鍛冶」長田驥、飯富雅介、杉江元、松井直子。本田光洋、辰巳孝、豊嶋三千春、大島久見、政允、梅津忠弘が各流地謡に来演。

第三回は昭和五七年九月一日、愛知文化講堂。能組は能「巴」久田徳二・飯富雅介、狂言「墨塗」野村又三郎・井上礼之助・佐藤友彦、能「井筒・物着」梅田邦久、西村欽也、仕舞二番「鉄輪」長田驥「松風」林鉄郎、舞囃子二番「玉鬘」百々藤治「通小町」殿島修二、能「籠太鼓」吉田俊彦、西村欽也、野村又三郎、狂言「鏡男」井上松次郎、大野弘之・佐藤友彦、能「素上・袴之出」近藤幸江、飯富雅介、杉江元、大野弘之。他に本田光洋、豊嶋三千春、辰巳孝が来演。

第二回は昭和五八年九月一日、舞台を屋外に求め熱田国神社境内での新能。因に昭和三五年(一九六〇)大衆を標榜して発会以来、平成九年(一九九七)第三八回「大衆能」まで屋外能はこの時だけ。例によって前田満穂著「観能独語」の記述から次項。

大衆能がホールから野外へ飛び出した。全くの様変わり、いや驚きましたな。飛び出した先が護国神社境内、回廊風の社殿を背景に利用して、まずは見事な舞台装置。ただしこれが新能形式で、当然のことながら夜能です。

新能といえは、既に氷の間売り込んだ熱田神宮の新能が八月六日にあつたばかり。ほぼ一ヶ月遅れで、場所こそ違え同じ神社の境内で華能とは「考えましたな」とほめたいところですが、無条件にはほめられない気がします。

理屈をいえは、熱田神宮の新能

名古屋能楽堂十月定例公演

十月二十二日(金)午後六時三十分始
名古屋能楽堂

狂言 朝比奈 (和泉進) 鹿島 俊裕 佐藤 融
河村 総一郎 加藤 洋輝
船戸 昭弘 大野 誠
後見 佐藤 友彦

能 大江山 (宝生遊) 衣装 正直 高安 勝久 橋本 幸元
河村 総一郎 加藤 洋輝
船戸 昭弘 大野 誠

間 井上 靖浩 今枝 郁雄
後見 玉井 博祐 愛 地謡 村上 茂 水 上 輝和 廣
衣 平野 幸三 久住 太郎

主催 名古屋市文化振興事業団
能楽協会名古屋支部

「チケット料金」
前売 指定四〇〇〇円、自由三〇〇〇円
学生二〇〇〇円
(当日五〇〇円増)

前売取扱いは名古屋能楽堂(電052・2331・0088)
プレイガイド(采アレチケ92・松坂屋ほか)
ナディアパーク階P.G.(電052・22655・2015)
チケットぴあ(電0570・0522・99999、P.コード406570・3688)

三交会大会

十月二十四日(日)午前九時十五分始
名古屋能楽堂

番外仕舞 敦 盛 小田三津子
仕舞 天東 北ケ 園 さなえ
鼓 北ケ 渡辺 きい
瀬戸 洋子

番謡 頼 政 藤吉 幸子 山内 弘司

仕舞 高 法 砂 篠田 武次
秋田 豊美子
富太 鼓 篠ケ 渡辺 幹子
増水 悦子

番謡 鵜 飼 篠田 武次 早川 功一
藤井 圓隆



能 辛都婆小町 加藤 寿子 高安 勝久 井林 清一 藤田 眞実 橋本 幸元 正樹 上田 敦史

能 井 筒 原田十恵子 飯富 雅介 上野 義雄 大野 誠
間 佐藤 融

仕舞 巴 菊地 翔子
船雲 雀 山若 高橋 珠子
舟 慶 藤井 一美
井 筒 藤井 圓隆

独吟 井 筒 江崎 澄子
辛都婆小町 秋田 豊美子
戸松 花枝

能 砧 伊藤 和美 光松 知子 高安 勝久 河村 総一郎 加藤 洋輝
後藤 孝一郎 鹿取 希世
間 井上 靖浩

舞囃子 胡 蝶 梅村 ひろみ 井林 清一 加藤 洋輝
船戸 昭弘 鹿取 希世

紅葉狩 後藤 阿紀 船戸 昭弘 鹿取 希世

遊行 柳 山内 清智子 井林 清一 加藤 洋輝
後藤 孝一郎 大野 誠

邯 鄲 坂井 七子 船戸 昭弘 鹿取 希世

舞囃子 小袖曾我 市川 美保子 井林 清一 大野 誠
後藤 孝一郎 河村 総一郎 加藤 洋輝

班 女 武藤 明美 福井 眞実 大野 誠
河村 総一郎 加藤 洋輝
後藤 孝一郎 鹿取 希世

卷 絹 山田 紗智子 河村 総一郎 加藤 洋輝
後藤 孝一郎 鹿取 希世

舞囃子 雲林院 後藤 弘次郎 上野 義雄 加藤 洋輝
福井 眞実 大野 誠

藤 戸 早川 功一 河村 総一郎 大野 誠
後藤 孝一郎

狸 々 瀬戸 勝治 上野 義雄 加藤 洋輝
福井 眞実 鹿取 希世

主催 三 交 文 会
久 田 三 津 子
「御来場歓迎」
お問合せ 名古屋市中東区三社一六二
電話 FAX 052・705・1585

松謳会大会

十月三十日(土)午前十時始
名古屋能楽堂

番謡 藤 戸(橋本 鏡子) 羽法師(新井 佳子)
雲林院(山本 保江) ほか

舞囃子 山 姥(橋本 鏡子) 松 風(白鳥 茂代)
融(山田 聡子) ほか

主催 松 謳 会
電話 052・681・1803

◆盛夏の舞台から◆

「名古屋宝生会定式能」と「名古屋能楽堂七月定例公演」第十一回御洒落
名匠狂言会「第六回金剛定期能」

竹尾邦太郎

「鳥遣」訴訟で永の在点の確
摩の国は日暮某(ワキツレ雅介)
の留守を預かる用人・左近尉(ウ
キ孝)、秋の人手不足を理由に主
人・某の妻子(シテ澄子、子方花
若、小林陸)を鳥遣しに使役。折
柄、摩国の某、一艘の鳥遣舟を漕
ぎ寄らせると、棹さすは左近尉。
舟中は妻子、と分かり手討ちにと
激怒するが、普信不通の上、十年
余の不在にも料が、の妻の執り成
して大団円。

前場、鳥遣いを命じられ「余り
に情なき事」と哀調反発のシテ
に、「十年に余り扶持し申す左
近ノ尉が情なきと仰せ候か」とキ
ツとシテにアシラフきつく冷たい
ワキの語調、表情が如何にも。
後場、従者(アと靖浩)に太刀
を持たせワキツレ日暮某(厚坂着
付・白大口・掛素袍・小刀・
笠、鼓鼓の賑やかさをアとに回
わせ、鳥遣舟と分かれば先ずは見
物、とワキ座へ。アとは切戸へ退

き、臆正に羯鼓を鳴子を付けた舟
が出る。鳥遣いに駆り出された子
方とシテ(前シテの唐織着流しは
労働者らしく腰巻・水衣の姿に替
え笠を、ワキは素袍の肩を脱ぎ
ぎ、棹を持ち舟に。爽りを喜ぶワ
キに、へうつつなき、と世の惨な
さを嘆きシラル子方とシテ。へ
(此頃は)なほ秋雨の晴間なき、
と左ウケ左手を笠にやり肩上げる
シテの姿に哀感。ワキは舟を出、
後見座へ(演出上のことで心は当
然シテ・子方と共に舟中)。へ上
の空なる(顔みかな、とシテと
子方は下居、掛合に現在の境遇を
託ち、笠を脱ぐシテは何時まで此
の様な悲しい目にも、袖を濡らすべ
き、と安座双シヨリ。それを見答
め面話するワキ、シテと子方は立
ち鳴子ノ段へ。へ思ひ乱れて我が
心、とシテが羯鼓を打つところへ
しどろもどろ、の手捌きには、ぎこ
ちなさを心みせ、へ心の闇はま

以下次号

主従者の挨拶通り桜花尽しの酒
落た能組が阿日とも好評。就中、
初日の「花折」は「西行迷」のパ
ロディ、両曲を並べてみせるのも
うごさいます。愛知文化講堂にて
始めました大衆能も今年で二十五
回を迎えました。本年は能楽の本
来の姿にかえり能楽殿にて二日間

「春らんまんの頃となつてまい
りました。皆様にはお褒りなくお
過しの事と存じます。日頃は能楽
協会名古屋支部に対して、いろい
ろ御支援を賜わり、誠にありがた
うございます。愛知文化講堂にて

二日目、仕舞六番「桜川」殿島
修二「熊野」前田茂穂、能「三
山」竹内通子、戸田和、飯富雅介
・辰巳孝(地頭)内藤泰二
(副)、狂言「花盗人」井上松次
郎・井上礼之助、能「飯屋天狗」
久田徹二・松山忠司(牛芝)久田
菜美子・久田陽孝子・武田大和・
武田大志・西村欽也(ワキ)佐藤
友彦・大矢高義・小島一英(地
頭)武田邦弘(副)。

二日目、仕舞六番「松風」熊澤
能組は仕舞六番「松風」熊澤
美子「笠之段」河井隆子「玉之
段」吉川周子「軍北クセ」前田茂
穂「罽丸」殿島修二「葵上」久田
秀雄、能「安宅」勲進帳・瀧流
シ「梅田邦久・同山ハ久田徹二・
加賀敏彦・本田勲・高橋暎一・清
沢一政、須部甫・祖父江修一(子
藤勝明、松山幸親、梅田敦史(女
方)西村欽也、野村又三郎(強
力)佐藤友彦(従者)、能「羽
衣」内藤泰二 飯富雅介、杉江
元、狂言「六地藏」井上松次郎・
野村又三郎・井上礼之助、佐藤友
彦、大野弘之、能「狸々乱」長田
驥・山崎俊輔。他に本田光洋、辰
巳孝、大島久見、松井彬が来演。

にわたり開催する事になりました
た。折から熱田神宮の桜も満開と
存じますので桜花の曲を増えまし
た。どうぞ皆様夜桜見物少々御来
場賜りますようお願い申し上げます
す」と。阿日午後五時半始。能
組は初日、舞囃子二番「忠度」長
田驥、「花見」吉川周子、狂言
「花折」野村又三郎・井上松次郎
・井上礼之助、佐藤友彦、佐藤融
・野村信行、大矢高義、能「西行
迷」梅田邦久、西村欽也、高安勝
久、飯富雅介、杉江元、野村又三
郎、片山博太郎(地頭)慶次郎
(副)



名古屋能楽堂7月定例公演「鼻取相撲」 左より井上靖浩、佐藤友彦、佐藤融



名古屋能楽堂7月定例公演「郡邸」梅田嘉宏 (撮影・杉浦賢次氏)

だ晴れず、と左手を胸に、へずは
く群鳥の、では左ウケて招き扇
に追い立てる心みせるところな
ども確かに、群鳥が立つて、ワキ
から休憩を促され舟を出る子方は
地前、シテは小鼓前に下居する。
一方、ワキはワキツレが主人の日
暮某と分かると思縮、妻子を酷使
する調れを語問されて減黙するの
み。「何とて物をさ言はぬぞ」辺
りのワキツレの憤怒、大いに利
き。ワキは地(慶次郎・孝・莊次
郎ら)のうち子方・シテ、ワキ
ツレと入り、ワキが留ま拍子踏ん
だ。よく纏った所謂人情物の劇
能、面白かった。(1時間2分)

「轡飼」石和川で轡使の漁翁
(前シテ和美)、轡を休めに河畔
の御堂に上がり、そこでたまぐ
宿る旅僧(ワキ勝久ワキツレ元)
と出遇い、シテ・ワキ問答に。問
答のうち、ワキツレが以前当地の
轡使の世話になった事を思い出せ
ば、死んだと聞かされ、ワキはそ
の間の事情を問う。談々と語るシ
テの屋語も、禁漁区での密漁を見
張られ、捕えられる辺りは昂る語
気、簾巻に沈められる断末魔の苦
しみには面を伏せ、描写力中々。
更にワキの興を惹くかに、しんみ
り己れがその時の亡者と明かせ
ば、跡を引うゆえ、犯した殺生戒
の戒極に業力の轡を使つて見せ
よ、ワキに乞われる。シテはワキ
との掛合に松明と扇を使い分けて
はつと轡を放す型に轡ノ段へ。昔
執った柱柄とはかり、まびくと

「鼻取相撲」 「隠れもない大
名」などと大袈裟に名乗るが、
「召使の者は唯一人」と己れを弁
えてもいる大名(シテ友彦)も、
その唯一人の太郎冠者(アト融)
には気の置けない気易さ。一人で
は使ひ足りないから新参の者を致
多抱えようと相談を持ちかけ、
「そなたのお心任せて御座る」の
返事に「八千人ばかり」と途方も
ない。五百人に減らし、「まだそ
れでは堪忍(経済上の負担力)が
続きますまい」とアトにあれこれ
窘められ、「それならばクワツと
減して二人置かう」とシテ。極端
な減りように「二人置」と呆れる
アトに「そち共に二人置」とケ
ロツとして笑わせるシテ。この辺
り所謂相撲物狂言の作劇の常套、
シテとアト、阿吽の呼吸のみせど
ころ、おどかな稚氣のシテを庇
護するかに素直に付き合うアトが
よい。

アトが新参の者(小アト靖浩)
を回連すると、殊更聞えよがしに
威張り出すシテの無邪氣、小アト
が相撲を相手として相手に、立合い
先づ小アトの手がシテの鼻梁を捉
えて炸裂したとみるや、シテ脳震
盪。相手の技が鼻取と分かれば、
シテは鼻の要害に土器を装備、再
挑戦を(写真)。作敵効を養する
が、これで終りにしたいのを三度
挑まれ、必殺拳をハズされて敗
退、小アトに凱歌を上げさせ憤懣
連る方無いシテ。土器を外して立
つと無気味な沈黙。「やい、やい
そこな奴」と行司のアトに八ツ当
り、引き倒して入ると、立つてア
トは無然たる面持ち、無言で入
る。(46分)

「郡邸」 人生の旅に迷い羊飛
山に聖音を尋ねる青年・慶生(シ
テ嘉志)、途次、郡邸の里の宿
で、宿の女主人(アト郁雄)か
ら、夢に語りを譲す不思議な枕の
事聞き、興味を覚え一睡するこ
た。

武田謡楽会秋季大会
十月三十一日(日) 午前九時三十分始
名古屋能楽堂

番外仕舞 清	経 武田 邦弘
素謡 羽衣	安井多鶴子 上田 瑛子 川合 丰子 岡崎 千代 奥田えつこ 前川 桂子 坂 寛美子 澤美子 弘子
三井寺	井出モト子 長谷川邦彦 永田 慶子 塚本 正康 太田 晴代
山姥	片山 幽香
番外仕舞 班女	小瀬古喜代子 河村総一郎 井上 敬介 小瀬古勝巳 船戸 昭弘 藤田 六郎兵衛
半能 老松	飯富 雅介 河村総一郎 井上 敬介 紅橋 藤代 船戸 昭弘 藤田 六郎兵衛
仕舞 羽衣	白井 京子 下里 紀子 井内 英子 中村チエ子
江采女	田中 薫子 河村真之介 井上 敬介 藤田 六郎兵衛
当麻	豊田 一彦 河村総一郎 井上 敬介 藤田 六郎兵衛
弱法師	中島 成利夫 吉井 順一 片山 清司
独吟 竹生	片山 清司
番外仕舞 天鼓	廣 廣 田中 朋子 成 成 林 井ミツ子 シテ 林 いそ子 小林 彰夫 川崎 元彦 川合 丰子 齋藤 忠雄 松 眞澄 山本 三江
能 三輪	飯富 雅介 河村総一郎 井上 敬介 井上 靖浩 曾和 尚靖 鹿取 希世 (後シテ面「理」 辻岡勝洋・作)
選吟 俊寛	廣 廣 田中 朋子 成 成 林 井ミツ子 シテ 林 いそ子 小林 彰夫 川崎 元彦 川合 丰子 齋藤 忠雄 松 眞澄 山本 三江
仕舞 実景	川合 丰子 齋藤 忠雄 松 眞澄 山本 三江
水無月	河村真之介 井上 敬介 曾和 尚靖 鹿取 希世
歌小町	長谷川邦彦 前川 桂子 奥田えつこ
熊坂	桑原 豊子 井上 敬介 加藤 愛郎 河村真之介 鹿取 希世 井田 順子 船戸 昭弘 鹿取 希世 村 龍留 船戸 昭弘
熊野	下里 紀子 前山 鎮男 齋藤 忠雄 武田 大志
鉢木	武田 大志
野守	武田 大志
附祝言	(終了予定六時半)
「御来場歓迎」	主催 武田 謡楽会 武田 大志 武田 邦弘

④面よりつづき

とに。深刻らしく重々しいシテの謡が胸中を反映する。暫し大床を眺めてから台へ近づき、上がると膝を着き繁々と杖を見下ろし、「さてはこれなるが」の沈鬱な語調には、夢の告げに人生を託する感慨も。

夢に、帝位に就けばどうかと安座、壮麗な宮殿に在つて八月月遅し(時は経たずに来華が続く)、と双手を挙げ敬慕を。大臣(ワキツレ正樹)の奏聞に、更に長寿をと仙薬は菊の酒を勧められるところ、へ国土安全長久の、いや増す喜びに、朗々とありたい地謡が乱れ残念。シテへ前立つ舞重(子方、分林道隆君)、舞はのりよく美しく立派、素晴らしい。子方に触発され、シテは掛籠を外し肩脱ぎに台上で「楽」、狭い空間を余裕を以て大きく舞う。「空下り」は足踏み外し(写真)、ハツと引き上げ使ひ、辺りを見廻す心が面白かつた。更に台を下り舞い上げる。引き締まったきれの良舞である。子方・ワキツレが退き、いわゆる飛込みは随正から台へ進み、片足を掛けて上がるこみや横臥、静かなものだった。夢醒めてからは、べたべたつらく人間の有様を、と左手の唐團扇を、胸に抱えるところに、悟りの思いを見る。(1時間21分・7月4日・名古屋龍楽堂七月定期公演)

「三本柱」普請が自出度く成就、と喜色満面の畢業者ノ主(シテ清造)、この度は金蔵用にと切つて置いた三本の柱を、三人して二本づつ運んで来いと太郎・次郎・三郎冠者(アト俊裕・郁雄・靖雄)に命じる。言葉の家に仕える幸わせを、てんでに口にして賑やかに出掛ける三人。山に着けば、シテの掛けた謎を巡り一類り喧しく、太郎冠者の知恵で一件落着すれば、喜々とした浮かれ気分は離れ子物にして帰路に就くことに。戻れば、出かしたとばかりに大機祝のシテも離れ子物に加わる(写真)。留メはシテが笛(鏡)のシテヤキリを聞き「イヤーン」と掛声に片膝をつくシャギリ留メ。アト三人の身長も揃い、シテ共に全体調和がよくとれた爽やかな舞



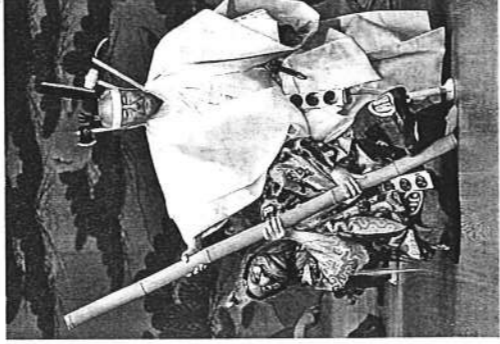
第11回御酒落名匠狂言会「三本柱」
左より野村万蔵、井上靖浩、鹿島俊裕

台。(25分)

「朝比奈」極楽へぞめく人間が増えて地獄は以ての外の飢饉には、閻魔王(アト万蔵)自から六道の辻に立つと、冥土へ赴く白装束の朝比奈義秀(シテ萬)に会う。良き御物ござんなれとアト、地獄へ遊さんと「いかに罪人、急げとこそ」と責め始めるが、「如く何程なりともお買戻候へ」と涼しい顔のシテ。アトは荷立ちをカケリ(誠・孝一郎・総一郎・義念)にみせるが、敵わずと竹杖を捨て、大竹に獅噛み付くが(写真)裏、虚しく払い退けられる始末。素性を聞いて気力も萎えるが、「もそつとお買戻やらいでなう」と憐れるシテに応えねば、地獄の名折れと甦る闘志。この度は厚板の上着を脱ぎ、身軽になつて興奮のカケリ。舞台、橋懸、と竹杖に踏がり「急げく」「それよく」と跳ね回り、拳向はシテに大竹で首根っこ押えつけられ戦意喪失するが、偉大な態度はあくまで閻魔王の矜持、本物の朝比奈なら和田軍の起りを「語つて聞かせ」と横柄。知らないか、とはかりに語る床几のシテの仕方話が秀逸。興に乗って身近のアトを敵とみて、手玉に取つて左右に転ばすところなど、互いに運動する技の切れの鮮やか。あす術もなくシテの七ツ道具を負われ、極楽へ案内させられるアトに一抹の哀感。(35分)



第11回御酒落名匠狂言会「八雲」
左より野村万之介、野村万作



第11回御酒落名匠狂言会「朝比奈」
左より野村万蔵、野村萬
(撮影・杉浦賢次氏)

「鏡肩」宇治は茶どころ。よそでは捨てるというせてくれるようにと次郎冠者に懇願、様々に面を見てはみるが(写真)鏡には鬼が。シテを懲らしめ、からかう心の次郎冠者に、何の因果と悲嘆に暮れるシテ、見捨てるられまいと次郎冠者に取り付けば突き飛ばされ、その拍子に外れまりの追込。「うつけ、うつけ」と憐れ、「やるまいぞ、やるまいぞ」と追うシテ。(34分)

「干切木」なまじ知識があるだけに鼻にかけ、物識り顔にうろさく口を挟み、それが嫌味なものを分つて居らず、連歌の講中の不興を買ひ、爪弾きの総ずかんを食つてのささ知らぬ太郎(シテ友彦)、初心講が始まっているのに当然訪れず、座に乗り込んで来て講中の面々から散々に足蹴にされ追い出される。事を知つて強妻(鏡)は夫・太郎の胸甲斐をさに激怒、干切木棒を持たせ「来い」と叱咤、この間の問答に精



第11回御酒落名匠狂言会「三本柱」
左より佐藤友彦、佐藤友彦
(撮影・杉浦賢次氏)

彩。結局、樺太の典刑太郎は強妻に付けて来て貰ひ、順次、面々を訪ねるが、どこも留守と分れば俄然勢つシテ。鮮やかに棒を使つて強妻にひけらかせば(写真)、「お出かしやつた」などと強妻も「なう愛しい人、ちやつと御座れ、ちやつと御座れ」などは情が浮きそう。融、持ち味が充分出る。アト当屋は弘之、小アト太郎冠者は郁雄、靖雄以下立衆に六人。(36分・7月11日・第11回御酒落名匠狂言会)なお恒例の大蔵流の参加が無かつたのは残念だった。

「八雲」屋島の浦の漁翁(実)は義経ノ亡霊、旅僧の求めに源平合戦の昔話を詳しく語れば、素姓あやしむ旅僧に名を問われ、修羅道に戻る時に、と。が、名乗らずとも名乗るとも夢は覚まぬやう、と言ひ残し消える。のち、旅僧の夢に義経の姿で現れ華々しい戦闘機軸を見せ、夜明けと共に消える。

旅僧(ワキ敬三)・従僧(ワキツレ善昭・英彦)の連行の連が心浮き立つ春宵の長閑。宿を塩屋に求めんと屋主を待つところ、漁夫(ツレ義徳)・漁翁(シテ水鏡)が海上に行く心に橋懸(現われ掛合)・連行に生活の場は春霞の海の佳景を。舞台へ入りへ春や心を誘ふらん、とシテは塩屋に戻つた態に大小前の床几に。早速、宿を借りたいワキと貸す側のシテ・ツレと



第6回金剛定期能「八雲」
金剛水鏡
(撮影・原田七寛氏)

の問答が情切れよく展開する。都人と知り宿をするシテ、その胸中を述べる初回(清隆・通成・道一)は、へ都と聞けば、と懐旧の念も一人に、へ纏て涙に、ツレ共にシテのも徒ならぬ。場の空気を憂える心にワキは源平の合戦譚を所望、シテ語に。当時の天晴れ大將軍の義経の、堂々たる威風を懐しむかにワキへアシラヒ、直ルと三保ノ谷四郎と悪七兵衛景清との組み討ち光景をツレとの掛合に活写。へ著たる兜の鍔を掴んで、と大きく双手を拡げて挑み掛かるシテの勢いは、鍔になぞらえた胸を左手にくつと掴んだところ(写真)力任せ養母。更にへ鉢付の板より、では体を右に引く様に開くや扇は右手に渡り、へ引きちぎつて、の型鮮烈にみせ胸がすく。へ御馬を汀に、でシテは床几を立ち、能登殿の矢で佐藤義経がへだつと、落馬する様を強い足拍子にみせ、源平双方が棒を引き上げた跡の寂寥を、へ機心の浪風、の音をワキ正の下へ面使となどで聴き澄まし、正中へ下居。余り許しい話に不審するワキへ、へ修羅の時に、と居立ツてワキにアシラフと、立つて常座からへ夢ばし覚まし給ふなよ、とワキへ指込トラキ、中入。代つて塩屋の真の持主・浦人(アト忠一郎)、旅僧を見咎め、疑心のうちに問われて居語に屋島の合戦譚を。抑制の利いた淡々とした語が流れば、津黄地白ノ帆掛舟群文様の肩衣が平家の軍船を暗示して妙。ワキとの問答にアトは疑心が晴れると、義経の亡霊へ回向を勧め退き、後場。後シテは義経ノ亡霊。一声(宿



第6回金剛定期能「羽衣」
鶴岡三十春
(撮影・原田七寛氏)

太郎・吉兵衛・喜彦)ですかくといった風に舞台へ入り、指込トラキにへ落花枝に帰らず、と英姿飄爽のシテの大きさ。夢物語は、へ思ひぞ出づる、と床几に掛かり、地と掛合のサシに弓流の段、落した弓の行方を面使とにみせ、へ弓を惜しむに非ず、とワキにきつとアシラフところなど、如何にげた跡の寂寥を、へ機心の浪風、の音をワキ正の下へ面使となどで聴き澄まし、正中へ下居。余り許しい話に不審するワキへ、へ修羅の時に、と居立ツてワキにアシラフと、立つて常座からへ夢ばし覚まし給ふなよ、とワキへ指込トラキ、中入。代つて塩屋の真の持主・浦人(アト忠一郎)、旅僧を見咎め、疑心のうちに問われて居語に屋島の合戦譚を。抑制の利いた淡々とした語が流れば、津黄地白ノ帆掛舟群文様の肩衣が平家の軍船を暗示して妙。ワキとの問答にアトは疑心が晴れると、義経の亡霊へ回向を勧め退き、後場。後シテは義経ノ亡霊。一声(宿

「鬼瓦」訴訟が落着、樺固に当たり信仰する因幡業師へ、と大名(シテ忠一郎)、太郎冠者(アト良介)を伴い参詣。お業師を回許に勧請したいと室を詳しく見らうと破風に黒い物を見付け、アトの教えで鬼瓦と知れるが、見詰めるうちに逆き出す。不審するアトにシテは鬼瓦が妻に酷似と。そして、顔の造作の

「羽衣」小説のない「羽衣」が却つて珍しい。正先の松立木に赤地長絹、漁夫白龍(ワキ勝久)が家の宝に、とそれを手にすると、呼掛で天人(シテ三十春)が現われ、問答・掛合に返却を懇願するが虚しく、春風が空に吹くささへ懐かしや、と天上を恋い、ワキ正遠か先を茫然と眺めシテと、切ない。ワキに「御姿を見申せば余りに御儀はしく」と言わしめる懇願も、羽衣を返せば直ぐ天に帰られてしまふかも、の危惧。「いや疑ひは人間にあり、天に帰らなまものを」のシテの一種憐れむような素直な口口に優しさがある。へあら恥かしくさらばとて、とシテに羽衣を手渡すワキに、右足少しひき、恭しく捧持して愛しげに羽衣を見詰めるシテは(写真)スキップを踏みかねない喜びに溢れる。物着に長絹は腰巻と同色の赤地、金芭蕉葉大紋の絢爛豪華。クセ中へこの松原の春の色、と指廻すときは眼前に大貴顕、浮きやかな気分は翻す袖も軽やか。序之舞躍わしく舞上げ、へ花を踏しの、と敬く袖も美しく、破之舞からキリへ。天上に近づくと憐しさは、スミでへ富士の高嶺、と扇を下から上へ挙げる象徴的な型にみせ、橋懸を使わないので興行に欠ける機はあるが、手練のシテの豊富な舞台だった。(1時間14分・7月25日・金剛能楽堂・第六回金剛定期能)

ゆきが、普通人とは思えない御面相が彷彿としてくる。それを殊でもないのが愛憎の深さ?却つて可笑しい。透には奈りにもよく似ると懐しさの双シテを、アトから直ぐ運えると誓められれば、由無い落胆だったと一紙

五色の会 能「田村」上演

12月23日 岡崎花朋会敷舞台

金剛流・明の会(羽多野良子師主宰)は「五色の会」第十二回能を観る公演」をきたる十二月二十三日(木・祝)、岡崎市の花朋会敷舞台(岡崎市大西町長47-4)で開催する。

「五色の会」能を観る公演は今回で十二回を迎え、毎年愛好者多数の鑑賞で、歴史ある岡崎での古典芸能への関心をひろく醸成し、市民から期待されている。岡崎市教育局教育委員会後援。

能組は、仕舞「山姥」(宇高遠成)

狂言「義山伏」(野村小三郎、松田高義、野村信朗)
能「田村」(シテ羽多野良子、ワキ高安勝久、笛・鹿取希世、小鼓・後藤義雄幸、大鼓・河村眞之介、間・松田高義、後見・廣田幸彦ほか、地頭・宇高遠成)
入場料は前売五〇〇〇円、当日五五〇〇円、高校生以下三〇〇〇円。
問い合わせ「明の会事務局」岡崎市中町5-12-15、電話/FAX 0564-23-43364

梅猶会公演

12月5日 大槻能楽堂

大阪 観世流・梅猶会は平成二十二年第四回大阪能楽公演を十二月五日、大阪・大槻能楽堂で開催する。

能組は、能「俊寛」(シテ梅若基徳、康頼、梅若善久、成経、梅若雅一、ワキ福王知盛)
狂言「寝音曲」(巻竹忠重、岡村和彦)
仕舞「道明寺」(池内光之助)
「百万クセ」(井戸和男)「殺生石」(立花加壽子)

能「三輪」(シテ井戸良祐、ワキ水留浩史、アイ幸田素之)
祝言仕舞「狸々」(梅若吉之丞)
正午開演、全自由席、入場料/前売四五〇〇円(当日券五〇〇〇円) 学生三五〇〇円(当日三〇〇〇円)
申し込み能楽師、大槻能楽堂(Tel06-67661-8055) ローションチケット(L5391、6)
梅猶会定期公演場所「豊中市新千里南町3-18-12、梅若善高方、電話06-68831-7854。

演能の記録

自主公演能 五百回記念 大槻能楽堂

大阪 大槻能楽堂は、昭和五十九年から自主公演能を開催しているが、このたび五〇〇回の節目を迎え、これを記念して十月六日、重要無形文化財、日本芸術院会員をはじめ、東西の名手を招き特別記念の公演を開催した。

番組は次のとおり。
大槻流狂言「宗論」(茂山千之丞、茂山千作、茂山正邦)
福王流脇仕舞「鷺」(福王茂十郎、一管「鷺之喜取」(野口伝之輔)、一調「女郎花」(梅若玄祥、亀井忠雄)
宝生流舞囃子「西行松」(近藤乾之助、笛・藤田六郎宗衛、小鼓・荒木寛光、大鼓・山本孝、大鼓・三島元太郎)
別習一調「磯邊」(宝生閑、曾和博朗)、一調「難波」(観世清和、三島元太郎)

当地の各流儀・流派・結社。 社中の消息を辿る ②

六、「大衆能」⑤

「承前」
第二六回は昭和六〇年六月二・三日。能組にごあいさつとして次のようにある。
「初夏の頃となつてまいりました。皆様にはお変わりなくお過ごしのことと存じます。日頃は能楽協会名古屋支部に対して、いろいろ御支援を賜わり、誠にありがとうございます。愛知文化講座にて始

竹尾 邦太郎

めました(大衆能)も今年で十六回を迎えました。昨年より能楽の本来の姿にかえり能楽殿にて二日間にわたり開催して居ります。本年は平家が屋島の合戦長門堰ノ浦の戦に敗れ一門滅亡して八〇〇年になりますので源平の能を揃えました。どうぞ是非御来場賜わりますようお願い申し上げます。ごあいさつの通り、平家滅亡八

豊春会秋の会

能「三井寺」殺生石」
京都 金剛流・豊春会(豊嶋三千春師主宰)は、十月十七日、京都・金剛能楽堂で「豊春会 秋の能」を開催。能組は、能「三井寺」シテ豊嶋幸洋、子方・豊嶋修莉、ワキ江崎金治郎、ワキッレ江崎敏三、笛・森田保美、小鼓・久田舞一郎、大鼓・河村大、間・松本薫、茂山正邦
狂言「西切」茂山千五郎、茂山正邦、茂山あきら
能「殺生石」シテ豊嶋三千春、ワキ江崎敏三、笛・左溝泰弘、小鼓・荒木寛光、大鼓・河村大、大鼓・前川光良、間・茂山あきら

源平謡曲年表

百年として「源平の能」の副題のもと、能組裏面には詳細な「源平謡曲年表」及び平氏と源氏の系図を載せ(図版参照)、見所を大いに啓蒙する。

能組は初日は午後六時始の夜能で、舞囃子「七騎落」長田驥、仕舞二番「経正キリ」久田徹二「佛原」武田邦弘、狂言「宗須之語」野村三三郎、能「朝長」梅田邦久、小島二英(ツレ侍女)清沢一政(トモ從者)西村欽也(ワキ)杉江元、飯富雅介(ワキッレ)佐藤友彦(アヒ)片山九郎右衛門(地頭)武田邦弘・中川雅章(後見)。

二日目は午後二時始。能「巴」竹市幸司、杉江元(ワキ)重本昌三(地頭)豊嶋三千春(後見)、仕舞「千手」加藤正嗣、狂言「文蔵」井上松次郎、能「船弁慶」玉井博祐、衣裳郷志(子方)慶「面へつづく」

名古屋観世会定例公演能

十一月十四日(日)十二時半開演 名古屋能楽堂
能 俊寛 高安勝久 河村総一郎 鹿取希世
問 野口隆行 福井四郎兵衛
後見 高橋 藤一 地謡 吉本 勲 梅田 孝 清沢 一政
武田 邦弘 加賀 敏彦 須部 正志 須部 正志
仕舞 籠太鼓 八田三津子 地謡 武田 孝 志 須部 正志
前野 郁子 加賀 敏彦
狂言 泉山伏 出伏 野村小三郎 男 松田 高義 野口 隆行 後見 奥津健太郎
仕舞 融玉 髪 古橋 正邦 地謡 本田 勲 梅田 孝 志 高橋 藤一 齋 一久
観世 喜正
能 三輪 飯富 雅介 河村眞之介 加藤 洋輝
問 奥津健太郎 後藤義雄幸 竹市 学
後見 梅田 邦久 地謡 吉本 勲 梅田 孝 志 武田 邦弘 高橋 藤一 齋 一久
附 祝 言 (終演 四時半頃)

名古屋宝生会定式能 第414期 第4回

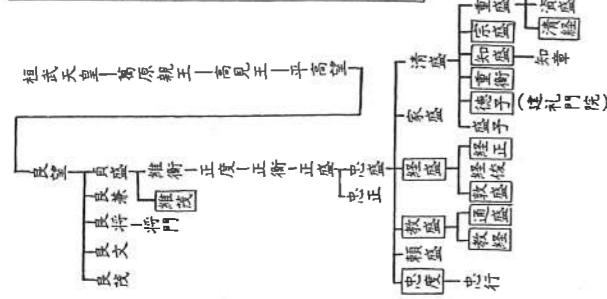
十一月二十一日(日)午後一時始 名古屋能楽堂
能 芭芭 王井 博祐 地謡 辰巳 清次郎 衣斐 正直
藤 孝 竹内 澄子 和久 丈太郎
子方 坂口 伶 内藤 飛能 飯富 雅介 寛 敏一 加藤 洋輝
問 奥津健太郎 後藤 孝 一郎 大野 誠
後見 王井 博祐 地謡 竹内 孝 成 龍川 善一 衣斐 正直 辰巳 清次郎 和久 丈太郎
狂言 貫 野村小三郎 松田 高義 奥津健太郎 後見 伴野 俊彦
(番組⑤面へつづく)

西暦	年号	()は関係謡曲名
一一四六	久安	平清盛安芸守となる
一一五五	久我	清盛嫡孫徳子後の建礼門院(大原御幸シテ)生まれる
一一五九	保元	保元の乱
一一六〇	平治	平治の乱・義経生まれる幼名牛若 義朝、朝長、美濃重盛に落ち、十一月朝長自害十六才(朝長)
一一六五	永元	一月義朝野間にて長田忠致に殺される(朝長)頼朝配流
一一六七	仁安	牛若丸鎌馬山入り(備前慶)
一一六八	安元	平清盛太政大臣となる
一一六九	寛平	清盛出家する
一一七二	承安	この頃牛若平家を憎む(鞍馬天狗)
一一七四	安元	徳子、高倉天皇中宮となる十七才。平家全盛時代(禪王・仏原・熊野・二人徳王)
一一七七	安元	義経奥州へ下る(飛騨・鳥帽子折)
一一七八	治承	鹿谷隆義発見、後醍醐帝される(後醍)
一一八〇	治承	安徳天皇生まれる、中宮純産の折康頼、成経赦免(後醍)
一一八四	治承	五月頼政謀反及宇治にて戦死七十六才(頼政) 八月頼朝兼平右兵衛山合

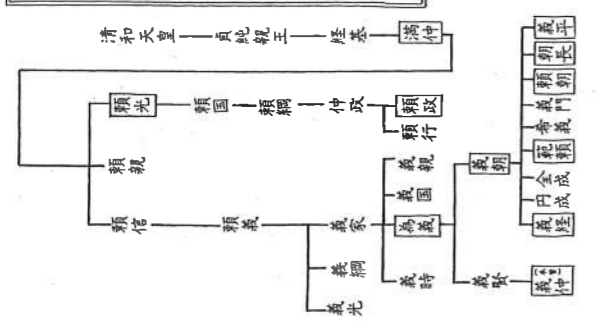
一一八一	寿永	二
一一八三	天保	二
一一八四	元治	二(元暦)
一一八五	元治	二(文治)
一一八六	文治	二
一一八七	建久	三
一一八九	建久	三
一一九二	建久	三
一一九五	建久	三
一一九三	建久	三
一一九四	建久	三
一一九五	建久	三
一一九六	建久	三
一一九七	建久	三
一一九八	建久	三
一一九九	建久	三
一二〇〇	建久	三

一一八二	天保	二
一一八三	天保	二
一一八四	元治	二(元暦)
一一八五	元治	二(文治)
一一八六	文治	二
一一八七	建久	三
一一八九	建久	三
一一九二	建久	三
一一九五	建久	三
一一九三	建久	三
一一九四	建久	三
一一九五	建久	三
一一九六	建久	三
一一九七	建久	三
一一九八	建久	三
一一九九	建久	三
一二〇〇	建久	三

平氏系図



源氏系図



大衆能



②面よりつづき

已孝、狂言「狐塚」井上松次郎・井上礼之助、佐藤友彦、能「大蛇」亀頭(前)稲川(後)竹内澄子(ツレ)芳賀由紀子(前・子方)山田麻記子(後・子方)西村欽也(ワキ)飯富雅介・杉江元(ワキツレ)大野弘之・佐藤友彦(アヒ)雛子方は恵司・啓次郎、総一郎・喜太郎・地謡は辰巳孝・辰巳孝門・衣笠正直ら・後見は戸田和ら。「大蛇」は大正二三年九月二八日、名古屋保能会で水谷鐘造シテ、西村弘敬ワキで上演されて以来六二年ぶりの稀曲。なお本紙二三三号(昭和六二年五月)の筆者の評中「明治17年4月、シテ大島熊次郎・ワキ西村大藏の記録しか見当たらない」を訂正。

二日目の能組は、能「子手・部曲之舞」久田徳二・武田邦弘(ツレ)飯富雅介(ワキ)・鹿取希世・後藤孝一郎・寛鈺一・地頭小島一英・後見梅田邦久・仕舞五番「田村クセ」加藤富貴子一殺生石「百々康治」難波「生駒里翠」徳之段「高木素重子」葵上「吉田紗、狂言「花争」野村又三郎、野村行能「鉄輪」近藤幸江、杉江元(ワキ)飯富雅介(ワキツレ)大野弘之(アヒ)・森本重一・福井良久・吉田定男・亀頭喜太郎・地頭梅田邦久・後見武田邦弘。

第二八回は昭和六二年六月二〇日、「ごあいさつ」に「金環が久しぶりに愛知県文化講堂で開催され御回覧のいたりでございます。

この大衆能が恒例のごとく継続して文化講堂にて開催されますよう皆様のお声を大に御援助たまわりたく、よろしくお願ひ申し上げます。名古屋百年・内閣拡大・文化生活と人間性の充実等のために、能楽の使命は益々大となります。観客の動機にも皆様のお力をおかしくくださいませ」とあり、内閣拡大などと経済用語を用いるのも能楽界の経済的な苦境を物語るものか。国内需要を拡大するとは、取りも直さず、能楽界の内に重要無形文化財の能楽に対してチケット購買力のある観客を増やしたいという願望の端的なあらわれであろう。観客動員を図るには能楽に対して

◆盛夏から初秋の舞台◆ 「青陽会定式能」と「狂言三の会第九回公演」「第二六回衣斐正宜後援会能」及び「大阪梅猶会」

竹尾邦太郎

「隅田川」冒頭のワキ渡守の名言の中、高安流は「又この間の雨に水気に見えて候程に、旅人の一人二人にては渡し申すまじく候」と増水のことを言い、禊王流は「又この在所にさる子細あつて大念佛を申す事の候間、僧俗を嫌はず人数を集め候」と大念佛のことに触れる。遣いはワキツレの人



青陽会能「隅田川」前野郁子・中野弘士郎(子方)(杉浦賢次氏撮影)

青陽会能「蟹山伏」鹿島俊裕 佐藤融 中島和亮(杉浦賢次氏撮影)

する人々の興味を喚起する契があり、ヒーローということにもなる。今回は能三番に「女・三様」の副題を付け、「賀茂」和製マリア像、「楊貴妃」天国で流す愛の涙、「殺生石」日本版エクソシスト、のキャプションを。能組は「賀茂」祖父江修一・松山幸親(ツレ里支)今沢美和(ツレ天女)高安勝久(ワキ神職)飯富雅介・杉江元(ワキツレ従者)佐藤友彦(アヒ末社神)・鹿取希世・柳原富司忠、河村総一郎・助川龍夫・地頭小島一英・後見中川雅章、舞雛子「初書」伊藤雄二、仕舞「冠之段」近藤幸江、狂言「悪太郎」野村又三郎・井上礼之助・佐藤友彦、能「楊貴妃」台望「梅田邦久・西村欽也(ワキ方士)井上松次郎(アヒ所ノ者)藤田六郎兵衛・福井啓次郎・寛鈺一・地頭泉嘉夫・後見武田邦弘、舞雛子「善知鳥」河井隆子、一調「鵜飼」池田茂二・井栄逸(謡)・仕舞「鉄輪」泉嘉夫、能「殺生石」佐藤耕司・飯富雅介(ワキ玄翁)・大野弘之(アヒ能力)・森本重一・福井良久・吉田定男・鬼頭好信・地頭辰巳孝・後見竹内澄子、他に金春泉英、重本昌三が来演。

以下次号

人のワキツレ(正樹)、素袍上下でなく白大口・掛素袍が好ましかった。笠は持たない。吾手を求め彷徨う狂女(シテ郁子)は無縁をカケリにみせ、へ跡を尋ねて迷ふなり、のシテからへ尋める心の果やらん、と右方前方を茫然と眺める風情、遵守(ワキ元)との都鳥問答にへ(思へば限りなく)遠くも来ぬものかな、と笠に手をやるところ、など一入冥憐の情を備させる。 渡しの場は、へ狭くとも、と膝つき手を合わせ乗船を懇願の際、狂と姫とり捲とし、笠も同時に。後見は直ぐ掛うが聞陸のことで、笠を早くシテにの地頭(勸懲)の指示が伝わらず、笠をひいてしまつてから改めてシテに渡る不手際、一寸残念だつた。船中、ワキ

語は高安・禊王とも多少の相異はあるが、「ただ返すがえすも都にまします母御の御事こそ何より以つて恋しく候へとて、雨りたる息の下にて(念佛四五返唱)一」の詞聲が禊王には無く、また話のトメも高安は「や、長物語に舟が着いて候」、禊王は「由なき長物語に舟が着いて候、疾うく御上り候へ」と微妙なニュアンスの違いが。ワキ元の語はしんみりと心が通い上々。シテの沈痛はワキとの問答・掛合に、へこれは夢かや、と笠を放り出す双シテに極まる。ワキの介添で船を出る心は常座近、塚を見て下居にクドキの哀調は女流ならこそこの趣。へこの士を愛して、と大きく双手で抱い見詰める塚、へ今一度この世の姿を、と双シテの哀願は、念佛に吾子の幻を追うところ(写真)東の間シテの戯れる姿を見る思い。それがキリの深刻味を更に深め、シテリ留メに人の世の虚しさを。(1時間19分) 「蟹山伏」、大峯・葛城の修験を終えて下山の山伏(シテ勸)と強力(アト俊裕)、俄に雲行き怪しく現われる異形ノ者(小アト知亮)に怖し気づく。法力自慢の山伏の法券は何処へやら、何者かを確かめるよう強力に命ずれば、「どうあつても嫌で御座る」と拒まれ、互い逃げ腰の押し問答に生彩。結局、山伏が当たり、蟹ノ精と分かれは濃気込む強力、金剛杖を振りかざすも耳を録ではさまざまに助けに出た山伏も呪文が利かすにはさまれ、拳け向兩人とも突き倒される。「捕らえてくれいやい」と利かなかつた法力に山伏の無念の叫び、「御無用になされませ」と無謀だつた弾力に構さの反省、甲殻類らしく骨はつた大きな蟹ノ精もよかつた。(17分) 「天鼓・弄鼓之舞」小書で王伯(前シテ修二)は面小牛尉・白垂・唐帽子の姿。勅使(ワキ勝久)の叱び出して出ると巨首に恐懼、勅命に背いた我が子(天鼓)の父ゆえのお咎めでは、とは思はずこして、鳴らぬ鼓を鳴らすようにとの事。参内する気の重い心情が運にもよく現われ、へ苦しみ海に沈むとかや、と下居にシラ

④面へつづく

久田勤鷗の会 特別公演 第21回 十一月二十三日(火・祭) 一時閉演 名古屋能楽堂

能黒塚	和入住太郎 高安勝久 河村総一郎 亀頭義命 杉江元 後藤嘉津幸 竹市学
間	野口隆行
後見	衣斐正直 地謡 津田節武 佐藤耕司 大森尚人 稲川昌次郎 玉井道夫 内藤飛能
主権	名古屋宝生会
正会員券	一八〇〇〇円
当日券	五〇〇〇円
学生券	二〇〇〇円
衣斐正直方	一〇〇円

久田勤鷗の会 十一月二十三日(火・祭) 一時閉演 名古屋能楽堂

仕舞	清経 松山幸親 久保信一 羽衣 星野啓子 地謡 藤谷音朗 隅田川 前野郁子 寺沢幸祐
能花月	久田勤鷗 河村真之介 鹿取希世 高安勝久 久田陽香子
間	野村小三郎
後見	久田勤鷗 観世清和 地謡 吉沢幸地 上田公威 寺沢山幸祐 大西礼久 幸田昭雄
仕舞	野宮 久田三津子 藤井徳三 地謡 下藤川孝充 野守 上田貴弘 久保信一 八神神孝 直長音亮
舞雛子	當麻 観世清和 河村真之介 上田拓三 久田舜一郎 藤田六郎兵衛 地謡 吉井善晴 上田徳三 笠田稔
狂言	魚説法 新発兼井上靖浩 榎家佐藤友彦 後見 佐藤融

能木曾 河村総一郎 藤田六郎兵衛 久田舜一郎

主権 能久田勤鷗の会

取扱い久田勤鷗事務所 T:052-734-6192 F:052-705-1385

名古屋能楽堂 自由席一〇〇〇〇円 学生券五〇〇〇円 (当日券は五〇〇円増)

7階PPG ナディアパーク チケットぴあ

NHK放送予定(平成22年11月~12月)

Table with 2 columns: Date and Program Name. Includes NHK-FM ラジオ才能鑑賞 and various talk shows.

演能カレンダー

名古屋能楽堂 (TEL 052-231-0088)

Calendar table for performances from Nov 22 to Dec 3, listing names and materials.

発行能楽の友社 名古屋千種区千種2丁目18-18

NPO法人

名古屋能楽振興協会

能楽の振興めざし、参加呼びかけ

日本の伝統芸術能楽の発展・振興を志して、このほどNPO法人名古屋能楽振興協会が設立され、広く賛助会員の入会が呼びかけられ、今後の活動が期待されている。

協会の活動として、次の諸事業が推進される。

- 一、能楽の伝達事業
二、能楽研究の支援事業
①講師との交流を通し能楽に係る研修修発を図る会の開催。
②能楽に係る中継や周辺を訪ね、関連曲の背景や歴史を学ぶ能楽により深く親しむための啓蒙の旅の企画・開催。

三、その他の事業
・能楽の公演
・能楽公演のチケット販売事業
四、講演会、能楽公演などの案内はその都度各会員に案内される。
・特典、会員割引制度有り。
NPO法人の発足にあたり、名古屋能楽振興協会・久田勘助理事長は次のように入会を呼びかけている。
能楽は、世界無形遺産にも言及され、日本人が世界に誇るべき芸術であります。室町時代にはば完

成をみたこの芸術は、舞臺芸術であることにより、芸術の「花」ともいふべき感動は、見る人の前で一瞬に咲き、一瞬に消えていく性質のものであります。これを日本国内だけではなく、世界の人々に広く伝えていくには、演能を通じて行うことになります。この伝統芸術を演能するためには、これを導く演能師の研鑽と努力に多大のエネルギーが必要ですが、現状は充分な状況にありません。そこで私達は、特定非営利活動法人名古屋能楽振興協会(NPO法人名古屋能楽振興協会)を設立して、日本の伝統芸術である能楽を発展させ振興することにより、日本人としての誇りを生み出す一助になるものと考えます。加えて私達の活動は次代

和泉流 狂言の伝承

金沢と名古屋

国立文化財研究所 金沢で公開講座

独立行政法人・国立文化財機構・東京文化財研究所、金沢大学連携融合事業「日中無形文化遺産プロジェクト」主催により、きたる12月12日(日)、石川県立能楽堂(金沢市石引4-18-13)で「和泉流狂言の伝承―金沢と名古屋―」の公開講座が行われる。

「講演1」 「和泉流狂言史の金沢と名古屋」
講師・西村聡(金沢大学人間社会研究域教授)

「講演2」 「和泉流：狂言小舞の音楽」

講師・高桑いづみ(東京文化財研究所 無形文化遺産部 部長)

「実演1」 小舞の比較「海邊平り」「石河藤五郎」ほか

「実演2」 狂言の比較「権様」ほか、出演 野村祐丞、佐藤友彦

開催時間は午後1時半~4時半(開場1時)

資料配付、入場無料、事前申込不要

連絡先 03・38223・485

3 (東京文化財研究所)、076・264・5338 (金沢大学)

大槻能楽堂 自主公演能

大阪 大槻能楽堂自主公演能

「能の魅力を探るシリーズ」は、「平家物語を観る」

「戦のあわれみ」を語るテーマで公演が行われているが、11、12月の演能は次のとおり。

◇11月20日(日) (第503回) 午後2時開演

お話し「頼朝峰起」伊沢 元彦

能「七騎落」恐之舞 シテ野村四郎、ソレ上野雄三、井戸良祐、上野朝彦、上野雄介、齋藤信輔、子方寺沢拓哉、ソレ齋藤信隆、ワキ福玉茂十郎、アイ茂山宗彦。

◇12月18日(日) (第504回) 午後2時開演

お話し「平家全盛の香馬場あき子」

能「熊野」読次之伝 村雨留

シテ片山清司、ソレ武富康之、ワキ宝生欣哉、ワキソレ大日方寛

一般自由席、前売四二〇〇円、当日四七〇〇円。

入場券は大槻能楽堂事務局(電話06・67661・8055)、

たちまち能

512日 能「景清」項羽

大阪 山本能楽会主催の山本能楽堂定期能12月のたにまち能は、12月5日(日)能「景清」能「項羽」、狂言「鷹鷹」で上演される。午後1時開演。

入場料 全自由席七〇〇円、問い合わせ、申込は、能の会事務局/京都市左京区下鴨宮崎町1-28、廣田泰三方、TEL・FAX 075・781・3421。

演能案内

先代 久田秀雄二十七回忌追善

久田観正会

十一月二十八日(日) 午前九時半開演

名古屋能楽堂

Table with 2 columns: Role and Actor Name. Includes 通小町, 遊行柳, 巻, etc.

Large advertisement for a performance by 久田観正会, listing various roles and actors like 須磨源氏, 野宮, 養老, etc.

六、「大衆能」⑥

第二九回は昭和六三年八月十四日、昨年度の能楽協会名古屋支部の願いも空しく舞台は文化講堂でなく熱田神宮能楽殿、賃貸料が高いため四年間続いた「ごあいさつ」は今回無しである。能組は舞囃子「碓正」竹市幸司、能「羽衣」今沢美和、飯富雅介(ワキ白龍)、藤田六郎兵衛、後藤孝一郎、鬼頭英二、鬼頭喜太郎、地頭梅田邦久、後見武田邦弘、仕舞四番「半部クセ」伊藤雄二「舞」祖父江修一「松風」加賀敏彦「天鼓」中村和男、能「富土太鼓」内藤泰二、内藤達俊(子方)高安勝久(ワキ)佐藤友彦

(アヒ)、地頭佐野朝、後見竹内澄子、狂言「伊文左」井上松次郎、野村又三郎、井上礼之助、今枝郁雄、能「鴻」長田驥、西村欽也(ワキ)大野弘之(アヒ)、森本重一、柳原富司忠、寛鈺一、助川龍夫、地頭大島政允、後見高林白牛口二、他に武田孝史、松井杉、高林岬二が来演。
第三〇回は平成元年九月九日、熱田神宮能楽殿、特に三〇回記念を謳ってはいない。能組は能「女郎花」長田驥、長田郷(ツレ)頼風(アヒ)高安勝久(ワキ旅傳)大矢高義(アヒ)所ノ者)、藤田六郎兵衛、福井孝一郎、鬼頭英二、地頭久田徹二、後見熊沢恵美子、仕舞三番「那那」広瀬雅弘「母之教」高木美智子「熊坂」、竹市幸司、能「羽衣」戸田和、杉江元(ワキ白龍)、藤田六郎兵衛、福井良久、吉田定男、鬼頭好信、地頭吉田俊彦。

当地の各流儀・流派・結社・社中の消息を辿る ②④

竹尾 邦太郎

平成23年度 名古屋観世会定例公演

平成23年度の名古屋観世会定例公演の年間演能予定は次のとおり。23年度は年5回の定式能で、毎回能2番のほか、狂言、仕舞が予定されている。
年間自由席(年5回分)二〇〇〇円、年間指定席(年5回分)三五〇〇円、当日券六〇〇〇円(自由席)を一カ月前から予約受付されるが、救済に制限があり、売り切れになることがある。当日券は当日午前十一時より先着順で座席指定となる。
番組は次のとおり。
◇二月十三日(日)十二時半始
能 嵐山 武田 邦弘
能 邪法師 盲目之舞 観世 清和
◇四月十日(日)十二時半始

能 忠度 替之型 梅若 玄祥
能 藝上 空之折 久田 勘齋
◇六月十二日(日)十二時半始
能 竹生島 祖父江修一
能 幸郡婆小町 一度之次第 片山 幽雪
◇九月十九日(日)十二時半始
能 自然居士 古橋 正邦
能 安達原 黒頭 観世鏡之丞
◇十一月十三日(日)十二時半始
能 鷹戸 陸路之伝 観世 喜之
能 園廻 梅田 邦久
名古屋観世会事務所II(〒466-10033)名古屋市昭和区台町2-16-15(梅田邦久方)、TEL/FAX 052・841・4632

平成23年度 名古屋宝生会定式能 公演

平成23年度(第55期)の名古屋宝生会定式能の年間演能予定は次のとおり。
会場・名古屋能楽堂
◇第一回 一月二十三日(日)午後一時始
能 春日禪神 内藤 飛能
能 源氏供養 舞人 竹内 澄子
他 仕舞・狂言
◇第二回 三月二十日(日)午後一時始
能 忠度 和久莊太郎
能 巻絹 衣斐 正直
他 仕舞・狂言
◇第三回 六月十九日(日)午後一時始
能 藤願寺 玉井 博祐
能 鉄輪 至生 和英

他 仕舞・狂言
◇第四回 十一月二十日(日)午後一時始
能 海人 衣斐 愛
能 善知鳥 辰巳満次郎
他 仕舞・狂言
(入場券料)
正会員券二万八千円(年間通用4枚つづり)、当日券五千円(各回1回限り)、学生券二千円(各回1回限り)
お問い合わせ、入場券取扱いは、名古屋宝生会・衣裳正直方(名古屋市昭和区御器所3-23-19-802)
TEL/FAX 052・882・5600

名古屋能楽堂十二月定例公演

十二月五日(日)十二時三十分開演
名古屋能楽堂

仕舞 加茂 茂 廣瀬 瑞弘 地謡 前田 小島頭 久登
(金巻流) 加藤 芳尚
仕舞 玉ノ段 長田 郷 地謡 和谷 衛市 松井 俊介

能 杜若 (観世流)
八田 勘齋 河村総一郎 加藤 洋輝
恋之舞 高安 勝久 福井四郎兵衛 大野 誠
後見 八田三津子 地謡 本八神 孝允 清高 高橋 瞭一 近藤 幸江 松山 幸親 加賀 敏彦

狂言 鞍馬参 今枝 郁雄 大野 弘之 後見 佐藤 友彦
(和泉流)

舞囃子 自然居士 加藤かおる 河村総一郎 大野 誠
(金剛流) 後藤 藤津幸

能 船弁慶 (金生流)
飯富 雅介 福井 聡介 鬼頭 義命 橋本 正幸 河村 眞之介 能取 香世 相元 正樹
間 松田 高義

後見 玉井 博祐 地謡 石森 智幸 佐藤 耕司 衣斐 愛 平田 正文 衣斐 正直 辰巳 孝弥 和久 莊太郎

附 祝 言 (午後四時十分頃終了予定)

「チケット料全」 主催 名古屋市文化振興事業団 (名古屋能楽堂) 前売 指定四〇〇〇円、自由二〇〇〇円 学生二〇〇〇円 能楽協会名古屋支部 (当日五〇〇円増)

前売取扱いは名古屋市能楽堂(電052・2231・0088) プレイガイド(栄)フレチケ92・松坂屋ほか) ナナイバール7階PGG(電052・22655・2015) チケットぴあ(電05770・02・99999)Pコート404・762 (407・99・20)

十二月九日(木)
昼の部 午後一時開演
夜の部 午後四時半開演
名古屋能楽堂

聖夜蠟燭能

12月24日 名古屋東急ホテル
名古屋開府400年にちなんで多彩なイベントが開催されてきたが、そのフィナーレを飾って、クリスマスシーズンの12月24日(日)日本の伝統芸術「能楽」の特別イベント「聖夜蠟燭能」が名古屋東急ホテルで開催される。企画は名古屋東急ホテル(名古屋市中区栄4-6-8)、協力。

等 石橋 勢子 梅若 玄祥 等 森岡 未貴 風聲 千晴
狂言 若和布 新巻 野村小三郎 住持 松田 萬義 奥津健 太郎
清 古野山 静 藤間 勘十郎 女 スパス 野口 隆行 忠信 西川 千雅 後藤 清 清元 美三郎 清元 美太郎 清元 美次夫 清元 美次夫
能 巴御前 巴御前 藤間 勘十郎 舞子 梅屋 貞香 巴 貞村 翠香 堅田 亨代 実香 千晴 風聲 千晴
能 松風 村雨 山本 博通 松風 梅若 玄祥 松風 善之教 高安 勝久 河村 眞之介 藤田 六郎兵衛 野村小三郎
後見 梅田 邦久 地謡 川口 晃平 浦田 保親 味方 文 角当 直隆 山崎 正道

名古屋開府400年記念事業実行委員会。
会場は同ホテル3階ヴェルサイユの間、開催は午後六時三十分。特別座三万円、S席二万八千円、A席二万三千元。
演能は次のとおり。
舞囃子「紅葉」愚之舞、久田三津子ほか
能「土蜘蛛」久田勘齋、武田邦弘ほか
半能「石橋」大獅子、久田勘齋、久田勘齋郎ほか



初秋能 (第2部) 「箱坂」古橋正邦 (撮影・杉浦賢次氏)

赤坂宿で曰くありけな僧 (前シテ正邦) に回向を頼まれて出向き、庵堂らしからぬ武器だらけの室内を不審すれば、シテは野盗の類に備えての由をワキとの問答に明かすところ、互いの詞に小気味よさ。居タセに僧の随立を多聞天の予など例に説く哲理に夜も更け、へお休みあれや、とワキに勧めへ我も (睡まん)、と立つと中人に。明ければ庵堂が善業の不思議を里人 (アと郁雄) に問えば、居語に金商人三茶吉次を襲った熊坂長範が護衛の牛若に斬られ、回向を願ったのは長範の幽霊が頭れたものであろう、と明快に語る。

後場は熊坂の幽霊 後シテ正邦、ワキから当時の有様を語るよう求められ、言次ら襲撃の様をワキと掛合に展開。小書の記載は無かつたが「春え型」で床几は用いずシテは袈裟開袈。へこの長範を始めて、と両袖大きく捌き、とつつかと安座した威風は偉丈夫のシテならこそ。へはやへ入れと、面切り手下を促すか、へ言ふ

赤坂宿で曰くありけな僧 (前シテ正邦) に回向を頼まれて出向き、庵堂らしからぬ武器だらけの室内を不審すれば、シテは野盗の類に備えての由をワキとの問答に明かすところ、互いの詞に小気味よさ。居タセに僧の随立を多聞天の予など例に説く哲理に夜も更け、へお休みあれや、とワキに勧めへ我も (睡まん)、と立つと中人に。明ければ庵堂が善業の不思議を里人 (アと郁雄) に問えば、居語に金商人三茶吉次を襲った熊坂長範が護衛の牛若に斬られ、回向を願ったのは長範の幽霊が頭れたものであろう、と明快に語る。



初秋能 (第2部) 「箱坂」井上蒼大、井上靖浩、野村小三郎、松田高森 (撮影・杉浦賢次氏)

氣魄充分、牛若が長刀を禁止と受け止めへ戸手 (左手) へ、避けるを際行して追い廻らんとするのも迫力。キリは牛若の俊敏に疲れ果てた態にへ力も弱り、と安座に膝を抱え、へ露精と、と立つとへ消えし昔の物語、とワキヘアシラと膝をつきワキに合掌、地 (邦弘・勘助・轟宏ら) のうちに一ノ松へ、へ (赤坂の) 松蔭に、と小廻りして膝をつき袖で面を蔽い隠れる心、返し句に立ち留メに。足拍子は踏まなかつた。文字通り偉丈夫のシテの風格。雌子は学・嘉津幸・鉦一・義命。(1時間12分・9月5日・初秋能第2部)

こそ程も久しけれ、と長刀取つて立つと、長刀の扱い大きく豪快に牛若との死闘をみせる。討死の手下達へいで孝養 (供養) に報せん、と小書で橋懸へ走り、勾欄に足を掛け舞台を見込むと、勇躍舞台にとつて返してへ折養戸を小櫃に取つて、と牛若を牽制するところ (写真)

「口真似」 到来の酒を気の合った者と飲みたいと太郎冠者 (シテ構造) に入選を任す主 (アド融)、連れて来られた何某 (小アド彈重) は主が最も敬遠したい名うての酔狂人。今更追い返しもならず、粗忽があつては、と主、「身共が言ふ様する様にせい」と申し付ければ、太郎冠者は主の言動の一端を悉く反復。「お盆を出せ」と命じられ、は「お盆を出せ」と何某に囁返しするなど案じていた迷惑が何某に及ぶ。堪り兼ねた主が「こちへ」と手を引

「口真似」 到来の酒を気の合った者と飲みたいと太郎冠者 (シテ構造) に入選を任す主 (アド融)、連れて来られた何某 (小アド彈重) は主が最も敬遠したい名うての酔狂人。今更追い返しもならず、粗忽があつては、と主、「身共が言ふ様する様にせい」と申し付ければ、太郎冠者は主の言動の一端を悉く反復。「お盆を出せ」と命じられ、は「お盆を出せ」と何某に囁返しするなど案じていた迷惑が何某に及ぶ。堪り兼ねた主が「こちへ」と手を引

「口真似」 到来の酒を気の合った者と飲みたいと太郎冠者 (シテ構造) に入選を任す主 (アド融)、連れて来られた何某 (小アド彈重) は主が最も敬遠したい名うての酔狂人。今更追い返しもならず、粗忽があつては、と主、「身共が言ふ様する様にせい」と申し付ければ、太郎冠者は主の言動の一端を悉く反復。「お盆を出せ」と命じられ、は「お盆を出せ」と何某に囁返しするなど案じていた迷惑が何某に及ぶ。堪り兼ねた主が「こちへ」と手を引



青陽会 「花篋」松山幸親 (撮影・杉浦賢次氏)

短い前場、いわゆる置き手紙を読むシテ (写真) のしおらしさは、へ花の跡とて、と手籠を取るのと立ち、右手を籠の底に添え如何にも愛しげな風情に小持ちが好く現われる。

後場、先づ天皇の乗る輿の輿昇 (ワキツレ正樹・速) と官人が行幸の連ずから連吟、掛合に聖代を考ぐと、次いで狂と笹に先の唐織を脱ぎ下げた狂女姿のシテと花篋を持つツレ、掛合に旅塵へ思いを馳せ、連行の連吟が上々を地邦久・勘助・正邦ら) が受け、へ旅行幸に出遇い、ツレの花篋をワキに打ち落されて昂ぶる狂と、へ恐ろしや、と踏む数拍子は如何にも。宣言がありイロエ (希世・孝一郎・鉦一) は声の掛かつた嬉しさを反芻の心か。漢主・李夫人の故事を述べるサシ・クセはしつとりと地の名調、舞も無難に、再会へ。再会が匿 (かたみ) の徳に因り、「形見」の語意となつた経緯がワキとシテの掛合になるところ、へこの時よりぞへ始まりける、がへ始めなる、と外れたのは少々残念。子方は台詞が無いので行儀のよさだけ。(1時間20分)

「口真似」 到来の酒を気の合った者と飲みたいと太郎冠者 (シテ構造) に入選を任す主 (アド融)、連れて来られた何某 (小アド彈重) は主が最も敬遠したい名うての酔狂人。今更追い返しもならず、粗忽があつては、と主、「身共が言ふ様する様にせい」と申し付ければ、太郎冠者は主の言動の一端を悉く反復。「お盆を出せ」と命じられ、は「お盆を出せ」と何某に囁返しするなど案じていた迷惑が何某に及ぶ。堪り兼ねた主が「こちへ」と手を引



青陽会 「口真似」 左より 井上靖浩、井上弾喜、佐藤融

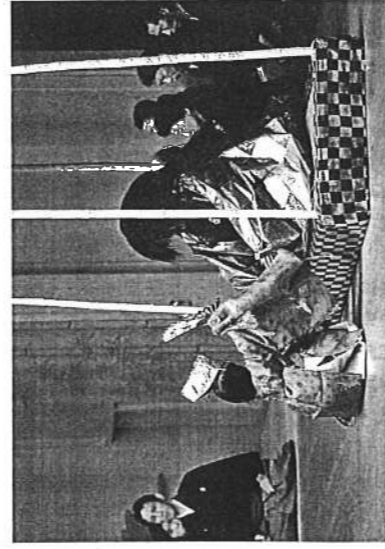
「口真似」 到来の酒を気の合った者と飲みたいと太郎冠者 (シテ構造) に入選を任す主 (アド融)、連れて来られた何某 (小アド彈重) は主が最も敬遠したい名うての酔狂人。今更追い返しもならず、粗忽があつては、と主、「身共が言ふ様する様にせい」と申し付ければ、太郎冠者は主の言動の一端を悉く反復。「お盆を出せ」と命じられ、は「お盆を出せ」と何某に囁返しするなど案じていた迷惑が何某に及ぶ。堪り兼ねた主が「こちへ」と手を引

「口真似」 到来の酒を気の合った者と飲みたいと太郎冠者 (シテ構造) に入選を任す主 (アド融)、連れて来られた何某 (小アド彈重) は主が最も敬遠したい名うての酔狂人。今更追い返しもならず、粗忽があつては、と主、「身共が言ふ様する様にせい」と申し付ければ、太郎冠者は主の言動の一端を悉く反復。「お盆を出せ」と命じられ、は「お盆を出せ」と何某に囁返しするなど案じていた迷惑が何某に及ぶ。堪り兼ねた主が「こちへ」と手を引

「口真似」 到来の酒を気の合った者と飲みたいと太郎冠者 (シテ構造) に入選を任す主 (アド融)、連れて来られた何某 (小アド彈重) は主が最も敬遠したい名うての酔狂人。今更追い返しもならず、粗忽があつては、と主、「身共が言ふ様する様にせい」と申し付ければ、太郎冠者は主の言動の一端を悉く反復。「お盆を出せ」と命じられ、は「お盆を出せ」と何某に囁返しするなど案じていた迷惑が何某に及ぶ。堪り兼ねた主が「こちへ」と手を引

「口真似」 到来の酒を気の合った者と飲みたいと太郎冠者 (シテ構造) に入選を任す主 (アド融)、連れて来られた何某 (小アド彈重) は主が最も敬遠したい名うての酔狂人。今更追い返しもならず、粗忽があつては、と主、「身共が言ふ様する様にせい」と申し付ければ、太郎冠者は主の言動の一端を悉く反復。「お盆を出せ」と命じられ、は「お盆を出せ」と何某に囁返しするなど案じていた迷惑が何某に及ぶ。堪り兼ねた主が「こちへ」と手を引

「口真似」 到来の酒を気の合った者と飲みたいと太郎冠者 (シテ構造) に入選を任す主 (アド融)、連れて来られた何某 (小アド彈重) は主が最も敬遠したい名うての酔狂人。今更追い返しもならず、粗忽があつては、と主、「身共が言ふ様する様にせい」と申し付ければ、太郎冠者は主の言動の一端を悉く反復。「お盆を出せ」と命じられ、は「お盆を出せ」と何某に囁返しするなど案じていた迷惑が何某に及ぶ。堪り兼ねた主が「こちへ」と手を引



青陽会 「邯鄲」 左より 味方梓、武田大志 (撮影・杉浦賢次氏)

「邯鄲」 来し方行く末を知らしめすという奇々な枕で粟の飯一炊の間に塵生 (シテ大志) に見る栄華の夢、へ (不老門の前) には月運しと云ふ心、と双高く拳を掲げるところには氣宇の壮大をみせる若いシテの容姿も。大臣 (ワキツレ正樹) から草莽の酒を勧められ、舞童 (子方・味方梓) の酌を受ける帝の塵生 (写真)、舞童は次いで酒を讀める地 (邦弘・正邦・修一) で着に舞を舞うが、手綺麗で大人顔負けの巧さが素晴らしい。これに融察され、よし、といつた気合に唐回扇をひと振り、立つて一舞台で舞い出すシテへ。再会が匿 (かたみ) の徳に因り、「形見」の語意となつた経緯がワキとシテの掛合になるところ、へこの時よりぞへ始まりける、がへ始めなる、と外れたのは少々残念。子方は台詞が無いので行儀のよさだけ。(1時間20分)

「邯鄲」 来し方行く末を知らしめすという奇々な枕で粟の飯一炊の間に塵生 (シテ大志) に見る栄華の夢、へ (不老門の前) には月運しと云ふ心、と双高く拳を掲げるところには氣宇の壮大をみせる若いシテの容姿も。大臣 (ワキツレ正樹) から草莽の酒を勧められ、舞童 (子方・味方梓) の酌を受ける帝の塵生 (写真)、舞童は次いで酒を讀める地 (邦弘・正邦・修一) で着に舞を舞うが、手綺麗で大人顔負けの巧さが素晴らしい。これに融察され、よし、といつた気合に唐回扇をひと振り、立つて一舞台で舞い出すシテへ。再会が匿 (かたみ) の徳に因り、「形見」の語意となつた経緯がワキとシテの掛合になるところ、へこの時よりぞへ始まりける、がへ始めなる、と外れたのは少々残念。子方は台詞が無いので行儀のよさだけ。(1時間20分)

「大江山」 これも重画をみる。昔 丹波の大江山 鬼ども多く纏り居て 都に出ては子供らや 人の宝を盗みゆく というので、首魁の酒吞童子退治に頼光・独武者・保昌ら (ワキ勝久、ワキツレ正樹・元・幸) 山伏に装束、大江山へ赴く。出陣の覚悟から連行のワキ・ワキツレの連吟も意気軒昂、着くと併し強力

「大江山」 これも重画をみる。昔 丹波の大江山 鬼ども多く纏り居て 都に出ては子供らや 人の宝を盗みゆく というので、首魁の酒吞童子退治に頼光・独武者・保昌ら (ワキ勝久、ワキツレ正樹・元・幸) 山伏に装束、大江山へ赴く。出陣の覚悟から連行のワキ・ワキツレの連吟も意気軒昂、着くと併し強力

「大江山」 これも重画をみる。昔 丹波の大江山 鬼ども多く纏り居て 都に出ては子供らや 人の宝を盗みゆく というので、首魁の酒吞童子退治に頼光・独武者・保昌ら (ワキ勝久、ワキツレ正樹・元・幸) 山伏に装束、大江山へ赴く。出陣の覚悟から連行のワキ・ワキツレの連吟も意気軒昂、着くと併し強力

「大江山」 これも重画をみる。昔 丹波の大江山 鬼ども多く纏り居て 都に出ては子供らや 人の宝を盗みゆく というので、首魁の酒吞童子退治に頼光・独武者・保昌ら (ワキ勝久、ワキツレ正樹・元・幸) 山伏に装束、大江山へ赴く。出陣の覚悟から連行のワキ・ワキツレの連吟も意気軒昂、着くと併し強力

「大江山」 これも重画をみる。昔 丹波の大江山 鬼ども多く纏り居て 都に出ては子供らや 人の宝を盗みゆく というので、首魁の酒吞童子退治に頼光・独武者・保昌ら (ワキ勝久、ワキツレ正樹・元・幸) 山伏に装束、大江山へ赴く。出陣の覚悟から連行のワキ・ワキツレの連吟も意気軒昂、着くと併し強力

「大江山」 これも重画をみる。昔 丹波の大江山 鬼ども多く纏り居て 都に出ては子供らや 人の宝を盗みゆく というので、首魁の酒吞童子退治に頼光・独武者・保昌ら (ワキ勝久、ワキツレ正樹・元・幸) 山伏に装束、大江山へ赴く。出陣の覚悟から連行のワキ・ワキツレの連吟も意気軒昂、着くと併し強力

NHK新春特集放送予定

- 教育テレビ(A.M.6.35~7.35)
能「羽衣」和合之舞
能「世流」シテ 梅若万三郎 野村 萬

新春謡曲狂言

- NHK・FM(11.00~11.50)
素謡「神歌」老松
(観世流)シテ 観世録之丞

NHK放送予定(平成22年12月~平成23年1月)

- NHK・FMラジオ(日曜日7.15~8.00)
素謡「野守」(金春流) 高橋 汎

演能カレンダ-

- 名古屋能楽堂 (TEL 052-231-0088)
(能・狂言演能関係)
平成23年1月
2日(日) 名古屋能楽堂新春謡初め

能楽の友

発行 能楽の友社
名古屋千種区千種2丁目18-18
(郵便番号 464-0858)

観世寿夫記念 法政大学能楽賞

大坪喜美雄氏 岩崎雅彦氏 受賞

法政大学(増田壽男総長)は、一九七九年(昭和五四年)に「観

大坪喜美雄

「贈呈理由」宝生流シテ方として早年の研鑽を重ね、流儀を支える中核的位置にある氏の能は、技術の堅実さと巧みさる品位によつて、宝生流の良き伝統を示してい

岩崎 雅彦

「贈呈理由」氏の近著「能楽演目の歴史的研究」は、能の演出に関する手堅い研究成果である。特に、従来あまり研究対象とならなかった間狂言の形成と展開に注目し、斬新な視点と資料による裏付けで多くの新発見を示した点が高く評価される。

催花賞 福井四郎氏

法政大学は、服部康治氏からの観世新九郎家文庫受贈を記念し

岩崎 雅彦

「贈呈理由」氏に近著「能楽演目の歴史的研究」は、能の演出に関する手堅い研究成果である。特に、従来あまり研究対象とならなかった間狂言の形成と展開に注目し、斬新な視点と資料による裏付けで多くの新発見を示した点が高く評価される。

能楽お出かけワークショップ

能楽師が積極参加、実演 明年2月名古屋東名小劇場

名古屋文化振興事業団(名古屋能楽堂・東文化小劇場、名古屋文化小劇場)による「能楽ワークショップ」が来年2月に、東文化小劇場と名古屋東文化小劇場で催される。能を身近な芸能として、多くの市民にふれ、親しんでもらう企画が行われる。

加、交流を深める。この「(能楽)お出かけワークショップ」は、明二十三年二月十一日(金・祝)午後一時から午後三時三十分まで、東文化小劇場。二月十二日(出)午後一時から午後三時三十分まで、名古屋東文化小劇場で開催される。

茂山千之丞氏 逝去

大藏流狂言方、茂山千之丞氏は、十二月四日、肝細胞がんのため京都市内の病院で逝去した。八十七歳。喪主は長男のあきらさん。大藏流狂言師の三子茂山千作の次男として生まれ、2歳7カ月で

名古屋能楽堂

新春謡初め

平成二十三年一月二日(日) 午後一時半始(開場十二時半) 名古屋能楽堂

- 連 吟 四海波 (観世流) 榎田 邦久他
舞 囃子 高 砂 (観世流) 久田 勘鷹

て、一九八八年(昭和六三年)四月に「服部記念法政大学能楽振興基金」を設立し、同基金に基づく事業の一つとして、能楽三役の功労者及び能楽の普及・発展に貢献の大きい個人・団体を顕彰する「催花賞」を設定、各方面の識者から推薦された候補者について、法政大学能楽研究所と能楽賞選考委員とが慎重に選考した結果、受

賞者に榎井四郎氏を決定した。「贈呈理由」氏は多年、老舗十松屋の工務責任者として、能・狂言の演技の要ともいべき舞囃の制作に携わってきた。江戸時代以来の扇制作の伝統・継承に果たした役割はすこぶる大きく、その繊細な職人技とセンスの良さは能楽師からも高い評価と信頼を集めている。

名古屋能楽堂正月特別公演

平成二十三年一月三日(月)

午後二時開演

名古屋能楽堂

- 能 翁 武田 邦弘 三番面箱 鹿島 俊裕
(観世流) 千歳 武田 大志

能 屋

- 吉沢 祖父江 修一
高安 勝久 河村真之介 竹市 学

入場料 前売指定五〇〇〇円
前売一般四〇〇〇円(当日四五〇〇円)
学生前売三〇〇〇円(当日三五〇〇円)
取扱所 名古屋能楽堂(電052・231・0088)
チケットぴあ(05770・02・99999)
市内アイガイド、ナナイフハイク7階PG(052・2665・2015)

- 連 吟 羽 衣 (金春流) 奥頭 尚久他
狂言小舞 よしの葉 (和泉流) 佐藤 誠

観世寿夫の名古屋

師走七日の清雪忌に寄せ、 その全足跡を辿る

竹尾 邦太郎

大正14年11月12日生まれ。寿夫は翌15年12月25日、昭和と改元されてから没年の昭和53年12月7日まで年齢は当然乍ら昭和の年になる。名古屋での寿夫の最初の舞台は清雪を名乗って居た頃(昭和19年から24年11月まで)の昭和23年10月26日、即ち23歳、舞台は戦火で名古屋(布池)能楽堂なきあと、焼失を免れた名古屋商工会議所ビル内の特設舞台、主催は明治・大正・昭和の三代に亘り当地能楽界に巨券を印してきた田鍋徳太郎が主宰の名古屋能楽鑑賞会。「秋の文化協賛能・観世流三大能楽大会」と銘打ち二部制の催会。

寿夫は一部でシテ永島鶴二「小袖曾我」の地頭と「敵・感立之出・兜」のシテ。二部はシテ観世華雪「松風・戯之舞」のツレ、一調「女郎花」小鼓田鍋徳一郎とシテ観世喜之「安達原・急進之出」の地頭を勤める。なお観世流三大能は来演の観世華雪、橋岡久太郎、観世喜之を指す。

次いで昭和25年8月15日・松坂屋ホール特設舞台・淡交会 素謡「安宅」のワキと素謡「綱綱」のワキツレ。

29年7月8日・松坂屋ホール・能楽渡欧後援会御招待能 豊多実シテ半能「融」の地頭と半能

碑(いしづみ)

観世寿夫の名古屋

師走七日の清雪忌に寄せ、 その全足跡を辿る

竹尾 邦太郎

大正14年11月12日生まれ。寿夫は翌15年12月25日、昭和と改元されてから没年の昭和53年12月7日まで年齢は当然乍ら昭和の年になる。名古屋での寿夫の最初の舞台は清雪を名乗って居た頃(昭和19年から24年11月まで)の昭和23年10月26日、即ち23歳、舞台は戦火で名古屋(布池)能楽堂なきあと、焼失を免れた名古屋商工会議所ビル内の特設舞台、主催は明治・大正・昭和の三代に亘り当地能楽界に巨券を印してきた田鍋徳太郎が主宰の名古屋能楽鑑賞会。「秋の文化協賛能・観世流三大能楽大会」と銘打ち二部制の催会。

寿夫は一部でシテ永島鶴二「小袖曾我」の地頭と「敵・感立之出・兜」のシテ。二部はシテ観世華雪「松風・戯之舞」のツレ、一調「女郎花」小鼓田鍋徳一郎とシテ観世喜之「安達原・急進之出」の地頭を勤める。なお観世流三大能は来演の観世華雪、橋岡久太郎、観世喜之を指す。

次いで昭和25年8月15日・松坂屋ホール特設舞台・淡交会 素謡「安宅」のワキと素謡「綱綱」のワキツレ。

29年7月8日・松坂屋ホール・能楽渡欧後援会御招待能 豊多実シテ半能「融」の地頭と半能

「狸々乱」のシテ。これは豊多実を団長にヴェニス国際演劇祭に参加する能楽団の披露。シテ方は豊多と観世の混成で戦後初の海外公演。同年一〇月二六日・名古屋商工会議所特設舞台・渡欧能楽団帰朝報告公演、素謡三番・仕舞八番で寿夫は素謡「彈丸」のシテ、「道成寺」のワキと仕舞「井筒」。

31年1月28日・前年の秋に柿落シの熱田神宮能楽殿・落成祝賀記念能 シテ観世鏡之丞「花燈・鐘之伝・大返」のツレとシテ梅若方三郎「石橋・大獅子」の副地頭。

31年11月11日・熱田神宮能楽殿「松風・戯之舞」のツレ、一調「女郎花」小鼓田鍋徳一郎とシテ観世喜之「安達原・急進之出」の地頭を勤める。なお観世流三大能は来演の観世華雪、橋岡久太郎、観世喜之を指す。

次いで昭和25年8月15日・松坂屋ホール特設舞台・淡交会 素謡「安宅」のワキと素謡「綱綱」のワキツレ。

29年7月8日・松坂屋ホール・能楽渡欧後援会御招待能 豊多実シテ半能「融」の地頭と半能

法政大学能楽賞 受賞者の略歴

大坪喜美雄氏

本名大坪近司。宝生流シテ方。日本能楽会会員(1999年認定)。1947(昭和22)年5月30日、東京に生まれる。故大坪十喜雄氏の養子となり、1959年に宝生流宗家入門。故宝生九郎、故宝生英雄に師事する。

1960年(鞍馬天狗)の花見で初舞台。71年(胡蝶)で初シテ。1976年(石橋)、1982年(道成寺)、1984年(乱)、1995年(翁)を抜く。数々の能のシテをつとめる他、若年の頃から流儀の長老たちのツレをつとめる機会も多く、(松風)(山姥)(緩鼓)等の重要なツレ役には定評がある。

流儀の定期能のほか、2005年には足利義氏生誕七百年記念の足利観阿寺能で、足利義満と観阿弥・世阿弥ゆかりの(自然居士)を上演。

2008年には「源氏物語千年紀 横浜能楽堂企画公演」で、明治時代に廃曲になった宝生流の固曲(空懸)を約百年ぶりに復曲上演するなど、意欲的な活動を続けている。2009年には舞台生活五十周年の記念会で宝生流の大曲(安宅 延年之舞)をつとめた。

東京芸術大学非常勤講師・国立能楽堂三役養成講師。夏休み子供仕舞教室、福井市中学生鑑賞能等、能の普及活動にも力を尽くしている。

岩崎雅彦氏

能・狂言研究者。1959年2月25日、東京生まれ。1981年、国学院大学卒業。1986年、国学院大学大学院博士課程単位取得。1986年から1988年まで、1990年から2005年まで、法政大学能楽研究所兼任所員。2002年の能楽研究所創立五十周年事業では、美術資料に関する数多岐な知識を活かし、記念展示「能楽資料の美」を企画・実現した。2005年から国学院

大学非常勤講師。他にも数多くの大学で講義を持つほか、各種能会、国立能楽堂等での解説で、普及事業にも貢献してきた。

2009年、「能楽演出の歴史的研究」により、国学院大学から博士(文学)の学位を授与される。おもな論文に、「猿楽の説話と鬼」(『能楽研究』26号。2002年)、「狂言「弓矢太郎」と「鬼争」の構想」(『能楽研究』29号。2005年)等がある。また、国立能楽堂パンフレットに1994年5月以来連載している「証言・能楽史」能を見た人びとの記録は200回に達している。

催花賞受賞

福井四郎氏

扇製作者。1929(昭和4)年10月15日、京都市生まれ。1950(昭和25)年、江戸時代から続く老舗十松屋福井扇舗に入店。同店を営む父福井芳敏の厳しい指導のもと、扇職人としての技術を磨き、六十年もの長きにわたつ

て、能楽の舞扇の政策に携わってきた。近年、扇の素材となりうる良質の竹が少なくなり、和紙も手渡さのものから機械漉きに変わっていく中で、従来の工程にはない新しい工程を増やすなどして、扇の質の維持につとめている。その丁寧な仕事ぶりは能楽師からも評価が高く、平成8年には京都府伝統産業優秀技術者として表彰された。最近では蘇島神社の翁屋中啓等の古中啓の修復をも積極的に手がけている。現在、有限会社十松屋福井扇舗専務取締役。趣味は謡曲とテニス。

②面へつづく

名古屋清韻会

平成二十三年一月十日(成人の日・月曜日)
午前九時半始
名古屋能楽堂

素謡 千手	入保田和代 安藤義孝子	富田 郁子	観世 元伯
遊行 柳	佐藤 尚雄	中原 基夫	藤田 六郎兵衛
仕舞 屋島	大島 多美子	久野 洋子	藤田 六郎兵衛
巻歌 占	安井 美智子	佐藤 由美子	藤田 六郎兵衛
大江 山姥	佐藤 由美子	佐藤 由美子	藤田 六郎兵衛
清江 経	中入リマエ 森 たけこ	鶴岡 良久	藤田 六郎兵衛
舞獅子 養融	老山本 淳子 水之伝 川崎 あきま	河村 眞之介 船戸 昭弘	藤田 六郎兵衛
素謡 求塚	緒方 啓子 御牧 紀代	河村 眞之介 船戸 昭弘	藤田 六郎兵衛
舞獅子 姨捨	三老女の向 渡辺 節子	河村 眞之介 船戸 昭弘	藤田 六郎兵衛
素謡 槍垣	三老女の向 鬼頭 眞代子	室生 開	藤田 六郎兵衛
仕舞 雲林院	馬場 葵子	加藤 新一郎	藤田 六郎兵衛
花庭 慈童	加藤 新一郎	谷口 寛子	藤田 六郎兵衛
漫吟 合浦	中村 真太	中村 大豊	藤田 六郎兵衛
舞獅子 葛城	古井 佐季	河村 眞之介 船戸 昭弘	藤田 六郎兵衛
素謡 求塚	御牧 紀代	河村 眞之介 船戸 昭弘	藤田 六郎兵衛
舞獅子 百萬	藤田 幸子	河村 眞之介 船戸 昭弘	藤田 六郎兵衛
仕舞 合浦	中村 真太	中村 大豊	藤田 六郎兵衛
素謡 岩船	室生 開	河村 眞之介 船戸 昭弘	藤田 六郎兵衛
舞獅子 通小町	加藤 美智子	河村 眞之介 船戸 昭弘	藤田 六郎兵衛
実盛	佐久間 義親	船戸 昭弘	藤田 六郎兵衛
自然居士	加藤 千一	船戸 昭弘	藤田 六郎兵衛
骸	福岡 克彦	船戸 昭弘	藤田 六郎兵衛
仕舞 胡蝶	大槻 又蔵		藤田 六郎兵衛

主催 大槻 清韻会

名古屋宝生会定式能(第155期)

平成二十三年一月二十三日(日)
午後一時始
名古屋能楽堂

仕舞 春日龍神	内藤 飛能 飯富 雅介	河村 眞之介 船戸 昭弘	鬼頭 義命 大野 誠
間 今枝 邦雄			
後見 衣斐 正宜	地謡 鈴木 久仁七 竹内 孝成	和久 庄太郎 辰巳 清次郎	
狂言 寝音曲	佐藤 融	井上 靖浩	後見 佐藤 友彦
仕舞 西行桜	佐藤 耕司		辰巳 清次郎 衣斐 正宜 稲川 喬一
能 源氏供養	橋本 幸 橋本 正樹	後藤 孝一郎	鹿取 希世
後見 衣斐 正宜	地謡 津田 健武 平田 正文	和久 庄太郎 衣斐 正宜 辰巳 清次郎	

第4回豊田御洒落狂言会

1月16日 豊田市能楽堂

狂言共同社主催の「豊田お洒落狂言会」は今回第四回目を迎え、新春一月十六日(日)豊田市能楽堂で催される。

後援/豊田市、豊田市教育委員会、豊田市文化振興事業団、愛知芸術文化協会(ANET)

演目は、狂言「入間川」、狂言「伊呂波」、狂言「貫聲」、狂言「鶴牛」。(番組⑩面掲載)。

「チケット取り扱い」

狂言共同社(TEL・FAX 052・8334・8607)豊田市能楽堂(TEL 0565・35・8200)など。

新春能面展

面紹社 鶴舞図書館で
能面研究会 面紹社(代表保田紹雲氏)は、新春一月五日(水)から二月六日(日)まで名古屋市鶴舞中央図書館一階展示コーナーで新春(第十九回)能面展を開催する。

出展は能面14点、狂言面1点、能絵14点、舞台写真1点、1月16日、1月28日に展示替えが行われる。

とき 昭和47年6月18日、熱田神宮能楽殿
名古屋観世会「敦盛・二段之舞」



(左より) 佐藤太俊・塚本秀雄・大西信久
(後見) 河村総一郎・観世寿夫・笈三男
(高辻幸一氏撮影)

④面よりつづき
40年11月21日、観世会 シテ山本博之「雨月」の地頭と「頂羽」のシテ。
41年4月29日、清瀬会能 シテ大柳秀夫「卒都婆小町・一度之次第」の地頭と舞囃子「熊野」。
41年11月20日 観世会 「野宮・合掌籠」シテとシテ梅若六郎「阿漕」の地頭。この時の野宮について田鍋惣太郎(62)は自著「小猿茶話」で次のように述べている。「観世寿夫師の野宮を勤めました。野口兼資氏と橋岡久太郎氏を思わせるところある、しっかりしたおシテでした。今日観衆の持久力を考慮して、能の一部を省いたりする演出が流行しているのに対し、できるだけジツクリと従来通りを守ってゆかれる側に立



昭和43年11月17日・名古屋観世会「山姥」
熱田神宮能楽殿 観世寿夫
(高辻幸一氏撮影)

つてみえるようであります。ただし、それも程度問題でしょうね。まあ、そういった過渡期に立つてみえる方で、将来の大成を囑望されてみえる方ですから、たのしみに致しております」と。
42年9月17日、観世会 素謡「正盛」のシテと仕舞「江野島」。
43年11月17日、観世会 シテ大柳秀夫「東方朔」の地頭と「山姥」のシテ(写真)。尖鋭といった印象を受けた。
44年12月6日、柳原富司忠孝清流殿分披露能 「二人静」のシテとシテ兼之丞「望月」の地頭。
45年4月19日、観世会 仕舞「善知鳥」シテ兼之丞「千手」 節曲之舞」の地頭とシテ大柳秀夫「安達原・白頭・鳥遣之出」の地頭。
45年7月5日、第九回調査会

「安達原・黒頭・急進之出」のシテ。
46年3月21日、長生会 鬼頭八郎古稀祝賀会
シテ伊藤長八「融・兜」の地頭と舞囃子「高砂」。
46年4月17日、猶諷会 シテ杉田谷子「運成寺」の後



(左より) 鬼頭喜太郎・助川竜夫・河村総一郎・観世寿夫・田鍋惣一郎
(高辻幸一氏撮影)

◆晩秋の舞台から(その一)◆

「第31回 名古屋金春会」「名古屋観世会定例公演」「平成22年度 忠三郎の会」

竹尾邦太郎

「頼政」旅僧(ワキ勝久)、從僧(ワキツレ元・正樹)を伴い南都への遠次、宇治の里で土地の老翁(シテ光造)に呼び止められれば、待つてましたとばかり風光明媚な所の名所旧跡を訊ねる。シテにとっては住まいするだけの唯の里、咄嗟の返事の糸口に響くのも、まつワキの関心事は喜樂法師のこと、そこからシテ・ワキ問答はほぐれ、初回(汎・忍・尚久ら)へ至る名所教次に。月明下、山も川もおぼろくとして、と面々に辺りの風光を、旅僧達が居る故にか、改めて愛でる風情のシテ。再びシテ・ワキ問答となつて此度は積極的な名所自慢、平等院と申す御寺「見たくは」と徳漚。庭に取り残された芝を見咎め不審のワキに、宮戦での頼政自刃を語る莊重な口調のシテ語には哀憐が。憐れし、とワキ、へ跡は草露の、と膝をつき合事も神妙。甲

を喜ぶシテは、今日がその祥月命日と明かし、静かな中入地はシテの胸中を代弁、身元明かしかねるかに消える余情、囁々。
ワキの求めに里人(アヒ俊徳、宮戦、すなわち高倉宮仁王を奉じ頼政が平氏と戦つた事、扇の芝の事、しつとり居語に語り佳。
後場 「再び問答にまみれたると」とアヒの語に先の老翁を思ふワキ、待詔から後シテ頼政の出現、宇治川に對峙する宮戦に自刃の場のシミュレーション(櫻櫻。クセは床几に掛かつた立ち、扇手に中板を引つ割がす型から、へ下は川波、と再び床几に掛けて下を眺め、へ寄する敵ござんなれとばかりのユーケン扇。シテ語になつては、先陣を争いへ名乗りも(取えず二百余騎)、と面を右に向けるのが、知らんぷりをする機で可笑しい。

「融・兜」の地頭とシテ兼之丞「融・兜」の地頭。
46年6月20日、観世会 シテ橋岡久共「巴」の地頭と「郡邸」のシテ。
47年6月18日、観世会 「敦盛・二段之舞」のシテ(写真)、後シテの哀れ憐い若き公達の気品ある舞台だった。仕舞三番の地頭とシテ橋岡久共「天鼓・善鼓之舞」の地頭。
50年11月9日、観世会「野宮」のシテ。
50年11月29日、鬼頭五阴退善能舞囃子「砦」シテ観世元正の地頭、舞囃子「鞍馬天狗」シテ喜之の地頭と舞囃子「乱双之舞」シテ。
51年11月14日、観世会 シテ橋岡久共「清経・替之剝」の後見、舞囃子「恋重荷」シテ観世静夫

「熊坂」シテ武田太加志「富士太

地がうけて、へ鑓を揃へ、と数拍子強々と踏み、群鳥のへ翼を並ぶる(羽音)、を打合せにみせ、白波に馬をへさつくとうち入れて、の型は大きく力強く、激流に流される武者にはへ己管を取らせ、と扇を笏の様に立て、へ両手に持ち、数拍子踏み床几を立ては渡河の心、宮戦の場が素晴らしい。
キリは頼政自刃の場、大刀を捨て、へこれまでも、扇を左手から右に替え、へ扇をうち敷き、と左膝つき正先へ扇を置き安座、へ埋木の、と刀に擬して閉じた扇を指うと、へ身のなる(果は)、と一閃振り下るすのが切腹、立つと常座へ、シテ柱みてトメ拍子。時流に乗り得なかつた老將の悲運さこそを思わせる力演だった。(1時間18分)

「賞観」酒籠甚だ宜敷くない舞(シテ柳雄)、暇をやるから出て行けの罵言も毎度のこと、あしらつていた妻(アド應)も、「暇をやるに何の惜し物があらう」と着ていた袴を脱ぎ、「これもやるぞ」と手切れに腰の物まで渡されては万事休す。「さては亦諍ふてみれた」と迎える実家の父(小アド友彦)は、手切れの品に舞の覚悟を知るが其処は男親、「酒の上のごと」と戻るよう勧めらるが、娘も必死。それなら舞が貰い下げに来て、世間体があり娘

は来なかつた事に、と父娘で固く確認。そこへ、ぬけくと男に泣きを入れに舞、「この度はふつつと止めました」などと追従。話が吾子に及べば、「申しへ金法師が泣きますか」と奥から娘、妻の声に佛然勢いづく舞、子は鏡とはよく言つたもの、父と夫の間にあつて娘と妻の立場を問わず自然体演じて融が出色 娘と舞に對する父と男としての友彦は老練、妻と男に對する柳雄は熱演だがもつと味味、灰汁の強さがあつても。(30分)

「海人」唐高宗に嫁した淡海公(藤原氏の祖・鎌足の次子・不比等の次子)の妹が氏守興福寺に贈つた三種の玉の、宝珠が讃州志度浦で龍神に奪られると、兄・淡海公は身を撃つて浦の海女と契り一子が授かる。その海女に宝珠を取り戻させるが、成功したら吾子を後嗣にと切願の海女、命を賭して挑む。
一子は即ち房前大臣(子方・金奉嘉繼)、從臣(ワキ雅介ワキツレ等)を伴ひ七母追善に讃州へ赴き、海女(七靈シテ總高)に出遇い一部始終を知る前場。シテ面世見・藤澤實・白地靈芝文摺箔着付・藤澤地唐草二小新文鏡箔巻・極淡浅黄水衣・右手に鎌・左手二海松藻・高懐中の琴。シテ・ワ

子8(内地頭2)仕舞10(内地頭2)一調1の82番。目立つのは最多の能「融」五番のうち四番が自身も勤める小書付、能「野宮」と善謡「正盛」のシテを各二番勤めること、師父兼之丞シテの能の地頭を七番勤めていることであろうか。
当地最後の舞台となつた舞囃子「小袖善我」は、衰弱の極にあり、正に幽鬼を見る思い。病軀を押し能に勝ける凄まじいばかりの一念は鬼気迫り、杵を正さずには居られなかつた。「羽衣」を舞つた翁の老師父兼之丞の胸中は何はかりだつたらう。励ましてなくひたすら慈しみであつたに違いない。世阿弥の再来と謳われた俊英観世寿夫の惜しみても余りある早逝、はや三十三回を迎え、改めて御冥福を祈るばかりである。

「海人」唐高宗に嫁した淡海公(藤原氏の祖・鎌足の次子・不比等の次子)の妹が氏守興福寺に贈つた三種の玉の、宝珠が讃州志度浦で龍神に奪られると、兄・淡海公は身を撃つて浦の海女と契り一子が授かる。その海女に宝珠を取り戻させるが、成功したら吾子を後嗣にと切願の海女、命を賭して挑む。
一子は即ち房前大臣(子方・金奉嘉繼)、從臣(ワキ雅介ワキツレ等)を伴ひ七母追善に讃州へ赴き、海女(七靈シテ總高)に出遇い一部始終を知る前場。シテ面世見・藤澤實・白地靈芝文摺箔着付・藤澤地唐草二小新文鏡箔巻・極淡浅黄水衣・右手に鎌・左手二海松藻・高懐中の琴。シテ・ワ

第四回 豊田御酒落狂言会

平成二十三年一月十六日(日)午後二時開演
豊田市能楽堂(名鉄豊田市駅前・参合館八階)

人間川	大名鹿島俊裕	大筋役者 佐藤融 人間の偉業 大野弘之
		後見 佐藤友彦
伊呂波	金法師 井上蒼大	観 井上清浩
		後見 今枝 郁雄
(休憩 十五分)		
賞 聲	観 今枝 郁雄	男 佐藤友彦 女 佐藤融
		後見 鹿島俊裕
蝸 牛	山伏 井上清浩	大筋役者 寺田勝敬 主人 井上 聖喜
		後見 今枝 清雄
		(後演予定 午後四時頃)
主催 狂言 共同社		

〔前売券〕一般三五〇〇円、学生二〇〇円
(当日券 五〇〇円博)
〔取り扱い〕狂言共同社・豊田市能楽堂
豊田市民文化会館(本紙②面参照)

平成23年度 梅猶会定期能公演

梅猶会による平成二十三年度の定期能楽公演の予定番組は次のとおり。	ほか狂言、仕舞
▽第一回 一月十六日(日)十一時開演、会場、大槻能楽堂	▽第四回 十二月四日(日)十一時開演、会場、大槻能楽堂
能 研究能 羽衣 小川晴子	能 半部 梅若吾之丞
能 梅若 善久	狂言 井杭 小笠原匡
能 狂言 田嶋堂 善竹忠一郎	能 船弁慶 立花春童子
能 雲林院 池内光之助	ほか仕舞
能 鞍馬天狗 井戸和男	入場料 年間会員券(四枚綴り)一六〇〇円
ほか仕舞	前売券四五〇〇円(当日五〇〇円)、学生前売券二五〇〇円(当日三〇〇円)
▽第二回 六月四日(日)十二時半開演、会場、大阪能楽会館	梅猶会定期能連絡所「豊中市新千里南町3-18-12(〒560-0084) 梅若善高方、電話06-68331-7854
能 巴 井戸和男	申込みは、出演能楽師、吉田書店、公演会場、定期能連絡所、ローションチケット(エコート5818)
能 狂言 藤澤守 善竹隆司	
能 遊行柳 梅若善高	
能 盛久 梅若基徳	
ほか仕舞	
▽第三回 九月三日(日)十二時半開演、会場、大阪能楽会館	
能 尉法師 梅若修一	
能 野宮 梅若鶴義	
能 安達原 井戸良祐	

④面へつづく

